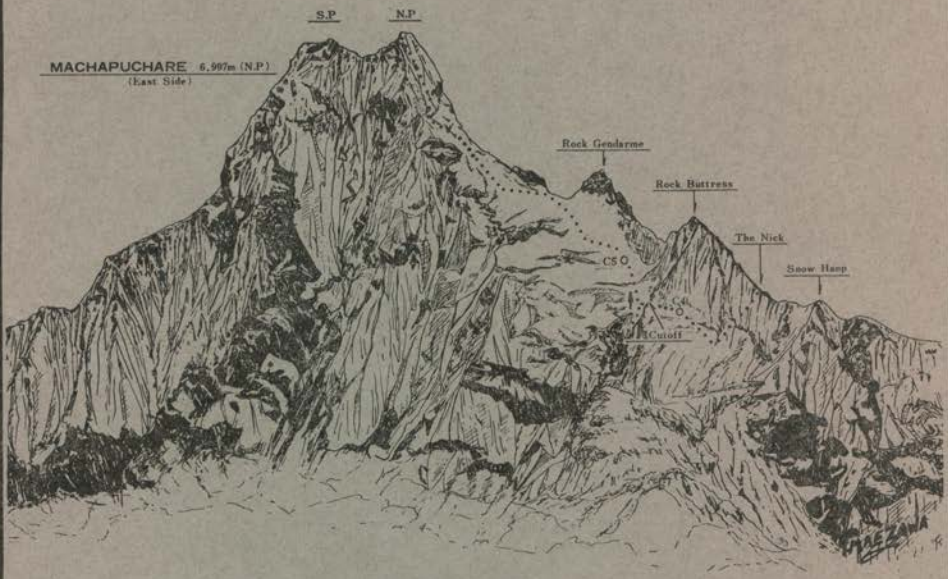
山岳

LXIX

山とスキー専門店

好日山荘®



EDELWEISS MARK

好日山荘®

上記のマークと社名は商標登録されております

●東京店
東京都中央区銀座3－5－7　〒104
☎03(561)3600・(567)9031
スキーショップ　☎03(561)0966

●吉祥寺店
東京都武蔵野市吉祥寺本町1－19－1　〒180
吉祥寺近鉄5F　☎0422(21)3331㈹　内線3318

●苗場店
苗場国際スキー場　ワールドカップ・ロッジ内

●大阪店
大阪市北区曽根崎上1-47〒530☎06(364)0933㈹
登山プロショップ芳沢ビル1F
スキーショップ　マルビル1F
豊中市千里中央"セルシー1F"　〒565☎06(833)0123

●三越店
大阪市東区高麗橋2-63　三越新館2F
〒541　☎06(203)1311

●福岡店
福岡市博多区須崎町1-4　〒812☎092(281)3440

山岳

第六十九年

山岳　第六十九年　目次　（一九七四年度）

ヒマラヤ登山の動向……片山全平　七
——一九七三～七四年の日本隊を中心に——
マナスル登頂（一九七四年春）……黒石恒　一八
エベレスト南西壁（一九七三年秋）……湯浅道男　三四
ジャヌー登頂（一九七四年春）……橋村一豊　五一
カンバチェン（一九七三年秋）……山野井武夫　六八
マナスルからヤルン・カンまで……石坂昭二郎　九七
ダージリン国際登山家集会……三田幸夫　一〇七
小島烏水論待望……加納一郎　一二三
日本山岳会と自然保護……渡辺公平　一二七
——富士山ケーブルから連峰スカイラインまで——
高所登山の忘れ物……金坂一郎　一三六
黒部の山案内人……湯口康雄　一三三
——下立村の人びと——

松方三郎追悼講演
その山の生涯……槙　有恒　一四一
日本山岳会への盡力……藤島敏男　一四五
指導者としての松方さん……加藤泰安　一四八
遠い国から……サミュエル・ブラヴァンド　田口二郎訳　一五〇
——グリンデルヴァルドの古い友人たちを代表して——
ブラヴァンドの追悼文について……田口二郎　一五三
松方さんと自然保護……村井米子　一五五
松方三郎略年譜……山崎安治　一六〇
追悼
神谷恭氏（牧野衛）　神谷恭さんと木暮理太郎翁碑前懇親会（山村正光）
尾崎喜八さんの山と詩（串田孫一）　佐々木高美氏（望月達夫）　金谷伊祐氏（富田健一）　田口三郎助氏（神奈川甚吉・鶴岡元之助・野口末延）
池田光二氏（鈴木英一）……一六一
図書紹介
児島勘次著『登山歴程』（織内信彦）　アメリカ林野局『雪崩—その遭難を防ぐために』（金坂一郎）　『深田久彌・山の文学全集』全十二巻（横山厚夫）……一七五
会務報告（一九七三年七月～一九七四年六月）……一八二
英文梗概……一九三

写真

マナスルに関するもの　三枚
エベレストに関するもの　四枚
ジャヌーに関するもの　八枚
カンバチェンに関するもの　三枚
ダージリン国際登山家集会　一枚
「黒部の山案内人」に関するもの　一枚
〔追悼〕名誉会員松方三郎氏　名誉会員神谷恭氏　尾崎喜八氏　佐々木高美氏　金谷伊祐氏　田口三郎助氏　池田光二氏

図版

マナスルに関するもの　一点
ジャヌーに関するもの　三点
カンバチェンに関するもの　二点

表紙カット　山里寿男

ヒマラヤ登山の動向

―一九七三～七四年の日本隊を中心に―

片山全平

一九七三、七四年は、いわばオイル・ショック、インフレのパニックという国際的な社会情勢下にあった。これが登山界に作用していることは否めない。身近なところでも資金集め、資材購入に響いたことは当然ながら、ポーター、シェルパの雇傭問題にもはねかえった。一応、これは登山活動を圧迫するかたちをとるが、反面、人間の内部的な問題としてとらえると、登ること、スポーツをすることへの志向は生活をすることと同じレベルに引き上げられ、人間性の回復という面の条件整備も急速に行なわれている。余暇の増大、交通情報網の発達はヒマラヤを身近なものとした。そのうえ、七三年、パキスタン山域の解禁、引きつづいて七四年には、インドがインナー・ラインを大幅に後退させて入山範囲を拡げるなど、受け入れの条件を好転させてきた。

ネパール・ヒマラヤでは七一年二十九隊、七二年十八隊、七三～四年が各二十一隊となっている。もちろんその大部分は各年とも日本隊が占めているのである。インド、パキスタンへの入山をふくめると、七四年で公的な隊は五十隊は下るまいと思われる。はじき出される各国登山隊の数字を見せつけられると、〝オリンピック〟とか〝ブーム〟と

ジャーナリスティックな表現となるが、もうそれは適切でなくなった。数字上の主役は日本隊であるが、ただここでこの数字は活動内容のバロメーターではないということである。『アルパイン・ジャーナル』は入山隊の増減は「日本隊に負う」とわざわざ付記していた。数字に反比例する内容を皮肉ったのかどうかはさておき、一つの課題としなければならない。一九七三～四年の活動をふりかえるが、山域別にとらえ、そのなかで時代順に列記した。

ジャイアンツ

まずエベレストの魅力であるが、最高のものへの願いと、南西壁という最悪のものへの挑戦という人間の基本的な心情に根ざした活動は尽きない。イタリアの富豪ギイド・マンチーノとピエロ・ナバのひきいる六十四人の大部隊、ついで日本から第二次RCC隊（湯浅道男隊長）四十三人と、七三年プレ、ポストの両シーズンは大規模な隊が繰りこまれた。

イタリア隊は七人（うちシェルパ三人）が二回にわたって、通常ルートから登頂した。軍隊も導入、アイスフォール上の輸送の危険を避けてヘリコプターを使用した。一機墜落して、また一機本国から取り寄せる……。この隊は不況下のイタリア経済とは別世界の存在なのかと思わせた。

第二次RCC隊は、ポストのエベレストに石黒、加藤両隊員が史上初めて登頂した。主目的としていた南西壁では従来の各隊以上の進展はなく、あらためてそのオペレーションのありかたについて問われるところであろう。

七四年に入ってスペイン隊（ファン・ロレンテ隊長）がサウス・コルまで進んだが、強風で失敗、ついでポストをフランスのシャモニーのガイド・パーティが引き受け、ロー・ラを起点とした酸素なしの西稜経由の登頂を目論んだ。しかし九月九日という、スタート間もない時点でC1、C2を襲ったなだれのため、ジェラルド・デボウス隊長とシェルパ五人を失って挫折してしまった。

ダウラギリ主峰（八一六七メートル）はアメリカ隊（ジェームス・モリセイ隊長）が七三年プレ、北東稜から第三登を果たした。当初未踏の南東稜ルートを試みていたが、「長大なナイフ・リッヂ」としてギブアップしたもの。登頂者はレイチャート、ロスケリー、ナワン・ゾンデン。これは一九六九年南東稜ルートを目指したエベレット隊（七人の犠牲）のとむらい合戦でもあった。

アンナプルナ主峰（八〇九一メートル）は日本山岳会信濃支部（七三年プレ）がフランス・ルートから試み、頂上直下五十メートルまで迫りながら悪天候で敗退、四隊員とシェルパ一人を失った。ポストのイタリア隊も北西面からたどったが二人を犠牲にした。いずれもなだれである。七四年はスペイン隊（ホセ・マニュエル・アングラダ隊長ら十人）がフランス・ルートの東寄り、北方ルートをたどって、無酸素で、四月二十九日アングラダ、ヨルゲ・ポンズ、エミリオ・チビスが登っている。

七三年プレ、ヤルン・カン（八五〇〇メートル）に京都大学学士山岳会が初登頂したが、翌年プレの日大隊は頂上を目前にして失敗。七三年のマナスル（八一五六メートル）では西ドイツ隊（シュマッツ隊長）が東壁を登攀、シュマッツ、ジーグフリート、フプハウアーとシェルパのウルケンが四月二十二日に登った。登頂は第四登だが新ルートをひらいた。そしてポストのスペイン隊は日本山岳会ルートをたどったが、また大なだれにあって挫折している。一時懸念された人命には影響はなかった。これはスペインがヒマラヤに派遣した最初のもの。そして七四年のプレには、日本女性隊が第五登を果たした。

険悪なマカルー（八四八一メートル）のバリエーションに執念をもやすのがチェコ隊（七三年プレ・南西壁）とオーストリア隊（七四年プレ・南壁）で、いずれもまだ成功していない。ローツェ（八五一一メートル）のバリエーションは日本から神奈川県山岳連盟が七三年プレ、オーストリア隊が七四年プレにバルン氷河から挑み、オーストリアはシャルツェの登頂を果たした。このバリエーションは開拓の段階といえ、ローツェ連峰縦走はこれからの課題といえる。

ダウラギリ連峰

登山再開後から七四年まで三十二隊を数えている。七三、四年のプレ、ポストを通じても九隊と最高の人気を集めている。一八八一年、ジョセフ・トレフェンサラー牧師によって発見、四八年、カンチェンジュンガ、五二年、エベレストが発見されるまで世界最高の座として認められていた。一九四九年、アーノルド・ハイムが最初の空中撮影を行なってこの山への挑戦の幕開けとなる。タイソン、ロバーツ、また日本では加藤喜一郎氏の慶大隊が一九五九年と六〇年に第二峰（七七五一メートル）を目指して北面から、その翌年、石坂昭二郎氏が北面行をやっているが、この時点ではあまり反応がなかった。

この連峰のなかで注目されるのが未踏の第四峰（七六六一メートル）である。これまで日本の五隊が挑み、ここ二年間はイギリス、オーストリアの両隊に占められていたが、七五年は大阪府山岳連盟が二度目の挑戦を行なっている。この二年間のことにふれておこう。まず七三年のプレをオーストリア隊（ＯＶＡ）、ポストを英国隊が受け持った。さかのぼって、六九年南面のコーナボン氷河から登攀したＯＶＡエーデルワイス支部隊は五人の隊員とシェルパ一人を失っている。このためか、七三年のオーストリア隊は北面から登高、ホファーとワイゼンスタイナーが七二五〇メートルの地点に到達し、強風で退いた。ポストの英国隊はトニー・ジョンソンが、コーナボン氷河から企てた。計画中途で一人の故障者がでたため、本格化したのは十月中旬、Ｃ７（約六〇〇〇メートル）から二つのアタック隊が出された。第二次隊が西稜コルにＣ８を出したものの、息切れのかたちで後退、撤収時にデューイソンが滑落死し、ベースでシェルパの死亡事故にも見舞われている。

七四年プレには英空軍隊によって引き継がれ、ディッキー・バード隊長ら十四人がいどんでいる。北面ルートで、第一、二キャンプ間の輸送中、セラックスの崩落にシェルパ四人が巻き込まれてしまった。ダワ・テンジン、カミ・

サルキは即死、重傷のアン・ツェリンも翌日死亡した。六人のシェルパのうち、四人（一人負傷）まで戦列から離れたことで計画を打ち切っている。

日本隊五、オーストリア、英国各二の計九隊が集中、すでに群馬県山岳連盟の松井高重郎氏をふくむ十二人（英・マウンティン誌は十五人）の命を呑んでおり、七千メートルでこれほどの犠牲者を出して、なお登頂を拒んでいる山はない。

ダウラギリ第三峰（七七二五メートル）は七三年ポストにミュンヘンの西ドイツ隊（クラス・シュレッケンバッハ隊長）によって初登頂された。第一パーティが南西壁を（十月二十日）、第二パーティは西稜を経由して頂上に立った。七一年のオーストリア隊が第二峰（七七五一メートル）を、第六峰（七二六八メートル）は大阪府岳連隊が落としており「ダウラギリ連峰」のナンバー・ピーク未登頂は、第四、五峰（七六一八メートル）を残すだけとなった。

プタ・ヒウンチュリ（七二四〇メートル）は四日市山岳協会隊（七三年ポスト）があるが、出口光男、小谷勇両隊員とアン・ニマがC5で消息を断っているが（十月十四日）、地震に誘発されたなだれ説もある。

カンジロバ山域

西に移って、いまだに探検的要素を多分に持っているのがカンジロバ・ヒマールで、七三年プレに日本ヒマラヤ山岳協会隊（渡辺文仁隊長ら六人）が東部のカン・ジェラルワ（六六一二メートル）に、ポストには北里大隊（河村栄二隊長ら六人）がセルク・ドルマ（六二二七メートル）に、さらに七四年プレには山形大隊がビジョラ・ヒウンチュリ（六三八六メートル）にそれぞれ初登頂した。

同山域は一九五二年、ティッヒー、五八年川喜田隊、六一年、六四年、六九年と前後三回にわたってタイソンなどの隊が初期段階の空白地域探査を試みて注目されてきたが、いまなお探検的な興趣をそそる。

すでにカンジロバ主峰（六八五八メートル）は一九七〇年大阪市大隊が、七一年には大阪府岳連隊がツォ・カルポ・カン（六五五六メートル）にそれぞれ初登頂に成功した。

タイソンの三回の探査はカンジロバ山群の南北を包囲するかたちで、核心部にはまだふれていず、空白部として残っている。また同志社大（一九六三年）のサイパル隊が帰途フォクスンド湖にまわり込み、東海大（六三年）、神戸商科大（六九年）のパトラシ・ヒマール登山、そしてカンジロバ主峰にいたるのが最近の足跡となっている。このカンジロバの場合は西側からの横断アプローチをとるため、パトラシ越えの難行を果たし、また大阪府岳連隊は東面のフォクスンド・コーラから入っていった。

七三年の日本ヒマラヤ山岳協会隊はジュムラからの西面から東進、フォクスンド湖西側にあたるドジャム・コーラ、プンプン・コーラに入って探査、カン・ジェラルワ南西尾根に取りついて、四月二十二日京極紘一、五島泰明両隊員が、翌二十三日には服部博、野村信昭、坂本真沙留の三隊員とパサン・ノルブがそれぞれ頂上を踏んだ。このあとプンプン・コーラの源頭に接近、帰路はカダマラ・ラ越えを果たした。

ポストの北里大隊はまず大阪府岳連隊が開拓したプンモからフォクスンド湖を経るアプローチを採用、当初ハンギング・グレーシャー・ピーク（六四八二メートル）を狙ったが断念、六二二七メートルピークに十月三十日、守山栄賢、武市守弘両隊員とアヌー・シェルパが立った。これをセルク・ドルマ（黄金の女神）と名づけた。帰路はフォクスンド湖のいかだ渡りで東へとわけ入っている。

七四年の山形大隊はジュムラからフリコット、パニパールタ・コーラに入り、四月二十七日、中野守成、白石明の両隊員とアヌーが東に連なるミルヒベルグ稜線に出て、ビジョラ・ヒウンチュリ（六三八六メートル）に初登頂、二十八日にも伊藤捷生、桜田昭嘉、大竹直の三隊員が第二登を行なった。帰路はディブリコット、ジャングラ・バンジャンを経てポカラに出た。

解禁後、カンジロバ・ヒマールでの日本隊はかなり活発であり、これらの山域に入った登山隊による成果のとりまとめも必要な時期がきたといえるだろう。

アンナプルナ連峰

七三年プレでは山学同志会がアンナプルナ第二峰（七九三七メートル）に登山隊を送った。エベレストへ、小西、伊藤、遠藤らのクライマーを送り出しているが、同会が独自のプランを持ったのはこれがはじめてである。最初南壁を計画していたが、北西壁に変更（一九七一年の信州大隊が開拓）、近藤克之隊員が中途からソロを企て、五月六日第三登を果たした。この日に最終のC5から登頂して、ビバーク地点までのアルバイトは十七時間半であった。同シーズンのアンナプルナ南峰（七二二〇メートル）東山稜を目指したさがみの会隊（山田邦昭隊長ら六人）、七四年プレの南峰南西稜を試みた蒲郡山の会ヒマラヤ登山隊（鈴木常夫隊長ら八人）はそれぞれ登頂を断念している。

ラムジュン・ヒマール（六九八三メートル）には七四年プレに英陸軍登山隊（ミカエル・バージェス隊長ら九人）が南東稜経由で初登頂（ニーム、キャバーライン、イシャーウッド、スコット、バージェス）、ポストには日本ヒマラヤ山岳協会隊（山倉洋一隊長ら六人）がつづいた。

日本山岳会信濃支部のアンナプルナ主峰は七三年プレの異常な降雪が、シェルパの技倆不足とからまって、なだれ遭難となった。長野県では長野県陵山岳会のダウラギリ第五峰、信州大アンナプルナ第二峰（以上七一年）、長野県岳連ガンガプルナ隊（七二年）と今回をふくめ十七人の犠牲者が出たことは残念である。

東部ネパール

成城大隊がジャヌー（七七一〇メートル）の第二登に成功したが、ポストのカンバチェン（七九〇二メートル）の初登

頂を目指した立大隊（酒井吉国隊長ら十一人）は豪雪のため、C3が破壊され、なだれの危険をはらんだため断念した。これには七四年プレに早速ポーランド隊（ピオトル・モテッキ隊長ら十五人）が北西面から試み、五月二十六日、オレヒ、ブランスキ、カルプト、マラティンスキ、ルビノウスキが初登頂、ついでポストにはユーゴ隊（サカリ・アント隊長ら十五人）のベルク隊員ら三人が第二登をおこなった。いずれにしろ、ポーランド、ユーゴ、チェコの東欧諸国が、ここ数年、ネパール、パキスタンの登山活動に成果をおさめてきたことが注目され始めた。

シェルパレス

プモ・リ（七一四五メートル）では、この二年間に二つのバリエーションが日本隊の手で開拓されたが、いずれもシェルパレスで、このパターンの先鞭をつけたともいえる。七千メートルのライト・エクスペディションも盛んになる今日で、この二隊を取り上げる。

七三年プレは登攀倶楽部登山隊（中村重行隊長ら十四人、シェルパなし）による南稜ルートの開拓である。この小規模の隊とは対照的に、となりのエベレストでは、イタリア隊が大量の物量を投入しており、これにむしろ刺激されたか、五月一日重野太肚二、下坂信夫両隊員が登頂した。七四年ポストはクラブ雲峰ヒマラヤ登山隊（藤田博隊長ら十一人、シェルパ三人）の西稜登攀、チャングリ氷河支流から取りつき（シェルパはC1まで）、六四〇〇メートルの地点をデポ兼ビバーク・ポイントとしてルートを進展し、十月十三日、高木稔、金子信行の両隊員が第四登に成功している。北東稜と南壁の第一岩稜はそれぞれ登られている。

カトマンズ・サイドで

一九七二年、すでにネパール国内では登山、トレッキングの増加にともなう諸問題の続発、特に遭難からヒマラヤ

救助協会（ＨＲＡ）の結成の動きがあり、ネパール在住の米・平和部隊、外人医師、救出のための航空機関係者らが集まって協議を重ねていた。日本からも丹部節雄氏（日山協・日本山岳会理事）が下打ち合わせを受け、さしずめ医薬品調達と、具体化してきていた。しかしその後の進展はないままに、半官半民のヒマラヤ・マウンティニアリング・アソシエーション（クマール・カドガ会長）を設立、ＨＲＡは救助部門に吸収された。しかし、その内容はほとんどなく、活動らしいものもないという現状である。

一方、ネパール政府はこの社会情勢に対応して、登山規約の改正を発表したが、特に目立ったのは補償金で、七四年から実施されているが、シェルパ一人の死亡に対する補償は三倍の十五万ルピー（四百五十万円）にはね上がっており、登山隊もいよいよ慎重にならざるを得ない。いや、人命は尊いということをこれまで忘れていたのかも知れない。

いずれにしろシェルパの登山による死亡率はきわめて高い。解禁後四十人はくだらない。クムブのシェルパ人口を三千人と見積もっても一％以上で、類縁を計算に入れると、全家族がその死亡にかかわりを持つ。といって、優秀なダージリン・シェルパ（現在三十五人がピンジュによって確認されている）は印度・ネパール関係の悪化、クムブ・シェルパの圧迫といった要素から使用不可能な状態である。

こうしたことは登山形態にも影響をもたらした。その例がプモ・リの二隊だった。このシェルパ問題があともどりするような展開は歴史的にみても、社会情勢からも考えられない。登山史でもヨーロッパ・アルプスのガイドレスへの移行を示している。しかしヒマラヤの高度、特に八千メートル級へのバリエーション時代にあたって、大規模な登山隊の組織力、効率的運営面から考えて、シェルパへの依存も無視できない面があり、この二面に立脚して、純粋な職業としての近代的養成機関を必要とする時機にある。さきのＨＲＡ準備期間にもヒラリー、ロバーツらがその動きを見せていたが進展はなく、この問題も国際的な協力を得なければ実現は困難であろう。

もう一つ、ネパールがかかえこんだやっかいな問題はカンパ族の反乱で、ダウラギリ、アンナプルナ連峰以北の山

域の入山が禁止され、このことで被害を受けた隊は少なくない。ことし二月の戴冠式にこの反乱の影響がないよう、政府軍の手で鎮圧につとめたが、このことがかえって、奥地分散のかたちとなって問題解決をさらに困難にしてきたといわれる。

七三、七四年で示されたように、パキスタン、インドの活動範囲の拡大は、小規模の登山の受け入れを容易にし、ツーリストをふくめた各国の登山隊が殺到することになった。しかしルールはルールとして守らなければ受入れ側は迷惑千万。七四年、ネパールでおこった二つの例をあげる。

一つは西ドイツのオーベルラント隊。アンナプルナ第二峰の許可で、第四峰に登頂した。このため政府は、三ヵ年間、各メンバーに対して登山活動を禁止すると共に、オーベルラント支部の入山許可申請は受けつけず、罰金六千ルピーを徴収した。

またフランス隊は、トレッキングの許可で、タウチェに登頂した。六千ルピーの罰金はもとより、隊長には向こう五ヵ年間の入国拒否、七ヵ年の同国内登山活動を差し止めた。他十一人の隊員には四ヵ年間入国を禁止、五ヵ年の登山活動を禁止した。ネパール政府が初めて取った措置で、これはライジング・ネパール紙の社説にも掲載された。

この稿をまとめているあいだに、七五年プレの遭難第一号がすでに発生してしまった。都岳連のダウラギリ主峰南岩稜を目指していた雨宮節隊長らである。岩稜に取りつき、すでにC3を建設した直後の三月二十六日午前一時すぎ、C1がなだれに襲われ、隊員二人とシェルパ三人が圧死した。同隊は都岳連傘下の二百余団体からの選抜チーム。しかもマナスル西壁を初登攀したメンバーが軸となっていた。二十五日夜は気温上昇、二、三日来の降雪で、なだれの危険は多分にあった。事実、その夜、C1では二回のなだれに襲われ、BCとは常時交信をとって待避の機をうかがっていた。しかし最終的には現場の若い二隊員の判断にまかされた。

この隊は個人の自主性を強く打ち出しており、そのことが、マナスル西壁での運営を効率的にしていた。今回もその意味で登山界から注目されていたのである。しかしそれが裏目に出たといえよう。結果論として詮策すると、真夜中の待避が可能かどうかなどの問題は別にして、若い隊員の判断にまかせたことの可否である。

メンバー各自の自主性を保ち、許された個性のある登山活動のなかで、全員の意志が一つの目標に向けて集中される場合はともかく、いったん破局に直面した場合に、個々の判断がどこまで通じ得るのか。われわれの身近な土壌のなかで、組織のなかの日本人に負わされているタテ系列、現在もなお心のすみにひそむ上（指導者）への依存心が、自主性ある登山といったものを阻害しているのも現実で、その面の訓練は未熟であり、ここらあたり、指導性との問題もからめて、登山形態に一石を投じたといえる。

これは、七三、七四年の登山を通じて、登山地域の拡大にともない、日本でも欧州に似たクラブ組織の形態のなかからの小規模登山隊が増加するなかでの偶感でもあり、こうしたパーティは、反面、個人の責任の比重が大きく前面に押し出されることになるのである。

マナスル登頂（一九七四年春）

―日本女性隊による初の八〇〇〇メートル―

黒石　恒

はじめに

私たちのマナスル登山は、女性のみによる八千メートル峰登山の可能性を探る意味で計画されたものである。そして、目標の山に、日本人の山として親しまれているマナスルを選び、一九七二年四月に、ネパール外務省登山局に登山申請を行なった。ところが、希望していた日本山岳会ルートが、一九七四年のプレモンスーンには、韓国隊と競合、優先権は韓国隊にあるというわけで、私たちは、ルートの変更をせざるを得なかった。隊員候補者全員で検討の末、未踏の東尾根を選び、変更届を提出し、一九七三年一月に許可が下りた。以後、東尾根に取組んでみたものの、適当な資料もなく、偵察の必要を感じ、一九七四年四月、中世古直子を隊長とする鈴木貞子、原田志津の三名を現地に派遣、東尾根のルートならびにキャラバンルート、サマ部落の情勢などを探った。五月末に帰国した偵察隊の報告によれば、踏査行の時期がおそく、東尾根上には出られたものの、モンスーンの襲来で核心部を探るまでにいたらず、し

たがって、東尾根からの登頂の可能性については、確信が持てないということだった。また一方、韓国隊が一九七四年度の計画を中止したので、ネパール外務省登山局は、私たちが日本山岳会ルートでも東尾根でも、いずれを取ってもよいという見解を示したという。以上の報告をふまえ、全員で協議したが、当初に希望していた日本山岳会ルートを取らず、東尾根を選ぶことになった。それについては、一九七二年の、韓国隊の雪崩による大量遭難が、大きく影響しており、ルートとしては困難だが、雪崩の危険の比較的少ない東尾根にという空気が濃厚で、日本山岳会ルートは敬遠されたのだ。しかし、東尾根からの登頂が不可能ならば、日本山岳会ルートに転進しよう、しかもその時期も、三月末日をタイムリミットとするという申合せも行なっている。

実際に東尾根に取りついてみて、このルートからの登頂が望み薄となった時点で、その問題が表面化し、東尾根を最後まで追及してみたいという人たちと、頂上に立つために日本山岳会ルートに転進するという人たちとで、二派に分かれ論争した。東尾根へのアプローチを始めた頃から、それ以後に加わったメンバーは、女性による世界初の八千メートル峰登頂というのは、確かに意義のあることには違いないが、自分は、東尾根をやりたいから参加したのだと言い、一方、計画発足当初からのメンバーは、八千メートル峰の登頂が第一義の目的だという受けとめ方をしていた。隊の目的について、隊員個々の受けとめ方に齟齬が生じていたことに気づかず、その点を曖昧にして深く追及しなかったのは、全くの手抜かりで、のちのちに禍根を残す結果になった。結局は、多数決で日本山岳会ルートへの変更が決まったものの、この決定は意外だと言う人たちがいたのだ。

隊の問題はこれ一つにとどまらず、いろいろあった。中でも困ったのが資金難だった。私たちの、女性だけでヒマラヤの八千メートル峰に挑戦するという試みに対し、世間の評価は意外と厳しかった。募金や物資の調達に着手して、初めてそのことに気づき、愕然とした。そして自分たちの見通しの甘さを悔んだが、時すでにおそしというわけだった。私たちの計画の意義は認めて下さっても、果たして私たちにその力ありや、というわけで、危惧されるのだろ

うか、援助の手も控え目になるというありさまであった。さらに石油危機のあおりをくらって、出発の日が刻々と迫ってくるのに資金は集まらず、お先真暗で、どうしたらいいものかと焦慮した。土壇場に来て、もう他人様の援助ばかり当てにせず、自力ででもやる覚悟がなかったら、この計画は達成出来ないと思い、私たちはまず、隊員の自己負担金を、一人百万円から百五十万円に増額し、さらに都合のつくかぎり資金を提供しようという態勢に切りかえた。

こんな情況で、前途に不安を抱きながら、一九七四年を迎え、一月九日には、船積みで送った荷物の輸送と通関に、鈴木貞子、伊藤知子の両名を先発隊として送り出し、本隊出発予定の二月七日ぎりぎりに、ようやく資金のメドがついた。

出　発

先発隊のさびしい出発に引きくらべ、本隊の出発は、晴れの門出らしい雰囲気をちょっぴり味わったが、カトマンズに着くなり、シェルパ等の死亡、事故に対する補償問題で頭を悩ますことになった。今シーズンから補償の額が、一挙に三倍にはね上がり、どの登山隊もそのことで頭を抱えていた。すでに法務省を通過した法令とあって、各隊の代表が願い出た、この法令適用の延期も認められず、保険金でカバー出来ない分については、隊が責任をもって支払うという念書を入れさせられた。そんなわけで、資金の乏しい私たちは、シェルパの人数も極力減らし、雇傭についても、いきおい慎重にならざるを得なかった。そのため、事前に健康診断（血圧、脈搏数、心音、心電図、息こらえテスト、検尿等）を実施し、健康上難点のある者は採用を差し控えた。

このほかに山積していたカトマンズにおける事務手続、準備万端を処理して、予定通り出発出来るまでに漕ぎつけた。

キャラバン

二月十三日、荷物とシェルパを満載した四台のトラックと、隊員用の三台のタクシーをつらね、トリスリ・バザールに向かった。そこまでは、坦々たる舗装道路でわけなく着いた。すでに待ち受けていた、四百名余のポーターたちの前に、十一トンの荷は次々と運び下ろされ、それを三十キロの荷にまとめる作業が深更におよび、隊員、シェルパらは、明日からはじまるキャラバンの準備に忙殺された。

二月十四日の早朝、トリスリ郊外のテントサイトは、ナイケやサーダーの制止も聞かず、土煙をあげて荷物に突進し、奪い合いを演ずるチベッタン・ポーターで、喧噪をきわめていた。これから先、女ばかりで、この猛々しい人たちを、どう取りしきって行ったものかと、少々不安を覚えたが、さしたる事故も事件も起こらず、予定より一日早い二月二十四日に、無事にサマに着くことが出来た。

道中、大分手入れされて、歩きやすくなったとはいえ、平坦な道ばかりではない。急登あり、急降下あり、危険な崖のへつりや、濡れた桟道、危っかしい仮橋に、ひやひやさせられるところもかなりあった。その長い道程を、三十キロの重荷を担いで歩き通したポーターの中には、年端もいかぬ少年や少女もまじっていたし、四十度近い高熱をおして、隊列から落伍もせずについてくるものもいた。そんなポーターたちの列にまじって、彼らの眼から見れば、ほんのわずかばかりの荷物を担いだ隊員たちが、のんびり歩いていた。そして変った風俗と見ればカメラを構え、気に入った風景にめぐり合えば、スケッチブックを拡げる。植物や昆虫の採集に熱中しているかと思うと、その合間に、適当な時間に用意されている朝食や昼食に舌鼓をうつ。そんな隊員たちを、ポーターたちは羨んだ。夜ともなれば、星空の下で、ポーターたちは焚火を囲んで暖をとり、やがて身を寄せ合って寝に就く。だが、隊員たちは、コーラスを楽しみ、テープレコーダーより流れる音楽に興じ、日記をしたため、シェルパ・ダンスの仲間入りをしては、彼ら

との親睦をはかり、夜の更けるのも忘れた。連日、晴天に恵まれ、私たちはこれらの行事をあかず楽しんだ。

ローの部落近く、間近にマナスルを仰ぎ、ようやく緊張した。眼前に延びる東尾根の凄じさに、「あんなところ、一体誰が登るのかしら」と、気をのまれる人もあれば、闘志をかきたてられ、きらきら瞳を輝かす人もあり、十人十色の反応を示してサマに着いた。例年ならまだ深い雪に埋もれているというのに、今年は珍しく、ところどころまだらに消え残った雪が見られる程度だった。

登　攀

サマで数日を費やし、登攀の陣容を整える。三月三日には四四〇〇メートルの台地上にBCを建設し、サマのポーターを使っての荷上げが、三月四日には完了、一日遅れの雛祭を兼ねて、ベースキャンプ開きの祝宴を張った。当日ヘリコプターで飛来したTBSの取材班は、大車輪でカメラをまわした。

翌日よりC1の荷上げの準備とルートの偵察を開始した。この日から隊員は終始、先頭に立って行動したが、ペースのおそい隊員のあとについて歩くのが不服で、不平をもらすシェルパもいたが、私たちの登山である以上、私たちの流儀でやらせてもらうことにした。シェルパ・メイクと言わせないために、この流儀が彼らのカンに触ったとしても、譲歩するわけにはゆかなかった。そのためかどうか、彼らはサボタージュという権利を行使し、困らされることもあったが、反面、私たちは彼らの実体を見きわめることが出来、彼らの扱いにも次第に習熟して行った。しかし、二人のサーダーの確執から来るシェルパ同士の紛争は、私たちの頭痛の種だった。

C1への荷上げは順調に進み、隊員も高所順応を兼ねて、それに従事した。最初が肝腎なので、荷重は十キロ乃至十五キロにおさえていたが、シェルパなみに担いで疲労困憊して帰って来る人があったりで、一名の落伍者も出すまいとの配慮から、きびしく健康状態をチェックして、ドクターストップを行使した例もある。しかし、概して高所順

応には慎重だったので、決定的な高所症状は現れなかった。

三月十日にはC1（五二〇〇メートル）を建設、隊員を交替で宿泊させ、順応の状態を観察した。以後、初めて経験する高度には、かならず一～二回登降を繰り返してから宿泊させる方式をとった。三月十八日からC2へのルート工作を開始、中世古、原田、二人のサーダーにより、東尾根につき上げるクーロアールをつめて、尾根に迫った。この頃の天候は、連日、昼ごろより崩れ、降雪をみた。この日は風も強く、舞い上がる雪煙に、偵察隊の姿は時おりかき消された。ダーウォンチューがアイゼンを忘れたと帰りたがるので、尾根まで出られず引き返した。昨年の偵察時に固定したロープがそのまま残っており、十分使用に耐えたそうだ。翌日から隊員が交替でルート工作に出て、三月二十六日、尾根上にC2（六〇〇〇メートル）を建設した。それに引き続き、私たちが第一の難関と考えていた、岩峰へのルート工作が開始されたが、不安定な雪壁のトラバースに五日間を要し、岩峰基部に達したものの、シェルパたちは、隊員が必要と認めない部分にまで、不安がり、勝手にロープを固定してしまった。おまけに、荷上げは体力的限界だと、十五キロしか担がなかった。これではフィックス用ロープやスノーバーが大幅に不足するし、荷上げが追いつかないことが目に見えてきて、東尾根からの登頂は望みがないと思われた。三月三十一日、全員BCに集結、今後の方針について、半日協議した。そして、先に述べたような経緯で、日本山岳会ルートへの転進がきまったが、東尾根に対し未練を残す人もかなりあった。

四月一日よりBC移転の準備にとりかかる。C2まで上げた荷をBCまで下して、サマ経由で新たにBCへ移送するため、サマのポーターを使わなければならなかった。一ルピーでも節約したいと思う私たちと、足許をみて、この際儲けてやれという彼らとの間に、賃金の折あいがつかぬまま、数日間にらみあいが続いた。三日間で移転をおえる予定であったが、九日かかってようやく完了した。このおくれを取り戻すために、新ルートへは、登攀隊長の中世古を責任者とする、五名の偵察隊を送り、旧BCには各係の責任者が残って移転作業に当たった。サマへの下りは、春

の兆しが見えはじめ、可憐な草花が眼を楽しませてくれ、雪の中で暮した一ヵ月の酷しさが、まるで嘘のようだった。久方ぶりに見るサマの部落も、緑が濃くなり、ヤクの鈴の音ものどかで、新調されたゴンパの幟は、陽光にまぶしいばかりの白さを見せていた。新ＢＣへの登りにかかると、行手に、マナスルの鋭峰と、荒々しい氷河の末端が、岳樺の梢ごしに、視野いっぱいにひろがり、そこから足下の、乳緑色の水をたたえた氷河湖めがけて、轟音とともに雪崩が落ちこんでゆく。背後には、麗しい山容を誇るパンプーチが、端然と、折目正しく控えており、思わず足を止めて、その景観に見とれてしまった。最後の急登は、勝手放題につけられたヤクの道を、適当にひろって登って行った。間もなく着いた韓国隊のＢＣ跡が、私たちの登山基地に定められており、傾斜した狭いカルカで、設営に苦労させられたかわり、眺望のよさがそれを補った。

偵察隊の方は、すでにＣ１を建設、さらにＣ２へのルートを延ばしていた。ところが、このころになって、連絡将校が私たちのルート変更に疑念を抱き、彼がネパール外務省登山局に書き送った、ルート変更に関する報告に対し、回答があるまでは、ＢＣ以上にシェルパやポーターを上げてはならないと言い出した。シェルパたちは動揺するし、私たちは窮地に立たされたが、まもなく、登山担当官よりお構いなしという回答が届き、この問題はケリがついた。Ｃ１への荷上げは続行していたが、このころからすでに建設されたＣ２への荷上げも並行して行なわれ、ＢＣ、Ｃ１間は三十七名の、Ｃ１、Ｃ２間は七名のローカル・ポーターを起用、精力的な荷上げで、今までのおくれを取り戻した。

Ｃ２までのルートは、途中、ナイケ・ピークよりの雪崩の危険はあったが、比較的起伏の緩い雪原で、Ｃ１手前のクレバス上部のトラバース・ルートと、Ｃ２直下、ナイケ・コルから黒岩上部への急斜面に、ロープを固定しただけで、ローカル・ポーターの荷上げに危険はなく、彼らの起用で荷上げは順調にはかどった。

隊員もこのころはほとんどＣ１、Ｃ２に入って、ＢＣは一時ひっそりとしたが、すぐに、上部キャンプより交替で、休養に下って来る人たちがぽつぽつあらわれ、私はその人たちの健康診断と食事の世話に追われ、結構忙しかった。

そうなる前の一時期、BC移転作業に従事していた人たちは、東尾根でのローテーションが中断され、BCやサマに十日近くも釘づけにされたので、偵察隊の人たちと、高所順応に差がつくことを懸念していた。一方、偵察隊の中世古は、東尾根で、すでに六〇〇〇メートルまでの高所順応が出来ているので、日本山岳会ルートでの同高度までは、キャンプの建設を急ぎたいので、勝手知った今のメンバーで、C3の建設まで頑張ると主張していた。私たちには下る自由はあっても、登る自由がないという言葉が隊員の間にささやかれ、リーダー不信の気配が感じとれた。また私と中世古の間でも、トランシーバーの連絡だけでは、意志の疎通を欠き、直接話し合いの場を持つ必要に迫られていた。そんな時期に折よく彼女はBCに降りて来てくれた。下痢と腹痛に悩まされ、話よりもまず、治療と休養が必要な状態だったが、一日おくれて下って来たリーダーの内田をまじえ、二日間じっくり話しあって、今後の方針をたてた。アタックの態勢、メンバーの人選についても打合せをおこなった。私たちは、計画の段階では、アタック・メンバーにシェルパを加えることを考えていなかった。それには、それなりの理由があってのことだったが、それをシェルパレス登山と誤まって報道され、大分物議を醸したようだ。シェルパの中には、頂上に立ちたいと希望するものがおり、もしその希望が入れられなければ、サボタージュも辞さないという態度が見られたし、私たちはまた、今後の登山活動に支障を来すことを慮り、アタック・メンバーにシェルパも加えることにした。一方、マナスルは彼らの国の山であり、儀礼的な意味からも、彼らの代表を頂上に立たせることが、理に適うやり方だと反省もしたからだ。

四月十六日、中世古はC2に戻り、雪崩の危険で決めかねていたC3の位置を、偵察した隊員の意見を参考にして決定した。C3まではかなりの急斜面で、そのほとんどをフィックスした。ラッセルに苦労したが、アイゼンは不要で、これがヒマラヤの登山かと疑ったと話す隊員もいた。C3より鯨の背上部のC4までは、やや左寄りに、ダイレクトにルートをとった。見通しはよかったが、雪面は、ノースコルから吹きおろす風で、クラストするかと思うと、日照で軟雪となり、変化が激しかった。この辺はシェルパの要求で、六六〇〇メートル地点からC4まで、約八〇〇

メートルの固定ロープが張られた。C4建設前後は、天候が不安定で降雪が多かった。雪崩による事故もあるにはあったが、大事にはいたらず、着実にキャンプが建設されてゆくので、今年はよほど、氷河の状態がよいのだろうと思ったくらいだ。

四月二十八日、予定より三日おくれてC4（七一五〇メートル）が建設された。ここよりいよいよ酸素を使用しはじめ、原則として、夜間睡眠中は、毎分〇・五リットルの吸入を義務づけた。行動中は自由にしていたが、隊員は睡眠中も行動中もともに使用した。シェルパの中には、睡眠中の吸入も行なわず、翌日の行動に支障をきたす者が出たりして、彼らにも睡眠中は吸入するよう注意した。

一時、モンスーンがはじまったとサマの部落民が言い出すほど、悪天候が続き、心配されたC5へのルート工作が、二十九日より開始された。五月一日には、伊藤隊員が、三名のシェルパのサポートで、プラトー上に抜け、C5予定地を七六五〇メートル地点に定めた。この日は、シェルパにも強制的に酸素を吸わせ、ピッチを上げるようにしたが、十八時の定時交信時に、まだC4にもどらないというので、心配させられた。一九時三十分、無事帰着の連絡を受け安堵した。同日、頂上攻撃の日も迫って来たので、登攀隊長の中世古と、手紙とトランシーバーの二本建てで、最終的な打合せを行なった。アタック・メンバーは一応、中世古、内田、関田、栗林、森の五名を候補に選んだが、内田をのぞく四名はそれぞれ、腹痛、下痢、浮腫などの高所症状が認められるというので、この段階では、もう少し様子をみないことには、第一次アタックのメンバーはきめられなかった。したがって、上部のリーダーの判断で、最も体調のよいと思われる人から順に、第一次、第二次のメンバーを選出するよう指示した。またBCで休養中のサーダー、イラツェリンに、C2に上って、アタック時のサポートに万善を期するよう命じた。こうして逐次、頂上攻撃の態勢を固めて行ったが、種々好転の兆しが見えはじめたものの、やはり天候がいちばん気がかりだった。

五月二日、C5にシェルパのみで一部荷上げを行ない、中世古、内田、森の三名がC4入りをする。幸いこの日は、

マナスル登頂ルート図

鈴木隊員の事故現場
(ピッケル, ザック発見)
ピナクル
頂上
8156m
毎日数回ここから
雪崩れる
北峯
ナイケ・ピーク
ナイケ・コル
C5 7650m
C4
7150m
C3
6500m
岩峯
6000m C2
急な雪のルンゼ
東尾根ルート
ヤッケ安全ベルトを発見
ゆるい雪の斜面
セラック帯
C2
5900m
雪崩道
黒岩
C1
5200m
急な斜面
フィックスした
BC
4400m
東尾根の取付台地
C1 5300m
ほとんど平らな雪の斜面
マナスル氷河
灌木帯
BC 4350m

トランシーバーの受信状態がよく、C4の中世古と直接話すことが出来た。中世古、内田、森に、シェルパのジャンブーを加え、四名で明日C5を建設すること、五月四日に頂上攻撃を決行すること、メンバーは、四名のうち調子のよい二名にし、あとの二名はサポートにまわる予定であるという報告を受け、了解した旨、伝える。

五月三日、C3と交信出来ず、行動中の中世古の送信をキャッチし、シェルパ間に不穏な動きが見え、明日のアタックのサポート態勢に不安がある、という報告を受けた。ジャンブーをアタック・メンバーに選んだことに不服なシェルパが、サボタージュをはじめたということだった。シェルパ側の人選は、サーダーのダーウォンチューに一任したが、決めかねて、結局、隊員側から指名してくれというので、体力から言っても、経歴から言っても、最も適任と思われるジャンブーを選んだ。慣例にしたがわず、サーダーをさしおいて、平のシェルパを選んだというので、頂上に立ちたがっていたダーウォンチューの、機嫌を損ねる結果になったが、彼には健康上の不安があって指名をさしひかえたのだ。何度もC3を呼び出し、明日の頂上攻撃に対する隊員およびシェルパのサポート態勢に手抜かりのないよう頼み、確約は得たものの、シェルパたちの動静が正確に把握出来ないため、少々不安が残った。

五月四日、この朝、オレンジ色に染まるマナスルの頂上は、いくら眼を凝らしても雪煙が見当たらず、まれにみる快晴であった。このころC5では、すでに出発の準備を調えたアタックメンバーが、テントの中で風の治まるのを待っていた。やがて、内田、ジャンブーの二人が八時三十分に出発、サポート役にまわった中世古、森の二人が三十分後に出発した。強風の吹荒れた後のプラトーの上は、アイゼンをきかせての快適な登りもあれば、吹きよせられた軟雪に、ラッセルを強いられる箇所もあるという状態だった。二ピッチほどの間隔をおいた四つの人影は、ようやく無風快晴となった雪原を、頂上めざして、着実に高度を上げて行った。

十五時、何時も仰ぎみていたピナクルが、はるか足下に小さくなって、やがて一つの高みにたどりつき、それが頂上と本気で思いこんだのか、時間を気にして、この辺で切り上げたいと思ったのか、ジャンブーが、ここから帰ろう

と言いはって、内田は困り果てた。そこへ中世古が追いついて、「どうしたの、頂上?」とききただすと、内田が「ジャンブーが頂上はここだというが、あそこよね」と指さす方向に、日本隊の記録で見知った、真の頂上が見えたのだ。いぶかしげなジャンブーを後に、ニセ頂上へ登りつめたその足で、中世古がトップに立ち、頂上に向かった。頂上直下に、日本山岳会マナスル隊の登頂を支えたハーケンを発見し、感無量であったらしい。ここで中世古と内田の両名は、おたがいにトップをゆずりあったが、結局、最初に頂上を踏んだのは、登攀隊長の中世古だった。時に十七時三十分、かくて、世界初の、女性による八千メートル峰の登頂は成しとげられた。続いて内田、ジャンブーの二人が頂上に立ち、しんがりは森。

約一時間、それぞれ頂上での儀式をおえて、下山の途についた。十九時三十分、BCで一日中トランシーバーにかじりつき、アタック隊からの連絡を待っていた私の耳に、登頂成功の第一報が入った。息ぎれで言葉がとぎれる。…酸素マスクをはずすと、こうも苦しげになるのかと思ったが、なんと、ニセ頂上手前より、頂上往復までの約四時間を、森以外は酸素なしで行動していたのだ。高所順応は比較的順調にいったとは思ったが、こうも好調とは予想もしなかっただけに、後遺症を心配したが、その心配は無用だった。二十二時ごろ、全員無事にC5帰着。

登頂者の感想が、申しあわせたように「やれやれ、これで無事に責任を果たした」ということだったが、私とても同じことが言えた。

遭難

五月五日、第二次アタック隊員の鈴木貞子、伊藤知子の両名が、C4を出発してC5に向かったまま消息を絶った。十八時の定時交信でC5にまだ到着していないことを知り、不安をおぼえ、C3に待機中の中世古に問いあわせると、C4、C5間は固定ロープがベタ張りで、迷うはずもないし、安全だから心配はいらないという返答だった。天候が

激変しているので、明日のアタックは中止することに決め、C5に命令を伝える手筈をし、十九時三十分に再度交信する。この時は、アタック・メンバーとしてC5入りしたシェルパから、両隊員は天候が悪くなったので、アタックをあきらめ、C4に戻ったらしいという連絡を受けた。二十時三十分まで待ったが、彼女たちの行方は杳として知れず、それが遭難に結びつくまでには、かなりの時間が経過した。その日は、昼ごろより烈しいブリザードとなり、視界はゼロに近く、C5の位置がわからずC4に引き返す途中、てまどっておそくなっているものとばかり思っていたからだ。あまりのおそさに只事ではないと、C3の中世古に連絡、相談の上、緊急事態と判断、各キャンプに、トランシーバーを開局したまま待機するよう命じ、さらにC5とC4には、テントの周辺を、ホイッスルを吹いて捜索するよう依頼し、彼女たちがもどるまでは、テントに灯りを絶やさぬよう指示した。二十三時に、C4より、テントの近くに意識朦朧として突っ立っていた、伊藤隊員を発見し、テントに収容した旨の連絡が入った。鈴木隊員も間もなく、という期待も空しく、彼女はとうとう帰っては来なかった。暗胆たる想いで一夜を明かし、五月六日の未明に、C5のシェルパにプラトー上の捜索を、C4の隊員にはC5への救援を依頼した。C5のダーウォンチューとミンマは、おたがいに確保しあわなければ歩行出来ないほどの強風をついて、三時間余り捜索してくれたが、プラトー上には発見出来ず、下部だと判断して下降を始めた。その途中、プラトー直下の、フィックス・ロープ終了点から五メートルほどピナクル寄りに、鈴木隊員のピッケルと酸素ボンベの入ったザックを発見した。しかし強風に身の危険を感じ、それらを回収することが出来なかった。捜索を続けながらの下降中、C4近くの八〇〇メートルほどフィックス・ロープから左寄りに、鈴木隊員の防風衣（登攀ベルトが着いたままの）を発見し、それを回収してC4に下った。

目撃者もなく、あくまで推測の域を出ないが、鈴木隊員は、フィックス・ロープをはなれて、自己確保なしに着換え中（羽毛服に）、強風にあおられバランスを失い、C4付近まで滑落、クレバス内に転落したものと考えられ、生存の可能性も薄かった。なおC4、C5間は、ほとんどロープを固定してあり、それに登攀ベルトで確保し、さらにユ

マールを使って登降していたので、パートナー同士は、ザイルで結びあっていなかった。C4の隊員は、救出した伊藤隊員の看護で一睡もせず、疲労の極に達していたが、風がおさまるのを待って捜索に出、遭難現場を確認し、遺品だけでも回収して来ると申し出てくれたが、天候回復の兆しもなく、C4のテントは雪にうずもれ、炊事も困難になり、危険な状態におかれていた。シェルパたちは、私たちの頼みに耳も貸さず、C3、C2と下降をはじめ、伊藤隊員をC3に降す作業がせい一杯で、捜索を続けるのは無理だった。翌五月七日も天候は回復せず、これ以上の捜索は二重遭難のおそれありと判断、涙をのんで、C4の隊員に下山を命じた。救援に三名のシェルパをさしむけ、C4を撤収、さらにC3も撤収して、安全圏のC2に集結させた。

五月八日には全員BCに下山し、一日休養ののち、十日よりC2以下の撤収を開始した。主のない鈴木隊員のテントには、小さな祭壇が設けられ、隊員たちは、荷造りの手を休めては、手向けの花を摘みに出かけた。

五月十三日には、全員サマに下り、僧院において、ヘッド・ラマの回向による仮葬儀をとりおこない、隊員たちはしめやかに在りし日の鈴木隊員を偲び、冥福を祈った。そして、マナスルを仰ぐ丘の上に石を積み、慰霊碑を建てた。

モンスーン近く、いっせいに咲き出した花々を、碑前に供え、マナスル氷河に永遠の眠りについている鈴木隊員に、最後の別れを告げ、六月十七日、本隊はラルキャ峠を越えて、荷物の輸送隊はブリガンダキ沿いに、帰路についた。キャラバンは、標高が下るほどに暑さをまし、足の裏が焼けつくような酷暑に、一日も早くこの旅の終ることをねがった。幸い、モンスーン中というのに、一日も雨にあわず、蛭に苦しめられることもなく、本隊は五月二十八日に、輸送隊は五月三十一日に無事カトマンズに着き、約半月ぶりの再会を喜んだ。

おわりに

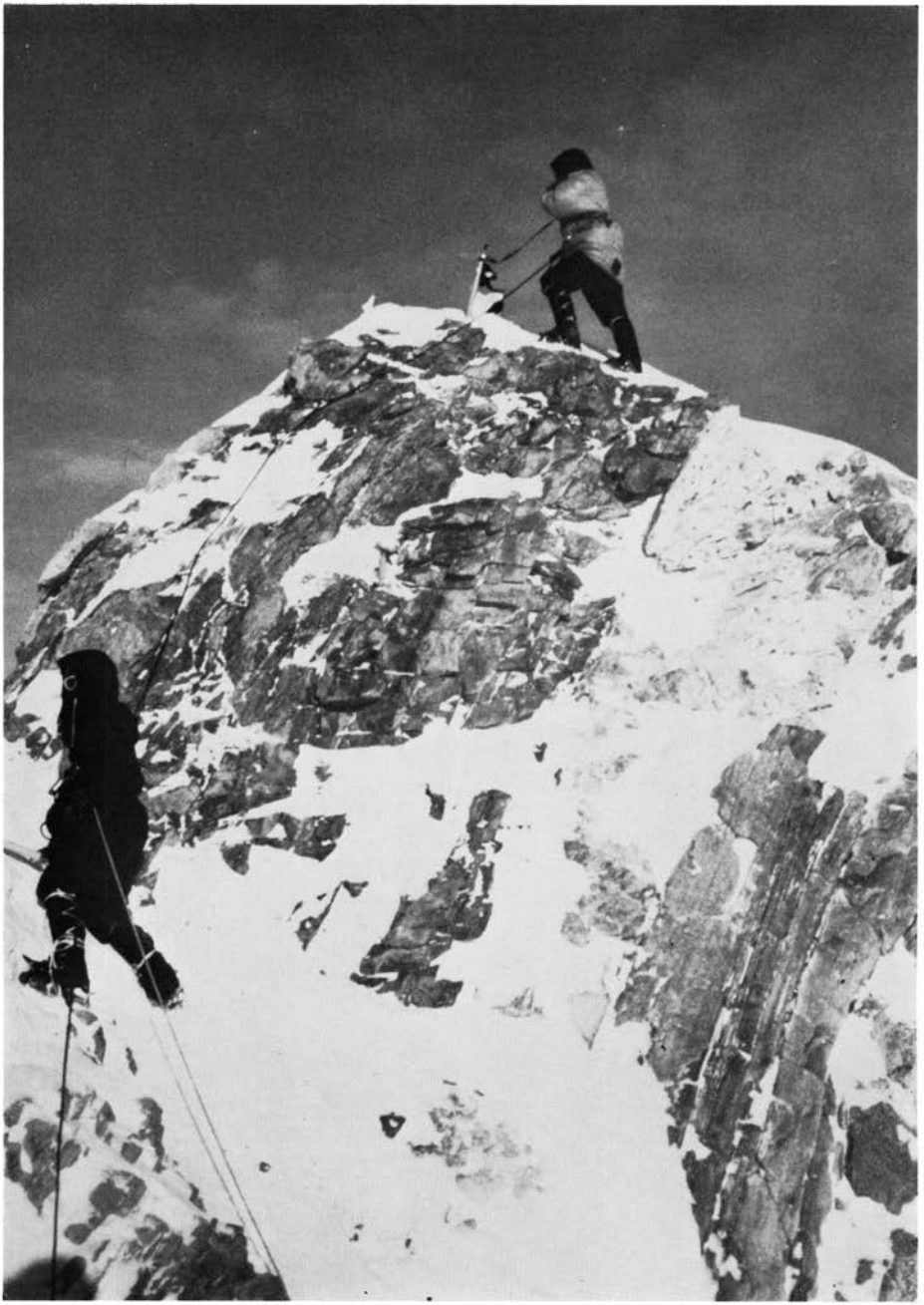
今回の私たちの試みで、女性に適した登り方をするなら、女性のみの八千メートル峰登山は可能だということが、

実証されたと思う。しかしそれはあくまで、生理学的な立場から言うことであって、私たちは、マナスルの登山を通じ、自分たちの社会人としての未熟さ、修練の足りなさを痛感するとともに、反省すべき点の多かったことも知った。そしてこのような私たちの体験を生かし、今後の女性登山隊が、よりよい成果を挙げられることを期待したい。

またこの計画の立案者である、総指揮の佐藤京子さんが、病のため、現地において直接この隊の指揮をとることが出来なかった。そのためやむを得ず、私が代役をつとめることになったが、結果として、彼女の構想とは異なったかたちの山行になったのではないかと想われる点、さらにこの計画を推進するにあたり、岳界諸先輩よりいただいた貴重なるアドバイスが、登頂を成功にみちびく力となったことを記して、この報告を終える。

隊　名　同人ユングフラウ　日本女性マナスル登山隊

隊の構成　〔総指揮〕佐藤京子（三十六歳）〔隊長兼医師〕黒石恒（四十八歳）〔登攀隊長〕中世古直子（三十六歳）〔隊員〕内田昌子（三十三歳）関田美智子（三十五歳）森美枝子（三十三歳）板倉昌子（三十一歳）中島睦美（二十九歳）鈴木貞子（三十歳）伊藤知子（二十七歳）原田志津（二十六歳）栗林直子（二十四歳）〔事務局長〕宮本良江〔リエゾン・オフィサー〕ブラディブ・S・ラナ（二十二歳）〔サーダー〕イラ・ツェリン（四十歳）ダーウォンチュー（三十八歳）〔シェルパ〕ジャンブー（二十六歳）マン・テンジン（二十三歳）フィンゾー（三十三歳）リンジン（三十八歳）ミンマ（二十三歳）パサン（二十六歳）ハクパ・ノルブ（二十三歳）ダワ・サンダー（二十九歳）ドルジェ（三十歳）フルテンバ（二十五歳）アン・ナムギャル（二十八歳）ミンマ・ツェリン（二十歳）アンテンバ（三十四歳）〔コック〕アンツェリン（五十歳）〔サブ・コック〕アン・タワ（二十六歳）〔キッチンボーイ〕ツェリン（二十三歳）タシ（二十六歳）〔メールランナー〕クリシュナ・バハドール（二十八歳）ランバハドール（二十八歳）〔ポーター〕四一〇人（ナイケをふくむ）



マナスルの頂上に立つ中世古隊員（1974年５月４日17時30分，森隊員撮影）

頂上稜線の森隊員

マナスル頂上よりチベット側を望む

行動記録

二月　三日　カトマンズ着
十四日　トリスリからキャラバン開始
二十四日　サマ着（隊員と三分ノ二の隊荷）
二十五日　残りの隊荷サマ着
三月　三日　BC建設（四四〇〇メートル）
十日　C1建設（五二〇〇メートル）
二十六日　C2建設（六〇〇〇メートル）
三十一日　東尾根より東壁へルート変更を全員協議で決定
四月　一日　東尾根ルートのBC撤収準備開始
五日　東壁ルートBC建設（四三五〇メートル）
八日　C1建設（五三〇〇メートル）
十一日　C2建設（五九〇〇メートル）
十八日　C3建設（六五〇〇メートル）
二十八日　C4建設（七一五〇メートル）
五月　三日　C5建設（七六五〇メートル）隊員三名（中世古、内田、森）とシェルパのジャンブーが五人のシェルパのサポートによりC5入り
四日　内田・ジャンブー、中世古・森の二パーティで頂上アタック十七時三〇分、登頂成功、四人ともC5帰着
五日　C5の四人C3へ下山、一八時鈴木の行方が不明、捜査を始める
六日　午前中C5付近を捜索、シェルパがC5よりC4に下降中二ヵ所で鈴木隊員のザックピッケル、ヤッケなどを発見、鈴木隊員はC5付近よりC4付近まで滑落と推測
七日　下山準備　撤収開始
八日　全隊員およびシェルパBCに下山
九日　休養
十日　C2より荷下げ
十一日　C1より荷下げ
十二日　鈴木隊員の仮葬儀準備のため、隊長、登攀隊長、サマへ
十三日　BCを撤収し、全員サマへ集結、ゴンバにおいて鈴木隊員の仮葬儀を行なう
十六日　帰路キャラバン準備
十七日　本隊はラルキャ・ラ経由、荷物輸送隊はブリガンダキ経由の二隊に分かれ、キャラバン開始
三十一日　全員、カトマンズ集結

エベレスト南西壁（一九七三年）

湯浅道男

出発まで

第二次RCCを主体とした「日本エベレスト登山隊・一九七三年」の派遣を正式に決定したのは一九七〇年のことであった。第二次RCCではその前年、奥山章を委員長とするヒマラヤ委員会が設置され、ヒマラヤ登山の研究をつづけていた。一九七一年、登山許可取得のために湯浅をネパールに派遣した。一九七二年秋または七三年秋に許可を与える、という内諾をネパール政府から得て湯浅は帰国した。一九七二年秋は、イタリア隊が偵察行のために権利を留保していたのでその調整の問題が残されていたからであった。時同じく、クリス・ボニントンがロバーツを通じて許可取得工作を開始していた。さらに、本隊の許可問題は、いわゆる「アマ・プロ問題」に関連して、国内手続において難渋した。結局、ネパール政府は、イタリア隊のキャンセルを契機に、七二年秋イギリス隊、本隊には七三年秋に許可する旨を発表した。こうして、委員会は準備活動に専念することになった。しかし、計画途次、本計画の中心人物として隊長を予定されていた奥山章がガンのために他界され計画の行方が危ぶまれたが、氏の「遺言」通り関係者は本計画の実現に邁進した。

登山隊は総指揮・橋本龍太郎、隊長・水野祥太郎とし、登攀隊長として湯浅道男を指名した。副登攀隊長には青木が指名された。大所・高所から登山行動をアドヴァイスするという意味で、七〇年エベレスト経験者である住吉、鹿野に参加を依頼した。タクティクスから算出された予定隊員は二十八名の登攀隊員と二名の医療担当隊員であったが、報道隊員五名、医学担当二名の追加、現地参加隊員の加入によって隊員は大幅に増加した。三年余の準備活動をやりぬいた者すべてに参加して貰うという委員会の方針と現地参加を希望する在ネパールの優れた登山家に参加して貰うという二つの理由によるものであった。隊員はつぎのごとくである。

総指揮・橋本龍太郎（六十三歳）、隊長・水野祥太郎（六十六歳）、副隊長・登攀隊長・湯浅道男（三十七歳）、副隊長・住吉仙也（四十七歳）、副登攀隊長・青木洋（三十五歳）、鹿野勝彦（三十一歳）、遠藤二郎（三十五歳）、＊上田富雄（三十四歳）、＊森田勝（三十六歳）、小暮勝義（三十歳）、田中壮佶（医師・三十三歳）、＊金田正樹（医師・二十七歳）、坂野俊孝（医師・二十九歳）、飯塚誠一（三十二歳）、松田昭（二十九歳）、三戸田一郎（三十一歳）、石黒久（二十八歳）、犬木精一（二十八歳）、岡部勝（二十六歳）、加藤保男（二十四歳）、山田和夫（二十七歳）、＊近藤国彦（二十八歳）、合田敏夫（二十六歳）、桜井正巳（三十歳）、深田良一（三十歳）、渡辺高根（二十六歳）、三羽勝（三十一歳）、＊重広恒夫（二十六歳）、清水清二（二十八歳）、下坂信夫（二十五歳）、須田義信（二十八歳）、高見和成（二十八歳）、丹下博（二十六歳）、根岸知（二十六歳）、＊長谷川恒男（二十五歳）、＊桜井洋介（二十四歳）、福島博憲（三十三歳）、国井治（二十九歳）、佐藤俊三（三十歳）、重野太肚二（三十歳）、＊本郷三好（二十二歳）、前谷東雄（在カトマンズ・二十四歳）、藤木高嶺（報道・四十七歳）、今井幹雄（報道・三十三歳）、中村和夫（報道・四十三歳）、赤松威善（報道・三十六歳）、寺田捨己（報道・三十四歳）、宇野耕平（コック・三十四歳）、ディパク・ラナ（連絡将校・二十三歳）（＊印は先発隊）。

シェルパは、第一サーダー、ハクパ・テンジン、第二サーダー、ソナム・ギャルツェン、第三サーダー、パサンと

し、以下三十名を採用した。

先発隊派遣

四月初旬、上田を隊長に以下八名の先発隊がカトマンズに向った。先発隊は種々の目的をもって出発したが、とくに資金調達の関係から数度にわたって分送されざるを得なくなった隊荷を通関・輸送するという困難な作業が課せられていた。学術隊員兼ゼネラル・マネージャーとして、現地参加を依頼した在ネパールの鹿野が学術調査の傍らこの任をよくサポートした。山田は、二度にわたって通関のためにインドに向かいその中心的役割を果たし、中発隊員として、国内の準備活動を終えた岡部、加藤、松田、前谷がこれに合流した。悪名高きモンスーン期のカルカッタ通関を三船にわたって無事に完了した。通関業者は、主としてゴーシェ氏を使った。

なお先発隊は、モンスーン前にこれらの隊荷を輸送するために約三十フライトをルクラに飛ばし、輸送基地となるシャンボチェの宮原氏のホテルへ集結させた。計画変更による数度にわたる通関、たびかさなるフライト変更、人員配置の変更など、折しも観光シーズンのネパールでしかもイタリア隊との輸送フライトの競合という諸事情の中での輸送任務の遂行は、きわめて困難な作業であったにちがいない。

アプローチ

七月十九日、水野隊長以下二十六名からなる本隊がカトマンズに向けて出発した。湯浅ほか四名は募金残務のため、二十九日、遅れて出発した。その間のリーダー権は青木に移行した。

七月二十日、カトマンズに集結した隊員は、報道隊員も含め四十数名となった。雨の中を残余の約十五トンの隊荷を伴ってキャラバンをしなければならない。行動を機能的にするために、遠藤、住吉、青木、須田をそれぞれリーダ

ーとして、四隊にわけてキャラバンを開始し、八月の十九日には輸送基地となるシャンボチェのホテルに集結した。途中、長谷川が肝炎になりジリからチャーター・フライトでカトマンズの病院へ入院した。ドクターからは強い帰国要請も出されたが、とにかく快復をまつことにした。ドクター・ストロング氏からは、ウィルス性肝炎にかかった前谷・森田・長谷川の三名の肝炎データを常時BCへ送ってもらうことにしたが、常識的にいえば、登山活動は不可能という結論ばかりであった。アイスフォール保全のためという危険かつきわめて地味な作業を担当することになっていた前谷には、在カトマンズのマネージャーとしてその任に当ってもらうことにした。森田はキャラバン中、暇さえあればサッカーに興じ、トレーニングにはげんでいた。長谷川は、二度目の入院であり、ドクター陣の帰国要請も無理からぬことであった。両名の処遇については、湯浅に一任された。農繁期のポーター集め、蛭の襲来にもめげず、この大キャラバンは隊荷一つ失わずに終了することができた。

八月二十日前後から、シャンボチェから隊をさらに再構成してそれぞれBCに向った。行動パターンは、大体、ペリチェ三日滞在、ロブチェ三日滞在を基本とした。鹿野、上田、小暮はBCへ直行して、すでにBC入りしていた重野らと合流し本隊の受入れ態勢に加わった。飛行機で直接シャンボチェ入りした湯浅も、青木とともに隊員の調子をみるために別動隊でBC直行というかたちをとった。今後の行動計画のための隊員の順化データが必要だったからである。エーデルワイスやブルーポピーの美しさに元気づけられ隊員の高度順化は順調に進んだ。順化不良の隊員は三、四名を数えるのみであった。総体的にみれば、シャンボチェ滞在の期間の長かったことが良好な結果をもたらしたものといえよう。

重野、重広らはBC整備のために先行して八月二十日、遠藤ら第一隊は八月二十四日、鹿野らは八月二十五日、湯浅らは八月二十七日、同日夜住吉らがBCに到着した。須田らは九月にBC入りした。BCは、イタリア隊、日本山岳会隊より若干上部に設営した。総数四十のテント、その他倉庫、食堂などと設営計画は順調に進んだ。

A・B・Cへの行動

エベレスト登山にとって最も困難な問題は、アイスフォールの通過である。総量十九トンの隊荷が、すべて人力によって、ここを通過して上部キャンプに運び上げられなければならない。さらに、上部行動に備えるための隊員の高度順化は実質的にはその行動の過程で為されなければならない。予測することの不可能だといわれているアイスフォールの危険、加えて、まだ資料のないモンスーン中にここに入らなければならないということは、エベレストを南面から登る者の宿命とはいえ、つらいことであった。

この問題に対処するためにわれわれは、次のような行動指針を採用した。①登山期間の終了するまで一貫してキーパーを置き、キーパーは同一人であること。②キーパーは、毎日先行隊としてルートを確保すること。③シェルパの行動には、常に隊員が同行し危険遭遇に際しての処置に備えること、などである。①については、その任にあたる予定の前谷隊員が肝炎になり、隊員のローテーションによって充当せざるを得なくなったが、シェルパのサンゲが全登山期間を通じて献身的にこの任にあたってくれた。サンゲが〝アイス・フォールの神様〟といわれるゆえんである。なお、アイスフォール・ポーターは、二十六人雇用した。

八月二十九日、本隊が到着して二日目。午前中晴、午後から雪という天候パターンを予想して直ちにルート工作に入る。ヒマラヤ経験者の隊員数人とサンゲを中心としたシェルパ十余人は丸太、はしごの資材を運び上げてこれに従事した。ルートは、従来のエベレスト登山で定型化された向って左側、エベレスト西稜寄りを約五八〇〇メートル地点まで登り、中心部へ若干移行して、ウェスタン・クウムへぬけ出るというものである。終始本計画を支援して下さった宮下秀樹氏の示唆によって、計画段階で予想したごとく、多量の雪は、アイス・フォールを不安定にする一要因であるシュルントを埋め、プレ・モンスーン期のそれと比較すると安全感を高めてくれる。しかし、午後ともなると、

ロー・ラ、ヌプツェ側からひっきりなしに雪崩が発生して改めてアイスフォールの怖さを思い知らされる。その間も、アイスフォールは、一日ごとにその表情を変え、ルート補修は毎日行なったといってよい。そのころ、湯浅は国内のS長老に「―このような氷河をもつ登山の隊長をつとめることが、いかに傲慢であるか、ということを思い知りました」という手紙を記した。ルートは順調に延び、三十一日には、三日間という新記録でウェスタン・クウムにぬけ出て、五九五〇メートル地点に仮C1を設営した。天候は、相変らず、午前中晴、午後降雪であったが、隊員の意気は高かった。それから、恒常的なルートとするための整備、隊員の高度順化のために三日間をこれにあて、九月四日、仮C1を撤去しC1を六一〇〇メートルに設営した。つづいて、トップ・グループは、九月四日、イタリア隊のA・B・C近くの六四五〇メートル地点に仮C2を設営し、さらに九月九日、南壁基部、台地上の六七〇〇メートル地点に、C2（A・B・C）を設営することに成功した。

その間、他の隊員は、アイスフォールを「三日行動・二日休息」という行動パターンによって順化をはかり、二ローテーション消化を原則として上部キャンプに移行した。隊員は順化をその中心目的としたために、酸素ボンベのみを運搬した。

天候は、小康状態を保ち、BCからの完全な行動中止はこの間三日間のみであった。アイスフォールの崩壊によるルート変更は数回に及んだが、幸運にも崩壊はいつも夜間または行動後に生じたので隊員、シェルパの身体・生命をそこなうことはなかった。アイスフォール専従員のシェルパを置いていたので、その補修も大過なくただちに完了することができた。気温は、昼夜の気温差が激しく、日中の日射しの強さに隊員は悩まされた。上部キャンプよりBCに帰った隊員のどの顔も痛々しく火ぶくれで皮がむけていた。この間の荷上げ管理は鹿野、小暮、山田、本郷らが担当した。隊員増のための荷上げ物資の増量をどのように調整するか、という問題の解決は重要であった。この間、隊員は、原則として三チームに分けて上部行動のローテーションを組んだ。頭痛、下痢などの症状のある隊員は、不満

を承知でアイスフォールの荷上げだけに専念してもらった。

南壁登攀ルートは、南西壁中央ルンゼを八〇〇〇メートルに到達した時点で最終的には決定することになっていた。基本的方針は、八〇〇〇メートル上部のルートを右雪田に採り南稜を経由して頂上に立つということにして補給計画は立ててあった。八三五〇メートル地点にC6、八五〇〇メートル地点に最終キャンプを建設するというものであった。最も容易と思われるルートから——というのが、初登攀者に与えられた特権だと考えたからである。しかし、どこが最も容易であるかは、誰も予想しうるところではない。現場判断優先ということでことにあたった。さらに八〇〇〇メートル地点までの問題は解決されている、という一般論が南西壁登攀に関してよく聞かれるが八〇〇〇メートルまでの行動計画はきわめて重要だという考えでのぞんだ。C6からC7の間の岩壁帯のルート工作を最低三日とし最終キャンプに一〇〇キログラムの荷物を補給する、という計画をたてた場合、現在の酸素ボンベの重さで、従来のオーソドックスなヒマラヤ登山の補給計画で逆算すると、第六キャンプには約一トン余の荷上げが必要になってくる。したがって、問題は、八〇〇〇メートルへの隊荷の集積のためのアプローチだという認識を強くもたなければならないということである。そのためには、C4がその基地としての機能をはたすことができるか、という点が解決されなければならない。従来のC4は七五〇〇メートル地点、そこは上部からの落石等に対して極端にいえば無防備である。雪崩がない、といわれていたこの地点も、本隊の場合は常に雪崩・落氷に見舞われ、ついにはシェルパ・テントは最後まで放置せざるを得なかった。解決の方法は、

① C4の地点を右寄り上部に移行しテント数を三張り以上設営する地点を求めることか、

② C4を従来のテント地で満足し、その機能を単なる中継地点として位置づけ、C3からC5までのダイレクトの荷上げを可能にする方法を考えるか、のいずれかである。本隊は原則として後者の見解を採ったが、なお前者の考え方も計画段階ではすてずにいた。そして、前者の考え方で計画を推進するためには、不動と考えられているC3の

位置を若干上部に移行することによって、C3～C5間の荷上げを容易にしなければならない。そこで、トップ・グループは、当初、軍艦岩の左上部の岩壁帯直下にC3を設営すべく、直上ルートを作った。これは、A・B・Cから直登できるという意味でも荷上げルートとして優れていた。しかし、①はたしてC5への基地としての機能を果たせるC4設営地が発見できるか、②新しいC3設営地は従来のテント地である軍艦岩以上に安全な場所であるか、という点が未解決であった。C3は南壁荷上げ基地である。のみならず、ルートは、予想と異なり常に表層雪崩に襲われ現実に登高中の隊員も雪崩に流された。プレ・モンスーン期ではさらに状況は悪くなろう。

九月十五日、飯塚らは、直上ルートの固定ザイルを右へ五〇メートルほど張り直して従来のルートに変更した。九月十八日、深田、三羽らは従来の遠征隊と同じように軍艦岩にC3を設営した。その時期におけるC1への隊荷は九トンを越えており、計画は順調に進行していた。

九月二十七日、中央雪田を上昇し七五〇〇メートル地点に隊員用とシェルパ用にウィランス・ボックス二張りをC4として設営した。さらに、八〇〇〇メートルまでルートは直上した。持参したテント台は、落石よけに使用した。頻ぱんに落ちる落氷、小石は、テントに直接当ると向う側へつきぬけるというものであった。そして風によって運ばれて来る新雪は、高傾斜の氷壁を行動する隊員に丁度表層雪崩のように襲いかかることもあったが、順調に高度をかせいだ。補給も計画通り進んだ。ちなみに九月二十七日現在、C1に約九トン、TC2に約三トン、A・B・C約二トン、C3に六〇〇キロ、建設されたばかりのC4には一〇〇キロの荷が集積されていた。九月三十日には、三パーティが登高をくりかえし、八〇〇〇メートルにC5地点を発見した。ウィランス・ボックス二張りが設営できるスペースをもっていた。登頂態勢に入ったために、湯浅登攀隊長、BCに下っていた青木副登攀隊長らは十月一日上部キャンプに移行し、鹿野、田中らと共に前線で指揮をとることになった。湯浅らが上部キャンプに移行する直前、九月二十八日のリーダー会において、サウス・コルからのサポート隊派遣を決定していた。基本案は、カトマンズで水野

隊長のもとで十分に議論してあったものである。その計画は、テントは七五〇〇メートル地点、およびサウス・コルの二箇所だけに設けるというものであった。サポート派遣は南壁からぬけて登高する南稜上のルートが、想像以上に長大だということが解ったからである。東南稜ルートのテントは設営したら、南西壁登頂の日まで放置する、という計画であった。さらに、南西壁の荷上げは、C3からC5までシェルパを中心に一気に行なうこともサーダーと話し合い決定していた。C4は中継キャンプとしての機能のみを果たすことになった。いよいよ登頂態勢である。高度順化充分の隊員もほとんど上部に移行・交代する配置をとった。隊荷はC1だけで十二トン近く集積されていた。シェルパの大半をA・B・Cに集結させ南壁補給態勢は整った。残る十五人のポーターだけで、C1までの食糧補給をするという作業を遠藤をチーフに山田が本郷と共に担当することになった。

十月二日、天候は激変した。C1は、平均一時間おきの除雪にもかかわらず、テントのフレームはほとんど折れてしまった。深い雪の中にテントは姿をかくした。三戸田らは二度にわたってこのテントを張りかえるという地味な作業をしてC1を守った。C2周辺は積雪は強風のためにみられなかったものの吹き荒れるブリザードは隊員の行動を許さなかった。風の強さは、例えば横になって寝ている隊員の顔にテントがゆがんで一晩中接触するというほどであった。南西壁もブリザードが新雪表層雪崩とみまがうばかりに荒れ狂った。

十月三日、同様に天候は荒れ狂った。十月四日、C2、C3間のみ天候は小康状況。他のキャンプは一歩も動けず。十月五日、十月六日、天候は相変らず芳しくない。南西壁最先端のC4からC5の間は比較的小康を保っている。風は冷たいが、来るべき好天を期して、岡部、近藤、加藤、下坂らのトップ・グループは、C5地点へのルート工作と荷上げに専念する。C3へ荷上げも荒天の中を敢行し、上部キャンプ用の隊荷約一・二トンがC3に集積された。

十月七日、アイスフォールはうちつづく荒天のため行動できず。C1以上は強風であるが、湯浅らはTC2へ移動。C4以上は深田パーティがC5予定地を決定してC4へ下降した。風強く荒天の兆しは全山をおおっていた。十月八

日、約八一〇〇メートルまでのルート工作を終了し、C5設営を完了したその夜、C5に滞在した深田、三羽隊員は西稜でゴーゴーと鳴るジェット・ストリームの音を聞きながら、間断なく烈風にあおられるテントの中で不安な一夜を明かした。夜半、シェルパ用のボックスに泊まっていたザムブーが隊員用テントにSOSを求めて飛び込んできた。シェルパ用テントは破損した。翌日、両隊員は、空になった酸素ボンベ等でテントを補強してC5を後にして下降した。この頃から、文字通り「目にみえて」気温は急速に下降しはじめ、ゴーゴーとうなる烈風がA・B・C以上で吹き荒れてきた。間断のない突風が吹いているといってよかった。C1は何度も雪につぶされた。絶対安全だといわれる仮C2も西稜とヌプツェからの雪崩に二度も襲われた。BC、C1、C2では、それぞれ気象条件が異なり、まざまざとエベレストの大きさを思い知らされた。したがって、各々のテントにいる隊員の事態のとらえ方には若干の相違がみられることもあったのは当然ともいえよう。

この間にもC2への荷上げは、わずかな荒天時の小康状況の合間をぬって敢行しつづけられた。C4、C3のシェルパはあまりの風の強さ、上から落ちてくる多量の雪のためにC2へ逃げ帰っていた。C4では、森田、高見が次の行動のために食糧も節約し酸素も使用せずに、半壊したボックスの中で四昼夜ツェルト・ビバークさながらの状況でC4をキープした。シェルパ用のボックス・テントは崩壊した。間断のない雪崩はテントを埋めつづけ、隊員がそれを除雪するという果てしない作業が、C3、C4でくり返されていた。C1あたりから発生した雪崩は全面的にアイスフォールをおおってBCまで達したこともあった。

十月十日、橋本総指揮がBCに来た。故松方三郎氏の遺品をアイスフォールに埋葬した。生前、後援会長の交渉などに松方氏は橋本と共に歩き、われわれに、本計画の意義などを教示して下さった。本隊が、もっと大きな視野をもって本計画に取組むことができたのも氏の御教訓の賜であった。

遭難事故

十月十二日、小雪、小康状態の天候が訪れた。とはいっても、南西壁上部は荒れていた。C4から下降を試みた森田らはその下降を断念せざるを得ず、C4補給を試みたC3のパーティもその行動を中止せざるを得ない烈風であった。C2はテントを出発するにはちょっとした勇気を要するほどのブリザードである。ここ数日の強風のために、C2のテント・フレームで完全なものは一本もないといってよい状態になっていた。その日は、隊員・シェルパ総員によってC3までの荷上げ、つづいて明日は、C4の再建とC3からC5へ一気にシェルパによる荷上げを敢行する日である。その中を、ザムブーは行動を渋るシェルパ数人を説得して、勇躍強風の中を南壁に向った。左側からトラバースして上部で固定ザイルをたどろうというのであろう。かつての直上ルートのあたりを目指して登高していた。南壁基部シュルントに達する直前に雪崩に襲われた。直ちに、出発準備をしていた隊員・シェルパは現場に急行した。次々とシェルパを掘りおこす。だが、ザムブーの姿がみえない。遭難時から一時間後、ザムブーを残して全員C2に帰る。十三日、十四日、皮肉にも風弱く、快晴の中を登高計画を全面的に中止して、隊員・シェルパ全員で遺体捜索に従事した。しかし努力の甲斐なく、捜索を断念。ここ数日の雪崩等のために、台地であったC2地点と南壁の間の谷間は知らぬ間に完全に平になっていた。あの南壁基部名物のシュルントも雪に埋ってその面影すら残していない。C2では、全員がナイフを握りしめてシュラーフにもぐり込むというありさまである。無駄だと解っていながらも、雪崩に備えてのことである。天候は再び悪化していた。南壁はC3以上の行動はもちろん、C3のキープさえ困難だった。ザムブーの事故のショックからシェルパが前線から遠ざかっている間、隊員のみの力によって、ルートの再建、想像を絶する苦業ともいうべき除雪によってテントは維持された。さらに、C3までの荷上げは、ウィンチの使用によって推進されていた。東南稜サポート隊は、強力に推進されなければならなくなった。南壁C7設営による登頂は

夢物語となったからである。南壁登高に残された方法は、八三〇〇メートル地点、C6からのアタック以外にはない。そこからのサポートなしのアタックは「死」を意味する。ローツェ・フェースへの行動すら烈風のためにままならない。それどころか、日をついで、気温は目にみえて低下し、ゴーゴーと音を立てて西稜にぶつかるジェット・ストリームは日増しに烈しくなり、その余波は南壁に雪煙をまき散らしていた。頂上のみをかちとる方法、すなわち東南稜のみからの登頂か、または南壁をやれるところまでやるか、という二者択一論の中で、湯浅は、両ルート共に計画を遂行する旨を決定し、訪れるかどうかも解らない最後の好天の機会を待った。湯浅は、隊員配置を隊員の希望に沿うべく、深夜までかかって隊員総員から意見を求めた。

計画変更

十月十六日、この時点で東南稜隊の性格は、独立に登頂を狙うという任務をもつことになった。好天が三日続けば東南稜、五日ないし七日続けば南壁からの登頂も不可能ではない。しかし、このような状況、すでに冬になっているエベレストでこれだけの微風快晴の期間の再来がありうるだろうか。BCにおける残余食糧は、概算ぎりぎりあと十日間、それも調達可能な現地食糧をふくめての話である。最前戦部隊をぎりぎりのエッセンスしたかたちでまとめ上げることが重要な問題となった。湯浅はC2で全員ミーティングの機会をもち、青木、鹿野のもとに、田中を登頂リーダーとする東南稜パーティと、森田を登頂リーダーとする南壁パーティの隊員を決定した。さらに、十月二十二日、TC2キーパーとして三戸田、C1キーパーとして須田を任命し、ぎりぎりの必要物資の荷上げ管理をするという困難な問題の解決にあたってもらった。文字通り最後の賭けの態勢をととのえた。上部滞在者をさらにしぼることにした。その人選の基準は、好不調にかかわらず、シェルパよりスピードのある行動をしたかどうかという点で決定し、さらにその中からTC2、C1での待機態勢に入る四名を決定し、残余の隊員はBCに下ることにした。最少限度の

物資で試みるためである。

東南稜計画

十月十七日、その性格を変更した東南稜隊は、南壁のルート再建と併行して、強風の中をローツェ・フェースへ向かった。東南稜ルート第三キャンプ（E3）予定地、七四五〇メートルに到着する。十月十八日、強風の中をE3を建設。十月十九日、比較的好天が訪れた。この機会にC2からの荷上げ、サウス・コルへのルート工作に専念した。七七〇〇メートルの高度までザイルを固定した。この作業に二名の隊員と四名のシェルパが従事した。ローツェ・フェースでの行動は強行することができたが、南西壁はC3以上は吹き荒れる風と、風によって運ばれる雪によって一歩も行動できない。しかし、この日、C3までは隊員四名、シェルパ四名で荷上げを敢行することができた。だが、翌日から、再び行動不能の荒天が訪れた。E3キープのために必要なシェルパも全員下降した。ローツェ・フェースのE3テントは、烈風の中にさらされ飛び交う氷片によってテントは静電気を発生して火花が散り、隊員の頭髪が逆立つという状況であった。炊事中のテント内気温はマイナス二十度であった。テントから一歩もでられない条件の中で、飯塚、岡部、清水らは、登頂の機会をすてて四昼夜にわたってE3を死守した。二十三日は、雪も降りはじめた。E3放棄もやむなし、との指令・示唆もしたが彼らはたじろがずにE3を守った。それは文字通り「死守」の名に値した。

十月二十四日、奇蹟的な好天が訪れた。上部滞在隊員すべてがそう思った。石黒、加藤は、長谷川、松田の支援のもとにE3に向った。飯塚らは、サウス・コルへのルート工作を完了してからC2に帰り支援態勢に入った。この日、隊の最高首脳部である湯浅、青木はBCに向った。BCと上部キャンプの滞在者の間にはその気象条件の相違から、状況のとらえ方に若干のへだたりがあったからである。登頂成否如何にかかわらず、この点のギャップを埋めること

が急務であり、この好天が最後のチャンスであることを誰もが承知していた。

十月二十五日、石黒、加藤は、松田、長谷川の指揮下七名のシェルパの支援を受け、サウス・コルにE4を建設し、アン・ツェリン、ハクパ・ツェリンの両名を伴って明日の登頂に備えてE4に入った。

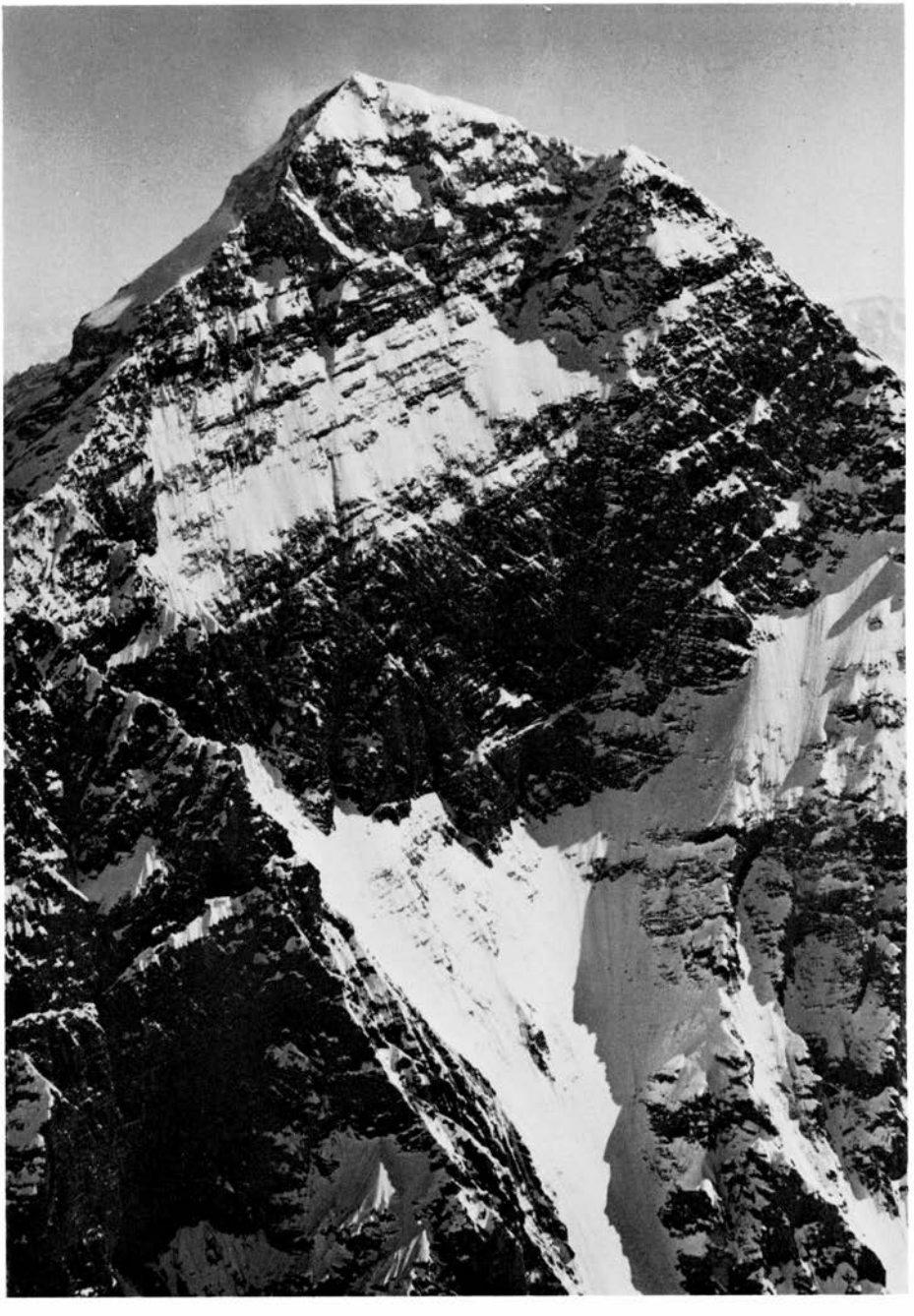
十月二十六日、若干風が出てきたが、微風快晴の中を、石黒、加藤はシェルパ二名の支援を受けつつ午前七時三十分頂上に向った。イタリア隊最終キャンプ地で登頂の見込みを立てた両名はシェルパをサウス・コルに帰し、ツェルト等もデポして頂上に向かった。東南稜はナイフリッジと化し、ヒラリーのチムニーは雪のために容易ではなかった。風も出てきた。二人の間のザイルは風にとばされピーンと弧を描いた。頂上直下で加藤は二本目の酸素をつけ替えた。完全に充填されているはずのボンベは五十気圧しか入っていなかった。フランス製ボンベへの信頼感が点検を怠らせたものであろう。そのことが悔まれた。しかし、頂上は直ぐ眼前である。二人は登高をつづけた。午後四時三十分、「第三の極点」八八四八メートルは二人の足の下にあった。加藤の酸素はすでに切れかけていたが、二人は写真をとり、世界で初めての十六ミリのカメラでパーンをしてパノラマ写真をものにした。ピッケルに結びつけようとした石黒の日章旗は風のために吹きとばされていた。二人は、幾つかの記念品を雪に埋め下降を開始した。ヒラリーのチムニーの手前で加藤の酸素は完全になくなった。あと八十気圧しか残っていない石黒の酸素を加藤と交替で使用しながらのスタカット下降は困難をきわめ、時間は遠慮なく過ぎ去っていった。酸素欠乏から視力がおとろえ、ルートは定かではない。やがて、石黒の酸素もなくなり電池もなくなった。チベット側へのスリップをしおに二人はビバークを決意した。南峰直下八六五〇メートルの高度、二人はツェルトもなく、死の深淵をのぞきながら一夜を明かした。たがいに顔をたたきあって朝を待った。二人の胸にはさまざまな想いが去来した。明るい性格の二人。厳冬のヨーロッパ・アルプスできたえぬいた加藤の生命力、ヒマラヤで常にその強さを誇った石黒。その「力」がこの苛酷な試練を堪えぬいて呉れた。人間がこのようなことを為しうるとは誰が想像しただろうか。翌二十七日、二人の視力のおとろ

えをたがいにかばい合いながら、イタリア隊の最終キャンプに到達しデポしてあった酸素を吸いトランシーバー交信を試みた。午前七時三十分、二昼夜にわたる交信途絶の後のことである。二人の生命力に祈るような想いで、一睡もせずトランシーバーを抱いていた田中がこれを受信した。BCでも湯浅、青木がこれを傍受した。予想以上に元気な声。うす汚れたわれわれの頬を涙は容赦なく流れた。風も強くなってきた。長谷川らにたすけられて、石黒、加藤は無事にサウス・コルに収容された。

その夜、テントは静電気によってパチパチと火花を散らしていた。酸素を吸った両名は、昨夜の分までもと睡眠をむさぼった。長谷川は単独でE3に帰った。翌二十八日、激しいブリザード。シェルパは行動不可能だという。前夜、八時、マイナス四十度、烈風のローツェ・フェースの高差七五〇メートルを救援のためにC2からE3に上った岡部、清水そして松田は、その中をサウス・コルに向った。視界は一〇メートル。ロック・バンド周辺で、彼らは合流した。トランシーバーを通しても解るほどの烈風の中で、全員の無事が伝えられた。われわれは、ただ祈った。サウス・コルのテントは、烈風のためにテント生地がやぶれてきていたという。凍傷とはいえ、湯浅は両名に自力歩行でのC2への帰幕を指令した。両名は、明るく応諾しC2へ帰った。凍傷は二度程度、田中の応急処置を受けた。金田ドクターはC1へ急行し待機した。一糸紊れず、極限の中での救援活動、これはこの作業にたずさわった全隊員の生涯の誇りとして生きつづけるだろう。チーム・ワーク、それも、今までにない全隊員の「個」の強さに支えられていたそれであった。

南西壁登攀最終の試み

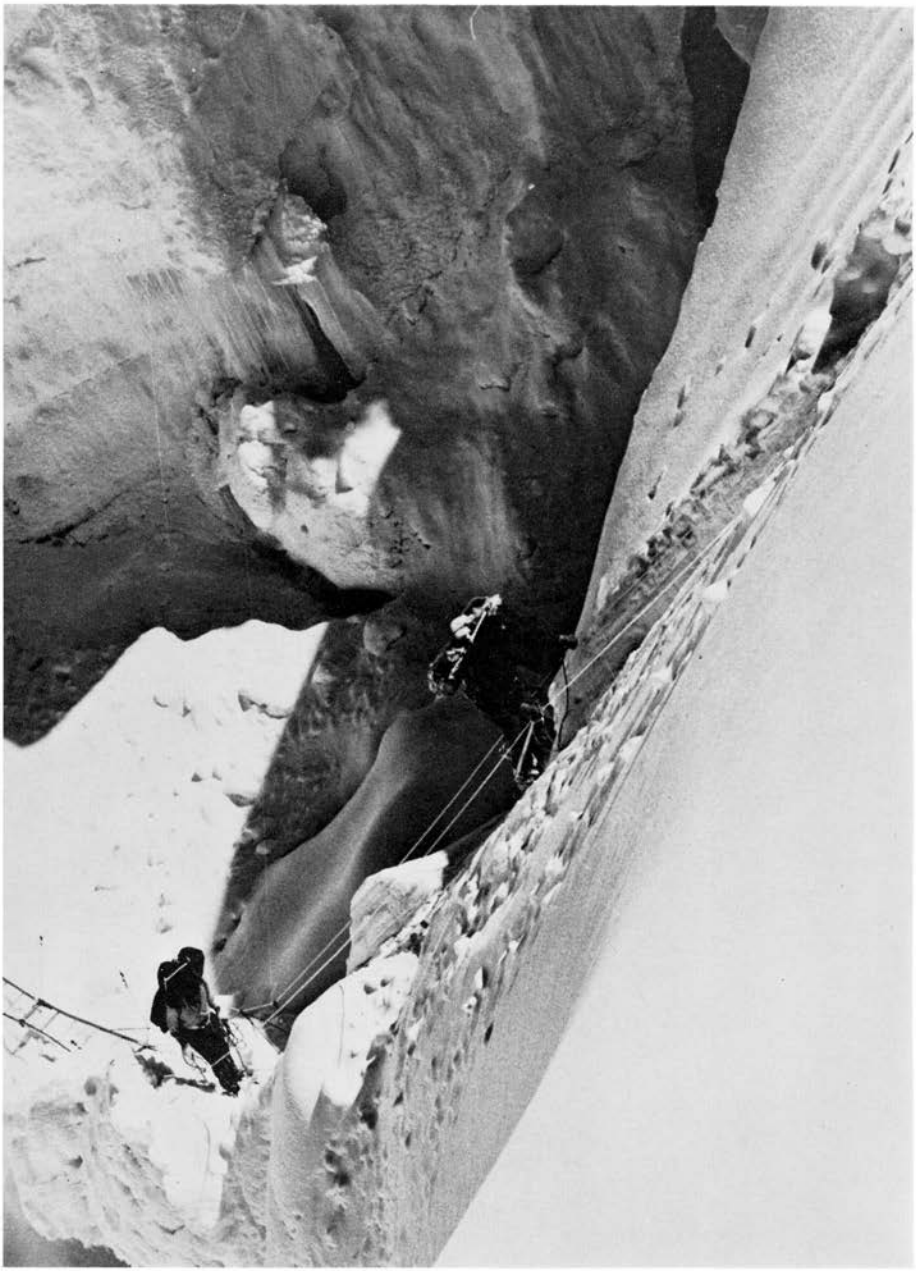
荒天、ザムブーの死、シェルパの前線からの離脱、そしていつ終るとも知れない荒天の再来、エベレストは完全に冬と化していた。憂色につつまれた各テントの空気を隊員は歌によって吹きとばしていた。この諸条件の中でも、ロ



エベレスト南西壁の全容

雲海上のC４

南西壁C３（軍艦岩の下に常営）



南西壁の登攀

1973年10月26日16時30分，エベレスト頂上に立つ加藤隊員(上)および石黒隊員(下)

ーテーションでトップ・グループに予定されていた隊員によって唯一行動可能なC2～C3間の荷上げ、再建が行なわれていた。C4の隊員用テントは再建できたが、シェルパ用テントの再建はできなかった。シェルパによる荷上げは、C3からC5までのダイレクト輸送という方法以外にない。そのためのC3への荷上げが風雪の中で続行されていた。C3のテントは昼は三十分ないし一時間毎に毎日除雪しなければならなかった。それでも、物資は、どんどん雪に埋もれていった。吹きすさぶ烈風は、十月八日以後、C3以上の行動を一切許さなかった。十月二十二日、可能性を残していた南西壁からの登頂も、この時点ではその可能性を論ずることもできなくなった。登頂に必要な最低限の好天期間、五日ないし七日の好天は望むべくもない。それでもベストをつくすことをわれわれは誓った。われわれは誰にいわれるまでもなく、自分自身で「南西壁登攀」を納得したかったのである。それは、ラスト・ワンチャンスへの儚ない期待である。一旦撤収して再起をはかることは、たとえ食糧等が残っていたとしても、無駄であることを全英隊の教訓が教えていた。冬のエベレストはそれを許さない。森田以下メンバーを重野、重広、高見、根岸、犬木にしぼった。この間の事情については、すでに述べた通りである。

十月二十四日、待望の好天である。前日C3に入った重広、根岸らはC4に入り、重広は五名のシェルパを伴ないC3に入った。翌二十五日、重広はC5まで荷上げをした後にC4に入った。森田はC2からC4に入り重広と合流した。重野、根岸は八〇〇〇メートル上部へルートを延ばし、C5に泊った。二十六日、重野らは行動後C4に帰り、森田・重広パーティとトップ・グループを交代した。高見はC3入りした。二十七日、森田らは、右雪田を上昇し南稜取付点付近に達した。風が出てきたために森田は足に軽い凍傷を負った。到達点は全英隊とほぼ同じ地点、C5の八〇〇〇メートルを基準にすると高度計は、八四〇〇メートルを示していた。一応最高到達点を八三八〇メートルとした。高見は、C5へ荷上げの後C4に入り重野と合流し、根岸はC2へ帰った。C5以上の固定ザイルの長さは約八〇〇メートルであった。風は次第に強くなった。サウス・コルのテントは吹きとばされるような不安にさいなまれて

いた。E3では明日の救援活動にそなえていた。南西壁各キャンプ、A・B・C、そしてBC間では、延々二時間にわたって上部キャンプで掘り出された酸素ボンベの量のチェック等の交信に余念がなかった。午後九時四十五分、覚悟の上とはいえ、湯浅は南西壁登攀続行断念の指令をした。誰の目にも涙が光っていた。最高到達点にボンベをデポして明日に備えた森田、重広の気持ちはいかばかりであったろうか。トランシーバーを通じて森田は明るく応諾した。すべての上部各キャンプからすべての隊員によって、BCにはげましのコールがあった。湯浅は、おのれの非力を詫びる以上に、佳き仲間とこのプロジェクトを推進しえたことに改めて誇りをおぼえた。翌二十八日、南壁はふたたび荒れ狂った。早朝下降予定の森田らが、C2に帰ったのは夕刻であった。テントから出発のために外に出た森田は烈風に飛ばされたという。その日、五四〇〇メートルは風一つない小春日和であった。エベレストの大きさというべきだろうか。こうして、われわれの南西壁登攀は終った。

おわりに

目的とした「南西壁」からの登頂は果たし得なかった。その原因は悪天候である。それに対する予測の甘さが真の「敗因」ということができよう。南西壁登頂の成否の鍵はなにか。ポストとプレの長短はなにか。私どもの計画は失敗したが、そのプロセスで私どもなりに多くのことを学んだ。ただ、エベレスト南西壁の困難さは、一にも二にもその高さにある、という当然のことの真の意味を知ること、例えば、現在の酸素ボンベの重量をもって、従来のオーソドックスなヒマラヤ登山における補給作戦ではその登高の成功は困難といわなければならない、ということを付言しておきたい。

最後に、本計画に寄せられた多くの先輩、会員諸氏の御厚情に対して厚く御礼を申し上げて報告の稿を閉じさせていただくことにしたい。

ジャヌー登頂（一九七四年）

橋村一豊

一、私たちの登山信条とジャヌー

この遠征の母体、成城大学岳士鉄人会とは、成城大学山岳部の卒業生によって組織運営される山岳会である。「岳士鉄人」という一見奇異な名称の由来は次の通りである。「岳士」とは、山岳部の生活を通じて先鋭的な高度登攀を実践した結果、ヒマラヤやアンデスの峻嶮な高峰に挑戦しても、おくれをとらない精神力と技倆を修得した、いわば登山の熟達者（マエスター）である、あるいはそうありたいと念願する気持の現れである。「鉄人」には二つの由来がある。その一は「哲夫成城、哲婦傾城」（詩経・大雅）すなわち才徳のすぐれた男は大事業をおこなって国家を繁栄させるが、賢い女はそのさかしらによって国を凋落せしめる云々、という成城学園の命名の故事にちなんで、哲夫（てつぷ）を音韻によって鉄人と読みかえたこと。その二は、登山における現代はいわゆる The Iron Age of Mountaineering と呼ばれるが、私たちはそれにふさわしい登山をおこなう者であるという自負があると同時に、また、iron will（不屈の意志）man of iron（意志の強い人）のごとき精神資格への連結もふくまれている。

「登山は楽しかるべきものである。この楽しさは個人の精神的満足を通してのみ実現されうるものであると同時に、その登山が高度かつ困難であるほど、大きくかつ深い楽しみが得られる。この大前提を実現・味得する条件は第一に個人の技倆・識見・士気が高く、すなわち実力が強固でなければならない。第二に目的とする山が困難であることを要する。そしてさらに第三には個々人の個性と思想が十分に尊重されていて、常に均等の発

言力の下に合意が得られた目的（山）こそが最高の、あるいは少くとも最大公約数の満足をもたらす」

右が岳士鉄人会の牢固とした信念であり、大学山岳部に対する指導精神でもある。なお、私たちは小人数での登山ということが、登山の実力を涵養する上でこの上なく有利な条件であると確信している。なぜならば登山のごとく複雑多岐にわたる技術・知識を必要とする遊戯の指導は、小人数であるほど先輩・上級生の目がゆきわたって、ゆきとどいた教育が個性に応じて行なわれて、結果としてこれが最も能率のよい教育であることが一つ、さらに小人数（三名とか五名という単位を考えている）で高度の登山を実行する場合には、全員が装備とか食糧といった各部分に精通していなければならないからオールラウンドな力がつく上に、山の中でもし誰かが少しでも手を抜いたり、欠けるところがあればカバーしてくれる人がなく、たちどころに支障をきたすから、不得意な面でも必死で頑張らねばならないからである。少数精鋭主義といえば、一部の受験高校に見受けられるように、全人格を重んぜず、英語、数学など人間の部分品のごとき能力の開発に重点をおく技術主義の臭気がして、私たちは最も嫌悪するところだが、結果からいえば少数で高度の問題に挑戦すれば、やる気があって、方法さえ間違わなければ、必然的に精鋭が育つはずであるというのが、私たちの考え方である。

鉄人会で海外遠征が企画されたことはたびたびあった。しかし、山の楽しみを最大に求めるという私たちの考え方が行きつく対象はヒマラヤ以外にはあり得ず、さりとてヒマラヤのむつかしい山を考えると少なくとも五名ぐらいの隊員が必要であるが、何しろ会員が少なく（全員で二十五名）、ある一時期に長期の休暇をとって海外に行ける者同士の都合が折合わないという社会的条件があり、今回のジャヌー遠征にいたって、やっと条件が揃ったために実現したのである。

特に今回の遠征実現の原動力になったのは、川瀬、市川、山田、長沼および橋村らいずれも三十五歳以上の中心会員が、「我等は四捨五入すればすでに四十歳になるではないか。マナスルへ初登頂した今西寿雄さんの例はあるが、世界の難峰へ四十代のサミッターというのは他にはジャヌーにおけるテレイぐらいしかいない。今西さんやテレイのごとき超怪物ではない我々は、年令的にサミッターの限界へきている。サミッターの資格をもってゆかねば、山の面白味も半減する。何はともあれ早くゆこうではないか。この際、海外登山につきものの、あのわずらわしい雑務も已むを得ず耐えよう」という心理的強迫にかりたてられたためである。

さて山を選ぶ段階での鉄人会の議論は、一九七一年に始って半年以上もめにもめた。各自の主義主張、思惑が入り乱れたからである。司会役を担当した川瀬と吾妻は、あまりの議論百出

に、方向性を見出すことが出来ずに劈易したという。「時間ばかり経過して、目的の山すら決まらない鉄人会遠征は、果たして実現するであろうか。」とある晩、橋村の家を訪れた吾妻は深刻に悩んだ。しかし議論をつくして、参加者の合意を得た登山は、非常に強い精神力となって実現する。「これはぜひ必要な過程である。半年や一年の経過は無駄ではない。何より大切なことは全員の合意である。私は議論参加の時間的余裕はないが、彼らの得る結論は現実の条件下でのベストであると信じ、遠征には極力参加したい」などと話しあったこともあった。目的の山がきまらぬうちに、さらに時は過ぎて行った。結論は得ぬままにも、大体の方向性が出始めたのは、一九七二年も春に入ってからである。それは大体次のごときものであった。

一、処女峰は避けること。現下のヒマラヤにおいては、処女峰があるとしても、それらはすでに登られた山々よりも無価値なるがゆえにとり残されているにすぎないからである。

二、隊員の多くはヒマラヤはおろか、海外の山に未経験であるが、実力とやる気があれば問題はない（市川、尾崎、橋村三名の海外遠征経験者の意見）。鉄人会の初遠征とはいっても、できるだけ困難な山を選ぶことが必要。対象が困難であるほど士気と結束力が強まって成功率が高くなるからである。

三、八千メートル峰か、なるべくそれに近い七千メートル峰で、登攀技術を高度かつ連続的に要求する山。

四、隊員の休暇取得の事情、遠征準備の都合から、一九七四年の春期に実施する。

右のごときものであった。

さらに時は経過して、一九七二年の夏になった。突如、外電はネパール政府が一九七四年プレモンスーンに解禁する諸山のリストを伝えた。見るとその中にジャヌーがあるではないか。「これこれ、これだ!! 何という幸運、ジャヌーのごとき名山にうまい具合にめぐりあたるとは!」ここにいたって四分五裂の山評定は、たちどころに一決した。これこそ私たちがここ十数年にわたって理想とし、かつ実践して来た登山の延長線上にある山だと思われたからであった。

ただちに所定の手続をふんで、登山申請が開始された。たまたま国内には競合隊はないものの、外国隊の申請と競合したらどうするか、不安な日々が経過した。情報入手にはいろいろ手を打ってはみたものの確報なきまま年も明けた。このころ日山協―外務省から正式の登山申請がネパールへ出た。一九七三年の三月には何らかの連絡があるものと予想したが、これも無音のうちに過ぎた。資金調達の後援会作りなど諸計画の実施をひかえ、イライラと待ち侘びることの永かったこと。ようやく六月三日のジャヌー許可の報に接した時は、私たちは力の伯仲する強敵と闘う喜びに、何度も盃を重ねた。そして「これほど、皆の意欲がさしせまって盛り上る登山は、過去私たちが成功し

て来たごとく、またもや大勝利するに違いない」との確信が全隊員に行きわたり、意気は大いに昂揚した。

しかし結果的には登頂に成功したが、ジャヌーは予想以上のきびしい試練をいくつも私たちに与えたのであった。

二、遠征準備と隊の編成

遠征成功の基本は隊員にある。特にジャヌーにおいては長期登山に耐える粘りある体力と、ザイルのトップに立ってルート開拓にあたれる登攀技術および人の和を保つ安定した情緒精神が必要であると考えられた。山がきびしいゆえに、数の少ない鉄人会のアクティブメンバーの中から、そのベストを選びたかったが、結果はかならずしも満足にはゆかなかった。特に峯岸孝一郎、尾崎祐一、岡林幾男、塙正広、北谷俊雄らが加われば、もっと精強な隊ができたはずであるが、仕事の都合、家庭の事情などで参加が得られず、二十歳台が手薄な編成とならざるを得なかった。ドクターは幼稚園から高校までを成城学園で過ごし、群馬大学で外科を修めて防衛庁の空軍にてメスをとる小原甲一郎が得られて、万全と考えられた。彼は高校・大学を山岳部で過ごして、山にくわしいという強味まであった。七月になって未定であった橋村が、川瀬、山田による強引な説得と、会社休暇の見通しが得られてようやくきまり、遠征隊の人事は大体の落着をみた。十二月に入って野村章が、家庭の事情から脱落のやむなきにいたり、最終的には次の九名となった。

〔隊員及び役割分担〕

川瀬　幹夫　三十九歳。隊長。国内渉外・記録。昭和三十四年経済学部卒業。川瀬鉄工社長。日本山岳会会員

市川　章弘　三十八歳。副隊長。会計・写真。三十五年経済学部卒業。埼玉銀行入間支店長代理。日本山岳会会員

橋村　一豊　三十七歳。副隊長。登攀隊長・外国渉外。三十五年経済学部卒業。トーレ・シリコーン、ゴム部次長。日本山岳会会員

山田　英二　三十七歳。装備。三十八年経済学部卒業。青宏商事専務取締役。日本山岳会会員

長沼　雄志　三十七歳。燃料・写真。三十七年文芸学部卒業。日本生命蒲原支部長。日本山岳会会員

吾妻　純男　二十七歳。酸素・輸送・外国渉外。四十五年経済学部卒業。日動火災自動車課勤務。日本山岳会会員

宮崎　純　二十六歳。食糧・兵站。四十四年経済学部卒業。国土計画万座観光ホテル営業主任。日本山岳会会員

小原　壮二　二十三歳。食糧・雑役。四十九年経済学部卒業。ゼネラル石油入社見込

小原甲一郎　三十六歳。医師・外国渉外。三十八年群馬大医学部卒業。自衛隊空軍三等空佐・医官

右の九名の年令は平均すると三三・三歳であった。中心隊員

がほとんど三十七歳前後であるが、皆、我こそはジャヌーに一番乗りをするのだと意気盛んで、年令のハンディキャップは全く問題にされなかった。

一九七三年の十一月にはヒマラヤ経験のある尾崎（一九七〇年、日本山岳会東海支部のマカルー東南稜遠征・登頂者）が、本隊に参加できないため、せめて準備段階での協力を果すということで、吾妻を連れてカトマンズに飛んだ。サーダーおよび主力シェルパとの契約確保、ポスト遠征の各隊から余剰物資の買付け、その他重要な事前交渉を行なうためである。この先遣隊は時間、金銭面でそれほど余裕がなく、二週間ほどカトマンズに滞在し、また通関の件でカルカッタへ数日行ったのみで帰国したため、山そのものに対する会戦はすべて本隊にゆだねられた。

シェルパは全員と約束をとりつけるにはいたらず、明年二月の本隊到着時までに、サーダーのカルマが責任をもって揃えるということになった。我々は特に希望して、第二サーダーとして、知性と実力のあるソナ・イシをサーダーと同待遇にてわが隊に迎えるべく努力したが、七四年のプレは日本だけで十隊、外国隊が十隊もひしめいていて、彼を得ることは困難であった。このような遠征ラッシュは、シェルパが水増しされる結果を生み、我々の隊にも資質の悪い者が流入して、山では大変な苦労をすることとなった。以下掲げるのが、本隊が行って最終的にカトマンズで傭い入れた者たちであるが、○印を付した以外の者は、困難な山の遠征では使えないと思われる資質の悪いシェルパである。

名前、年令、出身地および摘要を記すとつぎのとおりである。

〔高所ポーター〕

○カルマ　三十九歳　タクトッド、サーダー。CⅢで負傷、途中下山。指導力優秀。

○テンジン　三十七歳　ナムチェ、セカンドサーダー。CⅤで負傷。体力・技術はあるが英語下手。

ダヌー　二十三歳　ショルー、コック。料理が下手。怠慢でずるいところあり。

○ニマ・テンジン　三十八歳　パンボチェ。CⅥへ二回荷上した。技術・体力・英語抜群。

ソナ・ゾンブー　三十七歳　パンボチェ。弱い。

アン・カミ　三十三歳　クムジュン。CⅣより仮病で下山するというフラチな行動あり。やくざっぽい性格。

○ペンバ・ツェリン　三十歳　テーム。CⅥへ二回荷上した。性格最良、体力あり。

○ダジ　三十歳　パンボチェ。CⅥへ一回荷上した。おとなしい。

プル・テンバ　二十九歳　パンボチェ。弱い。

○アン・プルバ　二十八歳　クムジュン。技術、体力、英語抜群。将来サーダーになろう。

ダッチェリン　二十八歳　ザロック。不平多く、高所で胃弱の常習あり。

○ハクパ　二十五歳　パンボチェ。技術はないが人柄よくガンバリ屋。CⅥへ一回荷上。

パサン・ノルブ　二十一歳　ナムチェ。日本語をやや話すが、仮病で下山するなど根性なし。

パサン・テンバ　二十一歳　ナムチェ。人柄はよいが、体力技術で劣弱。ローカルポーターに格下げ。

〔ローカル・ポーター〕

スンヅー　三十八歳　テーム。強い時もあり。

アン・ナムギャル　三十三歳　テーム。弱い。

ニマ　二十三歳　パンボチェ。弱い。

○ダリタ　二十二歳　テーム。体力、意欲あり将来良いシェルパになる素質。CⅣへたびたび荷上した唯一人のローカル。

アン・ツェリン　二十二歳　テーム。難聴。

ヌルブ　十七歳　ナムチェ。まだ子供で弱い。

〔キッチン・ボーイ〕

○テンバ　三十七歳　パンボチェ。勤勉。

パサン　三十六歳　クムジュン。低能。

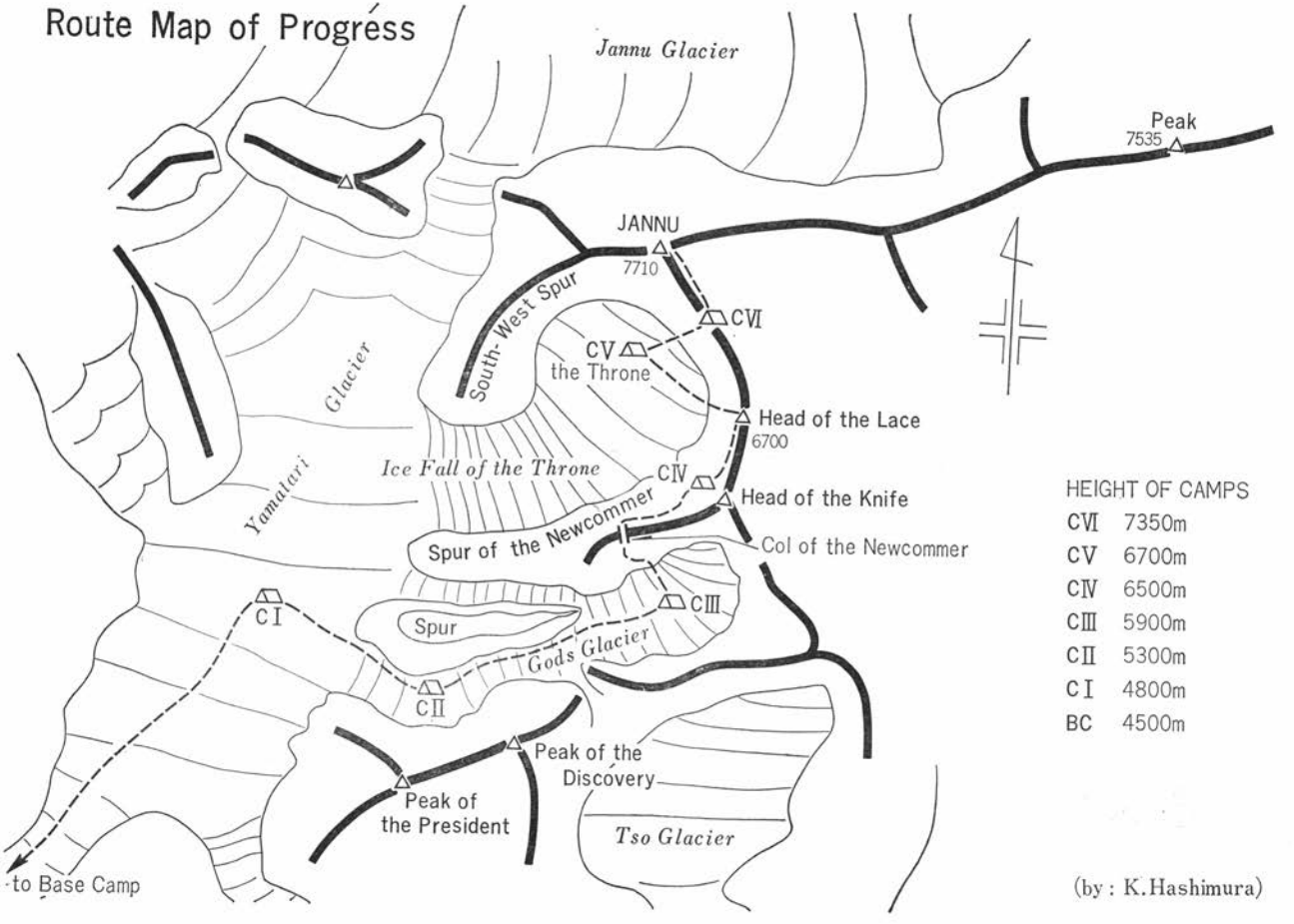
〔メイル・ランナー〕

○シエテ　三十三歳　ダンデシ
○キパ　十八歳　テイアムラン　共に強く勤勉

以上二十四名であった。なおリエゾン・オフィサーには二十一歳の陸軍少尉シャンタ・プラサド・ダワディが配属されたが、英語が上手で知性もあり、有能でたいへん役に立ってくれた。

登山経験の浅い小原壮二を除けば永年にわたる登山実績からして、隊員の技術練磨の山行合宿などは一切不必要と割切って、すべての時間を最大の難関、資金と物資の調達に投入する方針に決めたのは、橋村が正式加入した七月である。物資の調達は各係が分担し、資金の調達は川瀬と橋村が分担した。学校当局、同窓会、そして旧制高校山岳部のOB会である「雪嶺会」の強力なバックアップにもかかわらず事態は難行し、おまけに年末から起った石油不足による経済界のパニック状態は、資金物資の調達をいっそう困難なものにおとしいれた。登山規則改正による死亡シェルパ補償金の一挙五倍の値上げもこれに拍車をかけた。一部の人からは時期が悪いので延期してはとの意見も出るほどであったが、三十歳台の隊員の負担金を百万円から百五十万円にくり上げたり、さまざまな苦肉の策を弄し、一部先輩の篤志も加わってようやくメドを得たのは二月に入って出発の間際であった。遠征隊の正式名称は、成城大学ジャヌー遠征隊（SEIJO UNIVERSITY JANNU EXPEDITION, 1974）と名付けられた。

Route Map of Progress



HEIGHT OF CAMPS

CVI	7350m
CV	6700m
CIV	6500m
CIII	5900m
CII	5300m
CI	4800m
BC	4500m

(by : K.Hashimura)

三、ジャヌーという山

この山の登山の歴史と、これがヒマラヤニストの間でどのように考えられて来たかは、故深田久弥会員の大著『ヒマラヤの高峰』第三巻のジャヌーの項につくされている。したがってここでは紙数を省き、私の登山記を通してジャヌーの味を知っていただくことにしたい。ただ一つ、深田さんの本に書いてないことをつけ加えると、ローマ字で綴る JANNU はネパール語では、「ジャンヌー」と綴りの通り発音するのが正しく、それは「肩」という意味だそうである。ジャヌーとちじめていえば、「行く」、動詞の go の意だという。これはリエゾン・オフィサーのシャンタに問うたところの答であった。肩の意であれば、東西に肩を延ばした山稜と、その上に花崗岩の岩頭氷帽をもつ山容からして、たちどころに納得できる呼称である。

四、入山

二月四日、宮崎と吾妻が、日本から海路送った荷物をカルカッタージョグバニービラトナガールーダーランバザール（キャラバンの出発地点）へと保税陸送するため、半月早く空路カトマンズへ向けて先発した。

二月二十日、川瀬以下残る七名があわただしい準備を終えて、同じく空路をカトマンズへ向けて出発した。

二月二十二日から二十七日の五日間は、カトマンズにおいて、どの遠征隊もがするような、あわただしく味気ない準備作業が進行し、シェルパたちとの契約を終えた。我々はカトマンズ滞在には何の興味もなく、一刻も早く山へ向いたかったので、能率的に諸手続に精励した。特に現地での折衝では、実用的な英会話をあやつるドクターと橋村が分担して渉外にあたったことと、前記の尾崎・吾妻の有効な先遣布石があったため、わずか五日間ですべての準備を完了して山へ向うことが出来た。

二月二十八日、川瀬以下五名の隊員は、カルマ以下全シェルパと空送物資及びカトマンズでの買付物資をひきまとめて、大型バス一台とランドローバに分乗しビラトナガール経由ダーランバザールへ向った。カルカッタージョグバニービラトナガールーダーランへの海送主力物資の陸送通関にあたっていた先発の宮崎・吾妻と、その手助けにつけたテンジンおよびパサン・ノルブも、荷物とともにダーランバザールで合流できる段取りが整った。

三月一日、橋村は、軍務の都合でおくれた連絡将校のシャンタ・プラサド・ダワディをともなって、カトマンズービラトナガール間を空路により追走し、同日たちまちダーランバザールの本隊に合流するを得て、ここで全隊員と全シェルパの集結をみた。その夜、前途を祝して盛大な酒宴がひらかれた。

三月三日、キャラバン開始。ポーターの総数はナイケ（手配

師）を含めて三六〇名である。シワリク丘陵をシャングリ峠で越えて、レウテ・コーラへ下る。吾妻がひどい大腸カタルの下痢で遅れて、つらそうであった。

三月四日、タムール河を鉄製の吊橋で渡り標高一二〇〇メートルのダンクータまで炎暑の下を登る。ここは王室の別荘があり、折から王様が来ていて、町中に歓迎のアーチがやたらと目につく。この町にはチェックポストがあり、トレッキングビザの検査をされた。

三月五日～十日、標高二〇〇〇～二九〇〇メートルの丘陵地帯を上下しながら、ヒレーシドワーツテーチョウキと泊り重ねて、キャラバンは尾根上を順調に進む。ゴバールララからグルザゴンに下る日、遠い春霞の彼方に、目ざすジャヌーが眺められ、一同歓声をあげる。グルザゴンでは豚をツブして、香辛料の利いた焼肉に舌つづみを打った。川瀬とドクターを除いて、酒に目のない隊員ばかりであること、またカルマも無類の酒好きということで、行く先々の農家や茶店でしこたま焼酎（ロキシー）や濁酒（どぶろく）（チャン）が仕入れられ、毎日一杯機嫌の気分でキャラバンは進められた。

三月十一日、七三〇メートルのドウムハン（ドバン）まで一気に下る。太陽はギラギラ照って非常に暑く、河原のキャンプ地へ着くや否や水浴びをして涼をとる。ここはタプレジュンとグンザ方面の分岐点で、川の合流するところだ。タムール河の本流へ再び下ってきたわけだ。

三月十二日、昨夜からポーター賃上げのトラブルが生じた上に、ドウムハン以南から来たポーター一六〇名が帰るということで、カルマ以下シェルパの必死の努力にもかかわらず、荷が一一六個も残ってしまう。やむなく隊を二分し、先行隊はカルマをつけ、英語による交渉の点を考えドクターが入り、後隊はセカンド・サーダーのテンジンは英語がダメなので、頭がよく英語の最もうまいアン・プルバを残す。よって前後両隊の構成は、ドクター、川瀬、山田、長沼にカルマ、コックのダヌー、リエゾン・オフィサー、その他三分の二のシェルパとが先行隊へ、後隊は橋村、市川、宮崎、吾妻、小原とテンジン、アン・プルバほか約三分の一のシェルパを残す。後発隊に残ったシェルパの中でペンバ・ツェリンがコックを代行したが、しっかりしており料理が上手なのは助かった。

三月十三日、どうやら一一六名のポーターの手配がつき、翌日は出発のメドをつかんだので、吾妻、小原はニマ・テンジンとメイルランナーのシェテを伴って、連絡のため先隊を追う。この日のうちにミツルンの宿をとばして巨岩の累積するチルワで先隊に追いついた。非常にバテたそうである。

三月十四日～十九日、これからBCまで、先隊・後隊は二日の間隔をおいて同じ道を、ミツルン―チルワ―シャカッム―アムジェラサー―ケブラー―グンザ―BCへとたどった。途中シャカ

ッムにて本流タムール河左岸沿いの道をすて、支流のチャーチュー川沿いに急登してゆく。シャカッムーアムジェラサ間は、一日に一〇〇〇メートル以上登り、断崖絶壁の高巻きの恐ろしいところがある。本行程中一番つらく悪い一日だが、これを除けば、ジャヌーへのキャラバンの道はすべて安全である。この高巻きで先隊のポーターが転倒、あわやと思わせたが幸いにも止まり、その代り食糧の一箱が絶壁の下へ消えるという一幕があった。

三月十九日、前日グンザであまり意味のない停滞をした本隊がBCへ上り、テントを建設した。

三月二十日、後隊を気づかってグンザで待っていたカルマほか数名のシェルパをあわせて、残る全員と全荷物がBCへ上り、ジャヌー登山の態勢はきわめて順調に出来上った。ダーランバザールを出発して以来十七日間、一日も雨に降られず、今日もまたすばらしい快晴の下にBCへ集結できたことで、大いに気分は昂揚した。十二年前、フランス隊の造った石垣小屋ジャヌー・パレスを半日がかりで修復し、これをサーブの集会所とした。その夜、BC建設を祝って罐ビールの乾杯が行なわれた。

五、A・B・Cの建設まで

三月二十一日、すべての開梱を行ない、物資の整理にあたる。おびただしい量の登攀用具がズラリと並んだのは壮観であった。ザイルは五〇〇〇メートルあり、ハーケン類は千本近く、スノーバー二百本、カラビナ五百個等々は、装備係の山田に説明を受けなければ、誰もいくつあるか見当もつかない。

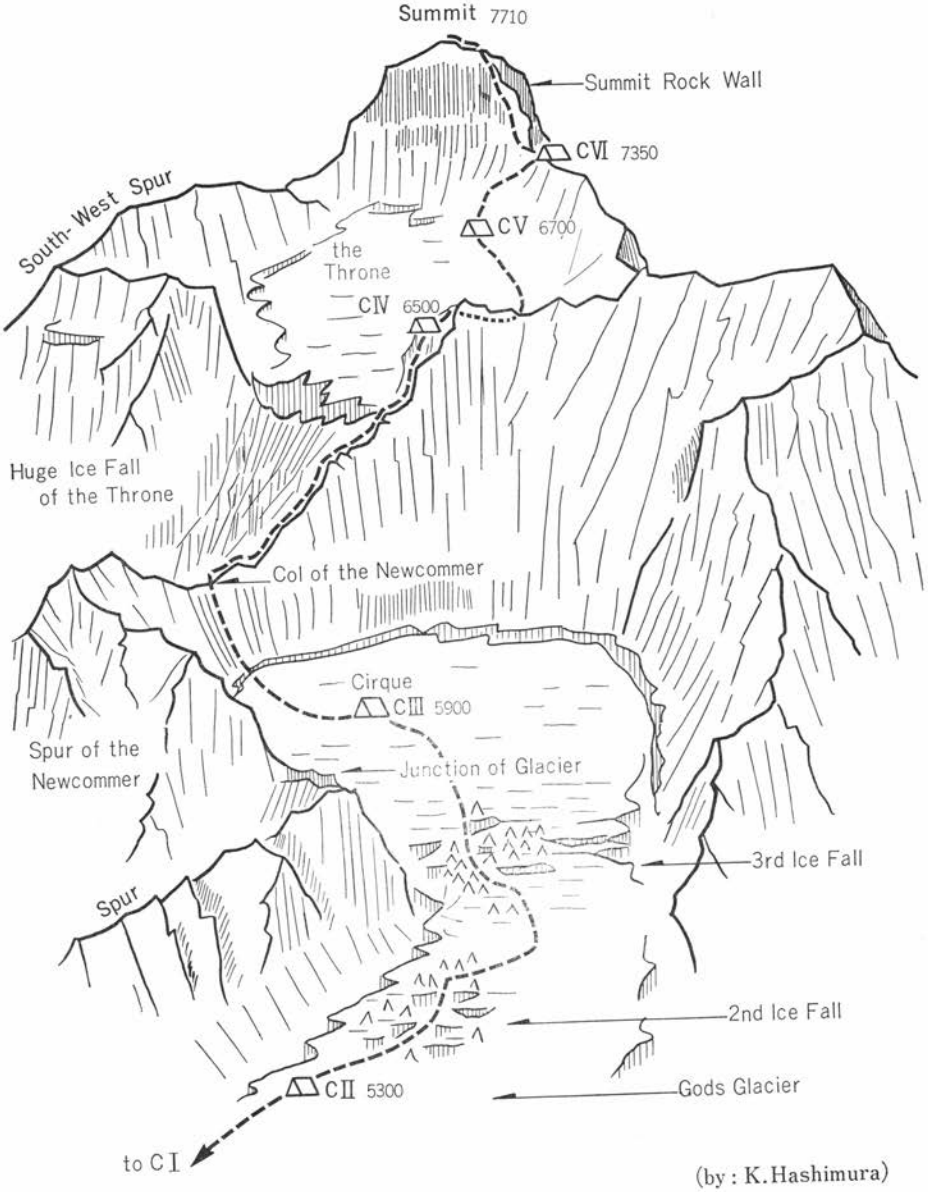
高所用個人装備が各隊員に配給され、いよいよ戦闘開始の気分がみなぎる。

シェルパたちは、ジャヌー・パレスの隣りに、その倍の大きさの石小屋を構築して、これをキッチンとシェルパ集会所とする。

三月二十二日～二十四日、BCでは食糧、装備を主体とする仕分けと、荷上げのための再梱包作業が延々として続く間に橋村、市川、長沼により、BCから約三キロ、ヤマタリ氷河を遡った四八〇〇メートルのモレーンの上にC1を建設した。BC～C1の間は巨岩や不安定な石が累積するモレーンの中を約三～四時間の登高であるが、あまりにも荒れ果てたモレーンのため、常に踏跡が見失われがちである。赤旗とケルンを徹底的に立てて道しるべとする。ただちにBCよりカルマの率いる精力的な荷上隊により連日C1へ物資を集積する作業が開始された。

三月二十五日、C1は上部への行動を中止してルートの観察と、C3までの行動計画を検討し、BCに伝える。㈠橋村、市川、長沼に宮崎を加え、この四名でC3（A・B・C）までのルート開拓を請負う。その間不調者がでたら、他の者と入れ代る。他の者はその間少しずつ下部キャンプを往復もしくは占拠

Overlooking View of Climbing



(by : K.Hashimura)

して、高度順応をしながら荷上げの状況をチックし、指示する。㈡ルート開拓組にはテンジン、ペンバ・ツェリン、アン・プルバ、ハクパの四名をつける。㈢C3建設後の計画は目下のところ白紙とする（下部キャンプで、しかも上部の全く見通しのきかないところでこと細かに計画を作っても無意味である）。㈣主要作戦計画は橋村と市川が合議で決め、登攀活動の全指揮は橋村がとる。㈤今後は原則として橋村または市川が最前線のキャンプを占めてルート開拓の指揮にあたる。

C1から上が、いよいよジャヌーの課題であるルートファインディングと氷雪登攀への挑戦となる。正面に見える王座氷河は、王座からヤマタリ氷河へ向って高さ約一七〇〇メートル、幅五〇〇メートルのアイスフォールとなって直接懸っている。そして常に小ブロックの崩壊が起って、この大氷瀑のあちこちの部分を掃蕩しており、また氷瀑最上部（王座下端）には最小のものでも霞ケ関三井ビルぐらいの巨大なブロックが崩落の可能性を示して並んでいる。万一これが倒壊すると、氷瀑全体は徹底的に掃蕩されて、人間が生き残ることはほとんど不可能に見える。以上のようなわけで王座へ上り込む最短ルートであるこの氷瀑は、一見しただけで敬遠されざるを得ない。

我々が着目したのは、王座からの大氷瀑五〇〇メートルほど下流で、左岸から直角にヤマタリ氷河本流へ落ち合ってくる支氷河の氷瀑である。幅が約五〇〇メートルある。フランス隊の記録は、このあたりのルート記述があいまいで、頼りにする気が起きないので、私たちの直感で決めるのがベストということになった。第二回のフランス隊（ジャン・フランコ隊）はこの氷瀑とおぼしき右側を登って上部で大迂回を強いられたとこぼしているので、ひとつ我々はこの氷瀑の左をヘツるように行ってはどうかということにした。氷瀑が押し出してくるブロックの多量さと、滝幅からみて、この支氷河は上部のどこかで小刀の頭の山稜へ喰い入っているであろうとの期待が持てる。小刀の頭の山稜はヤマタリ氷河とヤルン氷河を分つ分氷稜である。

夕方の吹雪の切れ目二時間を利用して橋村とニマ・テンジンが、C1からこの氷瀑の取付きまでのルートを探って、赤旗とケルンで目印をつけた。

三月二十六日、我々の直感は的中し、ヘツリなどの難場もなく、氷瀑の左端がガリー状のモレーンとなってつながっているので、これを登りつめて氷瀑の上へ上り込むことができた。五一〇〇メートルの地点まで登ると行手のモレーンが切れて、どうしてもセラックの乱立するところを行かなければならぬことが明らかになったので、ここへデポして下る。このガリー状のモレーンには最も急なところに、七〇メートルほど固定綱を張った。C1へ戻り着き、市川、長沼と三人で「うまくいった」とほくそ笑みながら熱い紅茶を飲む。

夕刻のBCとの交信で川瀬が伝えるところによると、入山以

来高度障害で半病人の態であった山田、吾妻が、いぜんかんばしくないとのこと。「出だしが悪いからといって、少しもあせることはない。無理をせず、ゆっくりやっておれば早い遅いの差はあっても、いずれ誰でも高度順応はする。C3までは俺たちが確実なハーケン陣で道を作るから、あせらずゆっくりやれ」と伝言する。

この日、BCから宮崎を迎える。

三月二十七日～二十八日、昨日の到達点五一〇〇メートルのデポを充実し、二十八日ここへ仮C2を出して、橋村、市川、長沼がペンバ・ツェリンを連れて入る。彼は一見すると比叡山の悪僧の如き容貌であるが落着いていて性質がよく、かつ勤勉で、英語もブロークンながらダージリン生活が長かったため一応はこなす。また彼は料理が上手なのでコックがいない上部キャンプでは欠かせぬ人物となり、ついにC5まで常に最前線のキャンプでルート開拓隊のために料理を作ることになった。もちろん荷上げもやる。C6に二回上ったのはニマ・テンジンと彼のみである。また朝一時間、寝る前一時間、停滞の時はさらにもっと長く毎日ラマ教の読経をして、一日たりとも欠かしたことはない。これはルート開拓に当る隊員の疲れきった心身を大いになぐさめるところとなった。かようなわけでペンバ・ツェリンは全隊員から最も愛され、信頼されたシェルパであり、下山後のカトマンズにおける給料・特別手当決定の大評定においても、全隊員一致の支持をうけて最高額の金を受けたのであった。

この日、テンジン、アン・プルバ、ハクパが仮C2へ上って荷上に従事することになった。

三月二十九日、仮C2の市川、長沼によって五三〇〇メートルまでセラック地帯をルートがひらかれた。宮崎が仮C2へ入り、C1へは山田が入る。余り高度障害がひどくなければ、少し無理をしても行動した方が順化が早いとのすすめにしたがったわけである。

三月三十日～四月一日、仮C2の橋村、市川、長沼、宮崎は交代して休養をとりつつ五三〇〇メートル地点までのルート整備と荷上げをくりかえす。高度順応のペースも考えて、一人にあまりバテのしわよせがゆかぬよう常に配慮した。

四月一日、五三〇〇メートルへの物資集積が予定量に達し、仮C2をめくり上げてここへC2を建設した。この時点での各キャンプの隊員配置は、C2―橋村、市川、長沼、宮崎。C1―川瀬、山田。残りはBCである。川瀬、山田、BCのドクター、小原らは、大体毎日上部キャンプを往復し、荷上と高度順応を行なう。シェルパの荷上活動は連日とどこおりなく規則的に行なわれた。

四月二日、C2から上のルート開拓が精力的に開始され、C1の川瀬、山田の指揮によって、C2へどんどん物資が集積さ

れ、各キャンプは活気づいた。サーダーのカルマはC1にあって上下のキャンプのシェルパの動きに目を光らせている。BCでは小原による食糧の再梱包が引続き入念に行なわれ、ドクターがBC責任者として、コックのダヌーとリエゾンオフィサーを通して采配をふるっている。吾妻はいぜんとして本調子でない。前線キャンプ―橋村・市川、中間キャンプ―川瀬、BC統轄―ドクター、この配置による指揮体系が原則的に全期間を通して維持運営された。

我々のドクターの特徴は、単なる遠征隊付医師ではなく、上部キャンプにこそ上らなかったが、作戦計画の中にガッチリ喰い入って、常時BCを統轄し、シェルパのローテーションと上方補給計画を完全に指揮すると同時に、連絡将校のシャンタを自己のペースに引き込んで、メイルランナーを通じて伝言をグンザのチェックポストからカトマンズへ打電せしめ、文明圏との連絡を確保するなど、その果たした役割の重大さは測り知れないものがある。高校・大学と山岳部で活躍したので、登山のポイントをよくわきまえており、英語を自由にあやつり、自衛隊空軍での軍務と医務を通じて身につけた組織体運営の原理に明るく、明敏な頭脳と三十六歳の充実した人格、その上に加えて隊員の大半の者と十年以上、特に橋村とは小学校以来、山田とは中学校以来の親交があって、隊員一人一人の気質性情を熟知しているなどからして、ドクターは必然的にこの重要な役割に

と任ずることになった。以上のことに精力を投じたからといって、決して外科臨床医としての役割がおろそかになるようなことはなかった。

四月三日、C2では第二の氷瀑を乗り越え上部の雪原に進出、第三の氷瀑下まで固定綱が張り通された。

四月四日、C2は連日の重労働の為に停滞。明日の第三氷瀑乗越しとC3建設のアルバイトに備えて休養する。C2からは一気呵成にC3へ達すべく荷上隊の増強ということで、カルマ、ダッチェリン、パサン・ノルブの三名が上りシェルパは七名となった。

ジャヌーの天候は入山以来、毎日ほとんど同じパターンをくりかえしている。午前中は快晴であるが、早い時は午前十一時、おそくも午後二時か三時には必ず視界をすべて奪う冷たいガスが谷底からせり上って来て山を覆う。すると間もなく急激に気温が下って雪または吹雪となる。積雪は大概は数センチに止まるが、大量のドカ雪に悩まされることもある。夕方から夜半にかけてこの雪は止んで晴れるが、夜は気温が零下十度あるいはそれ以下に冷え込む。右のようなことで、視界を必要とし、かつこみ入ったザイル操作や登攀用具を扱うルート開拓の仕事は大概午前中で打切られ、午後は吹雪の中を帰幕するというふうになる。登攀の能率は、天気の良い山での半分しか上らない。午前中に作業を完了する必要性から、最前線の隊はあまり遠くへ

ヤマタリ氷河4800m地点の第1キャンプ

第3キャンプから見た新参者のコルと第4キャンプへつづく氷の尾根

レースの頭より見たカンチェンジュンガ(左より西峰，主峰，中央峰，南峰)とヤルン氷河

第3キャンプ（5900m）

レースの頭から見たジャヌー，カンバチェンおよびカンチンジュンガ

C3より見た大統領の峰

ジャヌー頂上岩壁（点線は登攀ルート）

新参者のコルから第4キャンプへの登攀

ルート開拓に出られず、それ故固定綱等の仕掛けを大々的に投下するC6までは、次のキャンプ予定地の中間点にキャンプを仮設して、一旦ここに入ってから更に上部へキャンプを伸すというステップが採用された。

五月五日、C2全員はC3建設の物資をすべて持ち、今までの最大の難所第三氷瀑の乗越に向う。四人の隊員は、三日の工作で張通された固定綱をたどって、いち早く氷瀑の下に到着。ここでザイルシャフトを二分し、橋村—宮崎組、市川—長沼組とする。先行組がツルベ式にトップを交代しつつアルバイトの激しい登攀に取組む間に、後続組はルートの指示、ステップの切り足し、アイスハーケンやスノーバーの打加え、固定綱の設置、時にはワイヤ梯子の固定などルート工作をしながら追従し、先行組が疲れてきたら交代する。

この二重交代制登攀システムの目的は、特定のクライマーにかかる荷重を極力分散し、最大の経済速度と安全性を長期間にわたって維持し、遠征隊全員にバテ込みによる戦線離脱者を一人も出さずに、最大の戦力を確保するという基本戦略を実現することにある。したがって最前線キャンプを占拠する者のローテーションは、過労の生じないうちに早目々々に行なわれる。但しこの前提としては、誰がトップに立っても間違いないルートファインディングが行なわれ、確実にルートが開拓され続けるという高度登攀技術の裏付けが必要である。

さて我々は、二重交代制システムの強味をフルに発揮して、複雑きわまる大氷壁群の中で、その弱点から弱点をつないで大急ぎで進んだのであったが、次から次へと現れる大小の氷壁とクレバスに時間をとられた。午後三時をまわり、市川—長沼組がきわどい氷壁のトラバースをすり抜けて、八〇メートルの氷壁を胸が張裂ける様な苦しい直登を開始する頃には吹雪も一段ときつくなって来た。橋村がこの直登を登り切って追いついてみると、その先には橋を架けねば渡れない大クレバスが真横に口を開き、氷瀑を完全に上下に分けている。市川と相談の末、今日はここで打切りとする。カルマ以下後続七名のシェルパを安全地帯まで降らせ、巨大なセラックの壁の根元へテントを設営する（高度五七五〇メートル）。四名の隊員とペンバ・ツェリンを残し、他のシェルパは大急ぎでC2へ降って行った。なおカルマの申出により、明日は休養日であるが、大事な時であるからC2のシェルパは全員この仮C3まで上ってきてC3への荷上に協力するという。この協力はありがたかった。我々のルートとして採用したこの支氷河の眺めは、たいへん荘重な感じがするので「神の氷河」と命名した。

四月六日、朝のうちは例によって快晴。橋村—宮崎組が昨日の到達点まで先行し、大クレバスまでのルート工作と、架橋の準備をする。その間市川—長沼組は仮C3を撤収し、C2から来るカルマ以下の支援を待って、これをクレバス手前へ導く。

段取りは予定通り進み、幅一〇メートルのクレバスに十二メートルの二段式スライド梯子を架設した。このクレバスは下の方が青黒く霞んで、底が見えない無気味な奴である。橋の固定工作、ゲレンダーザイルの設置、空中ザイルバーンの架設（荷物を対岸に渡す仕掛け）等は市川・長沼、そして心配してC2から登って来た山田らに頼み、橋村―宮崎組は登攀用具のみをブラ下げて大急ぎで先行する。大クレバス上の障壁にルートを開く必要があるからである。ハーケンやスノーバーの効かないオーバーハング気味の七メートルの垂壁に行手を阻まれた。やむなくかき集めたピッケルやアイスバイルを壁に叩き込み、このシャフトを梯子のようにして登りつぐという手荒なやり方で垂壁を足の下にした。そこから上を見渡すと、氷河どんづまりのカールまで障壁は無く、大したクレバスもなさそうである。足下から急に傾斜の落ちた大氷床がカールの奥へ続いている。このカールは穂高の涸沢と同じ位の規模である。後続者は再びワイヤー梯子でこの垂壁を越えた。なるべく安全そうなところを、按摩のようにヒドンクレバスをピッケルでさぐりながら進み（この中腰でやるゾンディーレンが非常に消耗するのだ）五九〇〇メートル地点をC3と決定して、整地にかかる。すでに午後三時をまわり、再び冷たい吹雪に追われて山田以下カルマと他のシェルパ達は大急ぎでC2へ下っていった。固定綱等によるルート工作は万全であるからして、ヘッドランプさえ持っておればもはやC2～C3間は夜間といえども安全である。

かくしてジャヌー第一のキイポイントA・B・C（C3）は獲得され、橋村・市川・長沼・宮崎にペンバ・ツェリンを加えた五名がここを占拠した。

その夜、C2との交信で、シェルパ達の猛烈な早足についてC2へ下った山田が、テントへ入るなり寝袋へもぐり込んで夕食も待たずに眠り込んだと聞かされ、「さもありなん」と笑い声に交って同情が湧き起った。しかしこれで山田の高度順応は好転していることが確認され、C3は心強い戦力の増強を喜んだ。

この日の各キャンプの配置は、前記C3の他はC2に山田、小原、C1に川瀬、吾妻、BCにドクターとなり、吾妻の戦列参加も近いことがわかり、士気は高まった。シェルパの配置はC3に一名、C2に六名、C1に六名、BCに九名プラス、キッチン関係二名となり、強力な補給態勢が整った。

六、C4建設とカルマの遭難

C4（六五〇〇メートル）建設は、長く激しい氷雪登攀を通じて戦いとられた。初登攀のフランス第三次隊（リオネル・テレイ隊）においても、入れ代り立ちかわりの全戦力投下（すなわち二人組ザイルシャフトの交代投下）により、苦闘の連続をもって前進している。テレイ隊に較べて我々の不利な点は、シェルパの荷上能力の低下（十二年前のダージリン・シェルパは、

三〇キロ担いだが、我々のシェルパは二〇キロしか担がず、すなわち三五パーセントの荷上力低下）およびテレイ隊のほとんどの人が二年前のフランコ隊への参加により高度順応が継続しているに比して、我々の全員は三年前マカルー東南稜参加の市川を除いて、高度順応ゼロから出発している。以上の二点である。しかしひとたびジャヌーへ向って一歩を踏み出した我々は、不利な条件をもって敗北の理由にすることは許されない。何が何でも頂上に這上ることが絶対に必要なのである。可能性がゼロになるまでは決して引きさがらぬ。この様なことが各隊員間で語り合われ、強烈に気合いの入った行動が展開された。

C3で市川から申し出があり、「自分はマカルーでの高度順化の余韻もあり、七〇〇〇メートル以上の高度で一カ月以上生活した自信がある。ここでBCへ降りて休養をとると、再び登り返してくることの方が面倒であるから、このまま下には降りず、上へ上へと進みたい、休養はその間に適当にとる。」過去の実績からみて、抜群に強いこの男の言い分であるから、これは了承された。

四月七日、橋村と長沼がC3上部の偵察を行なった後、まず休養にBCへ下る。と同時にC3へは山田が上る。C3〜C4間の困難な氷尾根のルート開拓はその間、全面的に市川の指揮に委ねられた。山田がひどい歯痛を得て、宮崎と共に十日、BCへ下り、C3へは吾妻、小原が上る。続いて長沼が十四日、C3に戻り、橋村が十七日、C3に戻った。後を追って宮崎と山田がBCから上ってくれば登攀勢力の大部分がC3以上に集結して、いよいよC5・C6の建設、そして総攻撃という段取りで、五月五日前後の登頂が見込まれていた。

休養をふくむローテーションが行なわれるうちにも、小刀の頭へ続く氷尾根がしぶとく一ピッチ、一ピッチ獲得されて、ハーケンが次々と叩き込まれ、ザイルが固定され、ステップが切り込まれて行った。二重交代制登攀システムが、この氷尾根克服の基本的戦術としても採用されたが、橋村と山田が不在中は、C3までに展開されたほど規則的にはゆかず、より多くの荷重が市川に行った。その原因は宮崎、吾妻、小原ら若手の登攀技術に、物足りなさが残ったからにほかならない。その結果、ザイルの伸びる速度は目に見えて落ち、結局十八日、仮C4を氷尾根上六三〇〇メートルに仮設、二十一日にいたって小刀の頭直下六五〇〇メートル地点に待望のC4が建設された。C3建設以来十五日間がこのきびしい氷尾根開拓に費やされたわけだが、ザイルのトップはこの間ほとんど市川によって導かれており、改めて峯岸や塙らに代表される、鉄人会精強クライマーの遠征不参加が痛感された。

しかし何はともあれ獲得されたC4には橋村、市川、長沼、小原が入ってレースの頭へのルート開拓が開始された。二十二日、橋村、小原がレースの頭へ向い、三分の一を獲得し綱を固

定してC4へ戻る。C3からのカルマ以下四名の荷上隊が驚くほど早くC4へ着く。新参者の側稜の取付きからC4までは固定綱が切れ目なく張り通され、困難なところは二重になっており、垂壁にはワイヤー梯子が吊されるなど、完全なルート工作を行なったので、荷上隊は、安心して上ってこられるからである。C3から三時間半、下りは一時間半だという。これを聞けば開拓に要した十五日の日数は嘘のようだ。

いよいよ上部への攻撃が始まり、隊員と主力シェルパはC3以下に降ることは登頂成功までないということで、この日（二十二日）ドクターはA・B・Cへ上るべく、コックのダヌーを連れてC1へ入る。

四月二十三日、朝七時の定時交信を終ろうとしていると、突如C3から「事故発生、緊急事態！」と、息切れし狼狽した川瀬の声が飛び込んで来た。レースの頭へのルート開拓出発を遅らせて待機する。やがて事故の実態が明らかになった。C3から昨日同様C4に出発した五名のシェルパからなる荷上隊が、テントから二〇メートルほど行ったところで巧みにカムフラージュされたヒドンクレバスにつかまり、先頭のカルマの姿がポッカリ口を開いた穴の下に消えた。穴の中をのぞいても姿は見えない。「生きていれば、何とか助ける方法はある。生きていてくれよ。足や手の骨折ぐらいやむをえないが、頭を強打していなければよいが……。」

宮崎の確保により吾妻がクレバスへヘッドランプをつけて下り、右肩を骨折したカルマが二五メートル下のクレバスの幅が狭まったところに止りついているのを発見。割合、気は確かそうだ、との報せにひとまず「ホッ」とする。幸い足と左腕は折れていないのでワイヤ梯子を二五メートル垂らし、吾妻が下から押し、シェルパたちが上からロープで引き上げる。カルマもワイヤ梯子に乗り、左手でユマールを使うという方法で二時間かけて氷の穴から引きずり出した。

苦痛を訴えるカルマに、シェルパ全員が泣き出し、川瀬、宮崎、吾妻らはこれをとりしずめることが出来ず、C3は大混乱している。したがってこの処置は、C4の橋村と、C1のドクターが無線機を通じて指示を与えることになった。まずカルマを天幕に入れ、ドクターからの指示をうけて、身体のチェックポイントを吾妻がしらべ応急手当を施す。後頭部と目の上に裂傷、全身に打撲はあるが、いずれも致命的なものはなさそうで、右肩の骨折が主な傷と判明。カルマは次第に発言もはっきりしてきて、耳からの出血等もなく、頭の強打はないものとわかり一安心。ドクターと橋村が相談した結果、何をおいても隊の全力を投入して本日中にドクターの居るC1か、すくなくともC2へ搬出することが良策と決まった。日本の岩場で同種の遭難救助に場数を踏んでいる市川、山田、長沼らもこの策を強く支持している。ところが肝腎の川瀬からの返答は、吾妻の通訳で

シェルパに伝えたが、セカンド・サーダーのテンジン以下はカルマが渋るので同意せず、説得は不可能である。カルマをC3で安静に寝かせ、ドクターをC3に急行せしめよ、という。やむなく橋村は無線機に直接アン・プルバを呼び出し（セカンド・サーダーのテンジンは英語があいまいな上に、グズでかかる場合当てにならない）説得にかかった。

「ドクターは隊の全員の命に責任をもっている。登攀の責任は、救助もふくめて橋村が持っている。ドクターの見解を土台とするこの策は登攀隊長の業務命令（オーダー）であって、誰であろうと違反することは許されない。それはこれがカルマの命を救うのにベストであるからだ。それでもシェルパはこれに従わないという場合は、カルマの生死については、一切シェルパが責任をとるということになる上、自分たちだけでカトマンズまで運ばねばならない。業務命令に違反した者は、もはや遠征隊のシェルパではなく、遠征隊からの援助は一切停止されると知れ。命令に従う場合は、C4から市川と長沼が降って救助の指揮をとり、これに従いさえすれば、カルマの命は遠征隊が全責任をもつ。遅滞なく二者択一を決め、返答せよ。」やがてカルマを説得していたアン・プルバが無線機に出て“We obey your order, sahib.”と返答して来た。

あれやこれやで三時間近くロスしたのが痛く、市川らがC3へ着いたのが午後一時。C2から五名の応援シェルパをふくめて市川の指揮により、長沼、宮崎、吾妻、シェルパ九名計十三名からなる搬出隊は直ちに出発し、神の氷河第三、第二の氷瀑にある数々の難所を確実に通り過ぎて、C2に夜九時半に安着した。手ぐすね引いて待つ山田、C1から上り待機していたドクターらがこれを迎え、早速ドクターの厳密な診察が始まる。一時間が過ぎ、夜十一時にドクターの見解が出た。「左肩は多分脱臼であろうが、骨折もありうる。X線の透視を経ねば結論はだせない。頭の裂傷は致命的ではない。打撲による内臓の強打も懸念されるが、安静にしておれば外傷以外は痛みを訴えないので、内臓破裂はないものとみてよかろう。いずれにせよ器具・薬品の揃ったBCへおろし、一、二日様子をみたい。生命は安全である。」この報せに各キャンプは胸を撫で下した。かくして無線機にしがみつき通しの一日は終った。

四月二十四日、カルマの生命も安全、搬出も主な難所は昨日通過済ということで、C2から下は吾妻の指揮に委ねられ、ドクターと共にBCへ下った。C3の川瀬は、事後処理のためハクパと共にBCへ下り、C3は無住となる。

C4の橋村と小原はレースの頭をめざしてルート工作に出るが、吹雪と雷にはばまれ、さしたる進展をみず。

C2は市川、山田、長沼、宮崎が停滞し、搬出の疲労を休めている。

その後協議の結果、無電でRNAC（ネパール国営航空会社）

へ救出のヘリコプターを依頼し、カルマをカトマンズへ搬出することになった。カルマの容態は、肩の傷をのぞいて日々好転している。

四月二十五日、橋村、小原は再びレースの頭へのルート工作に向い、午後三時までかかって氷の管状ルンゼを登りつめ、レースの頭の一つ手前のピークへ立った。レースの頭へは難なく達せられると思ったが、中間のコルがきわめて不安定なスノーブリッジになっていて、危険で荷上げのシェルパを通すわけにはゆかないと判断、引き返す。丸一日貴重なアルバイトを無駄にした。帰路雷雪に出合い、橋村の左腕セーターが滞電して焦げるなど、危機一髪の目に遭い、命からがらC4へ逃げ戻った。そのC4は、午後五時から九時まで雷と雪にとりかこまれ、落雷と稲妻が息つく間もなく起り、数回は天幕に滞電するなどして、ペンバ・ツェリンのお経を唯一の頼りとして恐怖の四時間を過ごした。雷の世にも嫌いな小原は、「生きた心地がしない」とちぢみ上った。

四月二十六日、橋村と小原はひきつづきルート工作に向い、レースの頭と昨日登ったピークの中間コルへ上っている大ルンゼへ悪いトラバースをして入ろうとしたところ、またもや雷鳴が谷底の方から上って来るのが聞こえ、昨日の恐怖がよみがえって、退却した。C4の食糧も底をついて来たので、C4の三名は一旦C3へ下り、態勢を立て直してから上部工作をやり直すことにし、その日の午後、C3に下りた。

市川、山田、長沼、宮崎が同日C3へ上り合流した。

BCからの知らせで、本日ヘリコプターが来て、カルマをカトマンズへ搬出したとのこと。シェルパの動揺も、これにておさまり、明日からの登山再開が約束された。

七、C5建設とテンジンの負傷

四月二十七日、C3は登攀態勢の立て直しを検討、プランを決定し、下部キャンプに指示する。また、カルマの落ちた穴へ宮崎が下り、荷物や登攀用具を回収する。

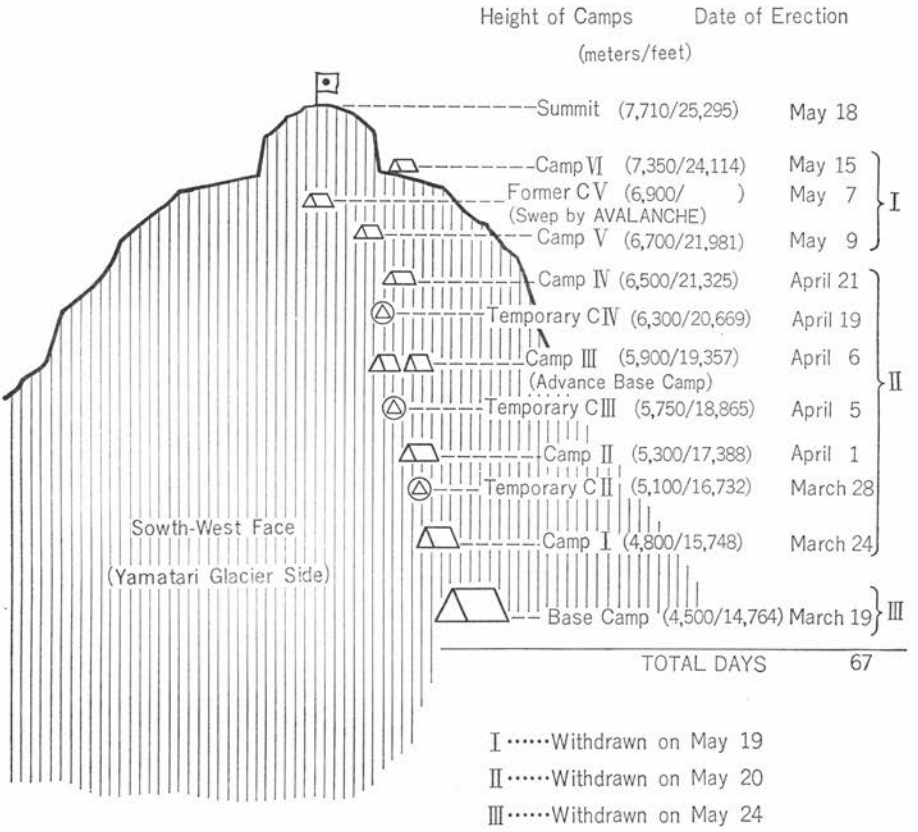
BCから、カルマとともにほとんど全員下ったシェルパのうち九名が、再び上部へ向けてプランにしたがって行動を開始し、C1をとばしてC2へ入る。

四月二十八日、BCからのシェルパ到着までに日数をロスすることを嫌い、C3の橋村、市川、山田、長沼、宮崎、小原、ペンバ・ツェリンの七名は担げるだけの食糧と燃料を持ってC4立て直しに出発する。C4には市川、山田、ペンバ・ツェリンを残し他の四名はC3へ戻る。この日は慣れぬ重荷がこたえた荷上げであった。

C2から、テンジン、アン・プルバ、ハクパ、アン・カミ、ダッチェリンの五名がC3へ入る。

BCから吾妻がC1へ入る。

Progress of Climbing at a Glance



四月二十九日、C4の市川、山田は前任者（橋村、小原）の意見にしたがい、レースの頭手前のコルへ上るルンゼのルート開拓に着手した。そのルンゼへ入る悪いトラバースに悪戦苦闘している。

C3からはシェルパ五名による荷上がC4を補給、C2よりシェルパ七名による荷上がC3を補給し登攀態勢は再び軌道に乗り始めた。

吾妻はC1よりC2に入る。川瀬はBCよりC1に入る。

四月三十日、C4の市川、山田は悪いトラバースのルート工作を完了。ルンゼの中まで固定綱が張通され、傾斜七十度の氷壁のトラバース四〇メートルに、蒼氷のバンドを切り通す難作業を完成させた。

C3より、長沼、宮崎がC4へ上る。C2より、吾妻がC3に上る。シェルパによる各キャンプの補給は規則正しく行なわれている。

五月一日、C4を出た山田、長沼、宮崎は昨日の到達点よりピッケルとアイスバイルを振り続けてルンゼを登りコルに達し、直上、トラバース、また直上とハーケンを連打しつつ氷壁の弱点を追及して頑張り抜き、ついにレースの頭を越えて王座氷河の入口までルートを完成した。朗報が各キャンプに伝わり、意気があがる。C1よりC2へ川瀬が入る。

五月二日、各隊員停滞。C3→C4は五名のシェルパにより荷上。

五月三日、C3より橋村C4へ上る。川瀬C2よりC3に入る。これにてドクターを除く全隊員がC3以上に入り、上部キャンプ進出の態勢が完了した。

五月四日、C4より市川、宮崎は四名のシェルパを引率し、王座氷河上部へデポを行なう。小原C3からC4に上る。

五月五日、C4より山田、小原は五名のシェルパを率いて出発し、王座氷河上端六九〇〇メートル地点にC5を建設し、テンジン、アン・プルバと共に占拠する。夕刻の交信で、山田から「王座氷河の登高は非常にバテる。山田と小原は〝バテドーシ病〟にかかったので、ドクターは治療法を指示せよ。」と伝えてくる。その後、この〝バテドーシ病〟という言葉が上部キャンプで非常に流行した。この特効薬は酸素である。

この夜山田、小原は睡眠に酸素を使用した。吾妻C3よりC4に上る。

かくして頂上攻撃予定者、橋村、市川、山田、長沼、宮崎、吾妻、小原、テンジン、アン・プルバの九名がC4以上に集結した（当初の予定ではカルマも連れて行くはずだった）。

以後C4から下の荷上げは、A・B・Cの川瀬、BCのドクターの指揮に委ねられた。

長沼は前からあった胃痛が、この時点で悪化し、C3へ下って様子をみることになった。

五月六日、C5の山田、小原は、C6へ通じる六十度の氷壁にステップと固定綱によるルート工作を開始し、二五〇メートルの高度差を獲得してC5に戻り、ここへ泊る。テンジン、アン・プルバは山田隊に追従して、その最高到達点に荷物（登攀用具と酸素）をデポする。

川瀬はコックのダヌーとアン・カミを連れてC3から下り、大クレバスのいたんだジュラルミン橋を、運び上げてあった丸太を副木として補強する。三名のシェルパにより、C4からC5を補給する。

五月七日、C5の山田、小原はC4へ下る。代って宮崎、吾妻がC4からC5へ上る。C5のテンジンとアン・プルバは停滞。再びシェルパ三名によりC5を補給する。長沼は胃痛が更に悪化、十二指腸潰瘍の疑いがあるのでドクターのいるBCへ下る。この大切な時期に戦列を離脱する口惜しい心境は察しても余りあり、かつ戦力の低下は痛いが、病はどうすることもできない。回復を祈るのみ。

五月八日、宮崎、吾妻はC5から前任者（山田、小原）のフィックスを伝わって登り、C6へのルート工作を継続する。一歩一歩ステップを切り固定綱を設置する消耗的な作業を粘り強く続け、昼過ぎからの吹雪をおして視界の利かない登攀を強行し、ついに午後三時、ジャヌーの東肩、七三五〇メートルのC6地点まで固定綱をとどかせることに成功した。再び朗報が各キャンプに伝えられ、荒々しい凱歌が上る。明後日（十日）橋村と市川がC6を建設し、最後の難関頂上岩壁のルート工作に専念すれば、登頂態勢は完了して、C4以上に居る全員の登頂が目前に迫るところまでジャヌーを追いつめたと、意気は大いにあがる。

酸素のC5、C6への配給、隊員とシェルパのローテーションにつき綿密な作戦計画がC4で立てられ、C3とBCへ伝える。すなわち、橋村と市川は十日にC6を建設し、アン・プルバを加えた三名がここを占拠する。C5よりの補給をうけつつ、十一日、十二日の二日間にわたって頂上岩壁にルート工作を展開し、ひきつづきこの三名によって十三日、第一次頂上攻撃を敢行する。頂上よりC6をとばしてC5へ下り、代ってC5の山田、宮崎、吾妻、小原がC6へ上る。十四日、この四名により第二次頂上攻撃を行ない、かくしてC4から上にあがっているアクティブメンバーは全員頂上を踏む。以上の様な要旨であった。いよいよ頂上攻撃を旬日内にひかえ、各キャンプは緊張してその準備に当った。

その夜は、ふだんだと夕刻にやむ午後の雪が、夜の九時過ぎまで降り続き、二十センチほどの積雪をみた。

五月九日、朝の三時、橋村がC4のテントから小用で外に出ると、雪はやんで月光にジャヌーの氷帽がすさまじく光って見えた。虫のしらせがあり、C5の地点に目をこらしてみると、

ライトが点滅しているではないか。「遭難だ!!」と直感して、直ちに無線機のスイッチを入れてる。宮崎の声が入ってきて、C4全員が登頂の夢をみて寝入っていた昨夜十一時ころ、全ての希望を打ち砕く様な雪崩がC5を直撃したことを知った。宮崎と吾妻は無傷だが、アン・プルバはあちこち打撲し、テンジンが腰と背中をひどく打撲か捻転して、身動きができない。テントごと約八十メートル流されて、それへ落ちれば絶望視されるクレバスの手前二十メートルで運よく止ったので、こわれたテントをかぶって救助の来るのを待っている。アイゼンとピッケル、ザイル、酸素、食糧、その他天幕外にあった荷物はすべて流し去られて行方不明。燃料がないので温いものが飲めず、寒くてつらいという。宮崎の声は、事態を冷静に分析し、落着いて状況を述べるので、かえって受けた打撃のきびしさが強く我我の胸を打つ。

命が助ったことにはひとまず安堵したものの、昨日立案した計画はすべて振り出しに戻り、ついに我々がジャヌーから追いつめられたことを知った。カルマの事故、先日の落雷（事故にはいたらなかったが。）、長沼の病気、今回の雪崩と、ジャヌーの報復は執拗にして恐怖に満ちたものだ。我々の前進を、その要所要所で手きびしく打ちのめし、阻んでくる。「まだ負けはせんぞ!」口惜しさ無念さと、どうやって宮崎達を助けるかという考えが願の中でグルグル回る。しかしC4からレースの頭に続く急斜面のトラバースが、この積雪では危険で、夜が明けるまでは出発できない。準備をしつつテントへ入って身体を休めて夜明けを待つ。宮崎とは一時間おきに交信して、状況確認をかねて激励する。

朝食後、山田を連絡のため残し、C4の全勢力は救援に出動した。橋村、市川、小原、ニマ・テンジン、ペンバ・ツェリン、ハクパ、アン・カミ、パサン・ノルブの八名である。橋村と小原が先頭に立って、レースの頭に続く急斜面のトラバースを開始する。厚く積った新雪が崩れそうで恐ろしい。こういう危険な所こそ、サーブが挺身しなければシェルパはついてこないのだ。固定綱を摑んで強引にラッセルを続け、安全地帯まで無事達してホッとする。以後はラッセルを交代しつつレースの頭へと向う。固定綱を掘出し、蒼氷の上に不安定に積った新雪をかきわけて登るのは非常に神経を使い消耗する。レースの頭からも、さらにもぐる苦しいラッセルが続く。我々のルートは王座氷河の右端、ヤルン氷河へ王座が二〇〇〇メートルぐらいの絶壁となって落ち込んでいる側についている。

昼食をしながら市川と、事後の収拾策を検討し合う。五七〇〇メートル地点に、雪崩からは完全に免れている安全地帯がある。上の傾斜がゆるい上に二列に並んだ巨大なクレバスがパックリ大口を開いて、上からの雪崩を完全に呑み込む仕組になっている下の台地だ。ここを新C5として、本日持参の新品の六

人用天幕を設営する。高度をC5より二〇〇メートルも下げるのでC6の建設には非常に不利となるが、この際やむをえない。傷ついて歩行不能のテンジンをレースの頭からC4までの悪場をおろすことは不可能であるから、この新C5に収容する。そしてここへ橋村と、英語が確かで、最もベテラン（タイガーバッジ所有者）で動揺のないニマ・テンジンが入って救護に当り、BCドクターの指示をうけて負傷者を手当しつつ、回復を待つ。まだ半月の食糧、燃料の余裕があることはたしかめてあるから大丈夫だ。C5の雪崩で、折角集積した物資（シェルパ一五人分、すなわち二二〇キロ、マイナスC5居住者消費分約八〇キロ、すなわち一四〇キロ）を殆ど失ったのは痛いが、まだまだ登頂のチャンスはあるので、この新C5に物資の集積を行なう。当面は以上の様なことであった。

橋村がC4にいて作戦計画を立て直す方がよいのではないか、との意見もあったが、橋村は別の考えを持っていた。すなわちサーダーのカルマが負傷し、ここでまたもやセカンドサーダーのテンジンが負傷した。シェルパたちにとっては、これほどのショックはないであろう。迷信深い彼らのことであるからして、実力のある序列の高い者ほど、次は自分の番だと、内心縮み上っているに違いない。こういう心理状態の時こそ、登山の責任者である登攀隊長が、自ら挺身して救護に当り怪我人を安心させると同時に、全シェルパに対しても「サーブはいざ！という時には身をもってシェルパを助けてくれる。」という信頼感を持たせる必要がある。こう考えたのである。ここでシェルパに手をひかれたら登頂が不可能なことは明白だったからである。

六七〇〇メートルの台地に橋村が一人残って整地をし、天幕を立てる間に、市川の率いる救援隊は、ふりしきる雪の中を、深雪にあえぎ、あえぎ登って行った。

六七〇〇メートルの高度で、一人で六人用の冬天幕を立てる作業は、日本の冬山では想像できない苦しさがともなう。二時間かかって完成した時は目の前がクラクラして、天幕の中に倒れ込んでしまった。一時間ほど倒れ伏していると、人声がして、救援隊が負傷したテンジンを中心に雪の降る中をゆっくりと下って来るのが見えた。ハクパとアン・カミに両脇から半ば抱えられる様にして、後から丸腰のアン・プルバが確保し、そのアン・プルバをパサン・ノルブが確保している。前をニマ・テンジンとペンバ・ツェリンが歩きやすい様に整地しながら来る。市川と小原がその前を、ピッケルもアイゼンも、アイスバイルまでも失った宮崎と吾妻を確保しながら来る。その二人は折れ曲ったテントのポールを杖に歩いている。陰気で、ションボリした雰囲気につつまれ、まさに敗残兵の退却という感じである。今後行く末の困難さが思いやられて、胸がしめつけられるような光景であった。

テンジンを収容し終ると、すでに午後四時に近く、橋村とニマ・テンジンの三人を残して、他の者は急ぎC4に下って行った。ニマ・テンジンがベテランらしい手ぎわのよさで天幕内を整えたり、炊事用のブロックを運び込むのを横目に見ながら、さっそく無線機をとってBCのドクターと交信を開始。ドクターの与えるポイントに従い負傷個所をくわしく聴取して伝え、治療法を仰ぐ。ドクターの指示は、「骨は大丈夫そうだ。首、背筋をひどくねじるか打撲するかしている。湿布して、薬を呑ませ、数日安静にして様子をみる。ビタミン剤をとらせ、動物性蛋白質は筋肉の回復によいので なるべくとらせる様に。」との要旨であった。なお心配が残るので、明らかに軽快化の傾向が見えるまで、朝昼晩三回の容態報告と指示のために交信を行なうことを決めた。

五月十日、終日降雪多く、C4からの補給がうけられない。交信によれば、ペンバ・ツェリンとパサン・ノルブ二名が出発したが、積雪多く恐怖を感じて、途中へデポして引き返したという。この日は各キャンプ共雪崩を恐れて荷上隊は途中から引き返している。C5の雪崩による壊滅が、シェルパ達に決定的恐怖心を植えつけたことが大きく作用している。

ドクターとの交信、薬品の荷上の指示などが、緊張した各キャンプを飛び交う。テンジンの容態は進展せず、ショックと痛みのため、口数少なくうなるのみ。小用を足すのに外へ連れ出すのが、痛みのため大変な仕事だ。ニマ・テンジンと二人で大汗をかき乍らやっても二十分はかかる。ドクターの見解をくわしく説明、時間をかければ必ず軽快化する種の負傷であり、下山はサーブが責任をもって指揮をとり、最優先で行なうから、今は云われた通り薬を呑み、辛抱すべきことをニマ・テンジンの通訳で伝える。納得して安心の表情が見える様になってきた。不安を抱くといけないので、各交信の内容、特にドクターとの交信は詳しくその都度説明を与える。

五月十一日、ようやく快晴となった。市川、山田がC4からレースの頭までの難所の荷上を先導する。シェルパの恐怖心をとり除くためである。新C5（以下単にC5という）からは、橋村とニマ・テンジンが逆ラッセルにレースの頭まで下る。市川、山田の荷上して来た荷物は、C5の二人が引きついで上げる。アン・プルバとハクパが上ってきて心配そうにテンジンに様子をきいていた。C4からも吾妻、小原が逆ラッセルでアイスビルディング（小刀の頭の一つ下のピーク）まで下る。いずれの個所も腰近くまでの積雪で、吐く息はふいごの様に荒い。

アン・カミとパサン・ノルブが高度障害を理由にC4からBCまで下ったという。この積雪の中を高度障害にかかった者がC4から一気にBCまで行けるはずがない。明らかに敵前逃亡である。C3に居る川瀬は、なぜ彼らをC3で一旦泊らせて様子をみるよう指示をせぬか、と非難が集中した。カルマがおれ

ば、かかる軍紀の乱れは生じなかったであろう。それ程彼はすぐれたサーダーであることが、不在の今になって実感された。いずれにせよこのまますてておいたのでは、ますます悪影響が生ずるに決っている。夕方の交信で橋村はドクターを呼出し、逃亡した二人を診察してもらう。案の定、何でもないという。そこで、ドクターと連絡将校のシャンタを通訳に厳重な警告を発する。「最前線に傷ついた者がいる非常時に、仮病で逃げるという卑劣な行為は許しがたい。即刻C4へ上って来い。来ない場合は厳罰を与える。」彼らはさんざん言訳を並べた上で、とにかく従うということになった。

一方、夕方の交信でC4の市川が悪報を伝えてくる。頼みとする、C4のシェルパ、アン・プルバ、ペンバ・ツェリン、ハクパの三名が、「ジャヌーはあまりにもむずかしすぎる。もう登山活動は中止して、セカンドサーダーを収容し終えたら下山させてほしい。荷上げはやりたくない。」かように言い出して困惑している。橋村がC4へ下って説得してほしいという。二度の遭難のショック、長沼の胃痛による下山、そして脱走者の発生などが、彼らの不安を深刻なものにしているのだ。しかしここで傷ついたテンジンをおいて下山する訳にもゆかない。またこの際、登攀隊長が少しでも前線からひき下れば、シェルパの士気に与える影響は測り知れないものがある。そこでC5の二人のシェルパを通じて彼らを説得することにした。まずニマ・テンジンを通訳として、状況をくわしく説明する。しかるのちに説得にかかる。「われわれがシェルパの命を隊員のそれと同等に重要視するものであることは、カルマの遭難の時に自分の目でよく見た筈だ。今回の場合も、こうして登山の責任者である私と、最年長のベテラン、ニマ・テンジンがお前を確保し、C4には市川以下強力な登攀勢力が補給と救出のため待期している。ドクターからは常時不断に治療法が指示されており、世界最高の薬品を与えている。しかるにお前が歩けるまではドクターによれば、あと数日を要する。他方我々の遠征隊員の登攀力は、今までお前の知る限りでは最強のものであることもわかっている筈だ。物資の面では吾隊にはまだ余裕があり、士気も高く、お前を助けながらかつ頂上もとることが可能な状態にある。モンスーンまではまだ十日以上の日数がある。しかしそのためにはシェルパの荷上が不可欠である。シェルパはこのような強い遠征隊に参加したことを神に感謝すべきである。なぜならこの様な隊にしてはじめてジャヌーは頂上を明け渡すのであり、シェルパはヒマラヤの最も困難な山で、登頂の栄誉を担うことができるからである。なお本日以降、C4から上で荷上したシェルパにはその功績に応じて、成功報酬の他に給与を二十パーセント以上増額する」。ニマ・テンジンはこれをテンジンに伝えると同時に、C4のシェルパに交信で伝える。テンジンは同意して、自分は明日直接説得するから、とにかく荷上げに全

員C5へ上ってくるようにとC4のシェルパへ指示を出した。しかしその夜のうちに、明日の説得を待たず、全員同意したことが市川から知らされ、ほっとする。

こういう精神的な壁を乗越えた者は強い。迷いなく持場に全力を尽すからである。この日以後のシェルパは、サーブ達に負けぬ頑張りを発揮して、登頂を力強く支えた。

その夜、遅くまでC5とC4は荷上の計画、頂上攻撃計画その他について打合せを行ない、次の結論を得た。

㈠ C6の建設と、頂下攻撃は橋村、市川、山田、小原の四名で行ない、ニマ・テンジン、ペンバ・ツェリン、他一名のシェルパがこれをサポートする。頂上攻撃は四人一度でなく、二人組が二回に分けて行なう。

㈡ 宮崎と吾妻はその間アン・プルバと他一名のシェルパを使ってC5の補給を確保すると同時に、テンジンのBCまでの救助作業を指揮する。以上であった。

宮崎と吾妻の役割は、事実上頂上攻撃からはずれることを意味するが、彼等はこれを黙って引受け、シェルパ不足を補うために、何回もC5へ荷上げをしたばかりか、最終的には的確な指揮によって、数々の難場を通ってテンジンをBCへ安着せしめた。登頂の栄誉にかくれ勝ちであるが、地味で重要なこの種の任務の貴さは、幾ら筆を尽しても賞讃し過ぎることはない。その夜のネパール放送は、日本女子マナスル隊の登頂と、一人の隊員の行方不明を伝えていた。

八、頂上攻撃とテンジンの救出

五月十二日、C5より橋村とニマ・テンジンはC6へ向けてラッセルに出る。旧C5から二〇〇メートル高度を下げたため、すでにフィックスがあるとはいえ、C5からC6の建設がより困難な状況におかれたからである。太ももまでもぐり、吹溜りでは胸まで嵌り込む深雪を、この高度で、無酸素で漕ぎ登る辛さは筆舌につくしがたい。日が傾くまで精一杯頑張ったが、高度にして三〇〇メートル、七〇〇〇メートル地点のC6への固定綱下端に達したのみで終った。

C4より、市川、山田、小原がC5へ上り、既設の天幕と向い合せて六人用をもう一張り増設した。ペンバ・ツェリン、ハクパもC5へ入る。吾妻、アン・プルバ、荷上のためC4よりC5を往復。ダジ、上部増強の為、C3よりC5へ上る。

かくして再び頂上への活動が執拗に開始された。

テンジンの容態は好転のきざしを見せ始めた。

五月十三日、昨夜の風雪は、前日の橋村、ニマ・テンジンのラッセルを跡形もなく埋めつくしている。代って山田、小原がラッセルに出る。必死の頑張りにもかかわらず、前日の到達点の半分までしか進めず引き返してくる。

吾妻、アン・プルバによるC4よりの荷上げを助けるため、

ベンバ・ツェリンとハクパがレースの頭を逆ラッセルして荷物を中継する。

川瀬によれば、ローカルポーターのダリタはすでに二回C3—C4の荷上に従事しているという。普通の山とは違い、ジャヌーのC3—C4は非常な難所である（結局彼は五回往復した。それに見合う報酬をうけたことは、もちろんである）。

C5に停滞した橋村と市川は頂上攻撃の最終案を作り、C4の宮崎、C3の川瀬、BCのドクターに伝える。

㈠ 第一次攻撃隊、市川、小原。第二次、橋村、山田。傷ついたテンジンを除き、C5全員は明日C6建設に向う。C6は六人用天幕を設営し、市川、小原が入り、持日数は三日。はじめの二日をルート工作に用い、残る一日を攻撃に充てる。五〇〇〇メートル持参したザイルは、すでに各キャンプ共底をつき、C5には六ミリが三〇〇メートル、八ミリが五〇メートルその他短い半端物が二本あるのみ。ハーケンは岩用、氷用共十分ある。八ミリ五〇メートルをアタック隊の行動用に用い、六ミリ三〇〇メートルはすべて頂上岩壁の固定に投入する。それでも更に三〇〇メートル足りない感じであるが、これでやり通す以外に方法はない。

㈡ 第一次隊の頂上攻撃日に第二隊はC6へ入る。第一隊はギリギリまで突込むか、頂上への見通しをつけて第二隊へバトンタッチするかは市川の判断に任せる。

㈢ C6建設以後、C6への補給は一回しか行なわない。すなわち橋村と山田がC6へ入る日に三名のシェルパにより補給する。シェルパは、サーブの先導なしではC5→C6の荷上はできないからである。

㈣ 酸素はC6でのみ使う（数は十分あるが、荷上量が制限されている）。睡眠用二人一晩一本、攻撃用一人一日一本とする。

㈤ 成功、不成功にかかわらずC6は下山時に放棄する。以上であった。

この最終案をサポートするため、各キャンプから種々の質問や提案があり、長い交信を終った。夜のネパール放送は、成城隊、C5雪崩の遭難を伝えた。

五月十四日、橋村、市川、山田、小原、ニマ・テンジン、ペンバ・ツェリン・ハクパの七名はC6へ向けて出発した。昨日の山田、小原のラッセルが残っている所までは比較的順調に進んだが、その先は急に雪が深くなり十五キロの荷は非常にこたえる。がっくりとペースが落ちた。C6へのフィックスの下端に着いた時は午後一時を廻っていた。更にそこから上は高度差にしてC6まで三五〇メートル、固定綱にして四五〇メートルの氷壁が一直線に続いている。濃密なガスと共に激しい降雪がきて、日没前のC6到着が危ぶまれてきた。ニマ・テンジンが、次いで小原が先頭に出て、体力の限りをふりしぼってラッ

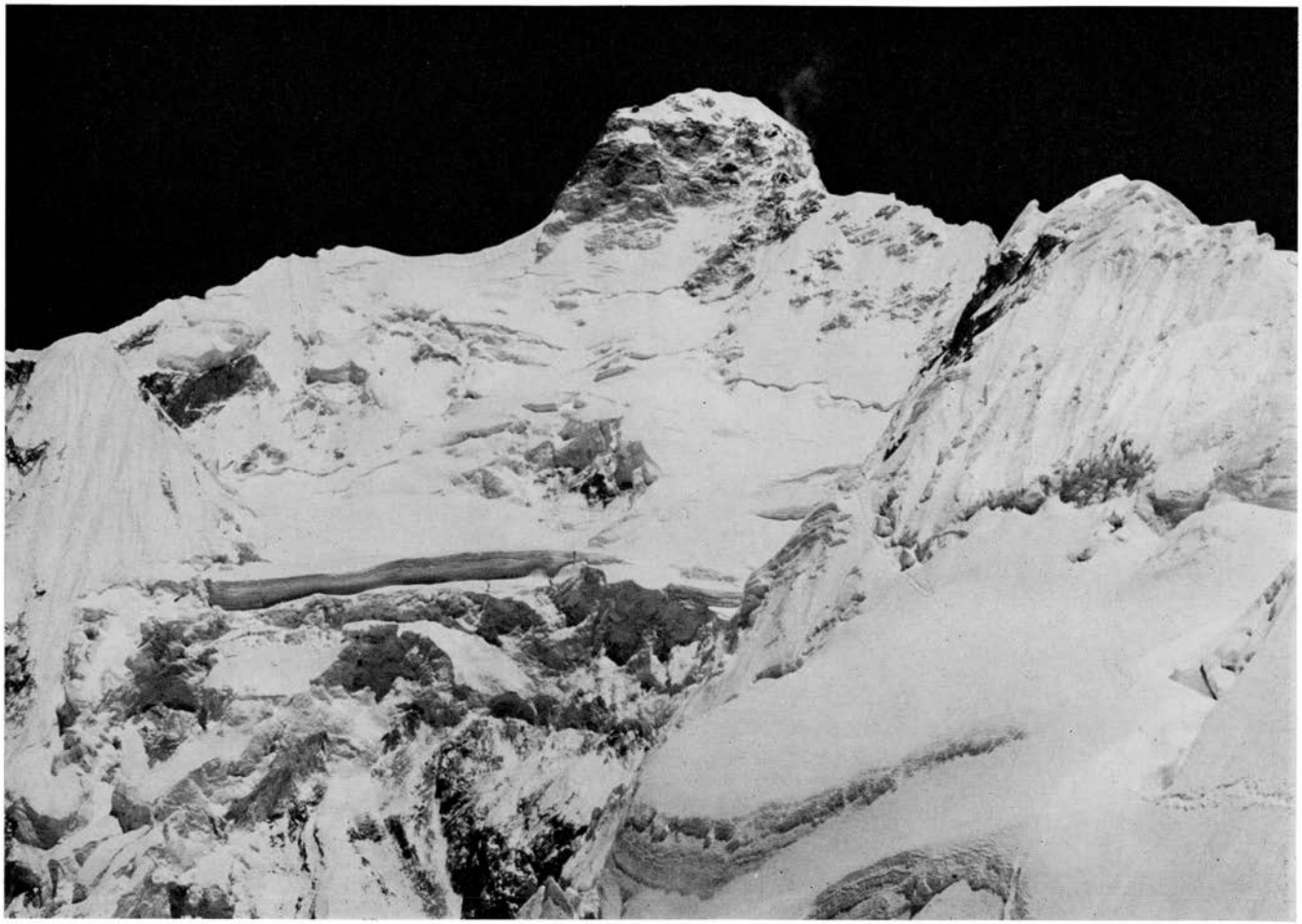
セルを先導する。固定綱を掘出すのに苦労する程雪が深い。時間はどんどん過ぎるが、ピッチは一向にはかどらない。固定綱にして一〇〇メートル登るのに二時間を費やす。その時、「雪崩だ!! 各自ザックを股の間に固定し、ピッケルを刺し込み、フィックスにつかまれ!」二番目を登っていた山田の鋭い声が降雪をつんざいて響き渡る。見上げるとC6へ続く氷壁全体を、今降った雪が表層雪崩となって滑り落ちてくる。生きた心地のしない光景である。やがてドーッと強い衝撃が来て、あたり一面白い奔流につつまれて何も見えなくなる。「もう駄目か!!」と歯を喰いしばっていると、サッとショックが去っていった。助かったのだ。目をこらすと全員無事で、嬉しさがこみ上げて来る。股の間にしっかりと押え込んでいた荷物もなくなっていない。山田の発見が早く、指示が正確だったお陰で、我々はシェルパが手袋を片方失ったほかは、すべてを保全した。ニマ・テンジンとペンバ・ツェリンはお経をとなえている。神への感謝か、あるいは第二波の来ぬ様祈っているのだろうか。更に五〇メートルほど登り、岩に突き当ってトラバースする所に小さいベルクシュルントがあるのを幸い、ここへデポして明日再挙することにした。今の時間（午後四時）からみて、C6へ上り、天幕を建設することは不可能とわかったからである。

ジャヌーはまだ恐怖の報復をやめてはいない。重い気分でC5へ戻り、血を吐くような苦しい一日の行動を各キャンプに報告する。

この日、アン・プルバとダジはC4からC5を補給した。

テンジンの傷は目立って軽快化してきた。一人で小用を足しに天幕外へ出られるようになった。

五月十五日、昨日同様C5の七名は、今日こそはC6建設との執念に燃えて出発した。昨夕雪が小降りになってから下ったため、踏跡が残っていて進行がはかどるのは助かった。デポに正午到着、いよいよ六十度の雪壁を固定綱を頼りに、苦しい喘登が始る。重荷のため十歩と続けて登れない。荒い息を吐き、皆黙々と耐えて一列に固定綱を登る。五月六日の山田隊、同八日の宮崎隊のデポ（酸素・ザイル・ハーケン・食糧）が固定綱の支点に散在するのを拾ってゆくため、更に荷はふえる。シェルパは二〇キロに達すると、それ以上は絶対に担ごうとせず、知らん顔で行ってしまうため、後から行く橋村、山田が全てこれを回収してゆく羽目になる。ついに橋村と山田の荷は、C5から担ぎ上げてきた物の他、ザイル二本、酸素三本が加わり三〇キロ近くなる。七三〇〇メートルの高度でこの荷物は、無酸素の人間の限界である。この世の終りかと思うような絶望的に苦しい登攀の一歩一歩に息は詰り、目はくらみ、死にそうになる。今にも倒れるかと思う時間がいつの間にか過ぎ、気がつくと稜線に立っていた。ふらつく足を踏みしめて、気力をふりしぼってトラバースするとC6だ。市川、小原らとシェルパ達が、雪



第4キャンプから見たレースの頭とジャヌー

第６キャンプから見た頂上岩壁

ジャヌー頂上に
立つ市川隊員

庇を切り崩して、テント地の整地をしていた。橋村と山田が担ぎ上げた荷の重さに、シェルパも敬意を表する。この苦しい荷上げによって、C6には十分な酸素と食糧、燃料が集結した。途中、小原が不注意にもとり落したアイスバイルを、苦労してひろってきた山田が、きびしく小原を叱責している。この男の粗雑さが、アタックの時にボロを出さねばよいが、という不安が全員の心をよぎる。さらに小原は、ハーケンの入った袋をC6下の氷壁に忘れてきていることが判明。取り戻しに下らせる。

テントを建て終え、夕暮れに追われて五時半、健闘を祈ってC6を後にする。途中、ハーケンの袋を持ってC6に登る小原に、頂上攻撃に当っては遺漏なきよう、再度山田と二人でクドクドと叱る。

C5には午後七時半、疲れ果てて帰着した。この日、アン・プルバ、ソナ・ゾンブー、ダジによりC5は補給された。テンジンの体調良好となり、自力歩行可能となる。C4宮崎、吾妻と交信し、明日段取りを整えて、C5に迎えに来る様指示する。

五月十六日、烈風吹きすさぶ中をC6、市川、小原は頂上岩壁のルート工作に出発、頂上岩壁を割って頂稜に達しているアイスガリー入口まで固定綱を張り通す。ここで手持ちのフィックス用ザイルは全て尽きて了った。この日の登攀はつらい一日であった。十二年前のテレイ隊は、我々よりもはるかに恵まれた状況の下に、ベルトラン、ブービエ、ルルー、ポレ・ヴィヤールの四人掛りで丸一日かかって固定作業をやったところである。それでも、酸素を吸わなければ、すぐに墜落しそうになると彼らは報告している。市川は言う。「マカルー東南稜では、八〇〇〇メートルでも酸素なしで行動できた。しかし、ジャヌーは違う山だということを、この日のルート工作で思い知らされた。何かのはずみで背負った酸素筒のレギュレーターが岩に当って流出がゼロになったことがあった。それと気付かず登り続けると、やがて目の前が暗くなり、危く墜落しかけた。あわてレギュレーターを二リットルに直し、事無きを得た。つまり、ジャヌーの登攀はきびしいのである。」彼等がこの日ルート工作に従事した標高は、七四〇〇メートルから七五〇〇メートルの間であった。

宮崎、吾妻はアン・プルバ、ハクパ、ソナ・ゾンブーを連れて、回復著しいテンジンをC4へ救出した。彼には、ここ二日間は睡眠時に酸素を吸わせて万余を期した。レースの頭の下降がきびしいので、確保には神経をすりへらした。アン・プルバの特筆すべき活躍もあり、午後三時、C4へ安着した。

ダジは、やや不調のハクパと入れかわりにC4からC5へ入った。川瀬は、登頂に備えてC3からC4へ上る。

五月十七日、C6、C5ともに停滞した。

ザイルの在庫はすでに底をつき、C4から上は燃料（プロパンガス）がギリギリ一杯の状態に追込まれて来た。食糧、酸素

はまだ在庫がある。本日C6が停滞したのは、ルート工作をしようにもザイルがなくて出来ないため、明日の攻撃に備えて休養したからであり、従ってC5も足止めをくった。

第二次攻撃に備え、C4から二名のシェルパがC5へ酸素を補給した。

宮崎、吾妻はひきつづきC3からのシェルパ数名（この中には先日脱走し、改心して戻って来たアン・カミとパサン・ノルブも含まれていた。）の応援も得てテンジンの救出を行ない、C4のオーバーハング・氷の管・トラバースなどが連続する困難な氷尾根を無事通過して、C3へ搬出することに成功した。アン・プルバが途中まで下り、C4へ戻ったが、相変らずの活躍で、後を引きついだC3のシェルパ、特に脱走した二人は大いに献身して、悔悛の態度を示したという。レースの頭下と、C4下の氷尾根を通して救出できたとなれば、残る難所は第三氷瀑と第二氷瀑であるが、慎重にやりさえすれば大過なくゆくであろうと予想され、各キャンプはこの報せに大いに安堵した。

五月十八日、我々の念願が天にとどき、風はあったが終日快晴に恵まれた。ジャヌーのBC以上で過ごした六十七日間で、終日の快晴は三日しかなかった。いかに貴重な一日であったことだろう。

C6、市川、小原は何があろうと今日は頂上に立つという執念の鬼と化し、午前五時出発した。一昨日の固定綱を丹念に追い、頂上岩壁の弱点、アイスガリーの基部に午前七時に到着した。固定綱の威力を思い知る。ここから上アイスガリー二〇〇メートルの登攀は、かの超人リオネル・テレイがラヴィエとウォンディ（テレイ隊のサーダー）を連れて、ハーケンを連打しつつ丸一日ルート工作に費やし、悪絶きわまりなしと述べた難所である。そこをわが市川は小原に確保させ、フリークライミングで登ったのである。その上彼は頂上までの全ピッチを終始トップでピッケルを振り続けた。まさに鉄人とは、この男を指していう言葉である。苦闘すること実に五時間半、ついに彼はこのガリーを抜け出て頂上稜線に立った。以下の記述は、現地で彼がしたためた手記にゆずる。

《登頂手記》

五月十八日、目覚し時計に起されるまでもなく、午前二時少し前に目を醒す。空は星が輝いて快晴であるが、かなりの風がC6をばたつかせていた。酸素を吸いながら小原が炊事、私が登攀用具の準備を進める。空の白みかける頃になっても風はやまない。午前五時、意を決してC6を後にする。

酸素筒各自が一本、登攀用具、食糧などを分担して背負い、出発時より毎分一リットルの酸素を吸って行動する。まだ暁暗に包まれたC6前の雪壁を強風にあおられ乍ら一歩、一歩と苦しい登高が始る。一昨日丸一日を要した頂上岩壁の下まで、二

時間で到着する。固定綱の威力を思い知る。ここから先は未知のルートである。

雪のルンゼを目がけて八〇メートル、トラバース気味に登る。いよいよ頂上岩壁の中心に入った。氷雪のルンゼを一歩、一歩とピッケルを振って足場を刻む。酸素が稀薄で苦しい登高が何時間も続く。風は相変らず強い。ルンゼに集る塵雪崩は吹上げられて我々に吹きつける有様。このルンゼを七ピッチ、二五〇メートルほど登って行くと岩壁帯に突当る。微妙なバランスで一ピッチ約四十メートルを登り、岩壁帯を越えて、遂に頂上稜線に立った。風はますます強く、バランスが崩れそうで非常に緊張する。目の前に三角形の雪のピークが見える。あそこまで行けば先の見通しもつくだろうと約一時間頑張る。そこへ到着すると、同様なピークがまた先に見える。とにかく頑張り続ける以外に方法はない。足場を切っては一歩を進め、一歩進めては呼吸を整えてまた足場を切る。際限のない苦しい前進である。

ピークの手前で今日初めて時間を見る。午後四時近い。強風と場所が無いため、今朝の出発以来休憩はもちろん、食物飲料を何も口にしていない。酸素マスクをしているため、小原とも一言も話をしていない。そこで雪面を削り取って荷物を置く場所を作り、立ったままで紅茶と水ヨウカンを流し込む。頂上までまだ一時間はかかるだろう。帰りのことを考えると、大部分が固定綱が無くて不安であるが天候は強風の割に雪の降る気配はない。自分の心に「前進あるのみ」と決心する。小原は荷物の軽くなることに魅力を感じて、酸素筒（約七キロ）を置いて出発する。

ピークの上に顔を出すと、身体を剝がされそうな強風にあおられた。しかしそこに見えたものは屏風のように左右のそげおちた雪のナイフリッジと三つのピークであった。手前から十メートル先、二十メートル先にそれぞれのピークがある。その一番奥が、天空に聳え立って雪煙を吹上げるジャヌーであった。思わず後の小原に酸素マスクの下から「頂上はそこだぞ！」と声をかけた。

ナイフリッジに跨がり、左右の足をそれぞれ南面と北面の雪壁にがっちり喰い込ませて、右手のピッケルと左手のアイスバイルを交互に刺し込んで前進する。喜びの瞬間を目前にして苦しくもどかしい登攀を続ける。五メートル、三メートル、二メートル、一メートル、そして遂に絶頂に立った。時に午後五時五分。

この登攀を後から小原が八ミリの映画に収めた。スチールカメラは寒さのため、シャッターが作動せず非常に残念であった。続いて小原も絶頂に上り、「もう登らなくても良いんだぞ」と身体を抱き合って安堵と感激を味う。足下を見れば、南面・北面共に二〇〇〇メートル以上もスッパリと切れ落ちる氷の絶壁で、恐ろしい高度感である。西の雲海上ではエベレスト、ロー

ツェ、マカルーに陽が落ち始め、東には至近のカンチェンジュンガが赤く夕陽に染っている。雲海が乱れ始め、ガスが下から上って来る。すばらしいヒマラヤの夕景がそこにはあった。

夕闇に追われて五時四十分、頂上を後にする。幸いにも風は弱くなってきた。不確実な支点を頼りに下らざるを得ないため、滑落すると二人とも浚われるおそれがある。事故は降り路で起し勝ちなものである。とにかく時間はかかってもよい、慎重に注意してゆこうとお互にいましめ合う。そういうことで、明るいうちに固定綱までたどり着くことは不可能となった。ヘッドランプをつけて、登りのステップを頼りに休まず降り続ける。午後八時、毎分一リットルの酸素も遂に切れた。C4に終始明りを認め、小原と私を見守る仲間の姿を思い浮べて元気づけられる。

午後九時三十分、頂上岩壁帯を無事降り終え、固定綱にたどり着く。このテラスで、事故の不安から解放され、紅茶で喉を潤しながら心の安らぐ休憩をとった。橋村、山田の第二次攻撃のために、ハーケン・カラビナをここへデポする。

固定綱に入って心も軽く岩壁と氷雪の斜面を一気に下る。アイゼンをきしませながら、待望の第六キャンプに帰着した。午後十時四十五分、星が皎く輝いていた。橋村と山田に暖く迎えられ、安心感に満たされるのを感じた。

勝利か敗北か。引分けということのない山の世界はきびしい。その中にあっても、ジャヌーはあまりにも厳しく恐ろしい山であった。度重なる事故、気力を打ちひしぐ諸々の悪条件が何回我々を圧倒しそうになったことか。これらを克服して、死闘の末にかちとった頂上は、全隊の終始一貫する敢闘とシェルパの協力の上に立ってはじめて掴むことが出来た貴重な成功である。登頂の喜びを、我々を支えたすべての人々と分ち合いたい。重ねていう。これはチームの勝利である。

一九七四年五月二十一日

ベース・キャンプにて　　市川章弘記

橋村、山田は、C6補給のニマ・テンジン、ペンバ・ツェリン、ダジの三名とともにC5を出発し、午後三時半C6へ入る。ニマ・テンジンに対し、シェルパ三名は何があろうと、C6からの連絡があるまではC5で待機して非常事態に備える様指示する。明日の頂上攻撃の準備を終えて、市川、小原の帰着を待つ。頂上岩壁を、夕闇に包まれるまで凝視するが、人影は一切見当らない。「市川達は全力をしぼって突込んだ!!」と直感する。山田も同感だという。種々な場合を想定して、対策を話し合う。

㈠　遭難した場合。頂上岩壁より上でやられていれば、助けに行くと確実に共倒れになるから、我々が頂上攻撃を強行する。頂上岩壁より下でやられておれば、これを助けた後、頂上

攻撃をする。いずれにせよ、攻撃のつもりで出動すれば救助も可能である。なお、夜間にこの困難な場所での救助は不可能であるから、何があろうと出動しない。

㈡ 無事帰着したが、頂上へ達していない時は（彼の性質上、頂上へ立たずに引き返すとは考えられないが）何をおいても第二次攻撃を強行する。

㈢ 登頂成功した場合。彼等の話をきいた上で、第二次攻撃をやる、やらぬを決める。

以上三点を明らかにしたら、気持がスッキリしたので、夕食をとって寝ることにする。事態がどの方向に進展しても、結局C6の二人がゆっくり休んで体力を温存しておくことが、実質的には最も重要と考えたからである。帰着した場合を考え、夕食を二人前用意した。早々に寝ようとして、酸素の準備を整え、念のためベンチレーターから凝視すると、降る様な星の光に交って、頂上岩壁上部でライトらしい物が見える。早速C4川瀬に交信し、双眼鏡で確認を頼む。やはり彼等が下っているという。C5からもライトを点滅しつづけると、心なしか点滅応答する様だ。いずれにせよ、そのようなことばかり続けていると消耗して了うので、彼らの無事帰着を祈って寝ることにする。

やがてC4川瀬から交信があり、救助のため、温い飲物などをもって出動せよという。先程の決定にてらして、その無意味、有害さを説明し、C6が力を温存するのがこの際の最上策なのでこれから寝る。必要あれば当方から交信するのでC4はスイッチオンで一晩中待機、観察を続ける様に指示し、無線機を切り、七時半就寝する。

人声と、アイゼンのきしむ音にハッと我にかえり、山田を叩き起す。市川と小原が戻って来たのだ。私のローレックス・オイスターは十時四十五分を指していた。嬉しさがこみ上げ、まともな会話にならない。何はともあれ二人を天幕に迎え入れ、用意してあったテルモスの紅茶・オバルチン等を飲ませる。

登頂の労をねぎらい、食事の用意をしながらも、待ち侘びている各キャンプに朗報を伝える。ついに永い永い苦闘はむくわれたのだ。隊員、シェルパの誰彼の嬉しそうな顔、在京本部、学園、先輩、友人、家族等我々を支えた人々の顔が目に浮ぶ。

市川は疲れ果てており、食物もオバルチンも喉を通らない。紅茶だけだ。その点小原は割に元気で、パクパクと何でも食べる。市川より十歳若いのと、信頼する先輩について行った気楽さからか。とにかく対照的であった。

攻撃の実状を二人から詳しく聴取し、状勢を再分析した結果、第二次攻撃は中止したい旨橋村の考えをいうと、山田が強く異をとなえる。可能性と自信があるのに引き下るのは不本意との意見である。その口惜しさはクライマーとしての橋村も痛感している。しかし

㈠ 本日の攻撃でも、天候が悪化すれば生還の可否は楽観で

きないことを市川は指摘している。ジャヌーの天候のパターンと統計は、明日が良いという保証を何一つ与えない。

㈡ C6で好天待ちするだけの補給はもはや期待できない状勢にある。市川達はバテドーシ病にやられており、彼等のサポートも期待できない。

㈢ 一隊が頂上をとった現在、長く延び切った兵站線を苦渋と恐怖に耐えて確保してきた各キャンプ、特にシェルパは、これ以上の遅延に耐えられない精神力の限度に来ている。

したがってこれ以上続行しない方が良い。山田は、不満は残るが、橋村がそう思うなら止むなく従うということで、渋々中止を受入れた。第二次攻撃中止及び明日下山の指示を各キャンプに伝える。

五月十九日、皮肉にもまた快晴に恵まれた。しかし午後は雪が来た。本日はC4まで徹収下山する予定を各キャンプに伝え、ゆっくり下山にかかる。各キャンプでもあわただしい撤収活動が開始された。C5ではシェルパたちがおめでとうをいって嬉しげに迎えてくれる。残念ながら酸素は撤収し切れず、天幕のみとする（C6は天幕も放棄した）。川瀬の待つC4へ下り、久しぶりに握手する。皆の顔が、登頂の喜びと、苦しい戦いから解放される安堵感で晴々としている。

なおテンジンは吾妻の指揮で昨日BCへ安着したことを知らされ、登頂と救助という、サーブの本義は二つながらに貫かれたことを、満ち足りて実感する。賑やかな談笑の声が、夜遅くまで続いた。

五月二十日、各キャンプはBCめがけて撤収活動を強行する。C4は川瀬以下四名の隊員、ニマ・テンジン以下のシェルパ合計十名の大人数が、固定綱に数珠つなぎに入って下って行く様は壮観である。C3に下りると、天幕は跡形もなく撤収されており、宮崎と二人のシェルパが我々の到着を待っていた。C2でさらに十人以上のシェルパ・ローカルを併せ、C1では下から撤収に来たローカルを入れて合計四十名近い大行列がヤマタリ氷河をBCへ凱旋行進した。

BC手前でドクター、吾妻、リエゾンがうまいにぎり飯をもって心からの出迎えをして呉れ、まずいインスタント食品にあきあきしていた我々は、むさぼり食った。

夜は大キャンプファイヤーがあかあかと燃えて大御馳走が並び、とっておきのビールやウィスキーが盛んに呑み交された。祝宴の喚声と、シェルパの踊る歌声が、いつまでもいつまでも夜のヤマタリ氷河にこだましていた。

九、結　語

ジャヌーとの闘いは、苦しい長丁場であった。私達の立てた作戦計画は、その都度ジャヌーの恐怖に満ちた報復に手きびしく打ちのめされ、ボロボロに砕け散った。カルマが、長沼が、

そしてテンジンが次々と不運なめぐり合せから、戦列を離脱してゆき、何度も何度も窮地に立たされた。打ちのめされ、疲労困憊しながらも最後まで私達を支えたものは、登山家の意地と、自分の技術への確信と、仲間への信頼感であった。

個性が強く、まとまりにくい成城岳人が、難事に当ってよく結束してその持場に全力を尽したのは、一人一人が戦う相手の強大さを正当に認識して、これ以外に方法がないと悟ったからである。

ジャヌーの様な山は、全隊が一致協力して当らないとなかなか落ちない。それに加えて、個人個人の登攀技術と執念が最後には物をいうのである。

当初は全員による登頂を希望し、計画しながら、その点では不本意きわまる結果に終った。その口惜しさは正直にいって今でも残っている。私たちは初遠征ということで、ヒマラヤに不慣れな点、計画の不行届の点は批判をまぬがれないだろう。

それにもかかわらず、私たちは今みんなが幸福であり、おたがいの友情をよりいっそう深め得たと信じている。それは、皆が、ジャヌーという登山家の桧舞台で、持てる力と人間性を出しつくして思う存分闘ったからであると思う。

この登山の想い出は、私達の人生に宝石のような高貴ですがすがしい光を与えて呉れた。この光は、年月の経過によって磨滅風化することのない共有の精神財産として、一生われわれの心の中に輝き続けることであろう。

カンバチェン（一九七三年秋）

山野井武夫

はじめに

立教大学建学百年、山岳部創立五十年が、一九七四年にあたる。この機会に八千メートル近い山へ登りたく六九年からカラコルム、ガルワール、ヒンズークシュと登山許可を得るべく努力したが、実らぬままに一九七三年が来てしまった。新年早々カンチェンジンガ山群のカンバチェン峰（七九〇二メートル）が、解禁になるとの情報に各方面の協力を得て、急拠申請を出したが、なかなか返事が来なかった。

七四年春はポーランド、秋はユーゴスラビアに許可が出ても連絡がない。これは駄目だという説と、七三年秋に許可するという説が出て判断出来ず、当って砕けよと、四月に寺島義雄がカトマンズに飛び、直接意向を聞いたところ、すでに立教大学に七三年秋の許可が内定し、六月一日正式発表とのことであった。未登の高峰にむかうよろこびに、準備は一挙に進められた。

隊員の選考、登攀計画の見直し、資金、物資の調達、輸送、梱包のチェック、すべてを七月上旬に完了させねばならない。五月に、藤門弘が現地にむかい、正式許可の入手、シェルパの予約、現地調達物資の購入等をおこなう一方、登頂を主眼に六月上旬、酒井隊長以下の隊員が確定し、医師は、慈恵医大の長尾先生にお願いして、山にも、本業にも達者な、横山誠司先生の参加が得られ、シェルパは、経験を買って、六五年ユーゴ隊に参加したカルマをサーダーに、藤門が現地で仮契約をすませ、こうして隊の構成がととのった。許可がおりてから出発まで時間がなく、荷物は全部空輸することとなったが、梱包、滞在等の間接費が、はぶけるため、費用はかさまなかった。隊を二分し、先発隊は、BCまでの荷物の輸送を中心に、ダランでキャラバンを編成し、グンサをへて、九月五日までに、ラムタン氷河の四七〇〇メートル付近にBCを建設し、本隊は、九月九日までにBC入り、そして先発隊と合流するという予定をたてた。先発隊は、七月十八日、寺島、牛窪、藤門、宮田、岩永の五名、本隊は、八月十三日、酒井隊長、山野井、大倉、石塚、市川、

横山ドクター、大沢の七名で、羽田を出発カトマンズに向った。

〔隊の構成〕

隊　長　酒井吉国（六十三歳）

登攀隊長　山野井武夫（三十九歳）

医　師　横山誠司（二十七歳）

隊　員　大倉昌身（三十三歳）寺島義雄（三十二歳）石塚誠之輔（三十三歳）牛窪光政（二十九歳、食糧）藤門弘（二十七歳、マネージャー）市川隆弘（二十七歳、食糧）宮田光雄（二十四歳、装備・酸素）岩永基文（二十四歳）大沢邦雄（五十八歳、特別参加画家）

〔リエゾン・オフィサ〕グルン（三十四歳）

〔サーダー〕カルマ（三十六歳、タクシンド）

〔シェルパ〕アガティ（二十五歳、タクシンド）ミンマ・テイジン（三十一歳、タミ）ペマ（二十七歳、タクシンド）ハクパ（二十五歳、パンボチエ）テンジン（三十八歳、ナムチェ）アン・ハクバ（二十九歳、クムジマン）ペンバ・ツェリン（二十四歳、ナムチェ）パサンダワー（二十八歳、ジュンベシ）オンチェー（二十五歳、ジュンベシ）アンナムギャ（三十二歳、ナムチェ）

〔ローカル・シェルパ〕サンゲ（三十二歳、ジュンベシ）カミ（二十歳、ナムチェ）ダルヒダ（二十一歳、ナムチェ）ノルケ（三十四歳、ナムチェ）ナムカ（三十四歳、パンボチェ）

〔コック〕パサン・ツェリン（二十五歳、ジュンベシ）

キャラバン

先発隊はカトマンズでの煩雑な用事をすませ、約七トンの荷をトラック、空輸と乗りついで、ダーランに集積し、シェルパ、ポーター等二百六十名によるキャラバンが出発出来たのは、八月七日であった。インド平原につづく亜熱帯の猛暑と、ダンクタまでのアップダウンにしごかれ、大きな尾根道をカンチェンジュンガ山群にむかって進む。八月九日、ヒレでポーターの賃上げストや、八月十七日、タプレジュンの二日先で吊橋が切れてポーターの死傷などのアクシデントがあったが、八月三十日、ラムタン氷河四七五〇メートルの地点に到着、BCを建設することができた。

本隊は、ダーランを八月十九日、隊員、シェルパ、ポーター二十六名で出発し、ドバンからタムール河沿いに進んで、九月四日、BCにて先発と合流した。両隊とも猛暑やヒルにやられながらも、キャラバンを満喫しつつ、ラムタンまで来たので、このBCからの眺望、正面のカンバチェンの偉容に一入感激した。先発はすでにユーゴ隊のBC跡までポーターを使っての荷揚げと、五四〇〇メートルまでの試登を行なっていった。

C2まで

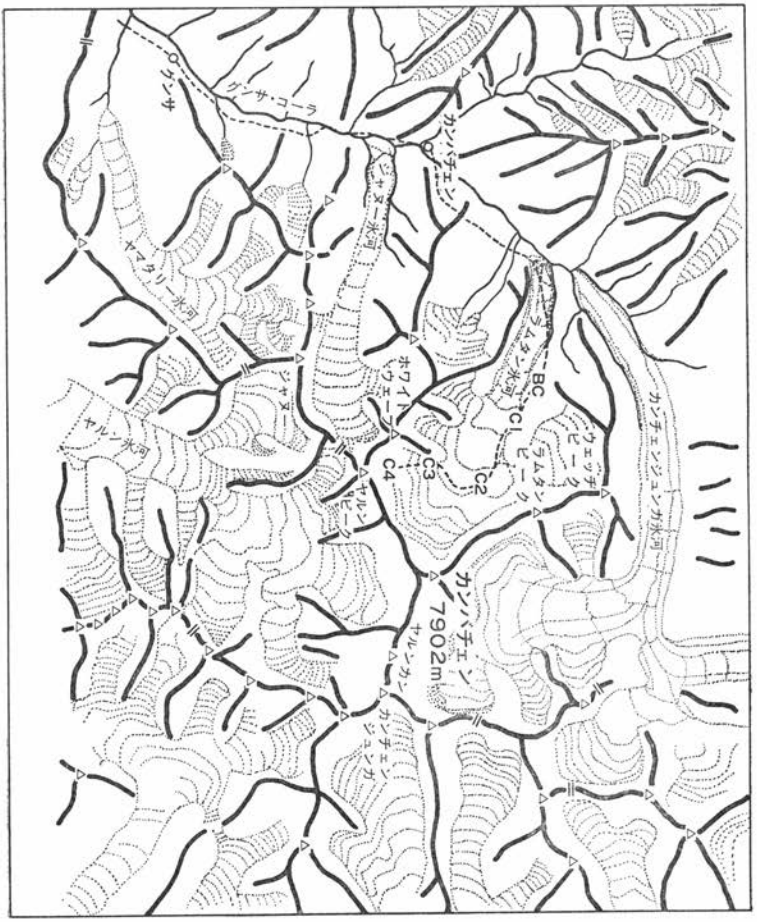
ラムタンの谷から登るのが一番可能性がある。この谷からの計画では、カンバチェンをとりまく七〇〇〇メートル付近の中段岩壁をどう越えるかにより、①右ホワイトウェーブ側、②中央、③左の三ルートが考えられており、いずれのルートも約七〇〇〇メートルまでは、高度の技術が必要とされ、雪崩の危険がともなうものと見、前進キャンプは、六カ所まで出せる、七千メートルに到達後は、酸素に余裕を持たせ、雪の状態次第ではヤルンピークからのリッジ通しに行くことも考えていた。BCから望見したかぎりでは左、正面の二ルートとも、雪崩と岩壁部分の突破不可能と判断、右、ホワイトウェーブのコルに出、ドームを越え、ヤルンピーク下プラトーに出るルートを採用した。ルートはまず、谷の真中を目がけて、ラムタン下部をトラバース、四八〇〇メートルのユーゴBC跡（DC）をへて、五二〇〇メートルにC1を建設、C2は中段岩壁の雪崩をおそれてずっと右にまわり、クレバスとセラックスの迷路に約三〇〇メートルほどのロープを固定し、ホワイトウェーブ下段の大雪原に出て、C2五五〇〇メートルを建設、高度順化のため、隊長をのぞく全員が交互に宿泊、九月十三日までに、第一段階を終了した。これまでは天気も比較的よく、ドクターの健康診断でも全員快調、荷揚げ、補給消費、いずれも予定どおりであった。

C3、C4の建設

全員BCでの休養ののち、九月十五日から、次の段階へと計画は進む。ホワイトウェーブとのコルから、ヤルンピーク下のプラトーへ出て、ここに登頂の重要拠点たるべきC4を建設すること、六五〇〇メートルまでの高度順化がこの段階の中心である。それまでの気象状況から、第二段階は、九月二十五日ごろ終了し、九月末から、十月上旬に登頂を試みるとして、高所用品の荷揚確認に特に注意をさせた。

C2は文字どおり、ABCとなり、テント村が誕生、C3へは、大雪原を越え、雪崩道をさけながら、高度をかせぎ、六一〇〇メートルの地点で、氷壁に引っかかったような、十五坪ほどのテラスを見つけ、この付近で最も安全と判断し、少々せまいが、九月十八日、ここにキャンプを建設した。

九月二十日、C3のテント前に、二十メートルのロープを固定し、左にまき気味に氷壁を抜けると、複雑な斜面が展開する。ホワイトウェーブ、コル直下の氷壁のひだの中へ入ってしまっているのだ。左に大きくまわれば、急な斜面で、容易にコルまで達するのが、雪崩の直撃を受けデブリが散乱している。直上することにして、ワイヤーばしごロープをふるに使い、ルートを開拓し、ホワイトウェーブとのコル横、約三〇〇メートルの安全地帯に到達した。下から望見出来るドームは、ここから見ると、ジャヌー氷河とラムタン氷河を分つリッジとなり、すぐに消えて氷壁となっている。C3からここまでに手こずった


カンチェンジュンガ氷河
ウェッチ
ピーク
ラムタン
ピーク
BC
C1
C2
ラムタン氷河
カンバチェン
7902m
ヤルンカン
カンチェン
ジュンガ
C3
C4
ホワイト
ウェーブ
ヤルン
ピーク
カンバチェン
ジャヌー氷河
ジャヌー
ヤルン氷河
ヤマタリ氷河
グンサ・コーラ
グンサ

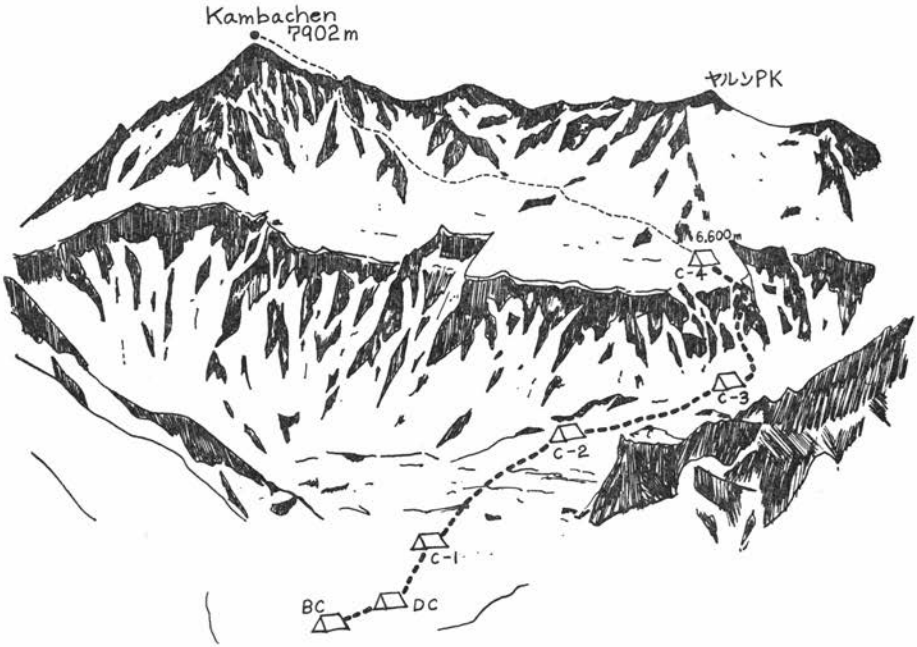
カンバチェン近傍図

が、この先は順調に進めると予測した。九月二十二日、C3を出発した宮田、岩永、ハクパ、ヒッピーの四名は初めてドームリッジを越え、六五〇〇メートルのヤルンピーク下のプラトーに到達した。BCの隊長はこの日、ウェッジとラムタンの間のモレンを四時間ほど登り、全ルートが観察出来る地点に達し、各パーティに声援を送り、宮田隊の報告を受けた。ドームリッジは意外に手強いコルから約二五〇メートルのトラバース、氷のまじった二〇〇メートルほどの壁は、全くベロンとしている。上部プラトーへ出ると一気に視界が開け、正面にヤルンピーク、左に比較的ゆるやかな側壁が雪をべっとりつけて、カンバチェンまで続いているとの報告である。二十三日、山野井、牛窪、寺島、藤門、シェルパ四名は、C4への荷揚げにむかった。将棋の駒と名づけた大氷柱が、ヤルンピーク下のプラトーにある。C3からの補給、ドームルートの維持、雪崩の安全性等を考え、この氷柱の下約一〇〇メートル、六六〇〇メートルの地点にC4を建設することとした。ここから上部は、どうしてもトラバスルートをとりたくなる。六五年のユーゴ隊は、この姿にだまされ、天候の激変で非常な危険におち入ったと、聞いている。まずヤルンピークの試登をおこない、リッジの状態を確認することとした。この日C3には、四張のテントが立ち、登頂用の資材は、集結を完了した。九月二十四、二十五、二十六の三日間、初めて本格的な降雪にぶつかった。各キャンプとも安全と思えるが、二十五、二十六日とC3からC2へ下降するパーティを送った。腰までのラッセルで下降に六時間を要してしまった。楽ではなかったが、後に生じた総退却に際して、この経験は大変役立つこととなった。九月三十日、隊長、ドクターをのぞく全隊員とシェルパ六名がC3に集まり、C4建設と最終行動の打合せを終え、登頂予定メンバーの発表をおこなった。ドクターもC4までの高度順化を早急におこない、登頂時七〇〇〇メートルぐらいまで活動出来る態勢を目指した。十月一日、山野井、寺島、岩永、シェルパ四名は、C4を建設、他が七名をサポートのため、C3を出発、C2からは、四名のシェルパがC3入りをすべく行動を開始したが、十時ごろから雪となり、午後からは、風も加わって来た。コルから上のルートはC4で確保する方が効率がよい。風雪の中を念のためプラトーに五〇メートルほどロープを延長固定し、午後二時、強引にC4（六六〇〇メートル）にテント二張を建設し、七人が入り、上部攻略の橋頭堡とした。C3完成から十二日を要してC4が建設された。明日はC4から五名逆ボッカ、C3から大挙してC4に入り、一気に強固なC4となるはずである。しかし、天候は悪化の一途をたどりつつあった。

C4よりの撤退

十月二日、各キャンプとも、前夜から除雪に追われており、テント場は盆地となって雪の捨て場もない。夕刻、C3付近に雪崩が発生するようになった。C3では、万一を考え全員完全装備で警戒し不寝番をおくこととした。十月三日、吹雪はおさまる様子もなく、朝六時の定時交信から、異常状況のためトラ

カンバチェン



ンシーバーを全開することとしBCの隊長、C4の山野井、C2のサーダーで情況分析が行なわれた。この深雪と吹雪の中での行動は、自殺行為に等しい一方、C3が雪崩に絶対安全と断言出来ない。C3が下れば、C4は維持出来ない。結局、山野井、岩永がC3を徹底持久で死守し、寺島とシェルパ四名で、下降、C3と合流、C2へ向うこととし、八時、下降を開始したが、この決定も束の間、C4下二十メートルほどのフィクスロープの始点が発見出来ずにトップのハクパが動いているうち、雪崩を発生させてしまった。四人で必死に引きもどそうとしているが、風雪と深雪のため自由にならない。過去のヒマラヤでの同じような状況の中での不幸な出来事がかけめぐる。水を作る燃料が持久のかぎとなるが、二日がやっとである。途中のデポはあてに出来ない。C4から全員全力で下降するしかなく、C3も大倉、市川が残り、C2への下降に移り、C2はこれをサポートすることとして、安全圏への脱出に全力を挙げることとした。雪崩により、固定ロープはちぎれ、標識は埋没し、視界はきかない。やっとの思いでC3に合流小憩ののち、C2へとむかい、午後五時半、倒れるようにC2へところがりこんだ。C3の大倉、市川はC4隊を収容すべく努力したが、わずか数十メートルの固定ロープまで一時間たっても到達出来ず、ヤッホーをくり返し、C4隊と合流後はC2への下降を先導した。一方、早期C3を出た石塚隊は、懸命の努力の末、午後二時半C2のサポート隊と合流、午後三時C2へ到着した。無事C2に集結出来たとはいえ、C4の下降、C3の雪崩の恐怖で

受けた隊員、シェルパのダメージは大きい。苦心の末、築いたC4も二昼夜しか維持出来なかった。しかし、まだまだやれる。取りあえず休養のため、十月四日、BCに下降し、再起をはかることとした。

ふたたびC2へ

C4より上で使用する器材は半分が雪崩に埋没し、失なわれていると見られるので、高所の長期滞在はむずかしい。このことからC3以上を強いシェルパと隊員中心の新しい登頂計画がねられ、隊長もC2へ入ることになり、六日から、再起の第一歩が始まった。八日夕方六時、C2の宮田と交信中雪崩だという悲鳴とともに、交信が途絶してしまった。絶望の中にBC、C1の交信がつづけられたが、やがてかすかにC1でC2の交信をキャッチした。ホワイトウェーブ側の氷塔が落ち、雪崩を誘発、C2八〇メートル手前でとまり、C2も爆風を受けたとのこと、安全と考えていったC2上部には、まだ三個ほどの氷塔があり、考え直さねばならない。またもや全員にショックを与えてしまった。C1に待機していた隊長には、安全確認までBCに定着してもらうこととして、九日、BCキーパーを残し、全員がC2に集結、C3の発掘も始められた。十日、十一日と雪が降りつづき雪崩の音は、激しさを加えるばかりである。

吹雪の中のビバーク

十月十二日、降雪は五十時間以上つづき、C2は盆地になって何も見えない。BCとの交信ではBCのテントは、有人三張を残し、すべて埋没破損したという。ここで下降しては再起不能である。苦しみ、迷った末、九時半、下降決定をして全員二十一名、ザイルパーティを組んでC2を出た。ロープも標識もすべて雪の下である。強いシェルパでトップを交代するが、胸までのラッセルに遅々として進まず、後続者は、風と雪でふるえている。惨めな撤退であった。C1まで通常一時間の下降だが、夕闇が迫っても、中間点までしか進めない。C2に引き返すことは、さらにむずかしい。雪は衰えない。小さな雪崩が足下から発生する。高度五三〇〇メートルで、夜のとばりにつつまれ、ついにビバークを決意し、わずかな安全地帯に縦穴を掘り、二十一名がうずくまった。十月に入ってからの天候はあまりにも異常である。十三日、寒い夜が明けた。降雪の一夜のため助かった。夜半から、天候が回復していたら、びしょぬれの身体が凍りつき凍死者が出たかも知れない。朝五時半、明るくなってまた、ラッセル行進が始まった。トップのシェルパの姿は全く雪の中である。八時間かかってC1付近に到達した。シェルパの勘で雪を掘っているうち、C1が出て来た。BCには全員無事を報じ食料持参のサポートを要請したところ、早朝、シェルパとコックがBCを出発しており、まもなくDCに到達するであろうと言う。しかし、ようやく合流出来たのは、夜八時半であった。平常一時間半のところ十時間もかかってしまったのだ。全員、サポート隊のジャガイモで腹ごしらえをし、ふたたび、BCへと下降をつづけた。このころから、さしも長時

間の降雪もやみ月光が淡くさして来、安否を気づかう隊長の迎えを受け、BCに全員がたどり着いた時は、午前零時をまわっていた。昨朝、C2を出て四十二時間ぶりで、無事をよろこびあったが、第二次登頂計画も失敗し、これからどうするか、そればかりが頭にあり、なかなか寝つかれなかった。

登高断念と撤収

各キャンプ地とルートを想定、必要な器材あらゆる条件を考えても、登頂は無理であろう。十月に入って荒れに荒れた天候もようやく回復してきた。だがもうおそいのだ。これから本当に必要になってくる器材の大半は、C3より上部で失なわれている。強気の隊長も駄目かという。しかし、このままで敗退は出来ない。C4を越え、何としても、七千メートル以上に到達したいと考えた。何よりもまず、C2、C3の現況を調査し、今後の行動を決することである。十月十六日、ラジオもモンスーンクリアを報じている。快晴の空に、カンバチェンの雪煙が長く、冬の訪れを告げている。岩永とシェルパ五名がC1にむかった。十七日、岩永隊は、三時間でC2入りをしたが、テントは埋没しており、夕刻までかかってようやく掘出し作業が完了、かろうじて宿泊出来たが、上部は楽観出来ないという。

十月十八日、大倉、牛窪はC1、市川、宮田はC2へ登るべく、BCを出発したが、C2隊の通信は、悪い状況ばかりである。岩永隊はC3のテラスに達したが、テントは積雪下にあり、どうしても発見出来ずにC2に引き返してきた。夕方六時の交信ではあまりにも状況悪く、隊長は撤退を指示した。十月十九日、市川、宮田、シェルパ二名でふたたびC3に登ったが、午後二時、三メートルの積雪下に一部を発見したとの通信が入った。十五坪ほどのテラスをくまなく掘り、二日目の午後、ようやく発見したのである。久しぶりにC2に隊員が大勢集まって、半つぶれのテントにぎゅうぎゅう詰めの一夜を明かした。二十日、全員でC3の発掘に登ったが、全部を回収することは、不可能である。酸素だけでも回収すべくテントを開き、長時間かけて大部分を持ち帰った。市川、宮田は、執念でC4へむかうという。風は強いがツェルトでビバークさせることにした。二十一日、ビバークした市川、宮田から、C4到達は、本日中は不可能と通信してきた。ふたたび、C4を確認することは出来ない。カメラも埋もれたまま放置せざるを得ない。そのため上部の写真もない。これで最後だ、完全にあきらめもついた。輝かしい期待と、気負いの中に築かれていった、ABCの最後の晩は、ただテントの中にいるだけという惨状であった。こんな姿を誰が想像したであろうか。

二十二日、下るときまったシェルパは別人のように働き、一気にBCへと下って行った。生涯ふたたびこないであろうチャンスを与えられながら。

七〇〇〇メートルまでも到達出来なかった。二度にわたり完膚なきまでに打ちのめされてしまった。何故。どうして、登れなかった？　これでよかったのだろうか。こだまのようにこの想念を断つことが出来ない。この日また、プタヒウンチュリの

日本隊三名の死亡をネパール放送が伝えた。われわれも一歩誤れば……。無事故をせめてもの慰めとしてあきらめ、全員グンサに集結出来たのは、十月二十六日であった。

ポーランドからの手紙

一九七四年五月二十六日、ポーランド隊は、カンバチェンの登頂に成功した。私たちは登れなかった。この差は絶対である。苦労して建設したC4だったが、二晩しか維持出来ず、カメラもシュラフもテントに残して下降し、ふたたびC4に到達出来ずに貴重品を失ってしまった。ヤルン・カンの石坂氏はカンバチェンの上部をトラバースするポーランド隊の姿を、下の谷から望見したと私に教えてくれた。同じルートをたどったにちがいない。目を閉じると、C4からの情景があざやかに想いおこされる。彼らはどうしただろう。

七四年末、思いがけずポーランド隊から一通の手紙を受けとった。ドームを越え、プラトーへ出て、少し凍って、なかば埋まった日本隊のテントを発見した。その中にニコンカメラ、と撮影済みのフィルムがあり、彼らは本国に持ち帰り、現像の後、フィルムを送ってくれた。彼らの登頂の写真も同封してある。二度と手に入れられないとあきらめていた高所写真である。カメラは、どうしたらよいか、とも言ってきている。もちろん、彼らにプレゼントしたい。

私たちはさっそく礼状を出し、心から彼らの登頂を祝うことが出来た。Poland illustrated magazine によれば、BCを四八五〇メートルに、C1を五四〇〇メートルに、C2を五八〇〇メートルに設け、七一〇〇、七三〇〇、七四五〇メートルにビバークして登頂しており、そのスタミナと気力は敬服に価する。彼等もやはりC2、C4間で手こずったらしい、いずれにもせよ、私たちの貴重な資料はポーランド隊により、山の友情と一緒に、私たちの手に届けられた。

何故登れなかったか。最良の気象に最高のコンディションでむかえば、よほど悪いルートでないかぎり登れる。私たちは寒さを恐れるあまり、気象の充分な把握もせぬまま、モンスーンの明けやらぬ、一番不安定な気象の時に、一番雪崩に対し弱い場所にいた。

充分に高度順化をしておきたい。プラトーへ早く出ておきたい。あせりも加わり、雪の不安定な時に上部にルートを進め、風雪と雪崩に、大半の高所器材を失ってしまって、モンスーン明けの好天が到来した時には、器材、気力、体力を失って敗退したのである。科学的な気象の把握。あせらず、おごらず、冷静に駒を進める態度、一歩一歩、科学的裏付けと数理にもとづいた登山をおこなうこと。要約すれば、ヒマラヤ登山のセオリーにまったく忠実に登ることに欠けていたと反省せざる得ない。おわりに、本登山に対し、ネパール政府、ランジャン氏、宮原氏、日本山岳会、毎日新聞社等関係の皆様方にお礼を申し上げ、報告を終えたい。

Ｃ２とＣ３の間から見たカンバチェン

C４よりジャヌーを望む

C４より見たホワイト・ウェーブ

マナスルからヤルン・カンまで

石坂昭二郎

一九七四年春のヤルン・カンの帰途、私は長い間あこがれていた、シェルパの故郷、クンブ地方に旅する機会をもった。

六月二十八日の午後、私は心はずませて、シャンボチェの丘（三八六〇メートル）にある、宮原ホテルからの坂道をくだっていった。昼頃からわき出したガスが、緑のジャガイモ畠を前面に、クンビラの南面にはりついた、八十戸ほどのクムジュン（三七九〇メートル）の部落をシャングリラのように、ひときわ美しく浮き上がらせていた。一九五三年のマナスル、一九六二年のダウラギリ一周の旅で一諸だったアン・テンバは、部落中央のゴンバに近く、この辺一帯に見られる、二階建の長屋の一軒に小ぎれいに住まっていた。丁度クムジュン、クンデの「ドゥムジェ」のお祭りが明日から五日間行なわれるとあって、ゴンバの中庭の壁の補修や、シートの屋根張でシェルパたちはいそがしくたち働いていた。近年はこのお祭も春の遠征隊に参加したシェルパが帰ってきてからということでこの時期になったという。わがヤルン・カンのシェルパもミンマは元気に帰りついており、アン・ダワやナムカも一両日中には到着するだろうということだ。アン・テンバの家の二階の居間には、シェルパやチベッタンの家独特の、ピカピカにみがかれ

た真鍮の大きな水がめが六、七個も並び、置物としてみたてても立派なものである。この水がめもエドモンド・ヒラリー卿が部落に二ヵ所水道を引いてくれたので、現在は一、二個しか使用していないという。彼の奥さんは、一九五五年のカンチェンジュンガ隊のサーダーをつとめたダワ・テンジンの娘で、息子が二人いて、長男は現在カトマンズのバラージュにあるバナスタリー・ハイスクールで寄宿生活をして勉学中であり、下の息子は小学校の高学年生ぐらいであろうか、クムジュンのヒラリー・スクールに通っている、元気な子供であった。おたがい、若干頭はうすくなったが、顔つきはどうもあまり変りばえしないらしく、ぼそぼそと話し始めると、五三年や六二年のことがまるで昨日のことのように思えて、何となくいつも会っているような気持で、自然に話に入ってゆけたのも、何とも不思議なことであった。

ヤルン・カン登山では当初サーダーとしてアン・テンバを考えていた。私も六二年以来、山らしい山に登っていないし、彼にしたって宮原巍あたりからきくところによると、最近はもっぱらトレッキング・サーダーのようだ。にあいじゃないかと思っていた。私は自分が語学に弱くて若干失語症気味であるところから、ペラペラやる人間には生理的にとっつきにくさをおぼえるのだが、それがシェルパであればなおさらであり、そんなところからもアン・テンバや、アン・ダワはぴったりなのだ。しかし、先発隊が、アン・テンバでは二十名のシェルパを集めきれないと判断したことや、彼の奥さんの反対もあって、アン・テンバももう一つ気乗りせず、結局のところ、第二次RCCのエベレスト隊の第二サーダーをつとめた、ソナム・ギャルツェンに変更したといういきさつがあった。シェルパ社会の変容のはげしさや、登山内容の変化などを伝える通信が、先発隊からとどいていたが、私は私で、山登りはそう変るはずもなかろうし、シェルパにしたって近頃さかんにいわれているように質が低下したというほどのこともあるまいと考えていた。

クムジュンからドゥド・コシにくだり、再びタンボチェに登りつめ、ややくだり気味にイムジャ・コーラを渡り、

谷沿いに高度をあげるとパンボチェである。ここには五三年のマナスルで、村山雅美さん付のシェルパであったアン・ノルブがいた。彼はちょうど結婚式のおよばれで村中の十二軒の家々を廻る途中であった。アン・テンバの奥さんの妹さんの旦那ウゲンの新築の家で、二十年ぶりのなつかしい再会となった彼もまた、マナスル当時と、全く変っていないといってよい顔であった。彼は七一年のガンガ・プルナの長野県山岳協会隊で両手の指七本を凍傷で失っていた。しかし身体全体でにこにこしている姿は昔そのままであり、英語も大してうまくなっていず、そんなことでサーダーにもならず、ハイ・シェルパとして活躍していた様子はいかにも彼らしいと思った。五三年マナスル当時、アン・テンバは私と同年の二十四歳。アン・ノルブ二十三歳。彼らは五月三十一日、ブンディ（二十八歳）、ラクパ（二十九歳）、ミンマ・シター（二十九歳）らとともにプラトーまで荷上げをしてくれた、マナスルのエース・シェルパであった。アン・ノルブが登りでへばり、アン・テンバが最後のつめでスリップし、降りでは、ラクパ、アン・ノルブが滑って山崎さんもまき込まれたが、山崎さんの頑張りで百メートルほどの滑落でことなきを得るなど、彼らにとっても、あのプラトーの登り降りはきびしいものであったろう。その後、アン・テンバ、アン・ノルブは一九五五年のエヴァンズのカンチェンジュンガで最終キャンプまで荷上げし、タイガーバッジをもらって男をあげていた。私はここクンブにきて、ダワ・テンジンの元気な様子を聞いたり、カンチェンジュンガと深くつながる彼らと再会し、同じく最終キャンプに荷上げしたタシには、エベレストの帰途、パンボチェ付近で出会ったりなど、全くヤルンの神々のお引合せのようなもので誠に楽しく、ありがたいことであった。カンチェンジュンガの最終キャンプまで荷上げしたシェルパが全員元気なのにひきかえ、わがマナスルは、彼ら二人のほかではグンディがシッキムのガントクで元気らしいが、ラクパはインドの山で遭難し、ミンマ・シターもダージリンで亡くなったらしい。その他の五三年のシェルパはサーダーのガルツェン（ミクチェン）三十九歳がダージリンで生活し、コックのパンシー（五十一歳）が死亡。全くの文盲で箱のナンバーも読めないところから、三田幸夫さんの個人装備を目方で判断して隊長の用をたしていたところ、たま

たま三田さんが何かの都合で中味を抜き取ったものだから、すっかり勘がくるってしまって、あちこちのボックスをさがしまわっていたという伝説的な男アン・ツェリン四号はいかにも彼らしく消息不明。このアン・ツェリンに見られるように当時のシェルパはほとんどが文盲だったと思われる。ネパール政府の識字率調査によっても、一九六一年で七パーセントであるから、五十三年当時はもっと低かったのではあるまいか。元気ものだったサルキ（三十四歳）はダージリンで死亡。ミンマ・ツェリン（二十六歳）はホテルのエベレストサイドに見渡せる緑の美しい南斜面のポルチェで健在。アン・ダワ（二十四歳）はガントクにいるが、ニマ・テンジンは五十九年のヒマルチュリで亡くなり、私付の一番若いシェルパ、ニマ・テンバ（二十歳）はインドで警察官をやっているらしい。キッパ（二十八歳）はジュンベシにいるらしいが、ワイフと子供を亡くし、さみしい日常のようだ。また「おばちゃん」の愛称で親しまれた、当時とても珍しい弁髪姿だったアン・ツェリン五号は、奥さんの故郷ナムルに在って、七十四年の春は女子マナスル隊、秋には青山学院のヒマルチュリ隊にコックとして参加して結構やっているらしい。十五名中死亡六名、不明一名という数字はまことに彼等の生活のきびしさを物語る。一方、わが十五名の隊員は「そいつはリーゾナブルだ」という声がきこえてくるような快男子高木正孝さんが多くのなぞを残して、一九六二年八月、南海の洋上で忽然と消息を絶った以外は、皆あちこち出かけているわりには生きながらえている。

一九五三年のシェルパは、ダージリンのヒマラヤン・クラブのヘンダーソン夫人の斡旋であったから、当時の彼らはネパール語以上に、ヒンドスタニーが得手であったと思われる。その頃の私たちの知識は、ネパールに対してあまりにもとぼしく、ネパールではインド語も通用しますよといったニュアンスの言葉をまに受けて、お茶の水の日本山岳会ルームで、一九五二年六月二十四日（火曜）から、毎週一回、ヒンドスタニーの講習を受けていた。谷口現吉さん、林和夫さん、秀島敏さんらのきもいりであり、講師は大戦末期、特務機関員として蒙古からチベットへと旅し、インド、ネパールにも足跡を印して、一九五〇年に帰国された西川一三さんであった。私たちはインド語などそっち

のけで、西川さんの素晴らしい旅行談にききほれたきらいはあったが、今思い出しても楽しい一齣であった。

ヒンドスタニーのほかに、ネパールにはネパール語があり、登山の舞台となるチベット人地帯には、チベッタンや、彼らの一種族であるシェルパが住み、その辺になると、ネパール語ではまるで役に立たず、ネパール政府派遣のリエゾン・オフィサーがだんだんと影がうすくなる事実などを見るにつけ、これはどうしてもシェルパ語か、チベット語を覚えなければと思っているうちに、あっという間に二十年が過ぎさったというのが実感である。河口慧海師や多田等観師らの遺産は仏教界にあって、登山界にはチベット語の出来る人はいなかったろう。チベット語とまでゆかずとも、ネパール語ひとつとっても、一九六〇年代の前半頃までは、日本に隊員でネパール語でシェルパや人夫と用をたせる人はいなかったのではなかろうか。私たちはそんな状態であったが、彼らの社会は大きく変りつつあった。その大きな要因は、ダライ・ラマのチベットからの亡命であろう。一九五九年ヒマルチュリの山中で聞いたこのニュースは、チベット人社会へのあこがれが並々でなかっただけに、強い衝撃となって、私の体内をカッとさせたことを思い出す。ネパール政府は国境地帯に兵や警官を送り、その整備につとめ、この頃から急速に普及しつつあった初等教育はチベット人地帯にまでおよび、一九六二年、そして七十四年と旅してみて、国境地帯でネパール語が通用する度合いは、五十三年を知る私にとっては、全く大きな驚きであった。

一九五八年秋のヒマルチュリ偵察。一九五九年春のヒマルチュリ登山の頃までは、ダージリン・シェルパの時代であり、エベレストのテンジン・ノルゲイが現役を引退したあと、一九五五年マカルー、一九五六年マナスルと、二つの八〇〇〇メートル峰の頂に立ったガルツェン・ノルブが、若手の一方の旗頭であった。彼自身は読み書きは出来なかったが、彼の秘書役をはたしていたコックのラクパ・テンジンは、英語の読み書き自在であり、一九五九年に彼がシェルパ見習いとしてつれてきた十八、九歳のシェルパは、皆いくらかは英語が話せ、簡単なものなら書いたり読んだりも出来る、気持のよい若者たちであった。一九五一年頃からテンジンなどが中心となって、ダージリン・シェル

パ社会の教育向上のために建てられた、シェルパの学校がその背景となったものであろうが、後年サーダーとして男をあげているカルマや、一九七〇年のエベレストで活躍したピンゾー、あるいはラクパ・ノルブ、また一九七〇年のマカルーに行ったダー・ノルブら、ガルツェン・ノルブの眼力の並々ならざるものを感ずるのである。ガルツェンは一九五九年当時、すでに功成り名遂げた身でありながら、なおすすんで頂への意欲を実行で示し、低地でのキャラバンにも、ポーターへの暖い心くばりを忘れないという誠にシェルパの中のシェルパであった。

それ故にこそ一九六一年五月十一日、ランタン・リルンで山に召されたのであろう。享年四十四歳。後年の彼は、ネパール政府のダージリン・シェルパ締め出しに胸を痛め、ダージリン・シェルパの期待を担って、彼の人柄で一つ一つ解決していた矢先であっただけに、心のこりであったろう。彼を失ってからのダージリン・シェルパはすっかり衰退し、ダージリンに住みついたものは他に職を求め、多くのシェルパはクンブに引き上げたものと思われる。

一九六二年頃からのヒマラヤ登山の主役をつとめることになった、クンブ・シェルパにとって、大きな役割をはたしたのが、エドモンド・ヒラリー卿が建設した学校であろう。一九六一年クムジュン、六十三年パンボチェとターミ、六十四年ジュンベシ、チャウンリ・カルカ、ナムチェ・バザールなどにそれぞれ出来上り、これらの学校を巣立ったシェルパたちが、正しいネパール語を話し、英語もやさしいものなら読み書き出来るほどに育っている事実は、今度のヤルン・カン登山隊でも充分なる恩恵を受けたことであり、初等教育の重要さをしみじみと感ずるのである。しかしその反面、アン・テンバの例に見られるごとく、サーダー級の子弟は、土地の学校を終えて、順次カトマンズの上級学校まで進学するようになり、いわゆる登山シェルパ稼業は、だんだんとなりてが少くなっていくというのもまた事実であろう。そんなことを考えると、シェルパは山で失ってはならないとしみじみと思う。エベレストにだけは行かせたくないといった、シェルパ・ニの声は、クムジュンやクンデで多く聞かされたことであった。

一方、おそまきながら日本側も一九六四年に日本・ネパール文化協会が発足し、一九六九年四月十六日からネパー

ル語講習会も開講した。この中心となったのは、ネパール人留学生のムクンド・シャルマ君と、東大の大学院で文化人類学を勉学中の俊才石井溥さんであった。丁度その頃第一回の日本文部省派遣留学生として、ネパールにあってグルン族の民族調査をやっていた黒田信一郎さんが七十年秋に帰国して、石井さんのあとを引き続がれ、その頃の生徒であった山形洋一さんが一ヵ年間の現地生活の成果をひっさげて帰国してから、短期の集中講座も開かれるようになり、一九七五年も目下山形さんのもとで第三回の集中講座が始められている。ネパールには国際言語研究学会（S・I・L）の会員鳥羽季義氏が研究に従事しておられ、そのお骨折で前記の諸氏や、日本ネパール協会前事務局長の田村真知子さんの手でS・I・Lのネパール会話読本の翻訳が進められ、近く出版の運びにいたったことは誠に喜ばしいことであるとともに、こうした成果が登山界の中にも広く浸透してゆくことを願っている。

最後に一九七四年のヤルン・カンについて簡単にふれよう。隊員十一名、シェルパ十五名、コック一名、キッチン・ボーイ二名、メール・ランナー二名、ポーター二百四十名、といった隊であり、酸素は川重四リットル・ボンベ（一五〇気圧）五十二本、アメリカ製五リットル・ボンベ（二〇〇気圧）十七本の計六十九本。食糧はベース・キャンプアップ五十日。装備は目新しいものなしといった、八五〇〇メートルを意欲的に狙う隊としては、ぎりぎりの人員、装備、そして食糧であったろう。これらをささえる基本的な考え方は、一九五九年のヒマルチュリ登山計画の延長線上にあり、いささか苦しまぎれの感はあったが、このメンバー、物量であっても、山の条件さえよければ何とか行けるという、最低ぎりぎりの線は確保出来たと思うし、もし条件が悪ければ途中で引き返すまでのことと思っていた。

二月十九日、東ネパールのダランバザールを出発した隊は、最終部落ヤンポデン（一七〇〇メートル）に三月四日に着いた。この付近は九ヵ村、人口一一〇〇人、百三十軒ほどの集落であり、内訳はボテイヤ四十五軒、グルン四十軒、ライ三十軒、リンブー十軒、カミ、ダマイ、チェトリバウン各一軒といったところであった。この辺一帯のパンチャ

ットの親方はバワニー・クマール・グルンという人で、人夫の入替に種々便宜をはかっていただいた。ここのナイケは、オム・プラカッシ・ライ君で、入山時はツェラムで引き上げたが、帰途にはBCまでやってきてくれたので大いに助かった。ここからBCまでの一週間行程は、完全な山中どまりとなり、人夫用の天幕や食糧なども隊で用意しなければならず、その上、最後の三日間は氷河上の行進となり、人夫も恐れをなしてか、チベッタンらの七十人ほどに減り、一日行程を何回も往復して荷を運び上げるという困難な旅となった。それでも三月二十一日、無事ヤルン氷河上にBC（五二〇〇メートル）を建設することが出来た。隊員は二十五日までに高度順化しながら順次集合した。二十七日、シェルパの儀式にのっとって安全祈願を行ない、二十八日から偵察行動に入った。私はその日コーナー台地にある松田隆雄さんのケルンにお参りして冥福を祈った。翌日はエヴァンズのBC跡に登り、一九〇五年に逝きしパーシの墓や、エヴァンズ隊で活躍したペミドウジェの墳墓に、先人の業績をしのんで深々と頭をさげた。

この山にたいして、私は新ルートからの登頂を考えていた。しかし、かすかなのぞみをもっていた南面ルンゼはあまりにもけわしく、五十五年のカンチェンジュンガ初登頂時のルートはいささか遠回りにすぎ、その上、上部には雪崩によるデブリのあとも見られ、結局七〇〇〇メートルぐらいまでの下部は京大ルートにしたがい、上部は新ルートを切り開きたいという意欲をもって、四月一日より本格的な登山活動にうつった。四月二日C1（五九五〇メートル）、十二日C2（六四五〇メートル）、二十日C3（七〇〇〇メートル）と順調にキャンプを進め、C4予定地までのルート工作と、荷上が予定量の半分位終了した五月一日に全員BCまで下って、最後の休養をとった。

五月四日、樋山、宗方の第一陣を先頭にいよいよ登頂態勢に入り、翌日は中山、福島の第二陣、六日には石坂、加藤、古畑の第三陣がそれぞれシェルパとともに行動を開始した。七日には登頂隊の平野、パサン、八日に最後をしめくくる三好、半谷が続いた。その頃になるとさすがのシェルパにも故障が出はじめ、BCで肺炎の療養中であったラクパ・ドルジェの容態がすぐれず、ずっと看護にあたっていた西川ドクターの判断で、若草の萠え始めたツェラム

（三八〇〇メートル）に収容するという活動も折りこまれていた。

上部では七日C4（七四五〇メートル）が建設され、翌日樋山、宗方がC5直下までのルート工作をした。九日は前夜の降雪で各キャンプ停滞したが、十日に中山、福島がC5までのザイルフィックスを完了し、いよいよ大詰めをむかえることとなった。十一日は七五〇〇メートル以上で強風が吹きあれ、加藤、古畑にひきいられたC5建設隊は何としても前進出来ず、途中に荷物をデポして引き返してしまった。当初八名を予定していた荷上隊のシェルパも日をへるにつれて高山病で三人脱落し、十二日は全く背水の陣であった。この日は幸いにも風はいくぶんおさまり、加藤、古畑の気力をふりしぼってのリードに、アン・ダワを筆頭とする、アン・カミ、ナワン・テーレ、アン・ニマ、ミンマのシェルパもみごとにこたえC5（七九五〇メートル）は成った。

十三日、昨夜C5で一夜を明かした加藤、ウォンゲルは風雪のやむのをまって、九時、上部のルート工作と酸素ボンベの荷上に出発し、十五時二十分、八一五〇メートル地点に達してボンベをデポし、十七時四十分C5に帰幕した。この日、登頂隊がC5入りし、いよいよ明日の好天を祈るばかりとなった。

十四日はすばらしい快晴に明けた。アタック隊は五時十分C5を出発し、昨日のデポ地に七時四十分に着く。予定より相当早い。ここでボンベを追加した登頂隊は前衛峰と主峰とのコルへ向ってトラバースを開始したが、どうしても通過出来るルートが見つからず、その上、十時頃には、C3で無線による指示をしていた私の視界も雲海がうばいさり、あとはただアタック隊員のねばり強い意志に期待するのみとなった。彼らはやむなく膝ぐらいのラッセルに悩まされながらも、やや斜め右へとじりじりと高度をかせぎ、十三時三十分、前衛峰の西側の意外に広いコルに相当消耗してたどりついた。心配していた前衛峰も北側の肩ごしに何とか行けそうだが、ラッセルは相変らずきびしい。彼らは勇気をふりしぼって前衛峰にいどみ、最後に細い雪稜をまたぐようにして雪の頂稜に立った。十五時五十五分であった。そこからヤルン・カンとの鞍部に降り、頂上まであと二、三時間はかかるだろう。とすると、とても明るい

うちにはC5まで帰りつけない。私は引き返すように指令した。

十六時三十分、下降を開始した彼らは途中で電池切れとなり、八〇〇〇メートル付近できびしい一夜を明すことになったが、無事生命をまっとうした。十五日、C5近くで古畑に迎えられた一行は、その日のうちに私の待つC3まで下山し、十七日までに全員BCに下った。

二十一日、少なくとも私たちのものとなった八四〇〇〇メートルの前衛峰に別れをつげ、帰途のキャラバンを開始した。私はグンサからカンチェンジュンガの北面に廻り、この大きな山塊に山旅の最後をつげて、六月九日、ダランバザールに全員無事帰着した。総費用は一八〇〇万円であった。

登山概要は以上のようなものである。結果的には京大が切り開いたルートを畏敬の念をもって後を追いながらも、なおとどかなかったというのが今度の山登りであったが、多くの先人の肩にのり、大きな舞台で、巨峰に飛び込んで行けた日々を幸せに思う。

マナスルからヤルン・カンまで、すばらしいシェルパやポーターに恵まれ、共々に何とかいのちを全う出来た幸運を、一人先に逝きしニマ・テンジンの霊に感謝と追悼の祈りを捧げたい。

日本大学ヤルン・カン登山隊

〔隊長〕 石坂昭二郎（四十五歳）〔隊員〕三好勝彦（三十歳）、加藤捷治（二十八歳）、古畑勇（二十八歳）、平野隆司（二十六歳）、樋山規夫（二十六歳）、中山昌之（二十七歳）、半谷伸俊（二十六歳）、西川正雄（二十七歳）、福島佑二（二十六歳）、宗方慎二（二十三歳）。

ダージリン国際登山家集会

——思い出の断片——

三田幸夫

一九七三年五月、インドのダージリンで行われた国際登山家集会（International Mountaineers' Meet, Darjeeling）は、一週間にわたって終始なごやかに進められた。各国の著名な登山家も多数参加し、場所がかつてのヒマラヤ登山隊の基地として知られたダージリンであり、時期も五月という暑くも寒くもない季節で、参集者はおたがいに面識はなくても名前は昔から知っていたという登山者が多かったので、たいへん楽しい集まりであった。

この企画の起りは、一九七一年の夏にさかのぼるが、インド側のギャンシン準将（一九六〇年のエベレスト隊長）、コリー中佐（一九六五年エベレスト隊長）らが、一九七三年の五月二十九日は、英国ハント隊の初登頂から二十周年になるので、これを記念して各国の連中に集まってもらい、友好を温めては如何といった提案を英国のジョン・ハント卿に申し送ったのにはじまる。

そしてインド登山財団（IMF）もこれを取り上げ、会長のサリン氏（前国防省次長）も公私熱心に応援することになった。そして各国の登山者宛に招待状が発送され、日本宛には植村、平林、伊藤、松浦、丹部、僕の六名に参加勧誘があったが、結局日本からは僕のほか、本会の丹部節雄理事、日本エベレスト隊の登頂者松浦輝夫君、それに山と渓谷社の川崎吉蔵君が取材のため参加した。

ダージリンで僕と丹部君のわりあてられたホテルはプランターズ・クラブになった。僕の部屋は二部屋つづきの奥で、それぞれベッドが二つ宛て用意されていた。バスは入口の部屋にあり、設備は万事質素だが、僕にとっては、ここでは一番豪華な

旧知のホテル・マウント・エベレストより気楽な毎日が送られるとも思った。

このホテルは正式名はダージリン・クラブで、英国のインド統治時代、周辺の茶園の経営者たちが造った木造二階造りの建物で、階段などみしみしきしむといった古いものだが、各国からの登山者たちにとっては、かえって親しみ深い、質素な山男向きの宿舎ともおもわれた。このクラブのことをかつてフランスのジャヌーの隊長ジャン・フランコが、ここでマカルーに登った英国の連中と合流して、豪勢な宴会をやった記述を思い出す。その宴会場がガランとした食堂で、到着の第一日目、一休みして僕が類を出した時はすでに一隅に二十名ほどのグループが大きな食卓を占領してにぎやかな食事が始まっていた。

ほかには二、三組の泊り客がいるきりで、僕はひとり真中辺の小さなテーブルについた。丹部君は翌日ネパールから駈けつけるということになっていた。

宿泊名簿を見ると、会議に参加する主な連中の三十名ほどがこのホテルにわりあてられている。そのなかには、名前だけは知っている人たちがかなりいる。面識のあるのは東京で会ったヒラリー、レビュファー、エルツォークといった人達である。

食堂のボーイたちと久しぶりにヒンドスタニーで話していると、だんだんなつかしいダージリンの思い出がよみがえってくる。僕が最後にダージリンにきたのは一九五七年だから、もう十三年も前のことになるが、ついこのあいだ来たばかりのような気もする。

ダージリンの町はほとんど変っていないが、在住の古い人たちは変った。各国の登山隊が世話になったヒマラヤン・クラブのヘンダーソン夫人は英国に引き上げていないし、テンジンの家に集まってもらった旧知のシェルパたちのなかでも、マナスルのギャルツェン・ノルブは今は亡く、フランスのアンナプルナや日本のマナスルで手柄をたてたサルキーも今はいない。英国のブルース将軍以来各国登山隊に可愛がられ、僕たちにもなじみの深かったパンシーも二年前に亡くなったという。

ただ一九五二年の日本のマナスル今西錦司隊、および五三年僕たち第一次隊のサーダーをやったギャルツェン・ミッチェンは健在で、年はとったが、日本の人たちのためにもう一度働きたいと言っていた。

ダージリン・シェルパは今なお各国の登山家たちからある程度高く評価されている。が、ほとんどが過去の存在となっている。そしてダージリンの登山学校が若いシェルパの養成を試みているが、これらのシェルパをネパール・ヒマラヤで雇用するとなると、ネパールのヒマラヤン・ソサエティーとのフリクションも問題になるだろう。この点、いい解決方法を研究する必要が残されていると思う。

このホテルでの二日目、隣りの部屋に新しい二人がやってきた。一人は山の映画で見たような人で、スイス人とばかり思っていたが、話をしているうちに、一九五三年の英国エベレスト隊のワイリーとグレゴリーだと解った。ワイリーとグレゴリーは同隊メンバーの選考委員をつとめ、五十七年にはロバーツとともにマチャプチャレの初登頂に成功している。グレゴリーはエベレストをふくめ英国の八つの大きな遠征登山に参加したヒマラヤのベテランで、数年前、上高地にもしばらく滞在した事があり、かなりの日本通である。二人とも隣り部屋同志なので、集会の期間中いつもいっしょになる機会が多かった。この二人のところに近くの部屋のハント卿夫妻もときどきやってくるので、自然いっしょに話しあう機会に恵まれた。

広い食堂の一隅にある大きな食卓は、日毎に賑かになっていった。その常連はスイスのエグラー夫妻、ランベール、ハーラー、ルシンガー。英国のハント夫妻、ボニントン、ワイリー、グレゴリー、ハウストン、ニュージランドのヒラリー夫妻。フランスのレビュファー夫妻、エルツォークと美しい女秘書、オーストリアのディレンファース、モラベック等々、諍々たる顔ぶれで、日本からは僕と丹部君。

スイスのディテール、デュナン、グンテン、ライスト、ドイツのバウアー、日本の松浦、川崎君たちは他のホテルに分宿、主催者側はサリン会長をはじめインド各地からのゲストをふくめ七十余名が別のホテルそれぞれ分散していた。

食卓での話題は、硬い山の話よりその時々の肩のこらないこぼれ話から仲間やシェルパの噂、世間話におよぶことが多かったようだ。僕とハントとの会話は、五十三年のエベレスト初登の報をマナスルのBCでキャッチし、ちょうどマナスルの頂を逸した直後で、翌年の再計画について話し合っていた時だったが、すぐポスト・ランナーに托してお祝いのメッセージをハントに送ったときのことから始まった。ハントもこのときのことはよく覚えていた。かたわらにいたグレゴリーも「いい話だったよ」と合槌を打っていた。ハントたちはネパールからシンガリラ、レンジを越えてやってきたとのことで、山稜のバンガロウはどうだったと聞くと、「たいへんな荒れかたで、昔の面影はない。それにしばらくジープを使ったが、あの稜線を飛ばすので生きた気持はなかった」とグレゴリーが大げさに説明してくれた。四十数年前、ヒマラヤポニーにまたがって、晴れた冬の日、一日中カンチ周辺の山々を眺めながら次のダーク・バンガロウに向う最高の旅を思い出した。昔の登山者たちにとって、ダージリンとシッキム、ネパールを結ぶこの高度一万フィートを上下する景色の好い長い往還は忘れがたい思い出の道となる

ことだろう。

一週間にわたる集会のプログラムは多彩で盛り沢山であった。主な講演、フィルムの映写などはほとんど毎日、国立登山学校（Himalayan Mountaineering Institute）の講堂で催された。

二日目、ハントがスライドを写しながら、英ソ・パミール合同登山（一九六三）について講演したあと、僕は「日本における山登りの歴史と現状」といった話をした。そのあとで持参した十六ミリのフィルム“Epic of Mt. Everest”を見せた。この時の模様を丹部君が帰国早々「山と渓谷」に寄せたが、そのリポートの一節を左に借用してみよう。

《お茶で一息いれてから、三田幸夫が、『日本登山界の現状』を簡単に報告したのち、日本より持参した“Epic of Mt. Everest, 1924”の映画（十二分）を映写した。それまで何となくざわついていた会場が、シンと静まってせき一つ聞えず、映画が終ってしばらくして、ほっと一息入れるとともに万雷の拍手がまきおこった。マロリーとアーヴィンの帰らざる出発を写したこの短いモノクロームの与えた印象は実に強烈であった。ジョン・ハントは直ちに立上って、皆に代って三田さんに感謝する。「私どもも、この映画のあることは聞いていた。しかし実際に見たのは今日が初めてであった。エベレストに挑戦した先輩のことを偲んで感慨無量の思いである（撮影者はノエル大佐であることが後刻判明した）」と、その感想をのべたことでもわかる》

演壇を下りると、僕は自分の席にもどり、すぐ隣りに坐っていたブリッグス夫妻に聞いた。僕の話は解ったでしょうか、と。夫妻は「一語々々よく解りましたよ」と手を握って喜んでくれた。

お世辞半分にしろそれを聞いて安心した。というのは、英語のあまりうまくない、それに発音の悪い僕が、この旅への出発直前、入れ歯を折って修理したばかりなので、大変気になっていたのだ。ブリッグス夫妻は日本の岳人にもなじみの深いヘンダーソン夫人（永年ダージリンのヒマラヤン・クラブの名誉書記を引受け、各国登山隊の世話に大変な努力を惜しまなかった）の親友で、ロンドンからわざわざこの集会に駈けつけていたのだ。

講演、討論、映画といった集まりのほか、毎日、お茶の会、晩餐会、コクテール・パーティ、遠足といったスケデュールの連続で、ゆっくり一人一人会話をかわす機会は身近かな人を除いて少なかった。が四日目のカリンポンへの遠足は楽しかった。三つのグループに分かれた一つの僕たちには、十人乗りの立派な大型ジープがわりあてられ、英国側はハント夫妻とグレゴリー、ワイリー、スイス側はエグラー、ランベール両夫妻、それに僕と丹部君。車内は雑談でにぎやかだった。その中心は、ホ

テルの食堂でもそうだったが、明るい朗らかなエグラー夫人だった。

カリンポンの丘の上の国営レスト・ハウスは、英国時代からの立派な石造りの建物で、全一行はその前庭の広い芝生に腰を下ろし、函詰の弁当をひらいてくつろいだ。

その夜、サリン氏の好意で僕たち日本人のためにバウワーとその一行を登山学校グレワール校長の瀟洒なバンガロウに招んでくれた。バウワーたちは、翌朝二時起きしてカシミヤに立つという忙がしい時間をさいて、九時きっちりに姿をあらわした。夫人、十五、六歳になる可愛い令息、若い後輩の山仲間たちをまじえての一時間ほどの歓談は、まことになごやかで楽しかった。

一九二九、三一年の、あのカンチェンジュンガへの執拗果敢な闘将の面影は失せ、白髪赭顔のバウワーはきわめて静かな老紳士であった。

後年、彼の家を訪ねた辰沼広吉君のこともよく覚えていて、日本に帰ったらドクターほか自分を知っている友人たちにくれぐれもよろしくと述べ、時にあなたはいくつになられるとの問いに、七十三と答えると、それでは私は三つ年上の兄貴ですよと優しくほほえんだ。

第一次大戦後、疲弊のどん底にあったドイツから、選りすぐった若い人たちを引きまわし、かずかずのみごとな記録を残した彼の偉業は、ヒマラヤ登山史上に燦然として永久に残るものである。僕の最も敬服していたこの人と短時間だったが親しく語り得たのは、この集会に参加して得た最高の思い出の一つとしてのこることだろう。

ゲストのなかに世界的なベスト・セラーとなった「チベットの七年」の著者ハインリッヒ・ハーラーがいた。集会の表面にはあまり出ない、控え目な存在だったが、僕たちは二回ほどゆっくり話しあう機会があった。ダージリンの代表的茶園とチベット難民自治センターに招ばれた時だった。二回ともチベット系の美しい婦人がホステス役で、いつもそうだったが、テンジン夫人はなかなか華やかな社交ぶりを発揮していた。チベット語が話せる機会が多くなったと見え、ハーラーはたいへん生き生きしてきたように思えた。僕たちはジープでもいっしょになり、いろいろとおもしろい話を聞いた。

僕は、近藤等君の訳書を何回か読んでいたので、ハーラー自身から聞く断片的な話もなかなか興味があった。インドの捕虜収容所から日本軍占領地区のビルマか支那に脱出しようとしていたため、日本語をずいぶん勉強したと語っていた。チベット難民自治センターでは、大勢の可愛い、チベット人の子供たちに迎えられ、水を得た魚のような嬉しそうな表情を浮べて、子供たちに話しかけていた。彼はチベットの方言は自分の右に出るものはいないだろうという自慢ぶりであった。彼はこの集会

が終り、ダラムサラ近郊に隠棲している前ダライラマに会いにいくことを楽しみにしていた。

集会の終った五月二十一日の朝は、なかなか忙がしかった。プランターズ・ホテル前の狭いテラスにはスーツケースをまとめた人たちが三々五々、車を待っている。他のホテルの人たちもわれわれの前を通りながら手を振っていく。顔なじみのシェルパたちが後から後からダージリン茶のお土産を抱えてさよならを言いにくる。しばらくの間は「また会いましょう」の声でにぎわった。だが、また会えるのはいつ、どこでだろう。でも僕は、ダージリンをいつかまた訪ねたい。

僕たち日本人には新しいベンツがわりあてられ、ディレンファースがいっしょになった。バラドクラの空港まで楽しい話が続いたが、彼はまた日本を訪ねたい、が今度は美しい風景の中で、山のことを忘れ、ゆっくりゴルフを楽しみたいと言っていた。そこで僕も下手な老ゴルファーだが、喜んでお伴をしましょうと手を握って再会を約した。

1973年5月1日，ダージリンにおける国際登山家集会にて
前列右より3人目，三田幸夫氏（デルフ・ライスト氏撮影）

当時の「坊主小屋」と石部幸弐一行を案内する瀬川栄吉，野村伊太郎，滝村耕平たち
（「黒部の山案人　下立村の人びと」参照）

小島烏水論待望

加納一郎

これまでもたびたび望月さんから「山岳」に原稿をかくようにすすめられていたが、いつもそれにおこたえできないできた。ほかの雑誌には、つまらぬものを書きちらしているくせに、「山岳」となると、どうしても今は自分の出る幕ではないという気がして、すすまなかったのである。若い人たちが、おおぜい発表の順をまっているにちがいないのに、何もしない者が、貴重な誌面をついやすのは、おこがましいと信じたからでもある。けんそんでも気どりでもなかった。

ところが、こんど名誉会員におされたのをしおに、またぜひ何か書けとのお手紙をいただいた。あいかわらずの不勉強で、何も持ちあわせはないけれども、こうなったら恥をさらすより仕方がない。望月さんの「山岳」の編集も、ずいぶん長いことになる。この骨の折れる仕事を、ご多忙の本職のほかに、かくも長期にわたってつづけられる御苦労はただごとではない。それにもかかわらず、いくたびか編集について愚見を申しのべた手前もある。こんどはそのおわびをもかねて、なにがしかの責をはたさねばならない。

名誉会員に推薦しますとのしらせが来たときには、ほんとうにびっくりした。まさに青天の霹靂であった。さきに永年会員になったときは、そのようなきまりがあると聞いていたので、まごまごしていると、そのあつかいをうけるハメになるかも知れぬと思ったことがある。だからいよいよその段になっても、これは五十年もつづけて会費をおさめて来たそのごほうびに、これからはただにしてやるとのありがたい思召しであろうと、すなおにおうけした。

しかしこんどはちがう。どんな規定があるのか知らぬが、と

にかく自分にはそんな資格はさらさらない。これといって会のためにお役に立ったためしは一度もない。関西支部ができた折に、理事の一人にくわえられたことがあるけれども特別に骨を折った覚えはない。中年から病身となって、ろくに山へは登っておらず、この山歴では今ならとても入会さえ許してもらえないだろう。当人はいくつになっても山がすきなことは間違いない。山登りの話をきいたり、本を読みあさるのが、いつまでもやめられずにうちすぎて来ただけのことである。いわば一介のやじうまである。弥次馬はやはりその他おおぜいのなかにいるのが一番よい。気もらくである。自分はとても名誉会員などいわれるがらではない。これは辞退せなあかんと思った。

ところで、好んで異をたて、人にさからうことをもってこころよしとする悪いくせがあった自分なのであるが、近ごろではとんと意気あがらず、いちずに我意をとおして人の気をそこねるような振舞いは、さしひかえておこうと思うようになった。これまでずいぶんと悪口雑言バリザンボウをほしいままにしてきたのだから、さだめし、あんなやつとのそしりもあったに違いない。そのなかをここまでとりはからって下さった方々のせっかくのご厚意にそむいてはならぬという気持がある。身分不相応だとはわかっていながら、正直いってその処遇に感激し、ご配慮をありがたいこととしみじみ思うのである。

日本山岳会にいれてもらったのは一九一八年、学生であった。紹介者は京都一中の金井千仞先生であった。松本出身の篤実な人で、その指導のもとに学校にはじめて山岳部ができ、わたしたちが最初の部員となり、日本アルプスへつれていってもらった。それ以来、京都一中の山岳部からは、おおくの有為な登山家、探検家が生れることになる。その人たちは、おおむね一中、三高、京大のいわゆるエリートコースをすすんだのであるが、わたしはそのがらではなかったので北大へ行き、そこで板倉勝宣君といっしょになるという幸運にめぐまれ、数しれず登山とスキーをともにした。

わたしの山への指向が不動のものになったのは行動の上では金井先生の指導と板倉君の影響であり、思索の上では小島烏水の「日本山水論」がはじまりであった。中学生のわたしは、「日本山水論」をいくたび読みかえしたことであろう。時には声をあげて。ついで「日本アルプス」全四巻がある。この時期はちょうど小島さんのもっとも油ののりきった時代と一致していたのではなかったかと思う。

シーズンごとに新らしい登山を敢行してあっといわせ、縦走形式をとりいれ、あるいは一山群に集中した踏査をつづける一方で、その文章の華麗さは、ひとり登山仲間といわず、文壇に異彩をはなつ発表が相ついだ。わたしはすっかり小島さんのとりこになって、その著作を追いもとめて、これに傾倒耽読したのである。

そのころの「山岳」は石崎光瑶とか富田渓仙とかいう、すぐれた画家の装画を表紙としたぶあついものが、年三回も刊行されて、それを手にするごとに強い刺激をうけ、何日も興奮状態におかれたことを忘れない。第十二年二、三号合本の小泉秀雄氏の「北海中央高地の登山」は身近かにあっただけに、もっとも深い感動をもって読みかえした。

このようにしてわたしは日本山岳会と小島烏水氏からはかり知れぬほどの大きな感化をうけたものであるが、東京には一ども住んだことがなく、近代アルピニズムの発祥の地ともいえる横浜とはまったく縁故がなかった。だから小島さんをはじめ山岳会のおえら方にはただの一ども面識をうる機会をもたずにすごした。ひとり武田久吉先生は一時、札幌に住まわれたのでお近づきになることができただけである。

そのうちに日本の登山界は岩登りと冬山登山の盛行期に入っていった。そして登山界の主流は山岳会をリードしていた人々の手から、学生登山者に次第に変ってしまった。「山岳」は往年の魅力を失ない、刊行も年一回となり、会を去る人も出るありさまであった。わたしにとっても「山岳」の記事は縁どおいものに感じられてきたのであるが、わたしはかつての恩義を思うと、会をはなれる気にはなれなかった。

山岳会は戦前、戦後の激動期にあたって、中央にあった人々は、その苦境をのりこえるのに一方ならぬ砕心をされたようであるが、わたしはいつも遠くにあって、その労を知らずにすごした。山岳会がわたしの前に、ふたたび心づよいものとしてうつるようになったのは、ヒマラヤ登山がわれわれにとって現実のものとなり、今まで横書きでしか読めなかった登山記が、日本文オリジナルで読める時代が来たからである。望月さんの「山岳」編集は、こうした貴重な記事のあつかいに腕をふるわれたのである。

日本山岳会は、いつの間にやら社団法人となり、名実ともに日本を代表する団体として活動していた。わたしが入会した時には会長はなく、数人の幹事さんが会務をとっておられただけで、いなかの学生も名の知れた社会人も芸術家もみんなおなじようにただの会員であった。山がすきだというのであつまった純粋の民間団体で、それが道頓堀うまれの町人気質のわたしには大そう気にいっていた。時には友人にそのことを自慢さえしたものであった。

初期の山岳会がACの気風をそっくりうけついでいたことも印象づよく残っている。そんなわけで後年、ロンドンにいった時に、何をおいてもまっ先に、オードリー街に車を走らせて、ACをおとずれた。それは質素な建物であった。だれに会いたいというあてもない、気まぐれな一訪客にすぎないわたしであったが、松方さんの懇切な紹介状のおかげで、まことにあたたかいもてなしをうけた。室々を見せてもらううちに、かつて書

物のうえでなじみになった登山史上の大家の肖像が、ずらりとかかげられているところに来て、いかにもアルピニズムの本山に足をふみいれた感動を、しみじみと味ったものである。

イギリスと日本とでは国情もちがい、山岳会ができたころと今とでは、世間の情勢もちがうことだから、会長ができ法人になるのもやむをえないであろうが、山岳会はいつまでも創立当初のような自由な気持と毅然とした態度をもちつづけてほしいものである。長いことお世話になったものとして、勝手な願いをゆるされるなら、どうか役人の下風に立って行政のお先棒をかつぐような仕事はなるべくごめんをこうむって、おちついたアカデミックな気風がもちつづけられるようにありたいものである。

殊勝なことをいうようであるが、わたしはいまも入会のころの初心を忘れないでいるつもりである。会と小島さんとには大きな影響をうけたそのご恩をおかえしするのには、この際、小島烏水論でもつづることができたら、しあわせだと、ふと考えてみた。そう思ったとき、ちょうど十二月に丸善で「近代登山の先駆者たち」という展覧会がひらかれたので、さっそく見にいった。これは小島烏水、木暮理太郎、岡野金次郎の三氏の生誕百年を記念するもよおしであった。木暮、岡野両氏にはなじみが薄いのにひきかえ、小島さんは、わたしにとっては恩師にもあたる人であり、もっぱらその部分にひきつけられていった。委員方の大そうな努力であつめられたたくさんの展示物につぎつぎとくびをのばして見ていく。小島さんの著書は、おおかた手にしたつもりであったが、まだ未見の書があり、異装の版があったりして、それらに通暁するのは、今のわたしの精力ではかなわない。滝沢秋暁氏への六十通におよぶ書簡の展示には眼を皿のようにしてながめて、すっかりくたびれてしまった。それに浮世絵、千社札のことになるとまた勝手がちがう。もうわたしの手のおよばぬところだ。

ここにおいて、かりそめにも小島烏水論をかいてみようかなど思ったのは大きな誤りであるとさとった。近代登山のもっとも偉大な先駆者であったとともに日本の文壇に不朽の足跡をのこしたこの異才の伝記、評論は、いずれ識見ゆたかな博捜の人の手であみあげられるであろう。その日の一日も早く来ることを望んでやまない。できるなら日本山岳会のなかから生れるとよい。これはわたし一人だけの願いだろうか。

日本山岳会と自然保護

――富士山ケーブルから連峰スカイラインまで――

渡辺公平

本会の自然保護委員会が、当面の運動目標を山梨県の連峰スカイライン一本に絞ることに決めたのが、昭和四十八年十二月の最終委員会だから、もう一年半になる。

この間、自然保護委員会（以下委員会と略する）はなにをしたか。またどれだけの成果があったのか。会員諸兄にアウトラインだけでも報告する義務があるので、それらに関することは、出来るだけその都度「会報」に載せてもらった。

それらを丹念に読んでもらえば、大体の動きと、その成行というものが明らかになるわけで、日本山岳会の自然保護委員会としては、委員会が生まれて以来、最も活発に活動した一年だったと言えるだろう。

連峰スカイラインに反対する委員会の方針は四十九年四月の会報「山」三四六号にぼくが書いた通りだが、この方針は同月二十二日に開かれた四十九年度通常総会において承認され、七月には、十六日付で山梨県知事宛、会長名で要望書、意見書を提出した。

「山」三五一号にそれらの全文が掲出されているが、日本山岳会の自然保護活動の歴史的な流れを理解して頂く一助ともなるので、要望書の要点だけを再掲しておこう。

「本会は明治三十八年創立以来、自然尊重を重視してきた。古くは大正十年の尾瀬沼発電問題、昭和十年の富士山ケーブル問題から最近では屋久島・上高地・尾瀬・大雪山などにおける自然破壊に対する活発な反対運動を続けて来ている。

本年度の活動方針として、昨年度に引続き所謂『連峰スカイライン計画―または自然公園道路』を主要目標として反対運動を行なうことが四月二十二日の会員総会で決定された。

かつて本会の大先輩たちが、あれほど愛された奥秩父の美しい自然は今や見る影もなくなった。ここが国立公園に指定（昭和二十五年）されたのは『代表的な日本的景観—原生林と渓谷の織りなす繊細な自然美—と豊富な動植物相』のためであった筈である。

五月十八日から三日間、本会役員（織内副会長、山本理事）が最終的実地検分を行なったが、その結果、破壊の進行は秩父の昔を知る者にとって、目を蔽わしむるもののあることを確認した。しかも開発の手は今なお進行中である。

われわれはこれ以上の自然破壊を断じて許すことができない。祖先たちが大切に守ってきた日本の自然を、われわれの世代において荒廃に帰せしめる権利は何人にもない筈である。ここに本計画の中止を強く要望する。」

この要望書を発送すると同時に、会の意見を説明し、あわせて知事の意向なども伺いたいので、知事との会談を希望する旨の書面を秘書課長宛に出した。それに対して七月二十九日付で県企画調整局長望月幸明氏から鄭重ではあるが断り状が送られてきた。それも「山」三五一号に全文紹介してある。

要約すると、この計画は山地の高度利用をはかり、人間性回復の場を提供するとともに過疎地域に活力を与えようとする地域開発計画だが、近時経済重視から福祉優先への転換が図られ自然環境保全の重要性が考えられている。

そこで本計画においても、現に自然に原始性が残されている奥秩父等の地域についてはこれを保存するため道路計画を凍結する措置を講じている。また総需要抑制策等によって諸情勢の変化に対応し、計画中の生活関連道路等を除き、この際建設計画への着工を見送ることにしている、云々。

この県側の回答を全面的に信用したわけではないが、とにかく県の今後の行動を監視することにして、事態の成行を見守るということに委員会は態度を決定したが、無許可林道工事のことが明るみに出て、環境庁から調査員が派遣されたりしたのはその後のことである。

自然保護運動への第一弾

山梨県知事への前記要望書にも示されているように、日本山岳会が自然保護、自然環境保全の問題で立ち上ったのは、珍しいことではない。むしろその歴史は古いのである。

大正十年の尾瀬沼発電の場合は、武田久吉博士らが農林当局の依嘱で尾瀬を調査し、わが国の自然財産として如何にこの地帯が国宝的存在であるかを天下に明らかにしたけれども、会としてのはっきりした行動は起さなかったように思う。

山岳会が、自然破壊行為に向って反対の動きを見せたのは、文部省がその尾瀬ヶ原を天然記念物に指定しようとしたことに対して、水利権を所有している東京電灯会社（今の東京電力）が

水力工事に重大な支障があるという理由から反対運動を起した時である。

昭和十年九月のことで、たまたま時を同じうして、富士山のケーブルカー計画が新聞に伝えられた。そこで、山岳会は機を逸せずそれらに対する反対の態度を表明、同年十月発行された「会報」五十号は自然破壊運動反対特集号の観を呈した。

その一部は「連峰スカイラインに反対する自然保護委員会の方針」（「山」三四六号）でも紹介したが、巻頭に「尾瀬水電と富士ケーブルカーの問題」と題する会の主張を掲げ、小島烏水氏が「富士ケーブル反対」、武田久吉氏が「風景地の保護と国民の自覚」、そして松方三郎氏が「他山の石―ユングフラウ鉄道、マッターホルン鉄道のことなど」という長論文でもページを使っている。

爽快なほどその論調が精気に満ちているので、主張の主要部分を「山」三四六号の中にも抜萃しておいたのだが、それ以外の条りを抜き出してみる。（一部重複）

「我々は四十万キロワットの電力よりも、居乍らにして富士山頂に達する安楽さよりも、懸け代えのない自然の保存を尊重するものであり、且又、国家百年の計に立てば当然斯く考うべきものと確信して疑わないのである。産業の発達に寄与するとか科学的研究に資するとか云う遁辞の下に今日迄如何に多くの自然が破壊されたかを熟知する我々としては、此の決意は余りにも当然の結論である。本会としては九月十月の再度に亘る理事会に於いて方針を決定、此の問題の満足なる解決のために全力を挙げて努力すべきを決意し直ちにそれぞれ活動を開始した。

本会としての主張が、尾瀬・富士に限定されたものでないことは論ずるまでもない。併し、此の問題について我々がその主張を貫徹するか否かが将来に如何に重大関係あるかを考える時、我々はその責任の重大さを意識せざるを得ない。

自然の破壊、無統制な機械文明の自然界への侵入に対しては、我が日本山岳会は断然反対であるという一事を此の機会に天下に表明し、旗幟を明にして置くことは望ましきのみならず、当然の義務でもある。」

四十年も前のことだが、日本山岳会理事たちの叡智と勇気に脱帽するとともに、日本という国が少しも進歩していないということに改めて驚かざるを得ない。

武田さんの論説の中にも次のような文章がある。恐らく尾瀬ヶ原のことを指しているのであろう。

「邦内他に代る可きものもない国宝的風致区域を、一種の事業のために犠牲に供する如きは、憂国者の坐視するに忍びざる処であるが、或は目前の利益に捉われたり、又は物質文明に眩惑されて、その事業がその地域を失なうても尚国家に貢献し得るものと誤信し、国土に対する認識不足から、敢えて破壊を謳歌せんとする者がある。而もそれが、日夜金銭上の利益のみを追

うに汲々として、他を顧ることなどを知らない事業家側のみでなく、国家擁護を主眼として国利民福を計る可き立場にある官憲の間にさえ、是認されんとするは、寔に慨嘆す可きことでなくて何であろう。」

昭和十年という時代的背景もあるが、武田さんは憂国者という言葉まで使っているが、「近時政府並びに関係者は、日夜心労を敢えてする程の熱誠があるならば、貴重な国宝的地域の壊滅に対して、黙して立たないのは何故であろうか。彼らは斯くも我国土に対する認識に欠如しているのであろうか。心ある国民は、須らく声を旺にして国土擁護を叫ばなければならないと痛感せざるを得ない」と政府を非難している。いかにも武田さんらしいと思われるが、尾瀬ヶ原や富士山などの自然を破壊しようとする動きに対する山岳会の怒りが、どんなに激しいものであったか、その一端を覗き得る資料として、この「会報」五十号は貴重な文献だと思う。

富士山ケーブル反対の成果

富士山ケーブルカー問題は、二年後には日華事変が勃発するというような時局を反映した面もあって、翌十一年には計画が不許可となり、山岳会の反対運動は成功した。

同年の七、八月合併号となって発行された「会報」五十九号には「富士ケーブル問題解決す」という標題で松方三郎氏の寄稿がトップを飾っている。

「……富士登山鉄道株式会社の事業認可は、内務省においては国民保健、国立公園の趣旨に基き、文部省においては名勝保有の見地より何れも却下するに至ったということであり、此問題発生以来機会ある毎に、富士の自然防衛のために努力し来たった我々としてこれ以上の喜びはない……もちろん此の決定の持つ意味は決して富士山に限られるものではない。永い将来に亘って起り得べき類似の事柄に対し、今日の決定が一つの前例として重要な役割を演ずべきは争う余地がない。況んやこれと形を異にして然も自然を冒涜することにおいて、これと異ならない計画が将来起らないとは何人も保証することはできない。」

というのがその論旨だが、さすがに松方さんらしい卓見だと思う。そして「今回の決定を如何に生かし、より有意義ならしめるかに関しては我々今後の努力如何が関係する所まことに大なりとしなければならない」と結んでいる。

このケーブルカーの建設計画申請が却下されたことは、富士山自体にとっても非常な喜びであったらしく、同年十一月発行の「会報」六一号には、富士大宮浅間神社の高橋正作宮司から山岳会宛に出した次のような礼状が記載されている。

「拝啓……富士山ケーブルカー問題については甚大の御援助に預りお蔭にて一段落の解決を見申候事国家のため慶祝至極、霊峰をして永劫に守護するの一大防衛戦の勝利を獲たるを欣快至

極に存候。貴会の天下大衆を率いたる御正論の致す所奉謝に不堪、今後いよいよこの鉄案の下に油断なき努力を払い申度存候。取り敢えず御挨拶申上候。会員各位にもよろしく願上候。十月三日。」

山岳会の強烈な反対運動だけのせいではなかったではあろうが、とにかく、富士ケーブルカーの方は以上のように大きな成功を収めた。

しかし、尾瀬ヶ原水電問題の方は、富士とは事情もちがうため、武田博士らの主張を以てしてもその計画を撤回させることはできなかったらしい。会報にもその後の尾瀬に関する記事はほとんど見当らない。

ただ十五年十二月に発行された「会報」一〇〇号に、吉沢一郎氏（らしい）の「尾瀬の問題」という短文が出ている程度である。

十五年といえば、日華事変が勃発してすでに四年を経過しており、国策の前にはあらゆるものが犠牲にされた時代である。

いくら抵抗しても無駄だということを誰もが肌で知らされていた頃だから、吉沢氏の文章にもあきらめの色が濃い。電気庁の手によって尾瀬の実地測量が行なわれることになり、堰堤の位置などを決める地下の調査が行なわれることになったという情報に関連して、「いよいよ尾瀬も時代の脚光を浴びて国策線上に浮び上ってきた。われわれ自然愛好者にとっては多少の感慨なきを得ない。公益優先、国家国防の完璧を期するためには統制も必要であろうし、ある程度の犠牲もまた止むを得ない。水底に沈まぬうちにせいぜいその風物を心の目に焼きつけておいた方がいいと思う」といった案配で、金輪際、戦争などしてはならぬと思う。

黒部川発電中止への要望

国策の犠牲は尾瀬ばかりではない。幸い尾瀬の方は、ぼくのかすかな記憶によれば、堰堤工事も地質の問題から困難視され、原も沼も現在見られるように、水電計画の犠えになることは免がれたが、黒部峡谷の水電計画は、国策の線に沿ってどんどん進められたらしい。

会員塚本繁松氏が、十七年の秋「会報」一一九号に寄せた「風致と水電」なる一文は、この黒部の電源開発に関連して、いかにも山岳会の人間らしい、また塚本さんらしい気骨を感じさせるものがある。塚本さんの危惧したことが、決して杞憂でなかったことを知るためにも、われわれの今後の参考としても、その一部を引用させてもらうことにする。

「私の真実言いたいのは外でもない。これ以上に黒部に水電を起してもらいたくないということ。必要な電力は何とかして他の方法で起してもらいたい。黒部も今尚上流と支流が未発電のまま残っている。

これらももし資材さえ十分なら無理矢理発電されたろうが、資材不足のため幸いにも未発電で残っている。戦時中はなかなか着手できないだろうが、豊富になったらやりかねない。

国威は及ぶところ何十倍となったが、さて省みられるのは故国の美しい山河のこと。火急の必要に迫られて貴重な原始林は伐り払われ、水電のために峡谷の風致は空しく死滅してゆくのを、いつまでも成行に委せておいてよいであろうか。国破れて山河ありでは困るが、国益々栄えて今や山河なしでも甚だ困るではないか……」

太平洋戦争が二年目に入った時期としてはかなり思いきった発言だと思う。そして毅然として黒部や尾瀬の発電中止、富士の原始林伐採中止を要望した結びの文章など立派なものだと思う。

「残すべき原始の風致は決然として残し、大自然の恵みに依て大国民を育て上げて行くという大国策を今こそ確立すべき時ではないか。この意味から黒部発電の中止、尾瀬発電の中止、富士山の原始林伐採中止等を衷心より熱望してやまない。」

会の自然保護に対する基本的姿勢

塚本さんは「国破れて山河ありでも困るが……」と書いたが、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争に突入した日本は、その塚本さんの困るといった道に向って歩き出していた。

もはや、自然保護問題などにかかずらう余裕などはなくなってしまった。青壮年の男子は戦場に狩り出され、山岳会々員にしても、山などに出かけることさえはばかられる時代と化していった。

その間に重要な国策資源として、至るところの山で、森林がどんどん伐り倒され、地元の人達が誇り、登山者たちが讃えてきたブナなどの原生林が次から次へと姿を消していったのである。

わが国森林荒廃の渕源は実にこの戦争にあったといっていい。そして山が各地で裸にされて敗戦の日を迎えた。バカバカしい話である。

戦後も歴代自民党政府の高度成長政策のあおりを食って森林の荒廃は続き、レジャーブームによる観光産業の野放図な拡大もあって日本の自然環境は著しく破壊され続けた。

しかし、山岳会でそれらの問題をとりあげ、その傾向に歯止めをかけることの必要を改めて論じたのは松方会長だった。

昭和三十七年の全国支部長会議の席上、松方会長はその挨拶の中で三つの願いということについて話している。第一は日本山岳会を楽しいクラブにしたいということ、第二は日本山岳協会ができて、山岳会はその構成の中に加っているが日本を代表する山岳団体としての責任は解除されていないということ、そして第三にもう少し広い意味での対社会的活動としての自然保

護に言及している。

ドライブ・ウェイを造って、その結果、人間の歩く道は姿を消してしまったところも多い。山を見ればケーブルをつけなければ気がすまないという危険な人物も、あい変らず天下に満ちている。そんなことはわかりすぎていると思っていると、案外少しもわかっていない。いうこともなかろうと黙っていると、とんでもないことになっている、といった事実はわれわれの目の前に余りに多い。ヒマラヤ遠征大いに賛成だが、自分の国の山を目茶苦茶にしておいて何のヒマラヤだということなのだ。

われわれは日本人だし、われわれの会は日本の山岳会なのだから、何としても日本の山をちゃんとした山にしておかねばなるまい。日本山岳会の土台は、やはりこうしたことに対する明確な考え方の上に、しっかりと根をおいていなければならないと思うのである、といった要旨が「会報」二二三号にも報告されている。

西穂高ロープウェイ反対と委員会の誕生

このような考え方、方針が前提となって、三十八年十月、上高地で開かれた支部長会議において、かねて問題になっていた西穂高ロープウェイの建設計画に対する反対が決議され、要望書が厚生省国立公園部長、日本自然保護協会理事会などに提出された。

支部長会議の模様と、要望書の全文は「会報」二三〇号に収録されているから省略するが、このロープウェイ反対は東海支部より提案されたものであり、須賀太郎支部長と石岡委員が説明、真剣な討議の後全員一致で、ロープウェイ及び上高地スカイライン道路（鍋冠山より大滝山、徳本峠北面をへて上高地に至るもの）の建設と延長に、支部長会議の名において反対を決議したのである。

もう一つ特記すべきことは、山岳会内に自然保護に関する委員会を設置することを申し合わせたことだ。これが今日の自然保護委員会の原点となった。

そして十二月の理事評議委員会では、交野武一評議員を中心に、次の理事会で発足できるよう準備を進めることにし、二月の同会で正式に委員会が設置された。委嘱された委員は次のとおりである。

委員長　松方三郎

委員　武田久吉　神谷恭　藤島敏男　日高信六郎　深田久弥　古沢肇　田中薫　足立源一郎　千家哲麿　福井正吉　渡辺公平　村井米子　交野武一　他各支部長

なお随時適任者を追加委嘱する。

しかし四十年度の自然保護担当理事となった杉浦耀子氏が「会報」二四〇号に報告しているように「従来から自然保護委が組織されていたが、具体的には活動していなかった。」そして

「本年度は松方会長、村井評議員、交野評議員等と相談して、更めて委員会を構成し、協議の上、具体案を作り活動してゆく」ことになったが、村井米子氏が自然保護委員会の中で活躍したくらいで、会の委員会としてはこれはという動きを見せなかった。

北海道の伊藤秀五郎氏が「われわれは、人力による自然の改変を全面的に否定するのでも、回顧趣味の郷愁から未練がましく愚痴をいっているのでもない。産業開発、社会開発に名を藉りた手ばなしの自然の破壊を放置してよいのかというのである。世界のどの国よりも海外遠征には熱心なわが国の登山家たちが、お膝元の日本の自然保護には驚くほど不熱心なのはなぜなのだろう」（会報二三八号所載「哲学者の旅」）と歎いているのも当然至極といわねばなるまい。

屋久杉と大雪山縦貫道路

四十四年度の自然保護委員会は、加藤泰安氏が担当理事となり、深田久弥、村井米子、川森左智子、渡辺公平で構成されたが、ちょうど屋久杉の原始林を守ろうという運動が鹿児島県自然愛護協会などを中心に盛り上っていたときであり、日本山岳会でも同年三月十八日には村井委員の提案で第一回の委員会が持たれ、日本自然保護協会とも協力して、反対世論の盛り上りをはかるべく委員それぞれが活動した。会員の協力で署名運動も行ない、部厚な署名簿を携え、林野庁を訪ずれ責任者に手渡すと共に山岳会の要望を伝えたりした。「屋久杉を守ろう」という村井委員の記事（会報二八九号）に屋久杉問題は詳細に伝えられている。が、村井委員のこの運動における活躍は目覚しいものがあった。

次に起ったのが大雪山における縦貫道路建設計画に対する反対運動である。

この道路は「帯広に近い新得の奥のトムラウシ温泉から、トムラウシ岳とオプタテシケ岳との間の通称鹿越峠付近を越えて十勝岳山麓の白金温泉を結び、更に北上して天人峡に至る」もので、「大雪山の中でも最も奥深く、最も原始的な、しかも風光においても高山植物や森林の美しさにおいても最もすぐれたいわば奥座敷である……この原始的な美しい自然が今日なお守られているのは、どこから入っても一、二日の幕営を必要とする不便さの故で、もしここに自動車道が通れば桂離宮を一般に開放したと同じ結果になることは目に見えている…日本のいやしくも山を愛するという者共はいまやはっきり反対に立上るべきときであり、緊急に日本山岳会や日本山岳協会の道路開設反対運動を期待する」と会員井手貢夫氏が「会報」三二八号に「大雪縦貫道路に反対」の一文を寄せている。

委員会の方も板倉担当理事を中心に委員会らしい活発な動きを見せ出し毎月定例の会合が開かれるようになっていた。井出

氏など現地との緊密な連絡の下に、山岳会として四十七年八月二十日付、三田幸夫会長の名で小山長規環境庁長官宛に要望書を提出、計画の中止を強く訴えた。

この反対運動は強力な世論の背景もあって一応北海道庁が計画をとり下げるところまで後退したので一応の成果を見たわけだが、富士ケーブルの問題で、松方氏がはっきり指摘していたように、これが反対運動の完了を意味するものでないことを委員会は百も承知し今後の出方を見守っている。

大雪縦貫道路と時を同じくして国民の視聴を集めた野呂川のスーパー林道に関しては、残念ながら委員会としてはなんらまとまった行動をとれなかった。石槌山のスカイライン、尾瀬の横断道路にしても同じようなことが言える。熱心さも足りなかったのだろうが、土木機器、伐材用具の驚くべき進歩によって自然破壊の進行が想像以上に速くなっていることや、情報集収力の弱いということなどから、委員会が自然破壊の情報をキャッチした時には、破壊は相当進んでいたという場合が多かったせいもある。

連峰スカイラインや大雪縦貫道路の場合は、井出氏や山村正光氏など各支部会員や委員が積極的な調査を行ない、適確な情報の把握に努力したことが、運動の成果を挙げた要因の一つとなった、といっても過言ではなかろう。

以上、昭和十年の富士ケーブル、尾瀬水電の反対運動から最近までの、自然保護運動を会報を基に大まかに拾い上げてみたが、この面に示した先人たちの意外なほどの強烈な情熱と、半世紀をつらぬく山岳会の使命感といったものを行間に読みとることができて、愉快にも思い、また勇気づけられた次第である。

（引用した文章のうち仮名遣いと読みにくい漢字については筆者が適当に改めたことをお詫びする。）

高所登山の忘れ物

金坂一郎

しばらく前の日本の経済界は、高度成長という言葉に乗って、すさまじい前進を示した。あわて者は、これで日本も大国に列するようになったかと、早呑込みしたほどであったが、綺麗に塗りあげられたのは表通りに過ぎず、裏通りはちり芥の山、これを片づけるのに何年かかるかと頭を悩ますような侘しい成長であることが、間もなく周知されるようになった。

ここ最近、登山の研修会などで現役の登山者に接する機会多く、登山界も激しく変りつつあることを知った。登山者の技術水準は高く、ひところのトップ・レヴェルの技術が一般に普及している。装備の進歩も著しい。例えば靴一足とりあげて見ても、岩でも雪でもはるかに登りやすくなっているし、登山靴をそのままスキーに使っても、昔のスキーの選手が使っていた靴よりも、もっと使いやすいほどである。

海外登山も普及して来た。エチケットや言葉の分からない輩が海外に行き過ぎると、顔をしかめる人もいるが、大衆化そのものは悪いことではない。昔、いろいろの事情によって合宿にも満足に参加できなかった時代のことを振りかえれば、若い人たちの海外進出を大いに後押ししてあげたい。また現に、そこでは眼ざましい成果も上がりつつある。

それでは登山界はめでたく、喜ばしいかぎりであるかといえば、必ずしもそうばかりとはいえないようである。跛行的前進といったらいいのか、いくつかの忘れ物もしているようだ。登山を経済事象と比較したくはないが、登山者も社会人である以上、好むと好まざるにかかわらず、社会の風潮の影響を絶ちきることは難しい。

ヒマラヤ登山の傾向を概観するためクロニクル類をひもとい

て見ると、外国の登山隊の場合、まず終戦の一九四五年以来、フランス隊のアンナプルナ初登頂の五〇年まで、十隊足らずの登山者が毎年ヒマラヤを訪れている。その間死亡者はめったに出ない。その後登山隊の数は増加し、十数隊から二十隊くらいに及んでいるが、事故は毎年一～二件にとどまっている。それが、五七年以降登山隊の数は大差ないのに、遭難件数が急に増し、四～五件を数える年もある。

次に日本隊を見ると、一九五二年のマナスル偵察以来五七年までは、ぽつりぽつりと年平均一隊ほどで、遭難は起こっていない。五八年は日本山岳会がヒマルチュリ計画に着手した年であるが、外貨事情がきわめて不自由な時代にもかかわらず、この年から数隊が海外へ出るようになった。事故もぽつぽつと現れているが、当時（五七年以降）の外国隊よりはずっと低率であった。遭難が急に増加したのは外国隊よりも十一年遅れて六八年からである。この年はまだネパール政府が登山を禁じていたにもかかわらず、あちらこちらで日本隊の事故が多かった。

何故ある年から突然遭難件数がふえたか。遭難の割合がふえたといってもよさそうである。その理由はいま明らかではないが、外国隊も日本隊も同じような変化を示している。最近の日本隊はまことにお粗末であると、一部の人の顰蹙を買っているが、これも成長期に起こる一種のハシカみたいなものであろうか。いずれにしても、大事にしなければならない時期である。

最近の日本隊に多い事故は転落である。およそ事故の半数をこれが占めている。国内登山の統計によると、これも転落が圧倒的に多いのであるが、高所登山の場合にはその原因は高度障害であろう。世界的に名の知られた優れたクライマーたちが、あまり険しくない斜面で転落した話を読み、奇妙な感じを持たれた人も多いと思うが、酸素不足によって、神経も筋肉も病的に衰えてしまうのであろう。

しかし高山病は最近現れた現象ではなく、昔からあったし、また登山者にはその厄介なこともよく知られていた。ヒマラヤ登山の第一歩は高度の克服から始まる。だから昔の登山者は、高度順化に対して慎重であった。高度障害についての知識は最近の方がずっと豊富であるにもかかわらず、このごろは高度障害が直接の原因である転落などの初歩的な事故が多い。

海外登山の初期には、登山および人生における経験の豊富なリーダーが指揮をとり、有能な幹部が慎重に計画を立てる。行動面でもあまり無理をしないので、事故は少ない。しかしそのうちに大勢の日本人が海外の山へ行くようになった。昔のようなベテランが指揮をするわけでなく、ドングリの背くらべ的な自分たちと大差のない登山者が運よく登頂したとすると、自分たちにもやれそうな気になってくる。いや、むしろやらなければならないような気になる。

そして豊富になった資料を仕入れて計画を立てるのである

が、計画の細部にまで眼が行きとどかない。登頂のための調査は一所懸命にやるが、高度順化のスケジュールはおざなりである。時間が不足してくるとまず省略されるのが高度順化の段階で、見かけの強そうなものがどんどん高所に突っこんで行き、ピンチに陥る。

こうした高所での登山のためには、ふだんから登山技術をよく練磨しておくことが大切である。付け焼刃の技術は通用しない。しかし高度障害がひどい場合には、体力も技術も役に立たないと思う。それ以前の順化の問題が大切なのである。しかも順化の様子は個人差が大きく、また予想もつかない。経験によっても変ってくる。これをこなすには計画に余裕を十分持たせることである。

高所登山の場合、最高所のアタック・キャンプは、予定していた位置では間に合わない場合が多い。昔は予定通りでは無理であると分かったとき、計画を変更してもう一個所キャンプを進めてからアタックにかかるのが普通であったが、最近は予定の位置から長時間かけてアタックを強行する例が多い。このごろでは国内の登山で十数時間かけて行動するといったラッシュ・タクティックスがめったに行なわれないにもかかわらず、八千メートル前後でそれを強行する。悲劇に突入するチャンスの多い所以である。初めからそのつもりで長年にわたって超人的体力を鍛えて来た人ならば話は別であるが、酸素やボッカ能力の不足をアタックで一挙に取りかえすのは乱暴である。

最近の通信機は大変便利になっている。アイスフォールの迷路におけるルート開拓などは、リーダーが隊を離れて見通しのいい場所から指示すれば、ずいぶん便利である。登頂隊のルート指示に使える場合もある。計画の変更などにもきわめて便利である。しかしこれを十分に使いこなすことは意外に難しい。

かつて文部省の登山研修所で、リーダーシップのテスト問題の中で、その隊はトランシーヴァを携行していないと付記したところ、そのような馬鹿げた隊は冬山に入る資格がないなどときめつけていた学生が何人もいたが、このような紋切型の考えを持っていたのでは、いつまでたってもトランシーヴァは使いこなせないであろう。登山には、ほとんど故障しないような装備を携行するか、さもなくば装備が故障したときの対策をしっかり立てておかなくてはならない。高所登山でトランシーヴァの修理はまず無理であるから、事前に、故障した場合の処置について打合わせておくことが大切である。もしこれに頼りきりの登山をしていて、その故障に会ったとしたらどうなるか。糸の切れた凧と同じである。

組織の力というものは、指示が的確に行なわれ、その指示が確実に実行されたときに発揮される。そのためには予め考えられるあらゆる想定のもとに、どのように計画を立て、またそれを変更していくか、事前に十分討論して、全隊員が納得してお

くことが望ましい。縦系列に育ったメンバーで組織した隊は、この点比較的やりやすいように思われているが、先輩、後輩の意志の疎通は意外にあいまいなことが多い。出発前の打合わせはどのような形の隊にとっても大切なのであるが、山に入ってからトランシーヴァを使えばいいや、といった甘い考え方で動きだしてしまう隊が多いようである。

もしこうした隊が山の中で分散してから、合議制で行動の相談など始めたら、円滑に進行するはずがない。これなどは、トランシーヴァという器械の使い方を甘く見て、トランシーヴァに振りまわされる例であろう。

登山準備の段階で、装備や食料、あるいは事務手続に追われて、登山計画をないがしろにするのは、初心者だけかと思っていたが、このごろではベテランと呼ばれる人たちも、その轍を踏んでいるようである。このような経過で、山の中で現れるトラブルをトランシーヴァはすべて聞いている。トランシーヴァにまつわる悲劇は意外に多いものである。

このごろ情報という売りものがさかんにもてはやされている。買う方にとっても大変都合のいい商品である。しかし登山界における情報の取扱いが適切でない場合には、いろいろと欠陥を生じやすい。

日本山岳協会では毎年海外登山研究会を開催しているが、そこにはいつも不思議な空気が流れている。すなわち、海外の山への入山手続だとかそれに類した事務的な情報の交換には大変熱心だが、山の登り方に関する諸問題にはさっぱり熱がわかない協会としてはそんな指導をしている訳ではないのだろうが、こんな空気を感じると、こうした登山者たちは高い山をどう考えているのか、恐しくなってくる。いい山を見つけ出して隊を送りたい気持は十分に理解できる。また未知の山に挑むにあたって、情報集め大いに結構である。金のかかる海外登山であるから能率はできるだけ上げたい。しかしそれだけでは立派な登山はできない。いくら情報が豊富になったとはいえ、ルート図片手に岩を登るといったところまでいかない。この辺の空気が高度障害や雪崩の事故にもつながっているのではなかろうか。

海外登山はできるだけ綿密な計画のもとに行なわれなければならないが、トラブルの続出と予定変更がエクスペディションの実態である。それだから情報がほしいのであるが、もう一歩つっこんで、変化に対応できる弾力的な頭脳を訓練するのが本筋で、こうした人にとっては多少の情報不足は大きな問題たりえない。

最近はヒマラヤで雪崩にやられる例が多くなった。日本の山では情報にしたがって雪崩多発地帯を上手に避ければ、雪崩遭難はかなりの程度に防げるはずである（現実にはそこまで行っていないが）。しかしヒマラヤではそうした手は使えない。また登りやすいルートは、いずれかといえば、雪崩の多発地帯に多

いからである。しかも未知の山における雪崩情報は皆無に近く、山麓の住民も雪崩地帯のことは知らない。

登山者にとって雪崩の問題で一番面倒なことは、山を下から見たのでは、雪崩の発生場所やその流れ方を誤りやすいことである。稜線から見下ろすときは、その判断はかなり正確に近づくのであるが、稜線に出るまでにやられてしまうのであるから始末に悪い。

高所登山の場合、ときたま氷雪崩にやられるであろうことは、過去の先輩たちの記録からも予想できることである。しかしこのごろではヒマラヤで新雪雪崩にやられる場合も非常に多い。海外登山のうちでもネパール・ヒマラヤにとくに多い。降雪量が多い地域だからであろう。しかしヒマラヤの新雪雪崩は、大体において日本の山の雪崩に似ている。少なくともヨーロッパのアルプスの雪崩よりは似ている。したがって日本の山で雪崩をよく観察し、その避け方を一応心得ている人は、かなりの程度にヒマラヤの雪崩を避けることができると思うが、積雪状態から考えて、誰でも無茶だと思うような斜面で行動して遭難している。

雪崩は登山界の最も大きな忘れ物であると思う。雪が降ったら二、三日は急斜面に近づくな、と古くから言い伝えられていながら、これが守れずに遭難が絶えない。統計的に見て、降雪後一日待てば新雪は大体落着くが、それすら待てない。

危険地帯を通らなければならないとしたら、一時に一名だけが通れ、というルールも守られていない。ここに挙げた二原則を守るだけで、雪崩の死亡者は十分の一以下に減ることは明らかであるが、登山界一般はそれを放置して来た。

しかもでたらめな雪崩理論が横行している。雪崩事故のコメントに、気温が高いのに行動して云々という言葉は常に聞くところであるが、これを逆に受け取って、気温が低くさえあれば安全だろうという誤解をいかほど振りまいたか。不勉強な登山者も悪いが、このようなことを、見逃がして来た登山界はもっと反省しなければならないと思う。

ヨーロッパの国では日本のようなドカ雪が少ないので、雪崩の被害も一般には日本とは様子が違うが、戦後何回かの大雪によって予想もしなかったような被害を受けてから、国を挙げて雪崩対策に取り組み、防護施設など戦前とは一変してしまったそうである。そろそろ日本の登山界も雪崩に対する認識を改めて頂きたいものと考えている。

登山を古い時代までさかのぼって見ると、探検的な要素が多かった。登山とはまず山岳の探検であった。同時に荒々しい自然との戦いである。山で生活するというよりは、むしろ生存するといった方が適切であろうが、人間が生存することを拒むかのような自然、そこで生活する方法を知ることは、山を登る方法の開発と同様に大切であった。

そのような時代に大切なことは、学問や知識ではなく、強い体力と動物的な感覚であったろう。そして少しずつ経験を積みかさねていき、危険を避けながら山を登る方法を知ったのに違いあるまい。

登山者が経験を積むにしたがい、その知識も次第に普及していく。あらゆるスポーツの中で、本の出版が一番多いのが登山であるが、そのため後発の登山者は、書物によって広く知識を得ることができるとともに、読書によって登山を楽しむという副次的な喜びを味わうこともできたのである。

傾向としてはこのように進んできたのであるが、例えば私が登山を始めた第二次世界大戦前夜の状態においては、一般の登山者が山の資料を手に入れることは、決して容易ではなかった。一般の登山案内書などは結構普及していたのであるが、第一線の困難な登山が対象となると、簡単に情報を手に入れるわけにはいかなかった。

また当時は通信も便利ではなかった。気象データーは毎日ラジオで発表されていたが、山の中でそれを捉える携帯用のラジオなど売っていなかったから、山に入っている連中は、雲行きでも眺めながら翌日の天気を予想したものである。山を歩くための資料としては、当時の陸地測量部の五万分の一の地図（今日のものに比して狂いが大きい）くらいのものである。積雪期の中級山岳を地形図だけを頼りに歩いたとき、人跡未踏のいろんな変った場所に入りこんだことを記憶している。当時の登山者の持っていた情報は、かもしかや熊とくらべても大差のないところであった。したがって人間でありながら、動物的感覚も大いに働かせなければならなかった。

終戦直後の物資欠乏期にも、事情は同様であった。いやむしろ戦前よりも悪かった。しかしその頃から登山の方法が組織化され、指導のやり方も能率的となってきた。これは戦争の経験が登山に取りいれられたためかも知れない。厳寒期の稜線にキャンプすることも上手になった。そして携帯ラジオによる気象情報が、登山行動を計画的に進めることを可能にした。また交通が便利になったので、アプローチの所要日数は短縮され、登山行動はますます能率的になってきた。

これは一種の進歩ということができる。しかしそのためにマイナスの面も現れてくるのは止むを得ないであろう。登山者は初歩の段階から効率的にクライミングの方法を身につけるかわりに、山の自然的要素に注目する余裕を失ってしまった。山は、あるいは岩壁は、すみからすみまで詳しく知られた、一種の競技場と化した。

このような環境に育った登山者は、成文化されたルールにしばられることがないとすれば、エンジニアリング化への道に突進することになりやすい。登山技術の向上よりもまず人工的補助用具の開発ということになる。例えば水泳の競技において水

かきのような不当な補助用具を使ったとしたら、その競技者は永久に葬られてしまうはずであるが、登山者はこれに類したことを平気で行っている。

今日の最も近代的な登山は、スポーツというよりは情報獲得競争であり、行為の機械化であるともいえる。極論すれば大学の経営工学科の対象にしてもいいくらいだ。したがってその成果も効率が高い。

しかし現代登山者が総ての点において優等生というわけにはいかない。どうも犠牲者の数が多過ぎるようである。戦争の場合には、いかに優れた指揮官を得たにしても、ある程度の犠牲は止むを得ないものとされている。しかしいくら甘い評論家でも、登山隊リーダーに対しては、それほどの寛容度は示さないであろう。登山は戦闘ではないから、生命の犠牲は極力避けたい。

登山の構造が複雑になるにつれ、人は登山における能力を、体力、技術、装備、情報といった目につきやすい面だけでとらえて比較しがちである。もしこうした単純な比較を、古い型の登山者と対比して行ったとすれば、新しい型の登山者の方がずっと優れていると結論しやすい。しかし未知な要素の多い、新しい高い山を目標にする場合、もっと別の要素、例えばルートを素早く嗅ぎ出したり、隠された危険を予見するような、感覚的な能力も大切なのである。

覆水盆に返らずという。昔のとおりの登山に戻れということも無益であろう。しかし近代化によって体質の一部が虚弱となった登山者の欠陥は、自らよく承知して、そこをかばうようにして計画し、行動しなければならない。

成分化されたルールを持たず、また自らの倫理をめったに確立しようとせぬ登山界である。いずれの方向に進んで行くか、私は知らない。しかしいつの世にも、登山とは何か、どのような流れに乗ってきたか、といった根源的な問いかけは、なおざりにされてはいけないと思う。

黒部の山案内人

――下立村の人びと――

湯口康雄

黒部川は、愛本橋の下に濃藍の渕をつくっている。このあたり、両岸にせまる山の端の岩壁が庇状にせり出し、それを被うように樹木が鬱蒼としており、妖気の漂いを感じさせずにはおかない。

かつて、この橋の西、俗に下立愛本と呼ばれているところに、粽を鬻ぐ店があった。ここの粽は、「愛本の粽」と称され、長持ちすることで定評があった。これには、橋下の深渕に住むといわれていた大蛇と美女をからませた伝説があるが、―これは、大蛇に懸想されて嫁いだ徳左衛門（地元ではヘイザブロウといい、その店をヘイザブサと称している）の娘お光が身ごもって帰ってくる、それと知らぬ母親は、蛇体となって蛇の子を湯浴させているわが娘を盗み見て仰天する、娘は親子の縁もこれまで、と例の粽の製法を伝授して立ち去り、以後ふたたび両親の前に姿を現わすことがなかった、という話なのである。

このうち、大蛇が娘を口説く部分は拡大されて、次に記すような盆踊唄「愛本橋大蛇口説き」になっている。ただし、地名、人名などに多少の異同はあるが。

ここに一つの　話がござる
　所どこよと　たずねて聞けば
所越中の　愛本村に
　花の八月　十日の季節
明日開帳の　参りしもどり
　七ツ半頃　愛本橋の
橋のたもとで　手拭拾た
　拾た手拭　ちらしを見れば
愛のしるしに　川瀬の模様で
　拾て　二、三日たたないうちに
きれいな男が旅装束で
　そろりそろりと　荻生に下る

ここはどこよと　子守衆に聞けば
　ここは荻生の　中村でござる
荻生の中村の　徳左衛門とはどこよ
　橋の先より　三軒目でござる
夜の九ツ　四ツ半頃に
　お竹お竹と二声　三声
夜の夜中に　私呼ぶ者は
　まよい者かよ　変化の者か
まよい者でも　変化でもないよ
　手拭落とした　大蛇でござる

黒部の山案内人、此川新作が生まれた富山県下新川郡下立村下立（現宇奈月町下立）は、黒部川左岸の村落で、下立愛本と隣り合っている。新作はここで農業にいそしむかたわら、米屋をも営んでいた。

現在の此川家は、昭和十三年（一九三八）に新築されたものだが、几帳面な新作はこれを記念して「御札納箱」と自書した木製の箱を作った。御札というのは、大神宮の神符のことで、かれはこの蓋の裏面に、此川家の家系を初めとして、新築の費用が四千円であったことや、この年は「北支邦事ノ真最中」であったことなどを克明に、しかも毛筆で書きとめている。しかし、どちらかといえばかれは不器用な方で、草鞋はおろか、稲架さえ満足に作れず、たえず夫人を嘆かせていたという。この地方の盆踊りには、かならずといっていいほど先述の「愛本橋大蛇口説き」が唄われるのだが、そんな新作は、踊るというよりは、もっぱらそれを観る方にまわっていたものと思われる。

新作は、イワナ釣りがまことに好きであった。たとえば塚本繁松（一八九九～一九四七）の「黒薙川柳又谷」（『山岳』第二十六年第三号）に次のような一節がある。

「ふと足許の渕を見ると、渦巻く激しい流れの中に大きな岩魚の群が浮き上がっては沈み、沈んでは浮き上がって居た。三人は顔を見合はせてにつこり笑ひ、早速糸を取り出して釣りにかかった。十分許りにして忽ち一尺足らずのを一匹釣り上げたのでそれに勢を得て熱心に糸を流してゐると、一尺二三寸もあるやうな大きな奴が悠々と水上に浮かんで、殆んど動かないで鰭を動かしてゐる。此奴を引き掛けやうとして針を流してゐる中にとうとう此川の針に食ひついた。慎重に浅瀬に流して来て、さて引き上げやうとしてぐいと竿を上げると一跳ね跳ねて糸を切り忽ち流れの中へ潜って行った。此川は竿を振り上げた侭、大きな目をむき口を開けて、水を睨んだ侭で一分間程も物さへ言はなかった」云々。

昭和六年八月、塚本は新作と滝林耕平を従えて黒薙川を探っている。「黒薙川柳又谷」は、六日から十四日までの、つまり前半の記録であり、十五日から二十一日にかけての後半のそれは、「朝日岳と北又谷」と題して、同じ『山岳』の第二十七年第一号に載せている。

入渓第一日は柳又谷と北又谷との合流点にある測水小屋泊ま

りであった。ここに着くやいなやかれらはイワナを求めてあわただしく動き始めた。だがこの日、イワナはその陰さえ見せなかった。翌七日は、釣り竿—といっても、かれらはオオイタドリの茎をよく使っていた—を片手に溯行を開始したらしく、出がけに一匹釣り上げて、幸先よしと快哉を叫んでいる。新作が大物を釣り落として地団駄踏んだのはこの日で、場所はカシナギ深層谷落ち口近傍だった。気短かなかれが、午後の四時から六時頃までのおよそ二時間もねばりにねばって、挙句のはてがこのていたらくだったから、よほど口惜しかったのであろう。そそくさと幕営地をさがすと、日暮れまでの寸暇を惜しむように、ふたたびここへとってかえしているし、翌朝も出発までにやはりようすを伺いに立ち戻っている。その執拗さといったらない。

「あの岩魚もさぞ口が痛い事だらう」（「黒薙川柳又谷」）とは、またしても釣り針を三本もとられた新作の捨てぜりふである。

いまここで、新作と、イワナと、そして黒部とを短絡的に結びつけるのは早計かもしれない。しかし、新作が黒部の谷へわけ入るようになったのは、いわゆる登山のための登山でも、山案内のためでもなかったとすれば、やはりこれしか考えられない。それにしてもかれは、ただわけもなく本能的にイワナを追った。たとえ農繁期であろうが、あきないがいそがしかろうが、そんなものを頓着するかれではなかった。生来の不器用さが、かれを農作業につないでおこうとする夫人をあきらめさせるのにいくらかは役立ったし、そのころ商売の米を宇奈月や黒部の谷の工事関係者に納めていたことも、ぼやく家人の目をぬすむのに幸いした。米の運搬だといっては宇奈月へ出向き、二、三日帰らないことがしょっちゅうだったというから、かれのやることは徹底していた。—しかも、別にこうまでしてイワナをとらなくとも生活に困るわけではないのにである。

その行動半径は、年とともに延び、晩年には内蔵助谷出合をはるかに越えるようになっていたという。

骨太で、しかも豪胆な男だったらしいが、こういうことがあった。やがて東の空がしらみはじめようとするころ、息せきって家へかけこんで来た。しかも顔色はなかった。いぶかしがる家人に、かれはそのわけを話した。

「岩小屋でうつらうつらしているとき、『まだ帰らんのけ』という声がした。妹の姑の声ではないか。それでうす気味悪くなるとともに、家にきっと何事かある、と思い、カンテラを下げて夜通し歩き続けたのだ。」

果してその予感があたっていた。新作が岩小屋で声を耳にしていたころ、その声の主が息を引きとっていったのである。

それはともかく、音沢村—愛本橋の少し上の、黒部川右岸の村落—の助七が、黒部で猟をしているうちに山歩きの技術を身につけていったのに対し、新作のそれは漁を通してであった。同じ「りょう」でも、猟扁のそれと三水扁のそれとでは、当然のことながら、その指向するところが違ってくる。助七が、どちらかといえば尾根歩きに、新作が谷歩きに卓絶していたのは、この猟扁と三水扁の違いによるものとみることもできよう。

漁を通じて山へ接近していった山案内人は、新作のほかにもいた。ほかにもというよりは、その典型的な存在であったのが、瀬川栄吉（明治十九年九月十五日～昭和十二年十月二日）、野村伊太郎（明治三十四年一月五日～）のふたりである。かれらは、冒頭で記述した徳左衛門の在所に生まれた。栄吉の家は、少しではあるが「愛本の粽」なども並べる菓子屋だったからまだしもであったが、伊太郎にはこれといった定職がなく、黒部の谷で土方をやったり、営林署の雇われ人夫になったりして糊口を凌いでいくよりすべがなかった。

こんなかれらにとって、趣味と実益を兼ねた漁は、小気味のいい作業であったにちがいない。

「父や五郎七は、明けても暮れても黒部に浸っていた。あれはどう見たって川漁師の姿だった。そのころの黒部川にはマスがたくさんいた。投網でとるのだが、最盛期には富山から来た問屋がつきっきりであった。」

栄吉の次男、享の述懐である。ついでながら五郎七というのは野村家の屋号で、伊太郎をさしている。かれは当時を回想する。

「マスばかりではなく、イワナもさかんにとった。これは主として釣り上げた。昼間釣りながら居場所をつきとめておき、夜になってから網をうつこともあった。柳又谷の広河原や、赤沢岳からくる赤沢出合ぐらいまではいつもくり出していた。獲物は塩漬にして持ち帰れば、『イイダヤ』では、ふたつ返事で買い上げてくれた。」

そのころの「イイダヤ」の店頭に、「宇奈月名物」と書かれたイワナの粕漬が絶えることがなかったといわれている。

昭和九年九月二十日から二十二日にかけて九州、四国、本州を襲った室戸台風は、死者二八六六人、行方不明二〇〇人、傷者一五三六一人、建物被害四七五六三四戸、船舶被害二七五九四隻といった爪痕を残した。この月の十七日から柳又谷に入っていた石部幸弍夫妻は、廊下のどん底でこの余波を受けて難行している。山案内人は、栄吉、伊太郎、耕平の三人であった。かれらがこの悪条件のもとで、黒部の山案内人としての力倆を遺憾なく発揮したことは、映子夫人の「柳又谷溯行日記より―黒部・黒薙川の支流―」（『登山とスキー』第六巻第八号）に明かである。映子夫人はその冒頭に「いずれも黒部保勝会選り抜きの山男達であったので、此の溯行も大体予定通りの好果を収める事が出来た」と書き、栄吉、伊太郎のふたりについてはさらに言及して、「三十年も黒部川で鍛えた岩魚釣りの名人で徒渉は実にうまい」と高く評価している。

かれらの所属していた「黒部保勝会」は、吉沢庄作（一八七二～一九五六、富山県下新川郡大布施村、現在の黒部市、日本山岳会々員）の奔走によって成立したものと思われる。『黒部遊覧』（下新川郡役所、大正十二年）はその付記に「黒部保勝会」と題する記事を載せている。

「天下の絶勝黒部峡谷を享有する我地方に於ては、之が自然美を保護し併て広く之を世に紹介し、且一般探勝者の便宜を計り

てその開発に努め、以て此の天恵に酬いむが為めに、本郡内の有志相謀りて、大正十一年創て黒部保勝会が組織せられたのである。本部は三日市町に、支部は内山村役場及下立村役場内に置いて、地方官民中錚々たる名士愛山家を以て成り、而かも最も熱誠ある人士其の幹部となりて、大に画策に努めつつあるので、当初に於ては登山者の最も要望する、峡谷案内者を多数養成するを急務なりとして、該会幹部之を指導して、祖母谷、大黒、白馬方面の地理を踏査し、尚三日市、泊の両省線停車場に峡谷案内図を峡谷の各要所に指導標を各建設し、尚案内図及登山心得書を一般登山者に無代配布するの計画を立てて居るのである。更に第二次の企としては、小黒部より剣山、立山、佐良、針ノ木方面に渉る案内者を養成し、尚進んで露営地に宿泊設備を成す等種々の計画を立てて居る。幸に是等の挙にして完成し、倍々多方面に該会の活動旺となるに於ては、登山家の利便は頓に増大して、此の峡谷美は弥々天下に謳はるるに至るのであらう。案内者の雇入れ等登山に関する照会は、内山又は下立の支部へ発せらるる方は便利である。」

この会のそもそもの発想が、当時はでに活躍していた芦峅寺や大山村の山案内人たちを意識してのものであったろう、などという私的な推測はこのさいさておくとしても、すくなくとも、黒部の山案内は地元の山案内人の手で、といった考えがあったことは否めまい。

新作と同郷の柳原虎松（明治二十六年十二月十日〜）は、

「わしらは、吉沢先生に誘われてはいったが、指導は全く受けなかった。これは下立の衆みなについていえることだ。わしなどは、古河合名の測量に従事して、いまの十字峡あたりまでいく度となく歩いていた関係もあって、この会にはいる前から山案内をやっており、その必要を感じなかった。ただ、会にはいってからは、吉沢先生を通して、登山客を頼まれることが多くなった」

といっている。伊太郎も同様のことをいう。つまり、黒部保勝会の結成は、ばらばらであった山案内人を組織化することによって、それまで劣勢だったかれらの活動をさかんにするために、大いに役立ったのである。

下立衆の場合、登山客の案内についての連絡が直接かれらのもとへ来ることは、まずなかった。たいていは、吉沢庄作から、此川清を経てはいった。清は別にこの会員ではなかったが、運送店を経営していたことなどもあり、連絡事務がやりやすかったのであろう。しかし、虎松にいわせると

「かれは、きかん坊で——」

と、いう。きかん坊というのは、ボスというぐらいの意味であるが、この家にはしじゅう集まっていた。むろん山の相談ばかりとは限らなかった。勝負事に目がない連中もいたというから、時には、小さな賭場に変わることもあったらしい。冬にはいる前の「山じまい」と、二月九日の「山まつり」には、吉沢庄作を招いて恒例の酒宴をはった、という。

そんな下立衆ではあったが、内部はいくつかのグループに分かれていた。たとえば新作、岡崎三次郎のグループであり、栄

吉、伊太郎、耕平のグループであった。

耕平は、滝林耕平（明治二十六年二月四日～昭和四十三年十二月十二日）。同郷の新作と、塚本繁松の黒薙川踏査行をたすけたことは、すでに書いた。北又谷支流漏斗谷（じょうごだに）の耕平滝は、塚本の命名でかれを記念したものである。

「父は百姓で、決してそんな山人ではなかった」

長男の捨吉は、謙遜しながら話す。

「若いころは、農作業の合間に土方に出たり、ネズの板の搬出人夫をやったりしたものだ、と聞いている。」

ネズの板は、樺平から宇奈月へ担ぎ下ろすのだが、そのころはまだ軌道が敷設されていなかったから、せいぜい一日一往復であったろう。しかし耕平は、このアルバイトを通して、虎松が評するように「荷担ぎに強い男」になっていったのであろう。

「柳又谷がとくにくわしかったのでは」というと、

「測量の手元としてたびたび出かけたというし、そのほかにも、小川温泉元湯から越道峠経由ではいったり、祖母谷からまわりこんだこともあったようだ」と答え、さらにつけくわえる。

「わしらに何度も柳又谷へは決してはいるな、といっていた」と。

はにかみ屋で、自慢することの嫌いなかれは、谷の峻嶮さを説くだけで、自分の子にすら、冒険談を吹聴することがなかったようである。二十年勤続で、日本通運から表彰を受けたのは、ずっと後のことと聞く。

「とても、まねはできなかった」

と、かれの山歩きのうまさを絶讃するのは、伊太郎である。祖母谷と祖父谷との間にある中背尾根や、八峰キレットなどに道をつけに歩いたりして、後立山連峰に多くの足跡を印しているかれが舌を巻くのだから、ただものではなかったのであろう。その上、誠実温厚な人柄であったと伝えられるから、年上の栄吉もかれには一目おいていたであろう。

栄吉らは―栄吉と伊太郎が縁戚関係にあることもあったが―山案内に出るときは、うまが合うというか、決まって一緒だった。このトリオを最も最屓にしていたのが、石部夫妻で、直接指名がくるくらいであった。その関係はおよそ十数年に及んだという。特に栄吉とは親交があった。長女を手伝いとして石部家へ上げていたこともあって、黒部へ来たときには泊まっていくことさえあった。

いま、わたくしの手許には、かれらが石部夫妻と撮った写真が数葉ある。伊太郎は、「柳又谷広河原」、「赤沢出合」、「平小屋」、「坊主小屋」の四種を即座に指摘したが、これ以外は思い出せないという。「坊主小屋」といえば、黒部保勝会の建設になるものだが、一行は以後どこへ向かったかはつまびらかでない。亨は「父は、石部夫妻を案内して剣岳から小黒部谷へ下ったことがあるが、これは剣岳から同方面へ下山した最初の女性ということになる、といっていた」と、いう。どうかすれば、「坊主小屋」の写真がこれと関連があるのかもしれない。しかし、もしそうだとしても、その年月日などの詳細は、資料不足でいまのところ明かにできない。

さて、新作の山案内歴であるが――。

秩父宮雍仁親王殿下が立山に登られたのは、大正十三年五月である。その詳細は、吉沢庄作の『立山』（大正十四年）に明かである。以下殿下の御日程をそれから摘記する。

六日　事務官前田伯、細川侯、槙有恒らを先導として、立山でスキー御練習のためご来富。芦峅寺、佐伯静方にご一泊。

七日　藤橋、ブナ小屋を経て弥陀ケ原にてご一泊。この日、付近でスキー御練習。

八日　風雨の中を室堂に御到着、立山気象観測所に入らせらる。

九日　ミクリヶ池方面まで、スキー御練習。

十日　立山御登攀。帰途、浄土山に立ち寄られ、山頂より一ノ越経由で室堂へスキーで御帰還。

十一日　剱岳御登攀の計画を、烈風のため御中止。地獄谷まで御巡遊。

十二日　スキーで御下山の上、御帰京。

秩父宮雍仁親王文集『思い出の記』（昭和三十九年）には、このときの殿下の紀行文が「山の旅」として収められている。

「父は、秩父宮殿下について立山に登ったことがあるといっていた」

と、友二が語ってくれたのは、おそらくこの年のものであろう。むろん、人夫としてであったろうが、しかし新作が殿下の立山登山に加わったことを証す文献には、まだ接したことがない。ただ、以下に記すような間接的な証拠、つまり傍証らしいものがかろうじて存在するのみである。

―新作には流行を追う癖があった。ラジオを求めたのも、スキーを仕入れたのも、この界隈ではきわめて早い方であった。スキーの練習は、裏山にあたる鉞岳で、生地のツグミとりの小屋を借り、泊まりこみでやった。そして、やがてここがスキー場にでもなるようなことがあったら、この小屋を買いとって此川清と共同経営することをもくろんでいたという。大正十年、朝香宮鳩彦王殿下の立山登山に案内役を仰せつかったことのある吉沢庄作が、スキーもやれる新作を、黒部保勝会から推挙したかもしれないのである。

友二は続ける。

「父がいうには、ある日警察から呼び出しがきた。胸におぼえのある父は、さては露顕したか、と大いにうろたえたらしい。おそるおそる出頭してみると、案に相違して、殿下の案内であったので胸をなでおろした、といっていた。」

新作がおそれたのは、先にも記した此川清宅での手慰であった。

ところで、新作の三男、孝成（現姓川瀬、調布市在住）のところに、あどけない少年を含む六名の登山者が立ち並ぶ写真がある。このうち、大きな荷を背にして木の枝を杖にしている両端のふたりは山案内人で、左端の人物が新作である。ピッケルを手にした内側の四人については、その裏面にある「小黒部雪渓ニテ、右ヨリ田口（兄）、安井サン、富士沢、田口（弟）」という走り

書きが解明の手がかりになる。この写真をめぐって、田口（弟）すなわち田口二郎から、およそ次のような内容の私信（昭和四十九年九月十二日付）をいただいた。

「わたくしたちの少年の頃、初めての日本アルプス行―黒部・剱―のときのもので、鮮明におぼえている部分もありますが、大方は忘れてしまいました。この時同行した四人はみな他界して、小生ひとり残っています。此川氏は背の高い、がっちりした中年の男だったように思います」云々。

続いて九月十八日付で『甲南高等学校山岳部報告』第二号（昭和四年）の「剱岳生活」の写しが送られて来た。それによると、一行はリーダーの田口一郎以下、田口二郎、安井博彬、富士沢浩、喜多又太郎の五名に、山案内人の新作、半場米次郎（小黒部谷のみ）のふたりを加えた七名であった。一行は、昭和四年七月十五日から小黒部谷経由で剱沢入りをし、八ツ峰や源次郎尾根を登攀後、二十七日に立山温泉に向けて下山している。

友二らの話を総合すると、新作はおもに学生たちを、黒部や剱へ案内したらしい。しかし、旧制甲南高等学校山岳部以外の文献をまだ手にしたことがなく、多くを語れない。

昭和十六年夏、新作は次男、繁春（現姓宮本、富山市在住）を連れて白馬岳に登っている。わが子を同行したのは、生涯のうち、この一回だけであった。―それも、くどいほどの注意を与えて、白馬岳から往路を帰している。なんでもこのときは、四谷から登ってくる広島高師の先生某と落ち合って、後立山の縦走をやるらしかった。新作親子は祖母谷から登ったのだが、

「当時、中学の四年であったが、荷物を担いだ父に、空身同然でついていくのがやっとであった」

と、繁春は父の健脚ぶりをなつかしむ。

この年の新作は燃えていた。念願の平ノ小屋を、翌十七年から経営する手はずが整ったからで、かれはこの年の秋に、数十人分のふとんをそこへ運びこんだという。

しかし、かれは、それをまたずして、昭和十七年三月十三日にこの世を去った。明治二十五年三月十七日生まれだったから、享年四十九歳ということになる。

（文中敬称略）

（追記）本文中に記載された石部幸弌氏について記しておきたい。

明治二十八年（一八九五）七月十七日山口県厚狭郡楠町船木で誕生、大正八年早稲田大学商科卒、同盟通信の前身である国際通信社、新聞連合社を経て同盟に移り、同盟通信社経理部長兼総務局次長、経済局長等を歴任、終戦後電通役員、昭和二十八、九年頃から病気のため秘書役室付となる。

山口中学時代から山が好きになり、大正十年頃から北、南アルプスに登り、特に黒部渓谷に興味をもち毎年時期をかえて三回位ずつ谷に入り、黒部川の支流には殆んど足跡を印した。また山岳写真にもすぐれており、終戦後新宿三越、銀座三越、福岡岩田屋デパート等で個展を開く。

昭和十年五月、松方三郎、槇有恒氏の紹介で日本山岳会入会、会員番号一五九七番。

昭和三十年（一九五五）九月十四日逝去、享年六十歳。

以上は石部氏と交友のあった吉沢一郎氏をわずらわし、石部夫人からの手紙によって記したものである。

（望月達夫記）

〔松方三郎追悼講演〕

昭和四十九年四月二十二日、本会は、名誉会員松方三郎氏の多大な業績を偲んで追悼会を赤坂OAG会館でひらいた。宮下秀樹常務理事の司会により、槙有恒、藤島敏男、加藤泰安三氏の追悼講演がおこなわれたが、ここに収録したのはその全記録である。

その山の生涯

槙　有　恒

名誉会員・松方三郎さんの追悼会にあたりまして追悼のお話をなさる方は、多勢いらっしゃると思いますが、御指名にあずかりまして私がまず最初に故人を偲びたいと思います。

御承知のとおり松方三郎さんは、社会的活動のたいへん広い方でありました。同盟通信社から共同通信社でのお仕事、あるいは芸術の方面、あるいはまたロータリー・クラブとかボーイスカウトなど、とにかく八面六臂、なんでもみなそれぞれこなして、よきリーダーとして生涯を終えられたのであります。ここに飾られた遺影にありますように、本当に精気発溂として、あふれるような元気を終生もっておられた方でありました。日本山岳会の会長を長くつとめておられたのですから、みなさんも御交友の上から、ことに晩年の松方三郎さんとは、いろいろと深い関係をおもちと思いますので、私は松方三郎さんとつき合いをはじめたころのお話をちょっとだけ申し述べて、故人を偲びたいと思います。

私と松方さんとの交友のはじまりは、大正十年の暮であります。それはその前にスイスで三郎さんの義兄にあたります黒木三次さんと私は懇意にしておりましたことから、私がヨーロッパから帰ってきたとき、黒木さんの招きで黒木さんのお宅でお会いした時がはじめてであります。たしかその時は立山でなくなった板倉勝宣さん、それから今、体を少し痛めて隠居しておられます伊集院虎一さんとか、みんな学習院の方々と一緒だったと思います。その後、私は本郷に住んでおりましたが、各大学の山岳部の若い人達が始終お見えになってなんのかんのと、山の話をお互いに話しあっておりました。そのなかでもことに松方三郎さんとか学習院の人たちは始終、自分の下宿にくるようにやってきて、帰りの電車が、なくなってしまい、泊っていったりしました。泊りがけで山の話をしておりますと、山岳会で山の小屋が欲しいとか、そんな夢を語ったものであります。一方、松方さんの住まいは三田の慶応義塾の隣りにありまして、その一隅に明治時代の木造の二階建が独立してありました。そこに慶応義塾山岳部の早川種三さん、三田幸夫さん、佐藤文二

さん、佐藤久一朗さんなどが塀を乗り越えて、と申しますのは門から入るのが面倒なもんらしく、よく集まってさわいでいたのであります。そんな時代でありました。その時代は登山技術といいましても、今日とはだいぶ様子がちがっておりました。たとえば私たちが山に登るにしても、草鞋と雑嚢をもって、そして露営には油紙をつかうとか、小田原提灯をもって歩くとか、そんな時代でありました。ともかく、幸か不幸か私がヨーロッパに少しおりまして、岩と氷と雪の山のわずかばかりの技術をもって日本に帰りました。私にとってもはじめての経験だったのですが、いかにもそれが若い人に興味をひいたものらしいんであります。

その当時の日本の登山界は、積雪期の山に入るということを念願し、研究しておりましたけれど、まだ実際には、具体化しておりませんでした。というのはスリーピング・バッグをどのようなものにつくろうかと、私らは、松方三郎さんも一緒だったと思いますが、横浜でトナカイの毛皮をみつけて、それで作ったりしたのであります。出来上ったのは、暖いんですが、たいへん重いもんでした。そんな時代でありまして、イギリスのスリーピング・バッグをモデルにして作ってみたりしていたような時であります。夏の山に登る人は相当にふえてきていましたが、ピッケルとかロープであるとか、あるいは登山靴であるとか、そういうものはなかったのです。それだけにヨーロッパの雪と岩、雪線上の山の経験を持ち帰ったことが、仲間の若い人たちからたいへん高く評価していただきました。それは何も私の功績などというものじゃございません。その時は若い人たちがひとつの夢と感激をもっていたのでありまして、ちょうど咽喉の渇いた人が水を求めるように、ヨーロッパの山の文献を手あたり次第に集めて読みだしたんであります。そういう熱心な若い人のひとりに大島亮吉君がいました。それはつまりアルプスの発見であると同時にもうひとつはヨーロッパの文化の中でのアルプスというものを発見した喜びなんであります。決して猿のように登るというだけではありません、山登りのなかにふくまれているひとつの文化の発見であります。ヨーロッパの中世期このかたの文学史に、あるいはまた美術などいろんなところに現われているものを、われわれは熱意をもって、感激をもって求めたのであります。松方さんもその一人でした。松方三郎さんは白樺派に親しくしておられた方で、それだけにたとえば絵の方では、岸田劉生さんの作品がお好きでしたし、あるいはウィリアム・ブレークの絵と詩をたいへん気に入っておられた。まるで気狂いのようにブレークを熱愛していました。今日の若い人はそんな時代もあったのかとお思いになるかも知れません。たいへん夢の多い時代でした。つまりロマンティックだったのでありまして、私は今でも思いのこすことはありません。そうした夢が松方三郎さんと私との交際に終生続いていたのであります。お互いに勝手を知った仲間でして、そんな夢は年をとってまでも刺激になりました。晩年の松方三郎さんは、「自分はいろんなことをやってみたけれども、いつも変らずに残っているものは山登りだった」と、述懐していたことを記憶

しております。

佐藤久一朗さん、松方三郎さんと私の三人で雪の富士山に登ったことがありました。十一月の半ばか末頃でしたが、一度降った雪が凍りついていて、五合目から上は鏡のようになっておりました。それをステップを切ってやっと八合目にたどりつき、時間がなくなったためやむをえず下ったのですが、そのとき松方さんは、海面からそそり立っている高山だけに雪、氷の変化が激しいにちがいない、今後、冬の富士に登って突風なんかで事故が起きることは多くなるんじゃないか、と述懐しておりました。三郎さんは富士山を非常に愛しておりまして、おそらく数十回は登っているでしょう。後年には富士登山は年中行事になって、私設富士学校の校長と自称していました。若い人たち、親戚縁者、あるいは外国人を引き連れていきまして、吉田の火祭をみて帰るというのが、晩年のたのしみだったろうと思います。なかなか元気な方でありました。

第二次大戦中はたしか満洲におられたと思います。そして戦後、いろいろと世の中が変ってまいりまして、そのひとつとして日本体育協会にすべての日本のスポーツ団体が加盟するようなことがおこりました。日本山岳会が、日本体育協会に加盟したのは、たしか松方三郎さんが会長をつとめておられた時じゃなかったかと思います。そのひとつのことをとってみても時勢をみること、そして対応の仕方は適確であり、敏捷な方でありました。

いろいろと想い出はつきませんが、大正十五年に秩父宮様がアルプスで一夏、登山をなさいました。これは当時のアルプスでもめずらしく大きな登山だったんであります。それは仲間が大勢だとかそういう意味でなく、天候に恵まれまして、いわゆる四千メートル級の山を十一座でしたか、なんでも十以上、一夏に登ってしまったのであります。もちろん秩父宮様はじめみんなそれだけのトレーニングと準備をかさね、そして当時のスイスの一流のガイドに参加してもらっておこなったものでありますが、宮様にとっても終生忘れることのできない、大きな愉快な登山でありました。三郎さんはこの一行の中心になってなかなか元気でした。たとえばマッターホルンに登った時にこんな話があります。当時、大使はまだなくて公使でありましたが、日本の公使から、そのころ輸出用の洋罐がツェルマットの宿へとどけられました。それは大きなブリキ罐のなかに嗜好品がおさめられていまして、インド洋を船で送っても変質しないように作られてあるんであります。私はそんな大きな重いものは、ロッククライミングには不適当だからやめようと言ったんであります。そうすると松方三郎さんはこんなものはしょうがないやとかなんとか言っておりましたが、秩父宮様はそこはお人がいい方でありますからすぐにひっかかって「それじゃ私がもっていこう」と言われました。秩父宮様はその重い洋罐一本と、そのほかセーターなどをもたれて出かけました。頂上につきますと、松方三郎さんはさりげなく「殿下、洋罐を出しなさい」というわけであります。三郎さんは酒ものまず煙草もすわない人でありましたので、甘いものは好物でした。こんな具合に茶

目っけのある三郎さんはいつも一行の中心でありました。また宮様の登山の準備も一緒に手伝って下さったのであります。それに言葉もよくできましたし、ともかくスイスでもイギリスでも大変に友達の多い方でありました。

その頃、ウェストンさんから、私と松方三郎さんと、それから浦松佐美太郎さんと三人が英国山岳会の会員に推薦されて入会したんでありますが、三郎さんは戦前から何十年というあいだ、英国山岳会の会員として勤めてこられた方であります。したがって先年、ロンドンで英国山岳会の百年祭の時に、会長の挨拶の中にも会員の松方がはるばる日本からやってきてたいへん嬉しいという言葉を加えられたほどであります。それほどに知友の多い人であります。せまい島国だけでちょこちょことするのでなくて、世界の人を友として、世界を自分の舞台として動きまわっていた人であります。ことに昭和四十五年の春に日本山岳会が主催いたしましたエベレスト登山の時、隊長として実に面倒な大きな隊をひきいて、その目的を達成しましたことはみなさんも御承知のとおりであります。また晩年はボーイスカウトの世界大会を富士山の山麓で開いたのであります。世界中からボーイスカウトのメンバーが集まるのですから、広いところが必要でありますが、やはり自分の好きな富士山を世界の若者にみせてやりたい、こういう念願があったんだろうと私はひそかに考えております。その時、大きな嵐がきたりしたそうであります。私はそのころ立山に行っておりまして、実際のことはわかりませんが、そのジャンボリーはたいへんすばらしい集会であったようであります。事務の多い仕事をよくこなされたと思います。そのころから三郎さんは体を悪くしまして、ついに再起されなかったんでありますが、なくなられる年の七月、病院に尋ねましたら、椅子の上に座って、トーストをたべて牛乳をコップにとって飲もうとしたらどうも喉が通らないんだ、そしてつばをのむのもつらいんだ、と言っておりました。いかにも気の毒でありました。もちろん点滴の栄養剤はとっていたにちがいないんでありますが、一時間くらいゆっくり話しあいました。私は重い病気だとおもいましたが、三郎さんにはいささかもかげった気持はありませんでした。そんなところはさすが松方三郎であると非常に尊敬の念を深くして帰ってきたのであります。まだまだ存命でしたらますます日本のためにも山岳会のためにもいろいろとよいことを考えていただけたのにと思います。個人としての寿命を非常に惜しみますと同時に、またわれわれの仲間としてもたいへん尊い人を失って、償うことが出来ないように思います。おそらく三郎さん自身は悔いを残すことのないような人生を濶歩した人だろうと思います。こういう立派な生き方をされたのは、たんに境遇ということだけでなくて、やはりその人の御性格による偉いところだろうと思います。

日本山岳会への盡力

藤島敏男

松方君が日本山岳会に入会したのは、大正六年、一九一七年であります。私より二年早く入会したのであります。考えてみますと、彼は一八九九年の生れでありますから一七年に入会した時は学習院高等科の末期だろうと思います。ただ私がその二年後に入会しても、当時の山岳会では年に一回の大会があるくらいで会合というようなものはありませんでした。小集会の始まったのは大正八年、私が入会した年からであります。そのころ彼はすでに京都大学に移っていたと思うんであります。したがって彼と会うようなチャンスはありませんでした。

私が松方君と知り合いになったのは、彼が昭和三年三月、ヨーロッパから帰ってからのことであります。その年の四月に三会堂で第二十一回の山岳会大会がありまして、そこで帰朝早々の松方君が「ヨーロッパの山二、三」という題で、アイガー、マッターホルン、ラ・メイジュの三つの山について講演をいたしました。その時、大きな紙に自分で山の絵を書いてきて話をしましたが、その時が初対面でありました。その後、急に親しくなりまして、松方君と僕と馬があったかあわないか、そこのところはちょっとわからないのでありますけれども、松方君は私の牛込の家にも時々やってきました。夜おそくまで話をしていると電車がなくなって、お茶の水の文化アパートまで、そのころも彼は小さいリュックザックをさげておりましたけれども、それをかついで歩いて帰ると、大曲の交番で時々とがめられたということをよく言っておりました。

松方君は昭和三年に日本に帰ってきて、その翌年の九月に、今の理事、その当時の幹事でありますが、幹事に推薦されて、そしてなおよく会うようになったんであります。彼は幹事になったとたんにクラブ・ルームとライブラリーをぜひつくろうという提案をしました。みんな異議がないのでさっそく松方と私が家さがしに出かけました。虎の門の不二屋ビルがまだ仕上げのできてないときで、足場をわたりながら三階へ上ってどんな部屋があるかと検分をしたこともあったのであります。そんなことを今、思い出します。

その年の十一月にはクラブルームと図書室が出来上ったのでして、このへんは非常な早わざだったといえるかとおもいます。二人で一所懸命やったのを思い出します。出来るとすぐに本をあつめにかかったのであります。それまでは図書とか雑誌はみんな幹事の私宅にあずかっていたんでありますが、それを運んで整理をするのに、松方君は懸命になって先に立ってやりました。ライブラリーを充実させるとか、会を運営するとかいうことについて、松方君はいつでも率先しておこないました。私も

しばしば彼にそそのかされて片棒をかついだというわけであります。

松方君が日本山岳会に対して非常な熱と力をそそいだということを、私は私なりに考えてみたいとおもいます。彼の学習院時代にはまだ山岳部はなかった。スキー部と旅行部というものがあった。けれども山岳部はなかった。これは先日同級生の伊集院虎一に訊ねて聞いたんでありますが、なかったそうであります。それから京都大学に移っても、そこにはまだ山岳部はなかったんであります。それで結局、あくまで日本山岳会が松方君にとっては本拠であった、というふうに私は感じます。松方は最後まで日本山岳会の松方であって、学習院の松方でも京都大学の松方でもなかったということをここにちょっと私はつけ加えたいと思います。

松方はさきほどの槙さんのお話にもあったように、ノー・アルコールでノー・スモーキング。ただし食べる方は超一流でありまして、ことに甘いものに目がないんであります。ある夏、御殿場の宮様の別邸で集まりがありました時に、御殿場の婦人会から大きなおはぎがお重につまって、おやつに献上されまして、私などはそのおはぎをみただけで、ひとつやっとというのを彼はなんと四つ平らげたんであります。それでけろっとしているんであります。おしるこなども非常に好きだったとみえてよく食べましたし、うなぎが大好きで二人前ぐらいは食べるというような食欲の持主でありました。よくお酒に強いということを申しますが、私に言わせれば彼はおはぎに強かったと言えるんじゃないか。酒に強いのもいればおはぎに強いのもいる、松方はそのあとの方なのであります。食べものについて超一流の松方君に、私はよく君の胃袋には引出しがついているからとからかったものです。

話し相手としては、美術についても陶器についても、あるいは書物についても、これほどいい話し相手は、また得難い存在だったと思います。それから私がどんなに皮肉をいっても、辛辣な悪口を言っても、打てば響くように言葉のかえってくる友達は、彼の右に出る人はありませんでした。今、私は松方という好敵手を失って、一体これからどうしようかと思って途方に暮れていると申し上げたいのであります。松方君が、大分前のことでありますけれども、ある集りで「藤島より先に死んではたまらない」と言いますので「どういうわけだ」「やあ、藤島みたいな奴と一生つきあって、先に死んでは浮かばれないから」ということを言って、座にいた人が非常に大笑いしたことがあります。

最後の入院のときには、時々彼の病室を訪れましたが、ある時見舞いに行きましたら、二番目のお嬢さんが病室から飛び出してきて「ただ今、点滴の最中、面会謝絶、よっぽどつらいものらしい。さっきこれを藤島にやらしたいなあといってたわ」と言いました。そんな話を聞いても、丈夫な私は点滴をしてもらうわけに行きませんから、そのまま帰って参りました。まあ、そんな間柄だったのが、とうとう松方君は私より先へ天国に行ってしまいました。非常に残念であります。

私はどうも天国よりも地獄の方に縁が深そうなので、松方君と再会する見込みはない。これがまことに残念であります。

指導者としての松方さん

加藤泰安

お二人の名誉会員が三郎さんの思い出話をしたあとで、若手を代表しまして、私が松方さんを偲びたいと思います。

私が松方さんにお目にかかりましたのが大正十四年であったと思います。学習院に入りまして山岳部ではじめて先輩団との会合をするということになりまして、そのころ二年生ぐらいのヤンチャ坊主でありましたから、先輩がきたらなんとか先輩を怒らせて一所懸命われわれを大事にするようにしむけようと、みんないろいろ作戦を練って、一週間ぐらい予行演習もいたしました。先輩のなかでも松方さんと伊集院さんの二人が、みたところ一番強そうなのであります。うっかりするとなぐられるかも知れんということで、二人のまわりには六尺腰掛けをバリケードのようにつくって、たいがいのことをいってもなぐられないように準備をしていました。やってみましたらなんのことはない。簡単に笑い飛ばされてしまって、もうわれわれ大いに拍子抜けしたのです。これが松方さんにお目にかかったはじめてでございます。

それから山の話やなんかでしょっちゅう伺いました。それから二、三年たちまして十一月の富士山に連れていっていただきました。その時は槙さんと松方さんとわれわれ中学生二人でありました。大先輩についていくので大いに緊張していったのでありますが、八合目にまいりましたら「子供たちはアイゼンをとれ、ステップを切れ」。びっくりしてしまいましたが、それでも大先輩に言われたから必死で切りました。あそこから上までかなりあります。ふうふういって切っておりますと、あとから槙さんが、「三郎さん、ステップカットをしているのをみると男の中の男という感じがしますなあ」と、もう当人たちはゆっくり歩いて御気嫌でいるわけです。こっちは上までやっとステップを切りました。そのころわれわれはセーターにウィンドヤッケ一枚をつけているぐらいでした。十一月の寒い日でありました。寒くなってきて早く下におりたいのでありますが、お二人ともヨーロッパ仕込みの毛皮の素晴しいのをきてヌクヌクとして「アイガーのなんとかは……」なんてしゃべっておりました。早くおりてくれないかなあと思っていると、私のステップは苦しまぎれにウンと幅を広げて切っていたのでありますが、下りは勘弁してくれるかと思ったら、こんどは「そのままアイゼンをつけずにおりなさい」。とても下りられたものではない。三郎さんが、犬っころをひっぱるようにザイルに結び目をつけて私どものあとから一歩一歩ついてくるんであります。私は滑

って、あんなくやしい思いをしたことはありません。そうやって鍛えていただいたことが、その後の山登りの深みに入らせたもとでありましょう。

その後、私たちは山登りの話を伺いに行ったり、いろんなことでお目にかかっておりましたが、山にお供したのはその後もう一ぺんありました。同じ十一月の富士山でありました。ちょうど伊勢湾台風がきた年であったかとおもいますが、五合目ぐらいの森林が全部倒れておりまして、これは山登りより木登りみたいなものでした。もう松方さんはそのころ相当肥満体でありまして、この木をかき登って下りるのに相当苦労しておりました。われわれは、ああいいきびだなあと思って一緒に歩いたのであります。

松方さんの紹介で、昭和五年に日本山岳会に入れていただきました。大学にすすむのについても、「まあ京都へ行ったがよいだろう。京都には今西錦司という変な奴がいるから、あの弟子入りをしろ」というので、喜び勇んで京都へ行って、とうとう京都で今西さんにカルチベートされて、今日にいたったわけであります。

めったにお供することはありませんでしたが、とにかくさきほどの槙さん、藤島さんのお話のようにおいしい物の好きな方でありました。しかもそれをおいしそうには召し上らないんでして、かならずフォークで練り上げて食べられるんです。サンドウィッチを一緒に食べたとき、これをどうするかと思ったら、サンドウィッチも練ってしまい、びっくりしたことがあります。

病院にお入りになって、かなり重態だと伺いお見舞に参りましたら、いきなりアンコロ餅を二つぐらいぺろっと食べてしまいまして「まあこれで体力がついた」と笑って話しておられました。ちょうど最後の御病気の時に、私は同じ慈恵大学病院に入院しておりました。私は、当時脳膜内出血といいますか、頭がぼうっとしておりまして、むしろ松方さんに毎日お見舞いただいたありさまでした。そして私が意識を回復したときには、松方さんがもうウツラウツラしておられたころであったと思います。医者がまいりまして、「お酒を飲んじゃいかん、煙草をのんじゃいかん」と言います。そうすると松方さんが一緒になって「そうだ、そうだ、泰安、もうやめろ」。そして女房と医者がいなくなると「いいよ、適当にやればいいじゃないか」。そんな具合で励まし方の非常に上手な方でありました。松方さんがお酒と煙草をのんでおられたら、まだ三十年ぐらい生きておられたと思います。ある時、お酒は飲まないといわれるので「松方さん、あなたはまあ、相当にうまいもの好きなのに、お酒の味がわからないというのは不幸ですね」といったら、しばらくじっと考えておられましたが、その会が終ってから家に電話がかかりまして「泰安、お酒ってそんなにうまいか」という電話でびっくりしたことがありました。おいしいものには目のない方でありました。

私が恢復しましたころには、松方さんはすでに昏睡状態に入っておられました。さきほどお話しがあった点滴であります

が、あれはほんとにいやなものであります。しかし、松方さんは辛棒強く点滴をやっておいでになりました。私のところにもおいでになって、点滴は私はもういやだといったら、これにはコツがあるんだ。点滴をあのボツボツと出るようにしたらたまんないんだ。医者のいない間にさっと出るようにしろ。そういうふうにしておられたかどうか私にはわかりませんが、最後まで辛棒強く点滴をつづけていらしゃったのが、今でも目にうつります。

あの懐しい、本当に大事な先輩が亡くなられて、もうあの笑顔がみられないことは、本当に悲しいことであります。日本の中で、また日本山岳会でもこんな素晴しい指導者はなかなか出ないでありましょう。あれだけの教養と人間的魅力といいますか、ああいう性格というものは、生まれながらにできたもので、ただ三郎さんのご冥福を祈るばかりであります。もちろん三郎さんはハライソにおいでになっております。私はインヘルノにまいりますので、もうとてもお目にかかれませんが、まあ来世か来々世ぐらいにはヒョッとしたらまた、お目にかかるだろうと考えております。

三氏の追悼講演のあと、松方三郎氏長男峰男氏から謝辞がのべられ、つづいてサミュエル・ブラヴァンド氏より寄せられた追悼書簡（松本重治宛）が板倉勝正常務理事から披露された。ブラヴァンド書簡は、共同通信社刊『松方三郎』（昭和四十九年九月）に収載されたが、のちに田口二郎氏からその訳稿が寄せられたので、つぎに掲載する。

遠い国から

グリンデルヴァルドの古い友人たちを代表して

サミュエル・ブラヴァンド
田口二郎訳

昨秋のこと日本から私達の手許に松方三郎氏が長い苦しみのちに、九月十五日（遂に）世を去ったとの悲しい知らせが届いた。同氏が重病であったことは、私たちグリンデルヴァルドにいる故人の友人達は知らされてはいたものの、訃報に接した時、さすがにそれを信ずる気持になれないのだった。しかし松方氏の面ざしは私たちの胸のなかに生きているし、彼のたゆることのない明るい笑いとあの人好きのする人柄は（いつまでも）私たちの周辺に居つづけることであろう。

松方三郎は日本からやってきた大きな登山家家族に属していた。槙有恒、槙智雄、松方三郎、別宮貞俊、秩父宮、浦松佐美太郎、渡辺八郎、松本重治、国分貫一、高木正孝、山崎春雄、磯野計蔵、井田清、藤島敏男、そして田口一郎、二郎の兄弟、以上の諸氏がその家族の構成員であった。

一九二五年、と言えばまもなく五十年前のことになるが、その年初めて松方氏は私たちの谷を訪れた。彼以前にここに来た日本の登山家といえば、槙有恒、智雄と、別宮の諸氏にすぎなかった。松方氏は初心者としてスイス・アルプスにやってきたのではない。故国において、すでに第一級のアルピニストとして育っていたわけだ。（それは）二五年の七月の上旬やってきて、すぐさま山にとりかかった時、実証されたのであった。七月十五日のヴェッターホルンを手始めとし、十八日はユングフラウ、その日はその脚で西尾根伝いにメンヒを登り、ベルグリ小舎までトラヴァースし、翌十九日にはメンヒ・ヨッホ越しにコンコルディア小舎に到達、そこからフィンスタールホルンに登頂、シュトラレッグ小舎にいたり、その後進路をエンゲルエルナーの岩峰群に変え、七月二十八日にはキング・シュピッツェ、二十四日にはジンメルシュトックを登った。七月二十八日はラウターラル尾根伝いにラウターホルン、二十九日にはグロース・シュレックホルンに登頂、アンダーソン尾根を下ってグレックシュタイン小舎へ。

私（の記憶）に間違いなければ、その年の冬――一九二五年から二六年にかけて、松方氏はグリンデルヴァルドを本拠として欧州に過されたと思う。方々に旅したが、イタリーを訪れ、私たちの谷ではスキーを楽しんだ。二六年には春にさきがけて（裏の）ファウルホルンに登っている。ホテル・アドラーの白い犬二匹が大抵の場合、松方氏の忠実な伴侶であった。

二六年の七月の初旬、槙有恒氏がふたたびのグリンデルヴァルド入りした時、松方氏は槙氏とともにヴァリスを訪れ、とも

に素晴しい日々を味わった。ツェルマットでは七月十四日にツィナルロートホルン。十七日には、オーベルガーベルホルンに登頂、アルベングラートを降りる。二十日にはダン・ブランシュ、そこで（南方に反転し）二十四日はビーチホルンの北尾根から派生した北東支脈を乗り越え、西尾根伝いに同峰の頂に立ち、ベルナー・オーバーランドに抜けた。

八月一日に槙・松方両氏の姿はエンゲルヘルナーの岩峰に見られ、ジンメルシュトックを登る。八月四日、二人は友人の渡辺（八郎）、松本（重治）の両氏とヴェッターホルンを登り、降路を急峻な西側の側壁をたどった。八月七日、ふたたびグロース・シュレックホルンに登頂、十一日には（エンゲルヘルナーの）キングシュピッツェの尾根をトラヴァースし、夏シーズン前半の最後の岩登りを行なった。

同年八月は、秩父宮殿下との山行に（筆者ブラヴァンド）は忙殺されたが、松方氏はそれには参加されなかった。しかし九月になると、友人の槙、渡辺両氏とメンヒをノルレンから、（また）アイガーをミッテルレキー尾根から登頂している。アイガーの（下半身である）ヘルンリ尾根の試みは準備が不足で果されなかった。

一九二七年、松方氏はあらためてグリンデルヴァルドにやってきた。この時、友人浦松佐美太郎氏を伴ってきた。八月三日、両人はエンゲルヘルナー山群のミッテル・グルッペを登り、同月六日にはアイガーのヘルンリ尾根の記念すべき初登攀をなしとげた。

八月九日には両人の姿はユングフラウの頂でみられ、そこから両人は進路をヴァリスにむけた。ツムット尾根伝いにマッターホルンに登頂、降路はイタリア尾根をたどり、（次に目ざした）ヴァイスホルンは悪天候に阻まれて退却した。次に来るのが（フランス・アルプスの）ドーフィネの旅だが、かみなりといなづまと吹雪をついてラ・メイジュの登頂を手に入れた。（さらに）シャモニーにいたり、プティ・シャルモーズを登り、エギーユ・アルジャンティエールの登頂ののちに、（この山旅の）素晴しいむすびとしてグレポンの岩頂に立った。

当時、松方氏はある山案内人のガイド手帳に次のように書きこんでいる。「アイガー・ヘルンリ屋根の空恐しいギャップ、白いマッターホルンの凍てつく登攀、そしてメイジュのいなづまと吹雪が思い出として残るかぎり、私たちは彼の（この山案内人の）たゆまない完璧なガイドぶりを忘れることはないであろう。」以上述べた松方三郎氏のすべての山行に、山案内人として同行したのは、エミール・シュトイリとサミュエル・ブラヴァンドであったが、松方氏はこの二人との友情を最後の死の日まで大切にされたのだった。

松方氏は初めのころはホテル・アドラーに逗留していたが、後になってはもっぱらホテル・バーンホフ・ダービーを滞在の場とされた。（そして）その所有者であるメルクレ・グシュタイガー家の人々と深い友情でむすばれることになった。グリンデルヴァルドを訪れるたびに、いつもそこに帰ってくるのだった。一九二六年の夏の終り、松方氏は槙、渡辺両氏とホテルの二人

の息女をつれてフィニスタールホルンに登り、グリムゼルに下りている。

私たちすべては、素晴しい山登りの体験がまるで昨日の出来ごとであるかのように、美しい日々を思い出すのだ。松方氏は、もう山に登らなくなった後年においても、グリンデルヴァルドには忠実であった。欧州を訪れるたびに、彼の「第二の故郷」に少なくとも短期間の寄り道をされるのだった。(また)松方氏から毎年年賀のたよりが欠けることはなかった。その賀状には彼が愛着してやまなかった家族の写真が添えてあった。松方氏のグリンデルヴァルドの多くの友人は、彼に先立ってすでにあの世に旅立っている。しかし私たち生き残ったものは、愛すべき人間、松方三郎を決して忘れることはないだろう。

注（　）内は訳者の日本文補足

ブラヴァンドの追悼文について

田口二郎

右に翻訳したグリンデルヴァルドの名案内人サミュエル・ブラヴァンド（子供の頃からの通称はザミ、即ちサミュエルの略称）の故松方さんにたいする追悼文については、これがもたらされた由来について書いた方が、その内容についてもよくわかり、また筆者にたいする礼儀とも思われるので次に説明を加える。

ブラヴァンドその人について書くのが目的ではないので詳述はしないが、あるいはそれを必要としないほどに、わが国のとくに山岳会の古いジェネレーションでは知名の人であろうと思う。彼は現在、齢七十の半ばを越し、緑なる美しい故郷の谷で静かに余生を送っている。数年前にはスキーで脚を折ったというから肉体的にも頑健とみえる。それもそのはず彼は少年のころから、村のほとんどの子供たちのように草地を耕し乾草を刈り、それをやまと背負って牧舎にはこび牛の世話をしてチーズ作りを手伝った。根っからのスイス高地の百姓だ。幼年のころ、彼の父はヴェッターホルンの頂で落雷の直撃をうけて即死した。父も百姓だったが、夏場には英国人のガイドをつとめた。ザミは二十歳を越してから父のあとをついでガイド免許をとった。長身屈強な若手として大いに嘱目されていた。しかし若いザミは村の他の山案内人とはすこし違ったところがあった。母方の血を受けて大変な勉強家、読書家であったことだ。村のインテリである。まもなく彼は村の小学校の教員となった。

彼の人生に幸福な転機をもたらしたのは、若き槙有恒氏の出現と、同氏がついに成就したアイガー・ミッテルレギー尾根初登攀への歴史的な参画である。これで彼はガイドとして一躍有名になった。ザミのその時の活躍ぶりは、槙さんの『山行』のなかにあざやかに描かれている。

爾来、第二次大戦の勃発までほぼ二十年間、あまたの日本人登山客の依頼をうけて数々の輝やかしい足跡を残した。私事にわたるが訳者も一九三〇年の後半に兄の一郎とともにスイスを

訪れ、アルプス登山の手ほどきをザミから受けたひとりである。追悼記にはこのような手ほどきを受けた日本人訪問客の名が列挙されているが、これを目にするとひとつの時代が浮かびあがってくる感じで興味深い。

槙さんを発端としてザミはもっぱら日本人との交渉をひろめ深めているが、さきに書いたように彼には教職という本職があったので、ザミの方から依頼人の選択が出来る立場にあったようだ。一九三〇年の後半、ザミは、ベルン州から社会民主党々員として出馬し国会に入った。戦時は主都ベルンにいることが多く、やがてベルン州の鉄道大臣になって故郷の山河のためにおおいに尽し、ベルン大学から名誉博士の称号を贈られた。このように彼の経歴を走り見しただけで、彼がただのガイドではなかったことがわかるが、晩年勇退して故郷の谷に帰り、人生を回顧したときやはり戻るところは、断ちがたい山登りの世界であったとみえて、ヴェッターホルンを眺めながら、「グリンデルヴァルドの山案内人」なる書名の好著をあらわした。彼とゆかりある日本人は、ナンバーの入った美しい限定版を頂いたはずである。

ザミ・ブラヴァンドについてはこれ以上書かないが、彼についてやや立ち入ったのは筆者の紹介を目的としたほかに、もうひとつの理由がある。右に述べたザミの経歴からして松方さんとの交流には、もちろん山登りを中心としてではあるが、さらに幅広い文化的な交流があったと思えるのに、追悼文では如何にもその面での触れ方がうすい。

ブラヴァンドは訳者が訳文上での質疑にたいする応答のなかで、実はあの文章が日本山岳会のジャーナルに正式掲載されるとは思わなかった。それを意識して筆をとったわけではない。それなら別の書き方があった。松方さんが村に来た時にはいくたびも自分のシャレーの客であったし、戦後訪日のさいは松方邸の客にもなった。できれば、もっとパーソナルな思い出を書きたい、との申し越しを伝えてきた。

この追悼文の日本への伝達について、訳者は会報に「グリンデルヴァルドからの訪問客」と題した小文に書きとめておいたが、要約すると、この春ベルン州の観光団が日本にやってきたが、参加者のひとりが、グリンデルヴァルドの駅前のホテル・バーンホフのむすこのペーター・メルクレ君であり、ザミの文章はほかならぬこのペーター君によってもたらされたものだった。ところでペーター・メルクレ君の母堂マルタ老夫人は槙さんや松方さんと大変因縁のある人だ。ザミも書いているように、槙さんや松方さんは、マルタとその妹をフィンスタールホルンの旅につれて行っているのである。当時の人たちに人気のある娘だったのだろう。

このたび息子のペーターが初めて日本を訪れるさいに、マルタ老夫人は松本重治氏に息子をよろしくとの依頼を行なった。周知のように松本さんは槙さんや松方さんと同時代にスイスで山登りを行っている。旧知の老夫人の要請にたいして松本さんは、マルタさんに、何かの刊行物に載せたいのでブラヴァンドに松方さんのことを簡単に書いて寄こすように指示されたもの

と察知される。

ブラヴァンドが文章の終りの部分できわめて念入りに松方さんとホテル・バーンホフとのつながりについて述べているのは、マルタ夫人という依頼者の立場を考慮して文章にアクセントをつけているような感じをうける。しかし追悼文成立のこうしたバックグラウンドを一応頭に入れて読んでみても、ザミの文章は大いに読みごたえのあるものだ。松方さんの人となりと業績をしっかりと伝えているばかりでなく、結果的には、日本人が大いに活躍した一九二〇年代の欧州アルプスのスケッチとしての体をもなしている。スイス人の目でとらえたあの時代の日本人の山登りの総括として、この文章はユニークなものとして残ってよいと思う。

筆をそらさせていただくが、ザミは文章にとりかかるまえに古い案内人手帳をとり出したものと想像する。もっとも先述のとおり彼はグリンデルヴァルドのガイドの歴史をすでに一冊の本にまとめているので、松方さんの年代記を綴るにさほど苦労しなかったと思うが、とくに松方個人をとり出して書くためには、やはり松方さんがザミとの山行を終えるたびに自筆でそのメモを書き入れたブラヴァンドのフューラー・ブッフが一番たしかな手がかりであったろう。すり切れた手帳のページをめくるごとに、老ザミは頭のなかで、松方さんとの出合い、共にしたいくたの山行を昨日のように思い出したにちがいない。フューラー・ブッフそのものが登山史の重要な一部を作っている場合が多々ある。近年ではヴァリスのヨセフ・クヌーベルやアレックス・グラーヴェン、ベルナーオーバーランドではシュトイリ一家やザミ・ブラヴァンド、こういう連中の保持する手帳は山岳博物館入りして然るべきものだ。後年スイスを訪れた私たちが初めてザミの手帳をのぞいた時に、そこに槙さんや松方さん、浦松さんその他の方々の署名と所感とを発見して大変励ましをうけたことを思い出す。

ザミの追悼文は松方さんのすべての旅を物語っていないかも知れない。すでに麻生武治氏は会報のなかで、同氏が昔日に松方、松本重治、渡辺八郎、鹿子木員信の諸氏と行なった冬のモンテローザの登頂の思い出を語られ、この旅がザミの文章のなかでは言及されておらぬことを指摘されていた。こういうこともあるので追悼文は松方さんの完全な山行録とは言いがたいのだが、そこに列挙された山行は、松方さんが一流の登山家として自己を確立した最も重要な最も充実した時代の記録であり、そしてまた、この時代に松方さんのいるところにはほとんどいつも山案内人ザミがいて、ふたりは形影の関係になっていたのだから、この重要な時代の語り手としてザミを黙らせておいては、松方さんもご満足ではなかったと思う。

サミュエル・ブラヴァンドは、あらためて筆をとりたい、とその親切な気持を伝えてくれたが、この文章はこのままでも十二分に価値あるものと信ずるので、これが綴られた時の状況をいささか勘案し、あえて「グリンデルヴァルドの古い友人たちを代表して」という副題を付け添え、ここに掲載する了解をブラヴァンドからとりつけ、編集部に翻訳をとどけることにした。

松方さんと自然保護

村井米子

春一番の南風で、庭の梅や白玉椿も、どこやらの山草というクリスマス・ローズも、にわかに花開き、つぼみをもたげた。藤蔓の芽も、思いなしかやや立ってきた。

この藤を見ると、御病床からいただいた松方さんの最後のお便りが、そこはかとなく心に浮かぶ。

「お見舞有難く御礼申します。藤の花があんなに香りのあるものだと、初めて知りました　つまり外気の中では切実に感じないのですね　小生病院生活乍ら元気　御安心下さい　四月二十六日　松方三郎」

いつもの薄いブルーインクで、独特のふくらみをもった横書きの文字が、なつかしい。しかも七円の第二十六回国民体育大会記念葉書が、すでに十円のときに不足税もとられず、すり抜けてきたことも、面白い。藤の花の香りを、最後の御病床で初めて知ったとのお言葉にも、藤の花を親しく賞で、観察なさったお心……また、識らざるを識らずとする松方さんの御性格が躍如として、私を撃つ。

香りといえば、その四月末の上高地開山祭に入山し、摘んできたふきのとうの、雪解けのふちの萠黄色、浅緑よりも浅々とした山の春の気を――召上らずに、彩りと香りをおたのしみ下さい――とお目にかけた。御通夜のときにお嬢さまから「しきりに手にとって香りを嗅いでらした」と伺って、胸が痛む。なぜ上高地の春の味を召上って、と申上げなかったか……御重症と察しはするものの、九十年の寿を保たれた正義公の御子さま、何とか奇蹟の御回復をと希ったゆえだ。

半世紀のむかし大正十年夏、神河内とよぶにふさわしいころ、穂高の一枚岩にトカゲし、梓川で泳いでいらした公達時代からの、永い山友達の想い出は、あまりに多い。

戦後、第一回のウェストン祭に御一緒したとき、上高地はやっぱりいいなあ、と顧みて微笑された大きい眼が忘れられない。そのすぐ前に、NHKを退いて暇ができたろう、大衆運動を拡げ、女性の会員も観迎することになったから手伝えとおっしゃられて、正式に日本山岳会へ入会した私だった。

昭和四十六年第二十五回のウェストン祭に御一緒したときの写真は、最後の山の記念となった。昭和三十八年八月十五、十六日、今田重太郎さんの奥穂山荘四十周年祝には、涸沢から同行。山荘に一泊した記念の署名額は、五十周年祝に登った日も仰いで、御病床の松方さんに想いをはせたが……。

先年の祝の翌朝、奥穂高からジャンダルムへと尾根をつたい、天狗岩、岳沢と下ったのが、それは松方さんの最後の穂高縦走となったであろう。ジャンダルムのそばで一枚岩のあたりを俯瞰しながら、

――あの辺から落ちたんだよ、よく助かったもんだなあ、あれから四十一年ぶりだ。

と感ふかげに指さされ、しばらく黙って見つめておられた。

――それにしても、上高地には建物がいっぱいになったねえ。

四十年間の自然の荒らされかたを、嘆じられた。そのとき岳沢ヒュッテで休んでる間に、つと戸外へ出て、私の革靴の口のあいたのを、釘で打ちつけて下さった。その山靴は今も大切に保存してある。

ちなみに、その八月は二十六日にも、富士山学校の吉田の火祭に馳せ参じた。富士山上で拾ってきたと、英国の老婦人をつれておられた。昨日羽田に着いたばかりの女流学者（薊苔類の著名な教授）で、日本にも教え子があるが世話をかけないように、黙って登ってきたという。

――ところが、岩に生えてる苔を、おもしろい、おもしろい、としきりに採ってノートにはさむんだ。

よろこんで説明するんだが、そんな苔の学名なんかわかりゃしない……それよりも、高山植物を採ることになるかなと、ちとひやひやしたね。

自然保護思想普及につとめる同志の私に、苦笑しながら告げられた。

おもえばゆかり深い上高地に、飛騨側から西穂高の尾根を越えてケーブルが架けられる、との奥飛騨観光会社の計画が報ぜられるや、松方さんも私も、黙ってはいられなかった。猛然と反対運動の急先鋒となり、日本山岳会、日本自然保護協会の連絡を密にして協調した。昭和三十八年十月五日、日本山岳会は上高地で支部長会議を開き反対決議、要望書を各方面に差出した。（会報二三〇号に詳しい）

その秋、松方会長は渡米中だったが、かねて日本自然保護協会で現地視察、開発計画者側の説明も聞いていた私が、拙いながら代役をつとめた。この反対運動が実を結んで、西穂ケーブルは飛騨側千石尾根で止め、稜線はすべて自然公園法の特別保護地域に指定されたのは嬉しかった。

いったい、自然保護の原点というべき、自然と人間との問題を、しみじみとお話したのは上海で、昭和十五年の五月だった。当時共同の支局長であった松方さんに、外務省と海軍の命をうけて渡った私は、ジョスフィールド公園わきのレストランで御馳走になった。みどりの木蔭の食卓を、来合わせた三田幸夫さんとともにかこんだ。

大陸の自然と人間性、あるいは戦場の心理状態など、国際的ジャーナリストの面影ふかいお話のつきぬ夕だった。外地ゆえ、ことに印象にのこる。

屋久杉伐採反対（昭和四十四年）のときも、鹿児島の赤星昌さんから詳細の資料と報告を受け、松方さんの御指示のもとに、日本山岳会と自然保護協会との連絡係となった私だった。これも効果をあげて、林野庁側も特に貴重な林斑の伐採中止を回答したが、どうも三千年生の屋久杉を一本も伐らぬように、とのわれわれの希望は、完全に達したとは言えない。

戦前の富士山ケーブルの問題も、日本山岳会が猛反対して一

応は中止させたが、今もなお開発者たちの作動は、絶えていない。

伐採反対では、昭和三十六年の国立公園大会で八甲田山に登ったのち、青森県の案内で視察した下北半島恐山のヒバ林もある。車から下りて歩きはじめると、松方さんは、

――いい匂いの林だ、幹もきれいだね。

思わず叫びながら、ヒバという木の薬効などを聞き、一層、伐るのは惜しいと肯きあった。帰京してから各方面に働きかけ、文化庁から天然記念物に指定された。

この旅ではまた、秩父宮様ゆかりの、会津藩士開拓の記念碑を草原に見つけ、私が撮った写真を、妃殿下にお届けした。

「あの二日はなかなか実のある楽しい二日でしたね。それにしてもあの碑の発見は大収穫……」

その絵葉書は、私の文箱にひそんでいる。また大町山岳博物館の保存を確立したことも、逸せられない。大町市立の同館は、安曇野をへだてて後立山連峰を見はるかす、すばらしい眺めの丘に建っている。市議会が観光事業に傾いて、この景勝の地にホテルを建てようと、博物館をつぶす動きが伝わってきた。折よく学術振興会の秩父宮記念賞に何を推すか、日本山岳会の理事会にはかられたのを幸い、「雷鳥の生活」の研究発表書も成った同館をぜひ助けたいと提案した。松方さんも同意で選定委員会に出され、第二回の賞が授与された。それまで無関心だった地元はいまさらに驚き、同館の価値を認識し、長野県からの補助も出るようになった。

――これで助かったね。もう潰されない。

松方さんは大満足の笑顔で、部厚い胸をおたたきになった。

終りに、日本自然保護協会への御協力を書いておきたい。そもそも戦後すぐ、国立公園中央委員会の委員として御同席した間も、絶えず御指導をうけてきたが、われわれが発起して生れた協会にも、最初から協力して下さった。会誌「自然保護」第二号（昭和三十五年十一月）には「御存じですか？」と題する一文が出ている。

「箱根の芦の湖畔、大きな赤い鳥居の立っているわきに、湖畔沿いに西へ行く現在の街道と、少し山手を廻って湖畔におりて来る旧街道とがぶつかるところがある。そのぶつかるところの角に、こんな石碑が立っているのだが、知っている人がいるだろうか。（略）碑文は第一段にケンピアの『日本歴史』の序文の一節を引き、つづいて一段大きく本文が三行に刻んである（略）」

大正大一年十月吉日　扇港、英人と署名のパーニーさんが、

「（前略）此光栄ある祖国をば更に美しく尊くして卿等の子孫に伝へられよ　箱根にて　と、その後の日本が果してパーニーさんの期待したようなものになって行ったかどうか、それはそれとしても、せめて日本人は心持ちだけでもパーニーさんの期待に添うことを考えなければなるまい（後略）」

特に学校の先生に、この碑を見よと告げられた。第十五号の論説欄には「自然に帰れ」と題して、「アルセニエフの『ウスリー探検記』は私の好きな本の一つだが、その同じ人の『デルス

ウ・ウザーラ』の中にこんな話があった」とデルスウが海馬を撃たなかった話、また生誕二百五十年のジャン・ジャック・ルソーの「自然に帰れ」の意味をのべ、神は開明された人には、「自然の中へ自己を啓示する」の言葉をひいておられる。

「自然を愛することにおいて、日本人は世界のどの国の人にも引けをとらないということが長くいわれてきたことでもあり、われわれ自身もよくいってきたことだが、今度の試験（村井注・富士山の美化）に果して及第することだろうか、落第はしたくないものである」と。

御生涯を貫く自然保護のお心がうかがえる。

歿後に刊行された『松方三郎』を拝見しても、一向に自然保護の面が語られていない。その文章も抜けているので、書き足りないが、ここに私が一端を挙げた。

あの思いきり大粒の涙でおなげきになった御昇天の奥さまと、いまはともに天上界にあらるる御冥福を祈りつつ。合掌。

松方三郎略年譜

明治三十二年（一八九九）　松方正義の十三男として生まる。生まれたときの名は義三郎。正義は旧鹿児島藩士、明治の元勲として日本の財政金融の基礎をかためた。三郎は正義の長男松方巌に養われ、芝南佐久間町に住んだ。

明治三十八年（一九〇五）　四月、正義の三男松方幸次郎の養子として届出。九月、学習院初等科入学。

明治四十四年（一九一一）　四月、学習院中等科に進学。

大正五年（一九一六）　三月、学習院中等科を卒業、四月同高等科進学。夏、中房温泉、燕岳、大天井岳、二俣、槍ヶ岳、上高地（案内畠山善作）

大正六年（一九一七）　六月、日本山岳会入会、紹介者高野鷹蔵、黒木三次。会員番号五四七号。夏、大町、針ノ木峠、平、立山、剣、祖母谷、白馬岳（案内畠山善作）

大正七年（一九一八）　朝鮮、満州、華北旅行。十二月、五色温泉スキー練習。

大正八年（一九一九）　三月、学習院高等科卒業。九月京都帝大経済学部入学。夏、中房温泉、烏帽子岳、双六岳、笠ヶ岳、中尾峠、上高地生活、霞沢岳、前穂高岳、奥穂高岳。

大正十年（一九二一）　一月、中房温泉より燕岳スキー登山（同行山崎深造、案内畠山善作）八月、日光、湯元、前白根山、奥白根山、金精峠。九月、湯元、川俣温泉、八丁湯、鬼怒沼、丸沼。

大正十一年（一九二二）　三月、京大卒業。同月、槇有恒らと槍沢より槍ヶ岳登頂。七月、中房温泉、燕岳、喜作新道、天上沢、北鎌尾根よ

り槍ヶ岳登頂（案内小林喜作、同行伊集院虎一、板倉勝宣）。上高地生活、霞沢岳。岳川、天狗コル、奥穂高、前穂高岳。奥穂高岳川側雪渓でスリップ、同行六人。八月、銀山平、尾瀬沼（同行板倉勝宣）

大正十三年（一九二四）　十二月、ヨーロッパへ留学。

大正十四年（一九二五）　七月、スイス山岳会入会。七月、ヴェッターホルン、ユングフラウ、メンヒ、フィンスターホルン、キングシュビッツェ、シメリシュトック、ラウテラールホルン、グロース・シュレックホルン。八月、グロース・ラウテラールホルン、アイガー、ヴェッレンクッペ、ツムット山稜よりマッターホルン。

大正十五年（一九二六）　前年の暮よりグリンデルヴァルドに滞在しスキー練習。二月、ブライトホルン、モンテローザ、シュトラールホルン、アラリンホルン、モンテモロ峠、ファウルホルン。七月、チナール・ロートホルン、オーベルガーベルホルン、ダンブランシュ、ビーチホルン、ジメリシュトック、ウェッターホルン、八月、グロース・シュレックホルン、キングシュビッツェ、ツムット山稜よりマッターホルン。八月、秩父宮殿下に随行、チェッケン、スイス山稜よりマッターホルン。九月、チナール・ロートホルン、モンテローザ、リスカム、メンヒ、アイガー東山稜。

昭和二年（一九二七）　AC会員となる。冬、エンガディンよりビッツベルニナ、ビッツバリュー。八月、ミッテルグルッペ。浦松佐美太郎とアイガー・ヘルンリ・グラート完登。ユングフラウ、ツムット山稜からマッターホルン（三度目）イタリア山稜下降、メイジュ、プチ・シャルモ、エギーユ・アルジャンティエール、グレポン。

昭和三年（一九二八）　二月帰国。九月、御殿場より富士山。十一月、須走より富士山（七合目より引返す）

昭和四年（一九二九）　二月、須走より富士山。

昭和五年（一九三〇）　一月、吉田口より富士山（七合目まで）。十一月、吉田口より富士山。

昭和六年（一九三一）　十一月、富士山。

昭和二十一年六月～昭和二十三年三月、日本山岳会々長。

昭和三十二年（一九五七）　十一月、AC百年祭に出席。

昭和三十七年四月～昭和四十三年四月、日本山岳会々長。

昭和四十三年（一九六八）　十二月、日本山岳会名誉会員。

昭和四十四年（一九六九）　五月、日本山岳協会々長。

昭和四十五年（一九七〇）　日本山岳会エベレスト登山隊々長としてクーンブ氷河のBCまで登る。

昭和四十六年（一九七一）　AC名誉会員。

昭和四十八年（一九七三）　九月十五日、東京慈恵医大付属病院で脳血栓のため死去。

著　書

『アルプス記』　昭和十二年五月、龍星閣刊。

『アルプスと人』　昭和二十三年十二月、岡書院刊。

『遠き近き』　昭和二十六年十月、龍星閣刊。

訳　書

『エヴェレストをめざして』　ジョン・ハント著、昭和二十九年十二月、岩波書店刊。

『わがエヴェレスト』　エドモンド・ヒラリー著、島田巽と共訳、昭和三十一年四月、朝日新聞社刊。

〔付記〕松方さんはご自分のこまかな山歴などほとんど書かれていない。したがってここに記したものは初期のものが主となってしまったが、

富士山やその他日本中の山へ登られていたことはいうまでもない。国体登山などにもしばしば参加されている。

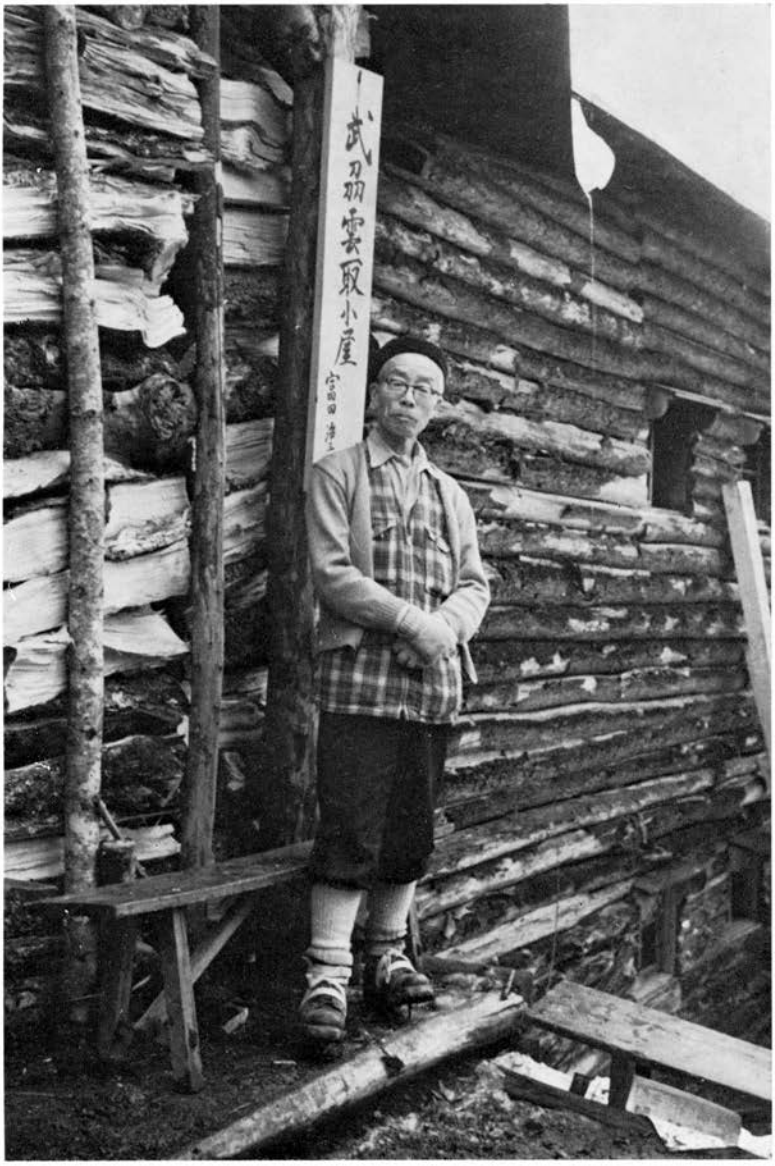
日本山岳会入会は会員名簿によると大正六年七月となっているが、自筆の略歴書（山崎蔵）には六月となっているのでこれに依った。本稿は山関係を主にしたもので、その他の年譜については『松方三郎』（昭和四十九年松本重治ほか編、共同通信社刊）の「松方三郎年譜」を参照されたい。

（山　崎　安　治）

名誉会員　松方三郎氏

Saburo Matsukata (Hon. mem.)

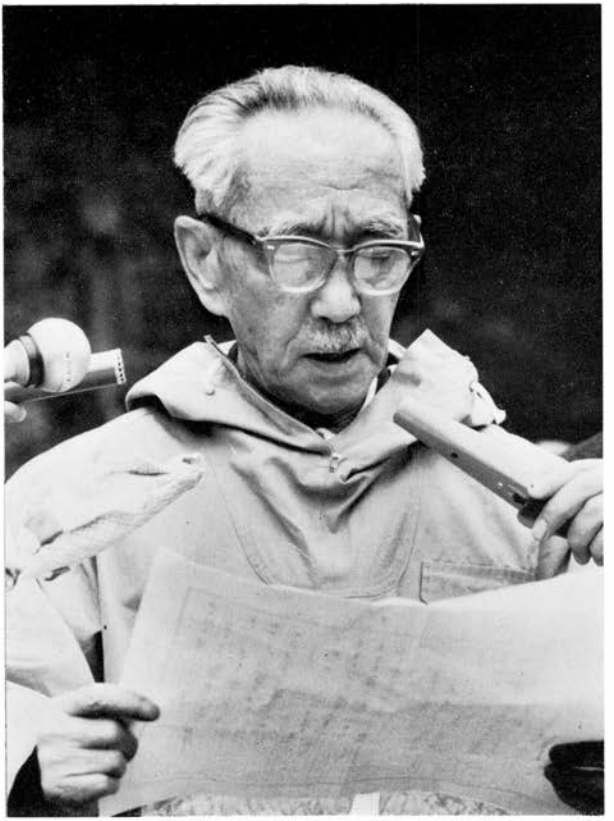
(1899～1973)



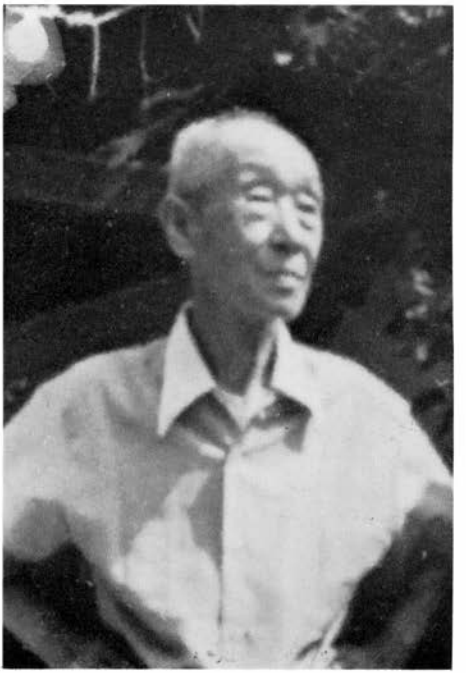
名誉会員　神谷　恭氏

Yasushi Kamiya (Hon. mem.)

(1890～1974)



尾崎喜八氏
Kihachi Ozaki
(1892～1974)



佐々木高美氏
Takami Sasaki
(1888～1974)

田口三郎助氏
Saburosuke Taguchi
(1908～74)

金谷伊祐氏
Isuke Kanaya
(1908～74)

池田光二氏
Koji Ikeda
(1919～73)

追悼

神谷　恭氏（一八九〇―一九七四）

神谷恭さんは、昭和四十九年五月二十日、血液疾患のため、八十四歳の生涯を終えられた。

その三日前、私がお見舞に参上した時には、もう意識不明で、時々ドッコイショ、ドッコイショと声を発しておられた。登山の折、きつい登りのときに、いつも聞いた懐しい掛声である。ほそぼそとした意識のすみに、まだ山への愛着を残しておられたのかと、感銘に堪えなかった。

神谷さんと初めて出会ったのは、戦中昭和十九年頃かと思う。横浜の勤務地で会員松本熊次郎君の紹介であった。

その頃は山登りなどのんびりと楽しめる時代ではなかったから、ただ話し相手という関係だったと覚えている。

終戦後、神谷さんも、私の勤務先も丸の内にあったので、おたがい足繁く往き来するようになったが、仕事の都合もあって、しばらくは誘われても一緒の山行は無理であった。

初めてお供したのは、昭和二十二年七月、富士お中道を歩いた時である。これは霧の旅会の遠足会で、一月に神谷さんの紹介で私が入会してから最初のものでもあった。

一行は神谷さん、野口末延君、松本熊次郎君と私の四人で、五合目雑貨屋に泊まって風雨の中をお助小屋まで歩いた。

二十二年中は、私がまだ日本山岳会に入会していない時であるが、お供のできた山行はつづき、奥多摩の天祖山、御正体山、十一月には初めて二人で、雲取山に登っている。

当時の写真を見ると、神谷さんの山行スタイルは、地下足袋にゲートル、着ゴザ持参である。着ゴザは便利だと当分持ち歩かれた。

雲取山はその後も誘われて共に何回も登ったので思い出多い山だが、特に次の事故は終生忘れられないものである。

昭和二十三年五月初旬、新緑を求めて、二人で日原から日原川沿いのコースで登った時、大ダワの稜線下にはまだ残雪があった。その雪の溶けた土の中に、ニョキニョキ生えている太い新芽を見つけて、神谷さんは、この芽は以前武田先生と大菩薩を歩いたとき、汁の実にして食べたら大変おいしかったと、採られたので、私もそれならと採ってみた。

雲取小屋に着いて私が夕食の仕度をしていると、神谷さんは「さっき大ダワで採った芽を汁の実にしたら」と云われたが、私は「歩きながらタラや、オオバラの芽などを採って献立を考えていますからまかせて下さい」と云うと、それでは朝の味噌汁に入れようと云われ、夕食にはその芽を使わなかった。

翌朝「あの芽を味噌汁に入れましょうか」とたずねると、

「いや、あれは土産に家に持って帰ろう」と云われたので、私は家から持って来たニラを朝の味噌汁の実にした。

翌日、私が出社すると間もなく、奥さんから電話があって、「主人が山から持って帰った木の芽を味噌汁に入れて呑んだところ、急に目がまわって具合が悪くなったので、すぐ入院させました」と云われ、驚いた。(私はその朝山からの土産はザックに入れたまま出社したので幸い何事もなかった。)

その日の午後、ご子息恭平さんが、今この芽のことを伺いに武田先生のところへ行って来ましたと立ち寄られた。(武田先生は当時GHQにおられて、私の現場事務所もすぐ近くだった。)

武田先生のお話では、その芽は、コバイケイソウの芽で、包葉で包まれていたので、ギボウシの芽と間違えたのだろう。毒草のコバイケイソウは、熊でも死ぬほどの猛毒があり、もし雲取小屋で食べていたら、二人とも間違いなく枕を並べたことだろうと云われた由、背筋が寒くなるような思いであった。

神谷さんは、七転八倒の苦しみをされ、その後二週間も入院されたが、強靭な心臓の持主だから助かったということであった。

この事故は後に神谷さんの話として、雑誌『岳人』などに掲載されたと聞いた。

心臓が強くて九死に一生を得られたのにこの度の病魔には勝てなかった。返す返すも残念でならない。

昭和二十三年十一月、私は神谷さんの紹介で日本山岳会に入会し、同月下旬の富士山冬山講習会に参加した。高所冬山経験がなかった神谷さんはこの時六十歳近くであったが、特別参加者として参加され、初めて冬の富士山に登ったと、感想を会報一四三号に寄稿されている。

六十歳代の神谷さんは、青年のようなお元気さで、また張り切っておられた。その頃私がお供をした山は、奥多摩、雲取山周辺、富士山周辺、笠ヶ岳(三回)、青薙山、千挺木山などである。

中でも青薙山は、神谷さんが崇拝しておられた、故木暮理太郎先生が生前よく登りたいと話しておられたので、ご遺志を継いで是非登りたいと云われ、昭和三十一年五月初旬、西沢峠から稜線づたいに登り、山中三泊強行の末、念願を果し、翌年金山の碑前祭で木暮先生に御報告された。

この登山の帰り、大島部落に出てバスを待つ間に、二人でバス停前の酒屋に入って、ビールを呑んでいたところ、呑み終らぬうちに身延行のバスが来てしまった。ゆっくり呑もうとそのバスを見送って、次のバスに乗車したところ、車中に二人連れの若い登山者がいたので、神谷さんがどこの山に登ったのかと聞くと、笠ヶ岳からの帰りですといい、下山の途中これを拾って来ましたと見せてくれたのが、この年の正月、二人で雪の笠ヶ岳に登ったとき、下山の途中で紛失された、スイス製の四ツ爪アイゼンの片われではないか。全く偶然のことであった。ビールが取り持つ縁とでも云うか。両方揃ったのでその後もたびたび使っておられた。

この登山がきっかけになり、翌年の静岡国体登山に青薙山が選ばれ、多くの岳人に紹介されたのである。

神谷さんに誘われて、二人で出掛けた最初の正月山行は、昭和二十三年正月で道志川沿いの山旅であった。その後昭和三十一年まで毎年つづけた。

神谷さんは、正月山上で祝う酒の味は格別だったらしい。特に喜ばれたのは雲取山の正月山行であった。

雲取小屋の管理人富田仙人は、神谷さんとは昵懇であったからサービスも親身で、万事行き届き、居心地も満点で、暮に小屋に着くと小屋がどんなに混みあっていても、二人だけは管理人室のコタツで悠々。元旦の朝は仙人が氷を溶かして焚いてくれた風呂に入り、祝膳につくと、仙人秘蔵の鹿肉、熊肉のサシミ、スキヤキと盛り沢山で、神谷さんの酒もピッチが上って来る。目を細めながら「こんなよい正月を過していると年を取らないんだよ」と午後過ぎまで呑んでおられた。

神谷さんとの山旅は、いつも酒の旅のようでもあった。山小屋で、テントの中で、宿で、おいしそうに呑んでおられた。よほど内臓が丈夫だったに違いない。

昭和四十四年夏、霧の旅会五十周年記念行事として、神谷さんはじめ有志で、ヨーロッパ・アルプスの旅をした。そのとき同行の会員田口三郎助君もすでに亡くなってしまった。

昭和四十六年十一月には、念願だったエベレストとの対面にヒマラヤ旅行をされた。八十歳を越える老人のヒマラヤ旅行は珍らしいと、新聞にも報道されていた。旅行前にいただいたハガキには「JACの川乗山集中登山に、トレーニングのつもりで参加して、まだ若い連中に負け身を感じませんでした」と書いてあったので、これなら安心だと思った。

その四月に私もヒマラヤ旅行をしたので、「神谷さん、エベレストを眺める酒は日本酒にかぎりますよ」と、すすめておいたら帰国後の話、牧野君がすすめるので、重いめをして持っていったが、ちっともうまくなかったと御不満だった。酒の小言は珍らしいことであったが、老令にもかかわらず高所の経験もされて思い残すこともなかったに違いない。無事帰国されて何よりのことであった。このとき採集された植物の種子を土産にいただいたが、今では珍種として自慢の花木になった。トウワタの可愛いい花は丁度今が盛りで、私の雑草園を賑やかにしている。形見としてこれからも大事に育て、厚意を謝し偲ぶよすがとしたい。

思い出はつきないが、今はただ大先輩の霊安かれと、心から御冥福をお祈り申し上げる。

法名　岳稜院行雲日恭居士

墓所は鎌倉霊園である。生前ご自身で選定された由、ご遺族のお話であった。

（牧野　衛）

略　歴

明治二十三年四月二十五日　長野県大町に生れる。

明治四十二年　築地工手学校電工科卒（現工学院大）。ヒーリング商会（後、桑本商事（株）と改称）に入社。

大正九年六月　日本山岳会入会、会員番号七四四、紹介者中村清太郎、

加賀正太郎の両氏。
大正十四年　桑本商事（株）取締役支配人に就任。
大正十五年四月　霧の旅会入会。
昭和三十五年四月　有信計器（株）を設立、社長に就任。
昭和四十年十月　日本山岳会名誉会員。
昭和四十七年四月　有信計器（株）会長に就任。
昭和四十九年五月二十日逝去。

神谷恭さんと木暮理太郎翁碑前懇親会

山梨支部で、木暮翁碑前懇親会というものを始めたのは、昭和三十八年の六月からでございます。以前から霧の旅会の方々は五月に金山詣でをなさっておいでした。山梨支部でも、木暮先生を偲んで、定期的な行事をしようではないか、という意見がでまして、霧の旅の方々に合流させていただき、行事が今日まで続いておるようなわけです。

第一回目のとき、私は東京の皆様を甲府駅に迎えに出たことをよく覚えております。昭和三十八年六月二十二日の、午前十時ころのことです。神谷さんは、あの瓢々としたいでたち、たしか、JACの旗を持ちまして、皆様をお連れしておりておいでした。

メンバーは、足立源一郎、中村謙、原田幹市、村井米子、瀬名貞利、野口末延、小池義正、松本熊次郎、一柳兵象、一柳しづ江の諸氏でした。

その当時、甲府では困るので、韮崎までお出で下さいとお願いしまして、韮崎からバスに乗られました。バスの中では、もうお酒を出して飲まれ、あとはブラブラと増富温泉から金山まで歩かれたんです。私たちが一時間ちょっとであがるところを、三時間ぐらいかけまして、ここは景色がいいから飲もうというようなことで、大部ゆっくりしておられました。

でも、私たちは、そのゆっくりしておられる間に、結構、あの道端で、沢山山菜をとりながら登って行き、それを、すぐに料理したわけでございます。

その当時、私たちは料理なんていうものを、よく知りませんでした。今の大沢伊三郎支部長の妹さんの若宮きよ子さんがお料理の先生をなさっておりましたので、そんなことから御指導を得ながら、遠来の客をおもてなししたわけでございます。

神谷さんも、お若かったものですから、宴たけなわになりますと、とても高尚な歌などをうたって、きかせていただきまして、大変勉強になったことを覚えております。山の人たちも、仲々、粋なところがあるものだなあ、と地元山梨の若い者は話し合ったものでした。

そんなこともありまして、翌日は、もう五時頃には眼をさますわけです。若い人たちはまだ寝ているのに、さあ、おきろ、出掛けるんだと。私たちまだ御飯もたべていませんと、いや、私はもうゆうべ、おにぎりを握ってもらってあるんだと、いうんです。仲々手廻しがよいのには、あきれかえるほど感心して

しまいました。そういうなかで、神谷さんは、大変面倒見がよくて、例えば、金山に着きますと、横浜の名物の崎陽軒のシューマイを五箱くらいザックの中から出して、サッとみんなに配るわけです。こんな風に、ちょっとした小さなところに気をつかわれるわけです。これは先程の先輩方のお話をおききしまして、やはり、お若い頃からの御苦労のなせるわざだと思いを新らたにした次第です。

あの当時、金山の奥の黒森に天使園といって、戦災孤児の収容施設がありました。神谷さんは、かならず、そこまで慰問品をもって訪ねました。今でこそ、金山から車は入りますが、その当時は、金山峠を越えて行くのですから、歩いて二時間はかかりました。常人のなせるわざではないと、感心していた次第であります。

話はかわりますが、金山においでの方々の中では、御年配の方でしたので、神谷さんに色紙をかいてほしいなどというのも出てまいりました。ところが、私はまだお酒を飲んでいないからだめだ。それでもといってなお御無理を申し上げると、やおら筆をとるわけです。すると、手がふるえるんです。やっぱり、私はまだ量に達していないから手がふるえるんで、もうすこし飲んでからにしましょう。そして、結局は翌朝になるわけです。朝になりますと、また正気にかえってしまって、また書けない。じゃあ神谷さん、もう少し飲んで下さいと、また酒ぜめにしてしまったんです。

でも、あのちょっと前こごみで、肘を真横にはった、独特のスタイルでおいしそうにお酒を召しあがっておられた姿が、今もありありと思いだされるのです。

ある時は、瑞牆山に登ろうなんていいだしまして、キリッと鉢巻きなどなさって、ステッキをついて登りはじめたこともありました。なかなかハイカラで、柄物のニッカーホース、綾織りのツィードのニッカー。上衣は、ときにはジャンパーのこともあり、またライトブルーの羽毛服などのこともありました。また東京支部のしるし伴天などを着ておられたこともありました。でもやはり、若い頃外国商社に永くおられた方だなあ、とどことなくあか抜けた印象が残っております。

永い間、かかさず金山においでいただきました神谷さんですが、一昨年、その前と二度ほどお見えになりませんでした。昨年は、病い重しとのことで、霧の旅会の方々も東京に足どめとなり、松本善二さん、野口末延さんが代表でお見えでした。やはり木暮碑前懇親会は、神谷さんがお見えにならないと、何となく淋しいおもいをしたのでした。

とにかく私どものような小さな支部に、木暮碑前懇親会という、よい伝統行事を残して下さいました神谷さんに対して、何とお礼申し上げてよいかわからないわけです。そして、第十二回木暮碑前懇親会と時を同じくして幽明境を異にするとは、何か不思議な御縁としか思えません。

心から神谷さんの御冥福をお祈り申し上げ、ささやかな思い出の言葉にかえさせていただきます。

（山村正光）

（昭和五十年三月二十九日、神谷さんを偲ぶ会における談話要旨）

尾崎喜八さん（一八九二～一九七四）の山と詩

尾崎喜八さんは、講演も勿論であるが、ラジオ放送も余り断られなかった。NHKの『自然と共に』という番組では、その取材のために、録音機を携えた担当の人と何回も二泊三日程度の小旅行をされ、それも山道を正直に歩かれたことが多かった。それらの放送原稿は、大部分『詩文集』に入っている。

その『自然と共に』とは別に、特別番組として昭和四十三年四月二十九日に、「緑のメルヘン」という題の放送があった。夜九時十分から四十五分までの番組であった。「かたくりの花」その他三篇の詩の朗読があり、御自身の歌と笛の演奏が入り、忘れ難い放送であった。花と小鳥と音楽についての話であるが、その途中で、次のように言われた。

「根っからの詩人として自然と音楽の好きな私には、年をとった今でも時どき山や高原へ出かける事と、たまに良い音楽会へ行く事と、自分でも下手な歌を少しばかり歌ったり、それよりもっと下手な笛を吹いたりする事とが、言わば唯一のリクリエーションです。」

この最初の「根っからの詩人として」という言葉であるが、尾崎さんほど、何一つ照れずに、むしろ誇らしげに自分の名前のまえに「詩人」という言葉をつけた人を他に知らない。

これは長い間詩を書いて来られた末の自信ではない。詩人として生涯を貫く決意をされた時に、同時に抱かれた当然の事柄で、そのことは、大正十一年三月十五日の日付で書かれた、第一詩集『空と樹木』の序文の一節を読めば明瞭である。

「たとえ如何なる環境にあっても私は歌う事を第一としたい。自分の岸辺にも同じ青浪の打ち寄せる、同じ日光の輝き、同じ嵐の吹き荒ぶ、静穏と暴風との人生の海を飽くまで歌いたい。その多彩な種々相と、その深遠な思想と、そしてその不死の憧憬に価する未来の水平線こそ私の取扱う主題の一切でなければならない。人間及び詩人としての私の存在理由は、私自身がより強くより正しく生きる事によって歌い、より明らかにより美しく歌う事によって生きるという、この単純で熱烈な要求を実行する事の外にはない。それでこそ私の生存に言訳が立つのである。そして此事は理窟でもなければ空想でもなく、常に私のうちに生きて育っている実感である。」

つまり尾崎さんは詩人として自然を見、詩人として音楽を聴き、また一粒の葡萄も詩人として口に入れ味われた。そしてまた詩人として山に登られた。その見方、聴き方は綿密で、すべて物に接すれば、何よりもまず科学的に観察し、書物で調べ、顕微鏡や望遠鏡を使って再確認をした上で、それに最も適しい言葉を探し、詩人として表現された。この科学的な過程を必ず経た上での詩人の感覚ということをはっきり言わないと、詩人の見方は非科学的であるというように受け取られる虞れもある。

しかし尾崎さんの多くの自然に関する随想を見れば、その観察、実験、そして確められた知識の豊かさを容易に知ることが出来る。

山旅が始まるのは昭和三年からであるが、それは河田楨さんの『一日二日山の旅』を読んで感銘を受け、後この著者河田さんを知ったことが直接の動機である。大分前のことになるが、尾崎さん、深田久弥さん、それに私も加わって、「山と文学」という題で、その座談をラジオ東京から放送したことがあった。その時も尾崎さんは、自分に山への道を教えてくれたのは河田楨さんであり、もう一人は長尾宏也さんだと言われたのを憶えている。

山行がはじまり、頻繁に出掛けられるようになると、当然、自然観察の対象も多くなって、特に気象や天体の観測も加わって来た。撮影を続けられた雲の写真集とその解説がアルスから出版されたのは昭和十七年であるが、既に詩集や散文集も多く出版されているにも拘らず、この『雲』によって尾崎さんを気象学の専門家だと思っていた人もかなりいた。

尾崎さんの山歩きについては、亡くなられて間もなく、日本山岳会の『山』（昭和四十九年五月号、三四七号）に拙文を載せていただいたので重複は避けたい。戦後、ウェストン祭への参加と、その碑前での朗読は、この行事のプログラムの中でも欠かせないものになっていた。その際、上高地で尾崎さんと会って話をするのを楽しみにしておられた方々の数もかなり多かったし、依頼を受ければ断れずに、深夜、宿の一室で何十枚という色紙に几帳面な文字で詩の一節を書いておられたのを想い出す。そのためにどんなに疲れ、憩いの時間が失われたかを察する人は少なかった。なぜなら、翌朝、その色紙を依頼した人が受け取りに来れば、にこにこと話しながらそれを渡しておられたからである。

私は、尾崎さんと長い山旅をしたことはない。一日二日の、比較的楽な山歩きの経験はあるが、それによって、多くの詩や散文として残されている若い頃の尾崎さんの山旅がどんなであったかを、かなり細かに想像出来る。ひと口で言えば、尾崎さんにとって山は常に自然の勉強の場であったと思う。

植物をていねいに観察し、既によく知っておられる鳥の声にも耳を傾け、新しい発見を期待された。それらは屡々手帖に書きとめられて、充分の燃焼の後に詩となり、散文になることもあれば、知識として次の観察を一層深いものにする場合もあった。

それは、都会を歩いても、平素の生活の中でも同じことであった。

今、燃焼という言葉を簡単に使ってしまったが、詩人の言葉に対する態度は当然厳しく、林のヘリで、僅かの風にそよぐ木の葉たちのように軽率であってはならず、言葉が「ひとつの確かな造形をなすためには、歌の過程に抵抗と挑みとが無くてはならぬ」（「詩術」）と書かれている。

尾崎さんの山には初登攀の記録はない。だが、この詩人にとっては、どんな山行も初登攀であり、すべての日常が初登攀の

真の意味を持っていたようにも思える。

（串田孫一）

略　歴

明治二十五年（一八九二）一月三十一日、東京市京橋区南小田原町に生まる。家業は回漕問屋。四十二年、京華商業学校卒業。「文章世界」「スバル」などにより高村光太郎の名を知り、その芸術意欲と反逆精神にふれる。また白樺派の影響下にあって文学に志し、『白樺』に翻訳および詩を寄稿。

大正五年（一九一六）、訳書『近代音楽家評伝』（ロマン・ロラン）を刊行、十一年（一九二二）、詩集『空と樹木』によって詩壇に登場、詩集『高層雲の下』（大正十三年）、『曠野の下』（昭和二年）を刊行。また大正末期に文化的半農生活をいとなみ、ロマン・ロラン友の会を設立し、人道主義的詩人として詩壇に注目すべき位置を占めた。

昭和五年（一九三〇）二月、霧の旅会入会、同八年二月、日本山岳会入会、会員番号一四一九番、紹介者松井幹雄、神谷恭。十年七月、『山の絵本』（朋文堂）を刊行。十二年八月、エミール・ジャヴェル『一登山家の思ひ出』（竜星閣）を翻訳刊行。十三年七月、『雲と草原』を刊行。

昭和二十年（一九四五）五月、青山南町にて空襲をうけ罹災、以後二十七年まで長野県諏訪郡富士見村に住む。戦後ながらく日本山岳会信濃支部長をつとめた。二十六年九月、書き下し散文集『碧い遠方』（角川文庫）が串田孫一の尽力により刊行される。以後、詩集に『花咲ける孤独』（昭和三十年）『歳月の歌』（昭和三十三年）『田舎のモーツァルト』（昭和四十一年）『その空の下で』（昭和四十五年）などがある。昭和四十二年十一月、紫綬褒章を受章。

昭和四十九年（一九七四）二月四日、逝去。歿後、詩誌『歴程』四、五月合併号および『アルプ』一九六号において、尾崎喜八追悼特集号が編まれた。

そのかずかずの文業は『尾崎喜八詩文集』全十巻（創文社、昭和三十三年～五十年）に集成されている。

佐々木高美氏（一八八八～一九七四）

佐久市岩村田在住の佐々木高美（たかみ）氏は会員在籍六十年以上にわたる永年会員であるので、逝去の報に接した後、暫くして夫人きいさん宛生前の略歴、山歴等について問合せをしたところ、数ヶ月たって夫人から返信に接したので、それを基にして知り得たことを録して追悼の辞としたい。

佐々木高美氏は明治二十一年（一八八八）三月十一日誕生、長野県佐久市野沢中学校を卒業後、東京の十九銀行に就職、同行が六十三銀行と合併して八十二銀行となり、引続き同行に定年まで在勤、最後は岩村田支店長であった。その後一年を経て軍事工場の会計主任となり終戦を迎え、更に住吉電気会社の会計庶務主任を十八年間勤めた。

日本山岳会へは大正二年（一九一三）一月、小島烏水氏の紹介で入会、会員番号三〇六であった。昭和四十九年（一九七四）一月九日逝去、享年八十六歳。

佐々木は長い間健康に恵まれ、仕事にもまことに勤勉であった。幼少の頃から野山を歩くことが好きで、休日などには一人

で野山をかけまわり、中学時代には近辺の山や蓼科山へ登って、植物を採集し標本にして楽しんでいた。現在でもその標本が実家の蔵に保存されているという。

十九銀行時代（明治末葉から大正の始め）土曜の午後から日曜にかけ、夜通し飲まず食わずで千葉房総方面や、静岡、箱根あたりへ徒歩旅行をこころみた。どこまで躯がつづくものか、ためしてみたかったというのが、その目的であった。登った山については、故郷の蓼科山、八ヶ岳、浅間山をはじめとして、上高地、箱根など、そのほかはよくわからぬのが惜しい。

山岳図書を愛し、随分沢山の本を所蔵し、晩年は山の本を読むのが何よりの楽しみであったし、また山の画も好きで集めたという。

佐々木氏はよく一人で山野を歩いたようである。大正二年十月六日に弟妹に書かれた手紙を見ると、次の一節が目につき、同氏は一人での山歩きを好んだことが知られる。

「曇った箱根の一日、私は山の中で雲に深く身をしづめてしみじみと静けきさびしさを味ったことが何度もありました。そしてその時は何時も〃自然〃と〃自分〃とが合致するのを感じました。昨日もこう云ふ気分はヒョッヒョッと針の先のやうに頭の中へさしこんで来ましたが、残念な事には〃私〃と〃自然〃との間には〃他人〃と云ふ者がはさまってゐて、塔ノ沢から宮ノ下迄一里半余の山みちをとうとう曇った箱根を深く味ふ事が出来ずに往復してしまひました。一体私は一人で旅をしつけた為か、人寰から遠ざかれば遠ざかる程、この〃自然〃と〃自分〃とを融合させるには一人だけでなければだめだと信じてゐます。〃他人〃と云ふものは、それがどんなに私に親しいものでも自分と全く一致する事は出来ない。この一致する事の出来ない〃他人〃なる同行者への意見（考…言語…動静…等）を自分が容るるとなると、それがたとへ僅でも自分と自然との間はうすらげられてしまふ。昨日の同行者は私の常に親しくして居る友の一人であったが、私はとうとう〃山の中へはいった（雲の低い山の懐に抱かれた）〃と云ふ気分は起りませんでした。私は〃自然〃を視る時には自分の全生命をその中へ投げ込みたいと思ひます。そしてこういふ時には必ず一種のさびしみが身を襲ひます。そしてこう云ふ風になるのを私は嬉しく思ひます。」

先年マナスル登頂の映画が、岩村田の映画館で映写されたときは、佐々木氏は夫妻で見に行かれたが、山頂の日の丸の旗を見た時、同氏は感激のあまり涙をながしながら見守っていたという。

今日、佐々木氏をよく知っている会員も殆んど見あたらぬので、追憶を書いて戴けるような会員もないのは残念だが、青年の日、山や自然への愛から日本山岳会に入会し、故郷岩村田へ帰省した後も永く会籍から離れることなく、六十年以上も会員であった同氏のごときは、会にとってまことに大切な会員であったと思う。その長逝をきき心から哀悼の意を表し御冥福を祈りたい。

（望月達夫）

金谷伊祐氏（一九〇八～七四）

「山よ！　汝はいかなればかく美しき」

金谷伊祐君はかずかずの山行アルバムのうち、初めて日本アルプスを訪れ白馬岳に登り祖母谷に下山した時のものにこのような感慨を冒頭に記している。

名峰立山に守られ大先輩石黒清蔵を生んだ富山に育った彼は、大阪工業に在学中から山岳部の友人らと六甲連山、高野山、霊仙など、近畿の山々を登りはじめていた。キャンプの面白さもおぼえ西岡一雄氏に種々教えを乞うていた。工業を卒え会社勤めをはじめた翌年には、白馬岳の壮大な美しさに圧倒されたのであろう、感激が筆先に現れている書体で「山よ！　汝は……」と書き残している。それ以後彼は仕事の合間をねらって山とスキーに若さを傾倒しつくした。そして年末年始はかならず信州に出かけていた。野沢、菅平、赤倉、栂池にと。これは結婚後もつづいていて未亡人も「お正月は家にいたことありませんでした」と語られる。母校工業山岳部をOBとしてよく面倒をみ、しきりと山に友人を誘って牛鍋会を催し、また十三山岳会の中心ともなってその活動に骨身を惜しまなかった。ノートに丹念にかかれた山行記録をみても、毎月、六甲連山をはじめ紀州の山々、鈴鹿山系、雪彦、大江山、高野連山に入り、冬期はマキノ、夜久野、氷の山、但馬高原、御在所岳に出かけ、当時よく行われたスキー軍事訓練にも興味を抱いて参加したり、新聞記事のスクラップ帖を何冊も残している。スキーアルバムの一つにはジュウソシュナイダーとおどけたタイトルをつけて喜んでいる一方、ロッククライミングをはじめて、たびたび百丈岩、雪彦山行を続けていた。

子煩悩の彼は可能なかぎり山行に子供達をつれて行き、好きな写真に山と共に愛児成長の姿を記録しつづけていた。昭和十七年、日本山岳会に入会し翌年支部例会の「山のスケッチ実地研究会」にも早速子供さんもつれて来て、榎谷講師の指導を一緒にうけていた姿が眼に残っている。ジュガール・ヒマール探査隊壮行会にも出席して、ヒマラヤの話に目を輝かせていた彼、時日が許せば恐らくヒマラヤにも行きたかったにちがいない。戦後、独立自営後は責任上、以前のように毎月山へ出かけることは少なくなっていた。二十九年八月、立山温泉から松尾峠を経て立山へ愛児と共に出かけたことがアルプスへの最後になったらしい。たった一日の急病で亡くなられたことは、御遺族、山仲間にとっても全く本意ないことであった。

（富田健一）

略歴

明治四十一年（一九〇八）三月十二日　富山市石倉町に誕生。
昭和六年三月　大阪工業専修学校電気科卒業、佐野鋳工所入社。
昭和七年八月　白馬岳より祖母谷に下山、アルプスに魅せられる。

昭和十七年十月　日本山岳会入会（会員番号二一七三番）。
昭和二十二年五月　佐野鋳工所営業部長退職、六月、弘和工業株式会社を創立、火力発電所用付属機器製作を業とし関西電力、川崎重工を主取引先とす。
昭和四十七年五月　創業二十五周年を迎える。
昭和四十九年一月　腸閉塞で一日の入院で死去、享年六十六歳。

田口三郎助氏（一九〇八～七四）

田口君の逝去を知ったのは、風見武秀さんのツァーに参加して、オーストラリア、ニュージーランド、パプア、ニューギニアの旅の終りであった。ポートモレスビーのホテルから、いよいよ帰る日が近いので家へ電話したら、田口さんが一月二十七日に亡くなったと言うのであった。とうとう駄目だったかと、その夜は何とも言えない気持で床についた。

思えば、田口君とのつきあいは、学校の山岳部以来だから、五十年余になる。そのころは、松井幹雄さんが講師で来ておられて、山岳部長もして下さっていた時で、汽車賃だけの金があったら、大菩薩連嶺などに夜行日帰りでよく行ったものであった。松井先生の霧の旅会に入れて貰ったのもその頃である。

田口君が、晩年と言ってもそんな年ではないが、どうした拍子か身体をこわして、大塚の癌研で胸の手術をしたのは、たしか昭和四十一年の春であった。自ら承知して、肺癌なんだと言っていた。その後経過もよく、はたから見ると普通の人と思うぐらい元気になって来ていたので、私も自分のことのように喜んでいた。

四十四年六月に、風見さんのヨーロッパアルプスの旅（霧の旅会五十周年行事）に、自分の身体をためすつもりで、田口君も参加した。二十二日間の旅であった。ツェルマットの三日間では、殊に元気であった。一日スンネガーにリフトで登り、途中まで歩いて降った時など、赤いセーターが似合って特に印象的であった。先日霧の旅会で、最近あいついでなくなられた、武田久吉先生、足立源一郎先生、神谷恭さん、田口君をしのぶ会を、箱根の強羅竹友荘で催した時、ご子息晴敏君が出席されて「あの時のセーターは僕がすすめて僕のを持たせたのです」と言っていた。私はああそうだったのかとうなずいた。アルプスの旅では終始一緒に行動したが、さすがに登りとなると大変な様子であった。とにかく無事にその時の旅行が終って、本人は勿論、家族の方々も大いに自信を持ったことはたしかと私にも思えた。

それからも時々逢っていたが、別段のことはなく、結構なことと喜んでいたわけであったが、去年の夏になって少しおかしくなったのであった。自宅静養のところを見舞った。暑い夏で、書棚で一杯の部屋に、ベッドをおいて休んでいた。その後、再び大塚癌研に入院をしたので、たまたま上京の折見舞ったのは十一月の末であった。大分良くなって来ているらしく、医者の

方でも退院の話をしている様であったが、簡単に退院などしないで、寒い冬をここで過ごすことを話したりしたのであった。

先日の霧の旅会の集まりの席上で、誰かが、田口君の怒った顔は見たことがない、と言っていた。晴敏君もやさしい良い親父であったことを話していた。私も永いつきあいを振返って、そう思っている。何にしても少し早くいってしまった。ほんとうに残念でならない。

（神奈川甚吉）

略　歴

明治四十一年（一九〇八）二月十八日　東京に生まる。
昭和三年三月　蔵前工業専修学校応用化学科卒業。この間蔵前山岳部に入会、教師松井幹雄氏の訓育を受け、続いて霧の旅会に入会。
昭和三年四月　横浜高等工業学校（現横浜国大）に入学、在学中アメリカに行く。
昭和六年三月　同校卒業、直ちに令兄の経営する田口ゴム工業株式会社（消ゴム製造）に入社、製品の品質向上に専念のため研究部門を担当、他方社団法人日本ゴム協会関東支部長として多忙の日を送っていた。
昭和四十九年一月二十七日逝去。

山　歴

故松井幹雄氏、山崎金次郎氏らが創立せる霧の旅会の谷川岳、大菩薩辺の山々および木暮、武田両先生の驥尾に付し度々山行を共にし、早くからスキー登山を始め、新鹿沢、鹿沢の温泉を根拠地として周辺の山々ならびに吾妻山の家形山、一切経山から吾妻小舎へのスキーツァーをおこなう。昭和四年の夏には、鶴岡、朝日鉱泉古川房吉と東北の朝日岳を縦走、大鳥池へ、その帰路月山に登り、昭和六年七月には、小林幹三郎外二名で南アの鋸、駒ケ岳、北沢峠、高遠に、その後鳳凰、白根三山、西山温泉、北アでは穂高、白馬三山等に出かけ、出身校の蔵前工業専修学校の山岳部長を勤め新人を養成するなど、数々の業績を残した。

記録及上手であった写真等は、戦災で烏有に帰したので判らないのが残念である。日本山岳会には昭和二十八年に入会、また松本善二氏が会長の東京史学会の会員で、関東地方の歴史、由緒ある神社、仏閣等を毎月、歩かれていたのであったが、数年前、肺癌を手術、退院してからも、霧の旅会数人、仙台の平沢氏伊達氏等と共に鳳見武秀氏の案内で、スイス、南オーストリヤ、北イタリーに三週間の山旅を過した。その後病状はだんだんと悪化したが、会社にあっては担当の研究開発に努められ、その精神力と勤勉さには感服のほかはない。その後、再度大塚の癌研に入院、あらゆる手当の甲斐もなく、一月二十七日逝去された。

同君は穏かな性格であったが、会合の節など時々冗談を交え、席をにぎわしてくれ残り少い霧の旅会員には好かれていた。六十六歳で幽明境を異にするとは、あまりに先を急がれた思いを感じ、寂しいのである。謹んで御冥福を祈る次第である。

（鶴岡元之助・野口末延）

池田光二氏（一九一九―七三）

池田光二氏（会員番号四六六二）は昭和四十八年十二月十三日、胸部疾患のため東京女子医大の一室で急逝された。まった

く突然のことで、よくつきあっていた筈の私も想像も及ばなかったことであった。

その年の九月一日、深田久弥氏ゆかりの山、茅ヶ岳を松本氏の案内で登ったとき、前夜は元気に歓談していたにもかかわらず、途中水呑場を過ぎやや急登になった頃より遅れだし、どうも息が切れて仕方がないとさかんに話していたのが、今になってみるとその徴候であったと思いあたる。

池田氏は大正八年一月二日、日本橋堺町にて板硝子問屋池田鈴之助商店二代当主池田鈴之助の次男として生まれた。暁星中学より水戸高校をへて、昭和十六年十二月、京都帝国大学文学部史学科を卒業、十七年、東部第六部隊に入隊、前橋予備士官学校を経て陸軍中尉となり、予備士官学校区隊長として終戦を迎えた。

軍隊時代には自動車部隊小隊長として雪中行軍や山中設営に大いに山の知識を活用し、軍隊らしくない行動力を発揮した多くのエピソードがあったようであるが、それは池田氏の若き日の山への情熱の一端をあらわすものと思われる。

復員と同時に長兄池田正一氏と共に池田商店の復旧に従事、以後硝子工事部門を担当し、昭和三十八年、池田硝子建材株式会社を分離独立せしめて取締役社長となり、長兄の販売部門の菱双硝子建材株式会社の取締役を兼任、更に関東板硝子工事協同組合専務理事もかね、業務はすこぶる繁多であった。

しかしその業務のかたわら本来自分の本職であり、世の中が平和であったら学校に残って研究をつづけたであろう歴史地理学を勉学し、いつの日か刊行することを目的としていた『山名考』の原稿をまとめていた。会報に山名についての記事がのると目を光らせて、私にもその相異を語り、特に静岡の山本朋三郎さんと紅葉会のとき論議していたのをみかけたものである。

目的あっての行動なので、私達と一緒の山行でもかなり早くから調査を始め、いざ出発の際は山行の行程は勿論、列車の時間表からバスの値段表まで大略頭の中に入れているありさまで、その博覧強記ぶりにはおどろかされたものであった。彼は山行中は決して記録をせず、大体鉛筆などは全然もってこないのである。かなりの老眼であるのにメガネももってこないし、地図はもう頭の中にしまってあるからと笑っていた。しかし帰宅すると山の日記、これは大学ノートであるが、これにことこまかく地図を入れて記録をまとめているのである。たまたまお宅へうかがった際に、これをみせられてびっくりしたことをおぼえている。

スキー歴は戦前からのもので手堅く滑るスタイルであったが、尾瀬のスキー学校で猪谷先生より二級をもらったのが自慢で、長兄池田正一氏がスキー連盟の一級合格となっても、俺の方がうまいといっていた。たしかにツアー向きのスキーで重心の下った面白いふり込みスタイルなので、いま転ぶかと思ってみていてもなかなか転ばず、かなりの急傾斜も楽しんでゆっくりすべっていた。

山登りの方では、一等三角点歩きと自称していて、山行のたびに必ず三角点を確認し、自分の地理勉学の一助としていたよ

うである。また二五〇〇メートル以上の山は全部登りたいと種々計画していた様子であったが、最近は業務の都合でなかなか実行できないとこぼしていた。

池田氏の山歴を語るには松本熊次郎および牧野衛の両氏を忘れることは出来ない。日本各地の山々をこのお二人の先輩と一緒に、また時には私も同行し、ある時は野口末延先輩をはじめとする霧の旅会の方々と登っておられ、コニカの写真と共に池田氏の記録が数多く残っている。

東北の山々、特に朝日連峰の縦走、栗駒山、鳥海山の雪の中の合宿、そして早池峯山の高速登山、これは池田氏発案の自動車利用の強行軍であったが、ともかく面白かった。

静岡支部主催の紅葉会も機会があれば、参加したいとよく話をしていた。昭和四十七年の鳥海山集会には、たった一回池田氏の頭の中の地図が調子悪く松本氏と私と三人で他の方々より時間も多く歩いてしまったこともあり、何度も残念であったとくりかえしていた。

追悼会の席上、那須岳の山名考につき日本橋浜町の会館にて講演された池田氏の肉声がテープで発表された。その山行は四十八年六月に実行されたもので、三斗小屋で私達同行の人々に説明されたものとおなじ内容であった。その山行では三本槍の頂上でおりあしく雷雨となり、更に霰となって初夏から急に真冬に逆もどりの天候異変に散々の目にあった。ところが、驚いたことには池田氏は元来若白毛で真っ白くなっていたが、髪の毛が雷の電気をうけて総立ちになり、寒さしのぎに少々ウィスキーの入っていた彼の顔は芝居の唐獅子のありさま、あわてて凹地へしゃがみこんで避難したのが、妙におかしく一同大笑いをした。

池田氏は日本の三角点を調べながら、山の神と山名考について無限の時間を過していることであろう。　（鈴木英一）

昭和四十九年十二月、池田はる子夫人の手によって、遺稿集『山名考』が刊行された。

図書紹介

登山歴程

児島勘次著　A5判　本文四二八ページ一九七三年二月　私家版非売品
写真十六ページ

昭和初期の日本における登山が旧制高校や大学山岳部の活動によって大きく開花したことは疑いをいれないところであるが、その中にあって同志社大学の児島勘次氏は、きわめてユニークな、しかも幅の広い活動をした人として知られていた。しかし、戦中の中断期をはさんで戦前に活躍したこれらの人達がぼつぼつと岳界に復帰するようになってからも、児島勘次氏の消息だけはそれを知る機会が少かった。

ところが、同志社大学山岳部がヒマラヤのアピの遠征に続いて、一九六三年西北ネパールのサイパル（七〇四〇メートル）の計画を発表したとき、そのなかに突如として隊長児島勘次氏の名をみいだしたわれわれをびっくりさせたことは記憶に新しい。その間の事情が本書の五三ページ「サイパル登頂」のなかで次のように述べられている。

「登山をやめてから二十八年間山岳部のルームに一度も顔を出さず、山岳部員遭難という新聞記事には勝手にまゆをひそめ、マナスル、エベレストとやかましくなったときも、なるべく新聞の山の記事は読まないようにしていた。山は我が家の禁句になっていた。」

その児島氏が長年の山の文章をまとめて本書を出した。しかも私家版である。私家版と言っても四二八ページ、上質紙を使い、装丁、造本、堂々として眼をみはるような豪華本である。私家版であるから書店の店頭で一般の人の眼にはふれない。著者はこれを先輩、知友に頒って、贈られた人は読みたい部分だけひろい読みしてもらえればそれでいいと断わっているが、どうして読みたい部分だけどころか、私などはしまいまで興味深く読まされてしまった一人である。

戦前の登山界にも、今西錦司氏を頂点とする探検派とよばれるような系列や人脈があったとすれば、学生時代既に台湾の山、北千島、朝鮮、冬の白頭山（京大隊のメンバーとして）、大興安嶺等の山へと触手をのばし、そして二十八年間の休止期をおきながらなお不死鳥の如くに再起し、ヒマラヤ五ヶ月の山旅をやってきた著者は正しく探検派人脈の最右翼に列せられる人と言ってよいであろう。

「サイパル登頂」のなかで「奥の細道評釈」を座右の書とし、折にふれ般若心経を誦し、南無大師遍照金剛をとなえた、と述べている氏にとっての心のよりどころともいうべき漂泊の精神

がヒマラヤの未踏峰への限りない闘志と結びついていく。その過程は、北千島、台湾、白頭山、満蒙、更に剣岳を中心とする北アルプスの山々などにどん欲なまでに山頂を追求してやまなかった若き日の著者の山行の軌跡ときわめて自然に連絡していくのである。その意味で本書のなかでも最も力点のおかれていると思われるサイパル関係の三篇と、二十代に書かれた千島や台湾や剣岳などの文章との間には三十年に近い時間的空白を埋めるに足る切れることのない糸の如きつながりがあるように思えるのであった。

タライの湿地帯に始まる長いキャラバンの後、雲にかくれて姿を表わさないサイパル峰をはじめて望見するチャンスをつかむ。そこはサイパル氷河のモレインの上であった。著者はその場面の感激を、静粛な能舞台で突如被衣(かつぎ)を取り去って現われた鬼女の面にたとえ、「はるけくもたどりきたりしサイパルの氷河の上に鬼女の面見たり」と謳っている。てらいもなければ気負いもない。年期をいれた者のみのもつ純粋さと言ってよいであろう。

「登山歴程」はヒマラヤと台湾の山（六篇）、千島、朝鮮、中国への旅（五篇）、日本の山（十一篇）、随想（十三篇）の四つの部分にわかれている。

日本の山十一篇のなかには児島氏がかつて情熱を傾けたとみられる剣岳の大日尾根、早月尾根、小窓尾根等の数々のパイオニヤーワークの記録をその都度関西学生山岳聯盟報告やＤＡＣ（同志社報告）、ケルンその他の雑誌に掲載されたものが収録されている。これらのものはいずれも北アルプス登山史の一頁を彩るものであって興味深いのは言うまでもないが、読みものとしては一九三二年十二月の「笹ヶ峯紀行」などが冬の小谷の情景を詩情豊かに描写していて感興を惹く一文である。著者は雪に埋まる北信小谷で嫁とりの行事に出合う。「夜の十一時頃戸外で大声で叫ぶ人がある。いよいよ花嫁のおいでだと湯治客やわざわざ下の村から見に来た人達がマントを着たり、毛布を被ったりして出て行く。誘われるままに冷たい靴を素足に穿いて隣まで行った。遠くの雪道に松明を燃して行列が来る。松明が雪に映えてその辺一体にうす明るい。皆が何か叫びながらやって来る。だんだん近づくと家の方でも火を燃して相応じて叫ぶ。嫁じゃ、嫁じゃ、よめじゃ、叫ぶ。やがてたくさんの提灯に守られて花嫁が馬に乗って着いた。凍えるような雪の道を馬に揺られて嫁入って来た若い女の顔は頭巾の中にただ白い。」

私も四十年ばかり前、スキーをやりながら冬の小谷の生活を楽しんだことがあったが、この文章を読んでいてあの頃の静寂な北信の山村がありありと眼にうかぶようであった。

前後するけれども、台湾の山の紀行のなかに故沼井鉄太郎氏の書翰が紹介されている。その手紙はいわゆる候文で書かれたかなり長文で、台湾の登山についての実に行き届いた細々とした注意と助言であって、亡くなられるまで本会のために非常な尽力と貢献をした沼井さんらしいキメの細かい誠実なもので同氏を知る人であれば感慨を新たにすることであろう。また本書は著者の知らないうちに児島氏夫人がいろいろな雑誌、報告書

類のなかから整理してまとめたものだということがあとがきに誌されている。かえ難き良い協力者があって本書は成ったものであることを著者と共に喜びたい。

最後に、これだけの文章を収録してあるこの分厚い本であるにもかかわらず、どういう意図か窺うことはできないが目次がつけてないことはまさに評者泣かせというべきことであった。この辺にも児島勘次氏独特の個性がみられるのかも知れない。

（織内信彦）

雪崩——その遭難を防ぐために

アメリカ林野局　橋本誠二・清水弘訳　B6判　本文三三八ページ　一九七四年三月　北海道大学図書刊行会発行　定価一二〇〇円

本書の内容は三部から成り、それぞれの原著は第一部が Snow Avalanches, A Handbook of Forecasting and Control Measures (1961) 第二部は The Snowy Torrents (1967) 第三部は Modern Avalanche Rescue (1968) である。著者はすべて Forest Service, U. S. Department of agriculture となっている。

順を追って紹介すると、まず第一部はなだれの概論的なハンドブックで、積雪およびなだれの性質、地形、なだれ予報、積雪の観測、雪面の安定法、安全作業、なだれ防止柵、地域安全計画、といった広範囲のテーマに触れている。一九六一年の発行だから古い本ではあるが、類書を見かけない日本の登山者にとっては大変参考になるテキストである。冬山に入る人、その他なだれに縁の深いスキーヤー、スキー場管理者、あるいは産業人等に広く推奨したい。

従来なだれについて論じられたものは数少なくはないが、多分に想像を混じえた議論が多く、しかも奇妙な俗説が横行しているのが現状である。こうしたとき積雪の観測および実地の経験を集約して得られた本書の翻訳が上梓されたことは大変喜ばしい。立派なテキストであるから読み飛ばすことなく、繰り返し熟読してなだれの基礎知識を身につけて頂きたいものである。

なだれについて古典的知識しか持ちあわせない人たちは、なだれの原因を気温上昇ぐらいにしか結びつけないが、気温上昇は、ある場合にはなだれ発生の原因になると共に、また積雪を安定化する作用もある。この辺の詳しい解説を読めば、逆に低気温による危険の醸成などもよく理解できるであろう。

なだれが発生した場合、従来の報告で一番問題にされるのが気温であるが、気温はなだれに対して間接の影響を及ぼすものに過ぎない。もっと重要なのは積雪そのものの温度であるはずなのに、そのときの雪温が報告されたのを聞いたことがない。こうしたことも科学的に整理された知識に基づいて是正されなければならない。気温もなだれにとって無視できない重要な要

素であることは申すまでもないが、それにとらわれて、ほかの要素、例えば雪温の変化に非常に大きな影響を与える輻射や風の作用を忘れがちである。こうした基礎知識を中級者が身につけるため、本書はよき案内をしてくれるであろう。

訳者あとがきにもあるように、原著の改訂増補版が準備中であるとのことであるが、評者としてもちょっと気にかかったところがあるので簡単にコメントしておきたい。二十四ページの終りの方で、板状なだれ（これは日本雪氷学会でいう面発生なだれのことである。訳語については後記したい）は積雪の凝集力が「非常に強いと破砕されずに安定する」と言いきっているが、これは不適当な表現である。シュタイクアイゼンがほしいような堅固な感じの斜面でもなだれが出る場合があるからである。この種のなだれについては「文部省、登山指導者研修会テキスト」のなだれの発生機構の中で解説しておいたから参照されたい。乾燥新雪や各種の湿雪のなだれについては、初級の人でも警戒するが、ここに述べられたようなだれは、上級者でも油断しがちであるから、特に注意しておきたい。

本書はなだれの優れた解説書ではあるが、本書をよく読めば山のなだれを避けることができるかというと、そんな訳には行かない。むしろ、なだれを専門に調査している人でさえ、斜面の危険度を的確につかむことができずに犠牲になった例など、他山の石として肝に銘じる必要がある。

なだれの遭難予防といえば、気温がどうの、密度がいくらといった数字による判断をしようと考えている人が大変多いが、なだれはそのような単純な計算で判断できるものではない。本書はなだれの数値予報にも触れているが、積雪観測所もろくに持たない日本の山では全く通用しない。要するに登山者は本書を基礎知識のテキストとして読むべきで、この知識を利用してなだれを直接判断できると思ったら、大変な勘違いと言うべきであろう。

日本の登山遭難の場合についていえば、降雪中またはその翌日には急な吹きだまりに近づくな、やむなく危険地帯に追いこまれたならば一時に一人だけが通過せよ、という簡単な注意を守るだけで、過去の犠牲者の大部分は救われていたはずである。しかし現実にはこれが守られていなかった。登山遭難に関するかぎり、物理的問題の解明以上に、遭難心理がむしろ問題となろう。残念ながらこうしたリーダーシップの問題については、本書では触れられていない。

本書の第二部は六十二例におよぶ豊富な事故記録である。過去におけるわれわれのなだれに関する諸知識は、遭難の解析によって得られて来た。その意味で貴重なページである。

しかしこの資料によって、なだれの発生機構解明のための統計などを作ろうとしても無理のようだ。データにムラが多く、詳しいものもあると同時に、新聞記事なみの報告も少なくない。事故までの降雪、積雪の概略、天候、気温などに詳しく触れているものは少ない。遭難例の中で特に眼を引くのは、なだれの滑り面に霜ザラメがあったという報告が非常に多く、登山者やスキーヤーがなだれを誘発させた例ばかりであって、日本の場

合とかなり違った感じを与える。日本の山では降ったばかりの乾燥新雪によるなだれが圧倒的に多く、霜ザラメについては、めったに報告されていないからである。

本書の第三部は救助法で、救助隊の組織から始まって、蘇生のための手当までふくむ。ここに述べられているような立派な救助隊が現に存在するということは大変うらやましいが、やる気さえあれば日本でもやれないはずはないと思う。貧乏性なのであろうか。

本書の翻訳は逐語訳というよりは、原義を損なわぬ程度に適当に省略の行われた意訳であって、日本語として読みやすい文章になっている。しかし欲をいえば、省略なしの方が一層正確に原著の意図を伝えるものであること、いうまでもあるまい。

専門用語を日本語に移しかえることはいつも問題が多いものであるが、destructive metamorphism と constructive metamorphism をそれぞれ崩形変態と成形変態に訳したものなどは苦心の名訳であると思う。

しかし loose snow avalanche を新雪なだれ、slab avalanche を板状なだれと訳しているのは、従来の日本での用例から見て混乱の種になるかも知れない。loose snow avalanche は新雪の場合に限らず、各種の旧雪の場合にも見られる。また slab avalancne のうち軟雪によるものは、従来われわれは新雪なだれと呼んで来たし、板状なだれといえば堅雪の slab avalanche に限ると考えている人が多い。そうした点から見ると、日本雪氷学会の分類による点発生なだれ、面発生なだれという用語がかなり普及した今日、それを踏襲した方がいいのではないかとも考える。

なだれの分類や名称については従来用いられて来たものが数多く、しかも厳密な定義が与えられていない場合もあり、議論するに際して多くの混乱を生じて来た。日本雪氷学会の分類について見ても、実証主義に則り、厳密を旨としているが、奇妙なことには、なだれそのものの定義が行われていないし、遭難予防の見地からは、あまりにも大雑把で不便である。このような状況から見て、訳語の選択については、前記した以外の用語についても一考を煩わしたいと希望する。（金坂一郎）

深田久彌・山の文学全集　全十二巻

〔監修〕小林秀雄　井上靖　三田幸夫　今西錦司〔編集委員〕近藤信行　中馬敏隆　四六判平均四七〇ページ　各巻に付録月報付　一九七四年三月～一九七五年二月　朝日新聞社刊　定価各巻一八〇〇円

深田久弥さんが茅ヶ岳で突然なくなったのが昭和四十六年（一九七一年）三月二十一日、それから満三年後の四十九年の三月二十一日に本全集の第一回の発行がなされ、以後毎月刊で、

今年五十年の二月に完結した。

《この全集は、現在までに探すことのできた著者の全作品の中から、小説・文芸評論の類を除き、主として「山」に関係を持ったすべての文章を対象として検討し、全十二巻に編集された。作品は昭和二年（一九二七年）から昭和四十六年（一九七一年）の四十五年間に発表されたものである》（第一巻解題　中馬敏隆）とあるが、八ポ二段組み、各巻五〇〇ページに近い本が十二冊並んでみれば、あらためて著者の「山」に対する熱情に心打たれるほかはない。先にまとめられた『大島亮吉全集』（全五巻　一九六九～一九七〇年　あかね書房）があるにしても、こうした個人の「山」の著作が十二巻にものぼる全集として上梓された例は、ほかには類をみない。日本ばかりでなく、欧米諸国においてもその例はないであろう。

全十二巻のうち、第一巻～第五巻が日本の山、第六巻～第九巻がヒマラヤ、第十巻～第十一巻が中央アジアを対象とした著作となり、さらに第十二巻に身辺随想、年譜などがおさめられている。以下、各巻の内容の大要を紹介しておく（巻数の下は表題）。

第一巻・わが山山　『わが山山』『山岳展望』『山の幸』。

第二巻・山頂山麓　『山頂山麓』『をちこちの山』　他に単行書未収録作品二十二編を「山岳雑記帳」の題名のもとに収載。

第三巻・わが愛する山々　『わが愛する山々』と『山さまざま』『山があるから』の大部分。

第四巻・瀟洒なる自然　『山岳遍歴』『瀟洒なる自然』『山頂の憩い』、他に単行書未収録作品三十四編を「山の愉しみ」「山の風物誌」「回想の山旅」の題名のもとに収載。

第五巻・日本百名山　『日本百名山』、他に『山岳遍歴』の一部と単行書未収録作品十六編、さらに書評三十一編と映画評七編を「山によせて」「山の本と映画」の題名のもとに収載。

第六巻・雲の上の道　『雲の上の道――わがヒマラヤ紀行』『ヒマラヤ――山と人』の大部分、他に『山があるから』などからの五編と単行書未収録作品十四編を「ヒマラヤ随想」の題名のもとに収載。

第七巻～第九巻・ヒマラヤの高峰（上）（中）（下）　『ヒマラヤの高峰』（雪華社）第一巻～第五巻から「後記」を含めて六十六編、『岳人』一九六一年十月号～一九六八年十二月号（「ヒマラヤの高峰」三四～一〇二）の八十七編、『ヒマラヤ登攀史第二版』（岩波書店）からの四編。

第十巻・シルクロードの旅　『シルクロードの旅』、他に『シルクロード』の大部分、さらに単行書未収録作品を「続シルクロード――ラサへの道」の題名のもとに収載。

第十一巻・中央アジア探検史　『中央アジア探検史』、他に「スウェン・ヘディン」「西域の探検家」の題名のもとに『ヘディン中央アジア探検紀行全集』の「解説」と『西域探検紀行全集』の「解説」などから収載。

第十二巻・九山山房夜話　『岳人』一九六九年一月号～十二月号に連載された「九山山房夜話」を中心にして単行書未収録作品など五編、『きたぐに』の大部分、「わが文学生活」（八文

学的半自叙伝〉十一編、〈同時代の人と作品〉七編)、「書簡抄――諏訪多栄蔵宛」を収載。さらに「深田久弥・年譜」(堀込静香編)と「ヒマラヤの高峰」索引がおさめられている。

深田久弥は、今なお、多くの人々に敬愛されている。すぐれたマウンテニアーとして、独自の風格を持つイルミネィティングな山の文学を生みだした作家として、また、その人柄をもって、私たちの心のなかにある。そして、その作品を身辺近くに・おき、常時それに親しみたいと願っている人もけっして少なくはない。ところが、初期の作品、ことに第二次大戦以前のものは、今ではなかなか見られなくなってしまっている。最初の「山」の著書『わが山山』が発行されたのは一九三四年であり、すでに四十年余の歳月がたっている。戦後発行の単行書にしたところで入手しがたいものも幾冊かある。こうした折、この全集が企画発行されたことは、まことに意義あることといわなくてはならない。つねに日本の山々をかたわらにしながら、ヒマラヤから中央アジアへと進んでいった著者の軌跡があまさずにもられているのが、この全集にほかならない。

加えて、これまで単行書に収録されなかった作品の数々、諏訪多栄蔵氏宛の書簡(一九五三年三月六日から一九七一年三月七日発信の著者がなくなる二週間前までの百一通)が収載されているのも、全集ならではのことであろう。

深田久弥を、単に山の紀行・随想を書き、ヒマラヤや中央アジアの研究を発表した著述家ととらえるのは、大きな誤まりである。現在の若い人のなかには、そのような狭い角度からしか著者をとらえていない人もあるが、この全集を求めた場合には、第十二巻を最初に開いてみることをすすめたい。とくに「きたぐに」「わが文学生活」の二章である。

「深田久弥の全体像を《山》だけでとらえようとするのは早計というべきであろう。彼はなによりもまず文学者であった。彼は小説を書き、批評を書き、詩をつくり、そして《山》を描いた。……《山》とそれにまつわるものを描いた文章にゆたかな描写力と深い洞察力があったのは、彼に文学者の魂がそなわっていたからだ」(第十二巻「深田久弥・人と作品」近藤信行)とあるが、その文学者としての深田久弥を知ることが、この全集をひもどくうえで、なによりも重要な前提となるからである。

本全集には、全巻にわたって本会常務理事の近藤信行氏が「深田久弥・人と作品」を、また千葉大学助教授で深田久弥の書誌研究家である中馬敏隆氏が「解題」を書き、第十二巻には千葉大学図書館司書でやはり深田久弥の書誌研究で知られる堀込静香氏の編になる「深田久弥・年譜」が載せられている。いずれもたいへんな労作であり、一般の読者はもちろん、今後の深田久弥研究をこころざすものにとっても貴重な資料となることは疑いない。

近藤氏の「深田久弥・人と作品」は合計二六〇枚にもおよぶ評伝である。そして近代登山史の中での著者をクローズアップさせるとともに、その文学的生涯をあますところなくとらえている。

中馬敏隆氏の「解題」、堀込静香氏編の「深田久弥・年譜」は驚くほどの詳細な研究である。底本の吟味、初出の探査、表記の統一、校訂などに多大の努力がはらわれている。作品に書かれた地図にもとづいての記述に対しては現行の地図と照合し、さらに現地に問合せるなどの手数を踏んで、その時代による差違なども発見し記している。著者の錯覚による地名の誤記などももちろん訂正されている。「年譜」は、著者の生活伝記事項、山行歴、山に関する作品目録を三本の柱にして、六七ページにものぼるものである。この全集は広く好評をえてむかえられたと聞いているが、以上のような入念な評伝・研究がつけ加えられていることも大きな理由の一つにあげられよう。

最後に、私感による蛇足を二つ三つ。造本はあまり感心できない。せめて表紙に布クロースが使ってあったらとおしまれる。紙だと表紙のつけねが痛みやすい。箱に蓋をつけたのはよいが、段ボール様の材質なので、蓋を開閉する時に爪で傷をつけ、穴をあけてしまいがちである。第十二巻に、第七巻〜第九巻収載の「ヒマラヤの高峰」索引が載っているが、これは第九巻に収載したほうがよかったのではないか。また、付録月報12に、全集の別巻として「ヒマラヤの高峰」全座を収録する写真集を準備中と予告されているが、一日も早く手にしたいものと願っている。

なお、去年の早春、本全集の紀行の中に不二さん、茂知さんとして登場するお二人とともに西上州の山へいったことがある。その折、宿の一夜の話題にこの全集のことがでた。そして不二さんがしみじみといわれるには「深田も全集なんかできなくてもよいから、今ここにいっしょに山にきてればよかったのに」。私は、それを耳にした時、「本当にそうです」というよりも先に、思わず鼻がつんとするのを感じた。

（横山厚夫）

会務報告

昭和四十八年（一九七三）七月～昭和四十九年（一九七四）六月

◇**七月理事会**　七月六日（金）　ルーム
出席者　今西、中屋、織内、伊倉、板倉、春田、宮下、須田、浜口、帰山、今成、田村、望月、佐藤、山崎
▽議事・報告
一、理事会の開催日、記録配布の件
二、海外登山（専大山岳部―七五年ヒマルチュリ）推薦の件
三、山岳研究所募金の件
四、ルーム経費の件
五、委員会組織状況報告の件
六、現地支部長会議報告の件
（詳細は「山」三三九・三四〇号参照）

◇**九月理事会**　九月十八日（火）　世田谷区青年の家
出席者　今西、織内、板倉、浜口、帰山、宮下、浜野、山本、神崎、今成、須田、田村、松丸、山崎、金坂
▽議事・報告
一、松方三郎氏葬儀・香典の件
二、上高地山岳研究所の件
三、ネパール駐在大使歓送迎会の件
四、図書交換会の件
五、十月理事会・評議員会の件
（詳細は「山」三四一号参照）

◇**十月理事会**　十月五日（金）　ルーム
出席者　中屋、織内、板倉、近藤、春田、宮下、神崎、須田、山本、丹部、田村、帰山、望月、山崎
▽議事・報告
一、松方三郎名誉会員追悼会の件
二、上高地山岳研究所開所式の件
三、年次晩餐会の件
四、会報遅延の件
五、高所登山研究会の件
六、集会・図書委員会報告の件
七、海外連絡委員会報告の件
（詳細は「山」三四二号参照）

◇**十一月理事会**　十一月二日（金）　ルーム
出席者　中屋、織内、伊倉、板倉、春田、宮下、原、近藤、須田、神崎、望月、金坂、山崎
▽議事・報告
一、エベレスト女子登山隊の件
二、名誉会員・顧問の件
三、会報の件
四、書評委員会の件
五、松方氏事後報告の件
六、自然保護の件
七、高所登山研究会の件
八、山岳研究所の件
九、集会委員会報告の件

十、海外連絡委員会報告の件
十一、図書委員会報告の件
十二、「山岳」進行状況報告の件
十三、学生部マラソン大会の件
十四、登山用具安全検定の件
（詳細は「山」三四二号参照）

◇**十二月理事会**　十二月七日（金）　ルーム
出席者　織内、板倉、伊倉、近藤、春田、神崎、松丸、須田、大倉、山本、丹部、田村、帰山、浜口、山崎

▽議事・報告
一、秩父宮記念学術賞授賞候補推薦の件
二、明大ダウラギリⅤ峰登山隊推薦状交付の件
三、昭和四十九年度事業予算の件
四、会員章の取扱いの件
五、ルーム使用時間の件
六、理事代行の件
七、「近代登山の先駆者たち」展（烏水・理太郎・金次郎生誕百年記念）の件
八、年次晩餐会の件
九、支部運営費補助の件
（詳細は「山」三四三号参照）

◇**一月理事会**　一月十一日（金）　ルーム
出席者　今西、中屋、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、浜野、神崎、松丸、大倉、山本、田村、浜口、望月、山崎、金坂、小倉

▽議事・報告
一、四十九年度事業予算の件
二、四十九年度通常会員総会の件
三、今成、須田両理事辞任にともない候補者選考の件
四、「近代登山の先駆者たち」烏水・理太郎・金次郎生誕百年記念展報告の件
五、会報発行状況報告の件
六、「山岳」六十七年発行の件
七、四十九年版山日記発行の件
八、四十八年度財務報告の件
（詳細は「山」三四四号参照）

◇**二月理事会**　二月一日（金）　ルーム
出席者　今西、織内、板倉、伊倉、浜野、神崎、松丸、大倉、山本、丹部、田村、帰山、浜口、望月、山崎、金坂

▽議事・報告
一、四十九年度通常会員総会の件
二、農工大山岳部ダウラギリⅡ峰登山隊推薦状交付の件
三、四十九年度委員会事業予算の件
四、秩父宮記念学術賞授賞決定報告の件
五、各委員会報告の件、その他
（詳細「山」三四五号参照）

◇**三月理事会**　三月一日（金）　ルーム
出席者　織内、板倉、伊倉、春田、浜野、原、山本、丹部、田村、山崎、金坂

▽議事・報告
一、立大アンナプルナⅡ峰登山隊推薦状交付の件
二、四十九年度除籍の件
三、山研利用規定、管理規定制定の件

四、総会開催日変更の件、その他
（詳細「山」三四六号参照）

◇**三月臨時理事会**　三月二十二日（金）　ルーム
出席者　今西、中屋、板倉、伊倉、春田、宮下、丹部、帰山、今井、望月、山崎、金坂、高遠、小倉
▽議事・報告
一、四十九年度事業計画案、予算案の件
二、監事任期満了につき候補者推薦の件
（詳細「山」三四七号参照）

◇**四月理事会**　四月十五日（月）　ルーム
出席者　織内、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、松丸、丹部、田村、帰山、村尾、今井、山崎、高遠
▽議事・報告
一、四十八年度収支決算の件
二、四十九年度収支予算案修正の件
三、上高地山岳研究所給水施設に必要な水路敷使用許可申請の件
四、山岳出版の件
五、創立七十周年記念事業の件
（詳細は「山」三四八号参照）

◇**昭和四十九年度通常会員総会**　四月二十二日（月）赤坂O・A・G会館
出席者　今西会長以下九十名（委任状一、〇四四通）
▽総会次第
一、会長挨拶　今西錦司
二、会務報告　今西錦司
三、物故会員に対する黙祷
四、昭和四十八年度事業報告および収支決算、財産目録報告
五、監査報告（右承認）　板倉勝正　伊倉剛三
六、昭和四十九年度事業計画および収支予算案の件　板倉勝正　伊倉剛三
（右、原案どおり承認）
七、今井雄二、村尾金二両監事の任期満了にともなう次期監事の選任の件
（再任が提案、全会一致承認）
八、昭和四十九年度除籍者の件
九、支部報告
北海道（伊藤）、岩手（笠原）、秋田（柴田）、宮城（伊達）、越後（藤島）、信濃（蒲生代理）、山梨（大沢）、静岡（山本）、岐阜（藤井代理）、富山（中田）、関西（今西寿）、東九州（木本代理）
十、連峰スカイライン反対運動の件　渡辺公平
十一、上高地山岳研究所の現況報告その他
（詳細は「山」三四八号参照）

◇**五月理事会**　五月十日（金）　ルーム
出席者　織内、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、浜野、神崎、松丸、原、山本、田村、浜口、望月、山崎、金坂、高遠、三枝
▽議事・報告
一、信濃支部規約改正承認の件
二、四十九年度年次晩餐会の件
三、担当理事選任の件
四、創立七十周年記念事業準備委員会組織の件
五、ウェストン祭、尾崎喜八氏追悼会の件

六、集会委員会四十九年度予定報告その他
（詳細は「山」三四九号参照）

◇**六月理事会**　六月七日（金）　ルーム

出席者　今西、織内、板倉、伊倉、近藤、春田、宮下、松丸、大倉、山本、浜口、金坂、高遠、三枝

▽議事・報告

一、上高地山研建物敷使用期間更新の件

二、山研管理人選任の件

三、エベレスト南西壁登山計画の件

四、神谷名誉会員御逝去報告の件

五、ウェストン祭、尾崎喜八氏追悼会報告の件

六、会費納入状況報告の件

七、各委員会報告（山岳、山日記、図書、医療、自然保護、青年懇談会、指導委員会）
（詳細は「山」三五〇号参照）

◇**小集会**

▽第二九七回　昭和四十八年七月九日（月）　日仏会館
映画会「アルプスは招く」「シャモニーの針峯群」

▽第二九八回　昭和四十八年七月二〇日（金）　ルーム
信濃支部アンナプルナ遠征報告会　松永敏郎氏

▽第二九九回　昭和四十八年七月二十一日（土）　ルーム
中央大学アビ遠征報告会とエベレスト会議報告会　市川邦治・丹部節雄氏

▽第三〇〇回　昭和四十八年十月二十日～二十一日　箱根湖尻キャンプ場　現地小集会

▽第三〇一回　昭和四十八年十月二十五日（木）　ルーム
映画と講演会　デンマーク山岳会ハーリ・ヴェドー氏

▽第三〇二回　昭和四十八年十一月十五日（木）　岸記念体育館
雪崩シンポジウム

▽第三〇三回　昭和四十八年十二月二十日（木）　ルーム
忘年会（詳細は「山」三四三号参照）

▽第三〇四回　昭和四十九年一月十三日（日）～十五日（火）八方尾根
中大山荘
スキー懇親会

▽第三〇五回　昭和四十九年二月二十日（水）　ルーム
立教大学カンバチェン遠征報告　大倉昌身氏

▽第三〇六回　昭和四十九年五月二十日（月）　ルーム
北里大学カンジロバ登山報告　河村栄二氏

▽第三〇七回　昭和四十九年六月九日（日）　中部地区支部懇談会

▽第三〇八回　昭和四十九年六月二十日（木）　岸記念体育館
日本エベレスト登山隊一九七三　南壁登攀報告　湯浅道男氏

◇**主なる行事および集会**

▽穂高涸沢合宿（青年懇談会主催）
昭和四十八年八月十五日～二十六日

▽第一回高所登山委員会
昭和四十八年九月二十二日（土）～二十三日（日）　上高地　出席者十七名。「山」三四三号参照。高所登山委員会についてはこのほか「山」三四五、三四七、三五二号参照のこと。

▽上高地山岳研究所竣工式
昭和四十八年十月八日（月）　「山」三四二号参照。

▽第六回山岳図書交換会（図書委員会主催）
昭和四十八年十月十三日　（土）　ルーム　「山」三四二号参照。
▽第十六回もみじ会（静岡支部主催）
昭和四十八年十一月三日（土）～四日（日）　東海自然歩道と禅寺泊、大日山金剛山　「山」三四三号参照。
▽昭和四十八年度年次晩餐会
昭和四十八年十二月一日（土）　ホテル・ニュージャパン　出席者二二五名。「山」三四三号参照。
▽第十二回「この一本展」（松方三郎著作展）
昭和四十八年十二月一日　ホテル・ニュージャパン　「山」三四六、三四七号参照。
▽「近代登山の先駆者たち」展（小島烏水・木暮理太郎・岡野金次郎生誕一〇〇年記念）
昭和四十八年十二月二十四日～二十九日　日本橋丸善三階催場　「山」三四二、三四四、三四五号参照。
▽今西錦司会長を囲んで（婦人懇談会主催）
昭和四十九年一月十七日（木）　ルーム　出席者二〇名。
▽第五回山岳図書を語る夕べ（図書委員会主催）
昭和四十九年二月二十七日（水）　ルーム
講師　島田　巽氏。出席者二十九名。「山」三四七号参照。
▽第十回秩父宮記念学術賞授賞式（北海道大学ネパール・ヒマラヤ地質研究会の「ネパール・ヒマラヤの地質研究」に対し）
昭和四十九年三月五日（火）　東京銀行クラブ　「山」三四六号参照。
▽第二回山岳史懇談会（図書委員会主催）
昭和四十九年三月十三日（水）　ルーム　「一高旅行部の足跡」講師日高信六郎・大木　操・中塚癸己男氏。出席者四十名。「山」三五〇号参照。
▽名誉会員・松方三郎氏追悼会
昭和四十九年四月二十二日（月）　OAG会館　槙　有恒、藤島敏男、加藤泰安三氏による追悼講演がおこなわれた。出席者一三九名。「山」三四八号参照。
▽第十四回登山技術講習会（指導委員会主催）
昭和四十九年五月十七日（金）～十九日（日）　上越谷川岳　参加者二十一名。「山」三五一号参照。
▽第十二回木暮理太郎翁碑前懇親会（山梨支部主催）
昭和四十九年五月十八日（土）～十九日（日）　金山平　参加者二二名。「山」三五二号参照。
▽第二十八回ウェストン祭（尾崎喜八氏追慕の集い）（信濃支部主催）
昭和四十九年六月二日　上高地　「山」三四九号参照。
▽上高地山岳研究所オープン
昭和四十九年六月十日　「山」三四七号参照。

◇**海外登山界との交流**

▽本年度は三十ヵ国六十五団体と情報および機関誌の交換をおこなった。
▽「青年登山家のための国際トレーニング・キャンプ」に藤井　洋、田和芳郎、近藤憲司会員が参加（昭和四十八年十月二日～九日、ソビエト連邦共和国クリミア地方）。（詳細は「山」三四六、三四七号参照）。
▽イラン山岳会長M・サデギアン氏が世界地図学会出席のため来日、昭和四十八年十月十二日（金）吉沢一郎会員他の案内で富士登山。翌十三日（土）ルームへ来室。（詳細は「山」三四二号参照）。
▽UIAA（国際アルピニスト連合）一九七三年度総会に田村俊介、鈴

木郭之会員が出席（昭和四十八年十月二十三日～二十九日、ソ連邦グルジア共和国）。（詳細は「山」三四六、三四七、三四九、三五〇、三五一号参照）。

一九七四年度役員

会　　長　今西錦司

副 会 長　中屋健式、織内信彦

常務理事　板倉勝正、伊倉剛三、近藤信行、春田俊郎、宮下秀樹、浜野吉生、神崎忠男

理　　事　松丸秀夫、原　真、大倉昌身、山本良三、丹部節雄、田村宏明、帰山　毅、浜口欣一、高遠　宏（代行）、三枝礼子（代行）

監　　事　村尾金二、今井雄二

常任評議員　佐藤テル、望月達夫、山崎安治、金坂一郎

評 議 員　藤島　玄、津田周二、伊藤秀五郎、渡辺公平、島田　巽、堀田弥一、加藤泰安、小原勝郎、田口二郎、今井田研二郎、今西寿雄、林　和夫、中田清兵衛、村山雅美、藤井運平、大塚博美

報　告

支 部 長　伊藤秀五郎（北海道）、笠原潤二郎（岩手）、柴田均二（秋田）、後藤幹次（山形）、伊達篤郎（宮城）、伊藤弥十郎（福島）、藤島　玄（新潟）、奥原教永（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、樋口敬二（東海）、松井辰弥（岐阜）、中田清兵衛（富山）、小林雄次郎（石川）、今西寿雄（関西）、織田　収（山陰）、末松大助（福岡）、野口秋人（東九州）、三谷孝一（熊本）

会務

SANGAKU

The Journal of the Japanese Alpine Club

Vol. LXIX 1974 **Issued in April, 1975**

Contents

(*In English*)
Monutaineering in Himalaya : centering for activities of Japanese Parties during 1973～1974 ……by Zenpei Katayama…… 1
Manaslu, premonsoon 1974—the first 8000 m by a Japanese Woman Expedition……by Tsune Kuroishi…… 6
Jannu, Old and New—the second ascent in the premonsoon, 1974……by Kazutoyo Hashimura……11
Southwest face of Everest : 1973……by Michio Yuasa……21
(*In German*)
Saburo Matsukata……by Samuel Brawand……28
(*In Japanese, except the articles mentioned above*)
Kanbachen, autum 1973……by Takeo Yamanoi……88
From Manaslu to Yalung Kan……by Shojiro Ishizaka……99
International Mountaineers' Meet, Darjeeling……by Yukio Mita… 107
Long waiting for story on Usui Kojima……by Ichiro Kano… 113
Japanese Alpine Club and Nature Protection……by Kohei Watanabe… 117
Essencials for high attitude climbing ……by Ichiro Kanesaka… 126
Guides of Kurobe……by Yasuo Ugouchi… 133
Memorial Service for Saburo Matsukata
His life with mountains……by Yuko Maki… 141
All his efforts and services to JAC……by Toshio Fujishima… 145
Mr. Matsukata as a reader……by Taian Kato… 147
Memorial adress of Mr. Brawand……by Jiro Tagouchi… 153
Mr. Matsukata and Nature Protection……by Yoneko Murai… 155
In Memoriam :
Yasushi Kamiya, Kihachi Ozaki, Takami Sasaki, Isuke Kanaya, Saburosuke Tagouchi, Koji Ikeda…… 157
Book Reviews …… 175
Club Proceedings…… 183

Editor : Nobuyuki Kondo

Editorial staffs : Yasuji Yamazaki, Ichiro Kanesaka, Hiroshi Nakajima, Ryozo Yamamoto, Sadao Karibe, Jusetsu Setsuda, Hiroshi Takato

The Japanese Alpine Club

(Founded 1905)

Address: Sakura Bldg., 1–6–1 Yushima, Bunkyo-ku, Tokyo.

(April 1974—April 1975)

President: Kinji Imanishi

Vice-Presidents: Kenichi Nakaya, Nobuhiko Oriuchi

Honorary Secretaries: Katsumasa Itakura, Gozo Ikura

Honorary Editor: Nobuyuki Kondo

Honorary Librarian: Ryozo Yamamoto

Honorary Treasurers: Katsumasa Itakura, Gozo Ikura

Auditors: Kinji Murao, Yuji Imai

Committee

Katsumasa Itakura	Gozo Ikura	Nobuyuki Kondo
Toshiro Haruta	Hideki Miyashita	Yoshio Hamano
Tadao Kanzaki	Hideo Matsumaru	Makoto Hara
Reiko Saegusa	Masami Ohkura	Ryozo Yamamoto
Sadao Tanbe	Hiroaki Tamura	Tsuyoshi Kiyama
Kinichi Hamaguchi	Hiroshi Takato	

Council

Teru Satoh	Tatsuo Mochizuki	Yasuji Yamazaki
Ichiro Kanesaka	Gen Fujishima	Shuji Tsuda
Hidegoro Itoh	Kohei Watanabe	Tatsumi Shimada
Yaichi Hotta	Taian Kato	Katsuro Obara
Jiro Taguchi	Kenjiro Imaida	Toshio Imanishi
Kazuo Hayashi	Yukichi Nakata	Masami Murayama
Unpei Fujii	Hiromi Ohtsuka	

Chairmen of Local Sections

Hokkaido: Hidegoro Itoh
Yamagata: Kanji Gotoh
Fukushima: Yajiro Itoh
Shinano: Norinaga Okuhara
Shizuoka: Tomosaburo Yamamoto
Toyama: Yukichi Nakata
Gifu: Kinji Imanishi
Kwansai: Toshio Imanishi
Sanin: Osamu Oda
Kumamoto: Koichi Mitani
Iwate: Junjiro Kasahara
Akita: Kinji Shibata
Miyagi: Tokuro Date
Echigo: Gen Fujishima
Yamanashi: Isaburo Ohsawa
Tokai: Keiji Higuchi
Ishikawa: Yujiro Kobayashi
Fukuoka: Daisuke Suematsu
Higashi Kyushu: Akito Noguchi

Mountaineering in Himalayas Centering on the Activities of Japanese Parties During 1973–1974

by Zenpei Katayama

We can not neglect the impacts of oil crisis on mountaineering during 1973–1974. The impacts has made it difficult for us to raise expedition funds, and prices of gears have soared, and in Himalayas, it is reflected on the employment of porters and sherpas. On the other hand, in Japan, recreations and sports have become to be argued in the same sphere as labor. Increase of leisure time, development of communication networks brought Himalayas nearer to Japanese climbers. Moreover, in 1973, Pakistani mountains were reopened and in 1974, India made her inner line retreat greatly.

To Nepal Himalaya, 29 parties in '71, 18 in '72, 21 in '73 and in '74 went from abroad. Japanese parties occupied large parts in each year. At least 50 parties went to Himalayas including Indian and Pakistani peaks in '74. This unusual number, however, does not show the barometer of the quality of their activities.

Giants

Everest is still attracting climbers in the world. Two big expeditions challenged it in '73. In the pre-monsoon, luxuriously equipped Italian party, 64 members, led by millionaire Gyde Mantieno and Piero Nava made two ascents by normal route on southeast ridge by seven members (three were sherpas). The Second RCC Party of Japan, 43 members, led by Michio Yuasa, made the first ascent in post-monsoon. Ishiguro and Kato stood on the summit. The party failed, however, in the attack by southwest face. A Spanish party and a French party failed in both seasons of '74.

Dhaulagiri I (8167 m): An American party made the third ascent by northeast ridge in pre. 1973. They, however, failed in the attempt by untrodden Southeast Ridge.

Annapurna I (8091 m): In pre. '73, JAC Shinano Branch party attempted by the French party route. They, however, were obliged to abandon the

summit just 50 m below it by bad weather. They lost four members and a sherpa by an avalanche.

Yalung Kang (8500 m): Kyoto Univ. party made the first ascent in pre. '73. Nihon Univ. party in the next year abandoned climbing just below the summit. A German party made the fourth ascent of Manasulu (8156 m) by east face in pre. '73. Although the fourth, the party developed the new variation route. A Japanese all-woman party made the fifth ascent by JAC '57 route in pre. '74. A Czechslovak party (in pre. '73 by southwest face) and a Austrian party (in pre, '74 by South Face) challenged dangerous Makalu but failed.

Kanagawaken Sangakurenmei party attempted to climb by the south face of Lhotse (8511 m) in pre. '73; and an Austrian party challenged there from Barun Glacier in pre. '74. The latter party made the ascent of Shartse, but both failed in getting the summit of Lhotse. Climb of Lhotse by variation routes seem to be at the opening stage.

Dhaulagiri Peaks

Since the reopening in '70 till '74, 32 parties attacked Dhaulagiri peaks. Nine parties gathered there in '73 and '74 respectively. Untrodden Peak IV (7661 m) especially became the target of expeditions. Five Japanese parties had already attacked the peak, but all failed. An Austrian party (OAV) attacked by north face but abandoned at 7250 m by strong wind. A British party in the latter of the year sent two attack teams from C6 (6000 m) but they withdrew at C8 on the col on west ridge. A British Air Force party succeeded in the attempt in pre. '74. On the way to carry goods between C1 and C2, however, four sherpas were assaulted by a crush of seracs (three were killed and one was seriously wounded). The party abandoned in the early stage. Dhaulagiri IV has already killed 12 men. Dhaulagiri III (7751 m) was conquered by a West German party in post. '73. Dhaulagiri VI (7268 m) was conquered by Japanese Osakafu Gakuren party. Putha Hiunchuli (7246 m) was climbed by Yokkaichi party in post. '73, but lost two members and a sherpa at C5 on Oct. 14. It is said that the cause of the disaster an avalanche aroused by an earthquake.

Kanjiroba Peaks

Kanjiroba Himal still remains unexplored areas. Main peak of Kanjiroba

was conquered by Osaka Univ. party in '70. In the next year, Osakafu Gakuren party conquered Tsho Karpo Kang (6556 m). Nihon Himalayan Sangaku Kyokai party entered there from the westward of Jumla and went to eastwards. The party explored Dojam Khola river and Phungphung Kola river located on the west of Phokusumdo lake. The party then attacked Kang Jeralwa (6612 m) through southwest ridge and reached the summit on April 22 by Kyogoku and Goto and on 23rd, Hattori, Nomura, Sakamoto and Pasan Norub also stood on the summit. Then, the party approached to the origin of Phungphung Khola and on their way back, passed over Kagmaa La (5115 m).

Kitazato Univ. party aimed Hanging Glacier Peak (6482 m) but abandoned it and got the summit of 6227 m peak. They named it Serku Dorma (Golden Goddess). Yamagata Univ. party in pre. '74 made the first ascent of Bhijora Hiunchuli (6386 m) on April 27 by Milchberg ridge. The party went back to Pokhala via Dibricott and Jangra Banshan.

Japanese parties were very active in Kanjirobas after reopening. Some compilings of the results of their activities seem to be needed now.

Annapurna Peaks

Sangaku Doshikai Association sent a party to Annapurna II (7937 m) in pre. '73. The party originally had aimed to climb by south face, but changed it on the way to northwest face route (developed by Shinshu Univ. party in '71). K. Kondo soloed from C5 and reached the summit on May 6. Sagaminokai party which aimed Annapurna South (7220 m) by east ridge in pre. '73, and Koriyama Yamanokai party which aimed southwest ridge of the peak in pre. '74, abandoned the summit. A British Army party made the first ascent of Lamjung Himal (6983 m) in pre. '74 by southeast ridge. Nihon Himalayan Sangaku Kyokai party made the second ascent of the peak in the latter of the year. JAC Nagano Branch party was assaulted by a snow avalanche as a result of unusual heavy snow in pre. '73 when climbing the main peak of Annapurna. Unskilled sherpas increased victims in the disaster. Expeditions of Nagano Prefecture for Dhaulagiri V in '71, Annapurna II in '71, and Gangapurna in '72 lost 17 members in Himalaya.

Eastern Nepal

Seijo Univ. party made the second ascent of Jannu (7710 m) in pre. '74. Rikkyo Univ. party which aimed Kanbachen (7902 m) in post '74, abandoned the summit because of the destruction of C3 by a heavy snow and danger of avalanche. A Polish party (15 members, led by P. Motteckey) made ascent of the peak by northwest face on May 26 in '74. A Yugoslabian party made the second ascent in the latter of the year. Activities of East European parties have become conspicuous in Himalayas.

Sherpaless mountaineering

Two variation routes were developed by two Japanese parties at Pumori (7145 m). Tohan Club party, 14 members, led by Nakamura attacked by south ridge without sherpas. Two members got the summit on May 1. Club Unpo Himalayan party, 11 members led by Fujita stood on the summit by west wall in post. '74. They attacked from a branch of Changri Glacier (three sherpas supported them to Cl). Two members stood on the summit on Oct. 13. It was the fourth ascent of the peak. These two expeditions should be marked since they pioneered new style light expedition of seven thousanders without sherpa. This style of mountaineering seems to become more popular in Himalayas.

Movements in Kathmandu

Responding to the increase of disasters of expeditions and treckers, movements of establishing HRA (Himalayan Rescue Association) emerged among foreigners in Kathmandu, such as the members of US Peace Corpse, surgeons and pilots. Before beginning activities, however, the organization was absorved in HMA and inactive now.

Nepalese Government revised mountaineering regulations. Compensations for accidents of porters and sherpas were raised widely at a stroke. Death of sherpa, for example, has become three times to 150,000 Rs since '74. The rate of death of sherpas has been actually high. After reopening, at least 40 sherpas were killed in the mountaineering. As the population of sherpas in Khumbu are about 3,000, the rate surpasses one per cent. On the other hand, superior Darjeeling sherpas cannot be employed because of bad relations between India and Nepal and also the oppressions by Khumbu sherpas.

These factors naturally have become affected to the style of moun

taineering in Himalaya. The two expeditions for Pumori were good examples. Although guideless climbing has become popular in Alps, Himalayan peaks inevitably require sherpas especially expeditions for eight thousanders. To establish modern training organization of sherpas must be eagerly desired. The roles of sherpas in expedition should be recognized as a vocation, guiding and carrying goods at high altitudes. Mr. Hillary and Roberts once moved to organize such training center, but aborted. International cooperations must be needed for that.

The revolt of Kampa was one of the annoying problems for expeditions. Northern areas of Dhaulagiris and Annapurnas have been inhibited to inter into.

When preparing for this manuscript, the first disaster in pre. '75 occurred at Dhaulagiri I. Tokyo Metropolitan party, aiming Dhaulagiri I by rocky south face was assaulted by a snow avalanche and lost two members at C1. It happened at midnight. The party was mainly consisted of the veterans of Manaslu West Face expedition in '71. Although they had expected the danger of avalanche at the night, the final decision whether to remain or to withdraw was given to judge for the two young members in C1. The Tokyo Metropolitan party for Manaslu was effectively managed by giving considerably wide free hands for each member. In this case, the method went against the party. When members are pursuing a single object, independency of members will work well, on the contrary, once the members are facing decisive moment, how far individual's judgement maintain availability to the situation? The disaster again evoked dispute about independency of members and leadership of a party. When in the organization, Japanese are usually said to be dependent to leaders (vertical relationship). Small sized expeditions for Himalayas increased during '73 and '74 based on mountaineering clubs which are similar organizing principles to European clubs. We, Japanese must be cautious that the responsibility of each individual becomes much greater in such organizations.

Manaslu: Premonsoon, 1974

the first 8000m by a Japanese woman expedition

by Tsune Kuroishi

Our expedition was planned to challenge a eight thousander by women alone. Manaslu was chosen since it is familiar to Japanese since '50s. Originally we proposed to take JAC '57 route, but were obliged to change it to east ridge route since a South Korean party had advancedly been given the permission. Our offer was approved by Nepalese Foreign Ministry in January, 1973. Since we had no detailed data, N. Nakaseko, S. Suzuki, and S. Harada were sent to make reconnaissance in Appril, '73. Although they could not examine precisely by the beginning of monsoon, they brought back a good news. Mountaineering Department told them that we might choose either JAC route of east ridge route because the South Korean party quitted their plan. We concluded in the all members meeting to take East Ridge route. The massive disaster of South Korean party by a snow avalanche in '72 on JAC route affected us much. We also decided in the meeting that if we were impossible to attack by east ridge, we would change the route to JAC. The time limit of conversion was expected to be by the end of March.

We were confronted with financial problem when beginning preparation. "Eight thousander by women alone" could not catch public interest so much as our expectation. Oil crisis also worsened fund raising. At last we raised our own burden from ¥a million to ¥1.5 million.

When arrived in Kathmandu, we were troubled with the compensation problem. All the parties there were confused by it. Proposals to postpone the enforcement of new regulation were rejected. We offered a memorandum to compensate for accidents by ourselves for the people who were not assured by insurance. We became cautious to employ of sherpas. We reduced the number and enforced medical examination of sherpas.

Caravan

We started from Kathmandu on Feb. 13 by four trucks and three taxis

to Trisribazaar. In Trisribazaar eleven tons of goods were devided into 30 kg of packages for four hundred porters. From the next day we began caravan to Sama. On 24th, after eleven days of march we reached Sama.

East Ridge

We built BC on a plateau at 4400 m on March 3 and finished carrying up goods there on the next day. We began the preparation of carrying up goods and reconaissance from March 5. Members always were at the head of every activity and work. Although some sherpas complained that we were too slow, we would not have made concession with them. We did not want to be said "sherpa make" ascent later. Sherpas then sometimes went slow-down their tasks. We gradually mastered how to control them. Discord between two sirders and troubles between their facilities, however, had always been our cause of anxiety.

Carrying goods to Cl went on smoothly. Members also engaged in the work for the practice of acclimatization. Although loads were limited under 15 kg, some were completely tired out when returned to BC. Strict health examination prevented serious maladjustment. C1 was built at 5200 m on March 10. I made a rotation program of members of staying alternately in C1 for acclimatization. We began to make route to C2 from 18th. Nakaseko, Harada and two sirders climbed up the couloir to east ridge. They found the rope which our reconnaissance party had left a year before was still useful. The weather changed to snow from afternoon every day. C2 was built at 6000 m on east ridge on March 26. Without a break, we attempted to make route to a rock peak which we had thought the first barrier to the summit. It took five days to traverse unsteady ice wall and to reach the foot of the rock peak. Sherpas would not bear over 15 kg of loads and arbitralily fixed ropes on route. The shortage of ropes and snowbar became evident and carrying of goods delayed much.

Conversion of attack route

All members gathered in BC on March 31 and discussed whether to convert our attacking route or not. Some members strongly disagreed the route change. We consumed half a day in discussion and finaly decided the matter by majority. We began to prepare the shift of our BC from the next day. Sama porters took advantage to our difficult conditions and

intended to raise wages. As we rejected, it took nine days for the shift of BC. Five members led by Nakaseko began to attack by JAC route in this while.

On our way to the new BC, we could find signs of spring after a month's stay in the snow. Tiny flowers and fresh greens pleased us much.

We hurried to rebuild BC, but, at that stage, the liaison officer forbade us to go ahead because he suspected our route change objected the permission. We had to wait for a while without activities till he received the approval of competent authority. Nakaseko team had already built C1 and were making route to C2. We hired 37 porters for the carrying of goods between BC and C1, and seven local porters for C1–C2. We could regain the delay of schedule by it.

I could feel complaints of members who had engaged in the withdrawal of the former BC. Nakaseko insisted that as her team members acclimatized to 6000 m, she would make C3 by these members. The others complained that they had no freedom to climb up but only climb down. I could not communicate well with Nakaseko through transceiver. It was lucky for me when Nakaseko injured her health a little and climbed down to BC. Nakaseko, Uchida and I discussed the problem about the attack members. At first we did not include sherpas in attacking team but later added some since they requested.

Nakaseko returned to C2 on April 16 and determined the place of C3. Although fixed ropes on steep slopes, members need not wear climbing irons. We made direct route from C3 to C4 on the "back of Whale". Conditions of snow changed frequently by the wind blowing down from North Col. Sherpas requested to fix ropes for about 800 m between 6600 m of altitude and C4. Although we had much snow, we could steadily continued to build camps. Three days of behind schedule, on April 28, we built C4 (7150 m). Members began to use oxygen above C4. When sleeping, I tasked them to consume oxygen 0.5 littre a minute.

We began to make route to C5 from 29th. Itoh, with three sherpas determined the place for C5 at 7650 m on May 1. I talked with Nakaseko and decided the candidate for attacking members as Nakaseko, Uchida, Sekita, Kuribayashi and Mori. Also, I ordered sirder, Ila Tsering to go up to C2 and support attacking members. Sherpas carried goods to C5 and Nakaseko, Uchida and Mori went to C4 on May 2. I could directly talked with Nakaseko through transceiver. She reported that the three members

and Zangbu would build C5 on May 3 and to attack the summit by two members in good condition and the others would support them on the next day.

Nakaseko reported that sherpas showed threatening behavior. They complained that we chose Zangbu as attacking member overheading sirder Dawa Wangchhu. They began slowing down of works. Although we had asked Dawa Wangchhu to nominate an attacker from sherpas, he could not select after all and asked us to choose one. We chose Zangbu instead of sirder Dawa Wangchhu since the sirder had some anxieties in his health. Although sherpas in C3 promised to support attackers, some fear remained since I could not directly grasp the situation of upper camps.

It was unusually clear sky in the morning. There was no smoke of snow on the summit of Manaslu which was dyed in orange. Uchida and Zangbu started from C5 at 8: 30. Nakaseko and Mori followed them 30 minuted later. They steadily climbed up. Uchida and Zangbu reached a pinnacle at 15: 00. Zangbu insisted to return from there. Nakaseko and Mori overtook them. Zangbu thought the false summit as the true one. Nakaseko at the head, then Uchida, Zangbu and Mori followed her in order. They found a haken which must have supported the climb of JAC '56 just below the summit. Nakaseko and Uchida made concession each other for a while and at last the attacking leader, Nakaseko at first stood on the summit. It was 17: 30. After an hour of stay there, they began descent. I could hear their voices at 19: 30. They breathlessly spoke through transceiver. To my surprise, all the members except Mori climbed up and down without oxygen for four hours from the false summit. They returned to C5 safely at 22: 00.

Disaster

On May 5, Suzuki and Itoh who were the second sttacking members were lost on their way from C4 to C5. We found at 18: 00 that both members had not reached to C5 yet. Nakaseko who were in C3 said that the route between C4 and C5 were almost fixed by ropes. C5 communicated at 19: 30. The sherpas in C5 said that Suzuki and Itoh seemed to go back to C4 abandoning to try the summit. The weather had changed to fierce blizzard. They did not return by 20: 30. We took emergency. C4 reported that they found Itoh stadning faintly near C4 at 23: 00. We expected Suzuki would come

back, too. However, she did not come back that night.

In the early next morning, members in C4 and C5 began to search. Dawa Wangchhu and Mimma in C5 began descent in the strong wind. They found Suzuki's pickel and oxygen cylinder just below the plateau. They however, could not collect them by strong wind. Moreover, they found her windjacket with climbing belt near C4 and collected it.

We guess that Suzuki must have been blown away when she was changing her clothes (to feather wear) without maintaining her body to fixed rope. She slipped down to near C4 and must have fallen down into crevasse. Members did not tie each other between C4 and C5 since they used climbing belts to fixed rope and also used jümar.

The weather was worsening and sherpas began descent from upper camps neglecting our request to stay. We could take Itoh down to C3 to our best. I ordered withdrawal of upper camps on May 7. All members came back to BC on May 8.

We returned Sama and had funeral of Suzuki at a lamasery on May 13. We built a memorial stones of Suzuki on a hill where Manaslu could be seen well. We started from Sama on May 17.

Our attempt seems to have proved that mountaineering of eight thousander is possible by women if making schedule suitable for female. The possibility however, is merely physiological one. We were not matured in public relations. We have many to be reflected about the matter. We hope women parties in the future can get better fruits standing on our experiences.

Members

General director: Kyoko Sato (36). Leader and doctor; Tsune Kuroishi (48). Climbing leader; Naoko Nakaseko (36). Member: Masako Uchida (33), Michiko Sekita (35), Mieko Mori (33), Masako Itakura (31), Mutsumi Nakajima (29), Sadako Suzuki (30), Tomoko Igoh (27), Shizu Harada (26), Naoko Kuribayashi (24). Liaison officer; B. S. Lana (22). Sirder; Ira Tsering (40), Dawa Wangchhu (38), thirteen sherpas, two cooks, two kitchen boys, and two mail runners, 410 porters.

Jannu, old and new

The Second Ascent in the Premonsoon, 1974

by Kazutoyo Hashimura

1. GENESIS

Mastered Iron-mountaineers' Club of Seijo University, to which the writer belongs, is an alpine club organized and managed by the graduates of Seijo University, Tokyo. Most of the members are the veteran climbers of the ice and rock in difficult conditions, and we can proudly say that this club has been achieving one of the highest-ranked climbings in Japan.

With a desire to make an expedition to the Himalaya, we had been looking for a good target for several years in vain. One reason was the governmental restriction of Nepal or Pakistan to the foreign expedition. Another was the difficulty to find a mountain which would bring us a real satisfaction. We did not have the slightest idea of devoting ourselves traditionally to the virgin peak alone. Generally, the virgin peaks of today are left unclimbed because there is a political reason, or the peaks themselves are less attractive for a challenge than those already climbed. We also hesitated to choose a mountain, however famous it may be, whose summit can be readily reached only if we have the well-advanced technology and the modern equipment.

Our frustration disappeared when the Nepal government announced in the summer of 1972 that Jannu was open to the foreign climbers. Convinced that this mountain, which was conquered by our respecting French alpinists including Jean Franco, Lionel Terray, or Robert Paragot after their three trials during seven years, was just what we had been searching for, we immediately filed for a climbing permission to the Nepal government which was issued on June, 1973.

In the second half of 1973, however, the sudden economic sluggishness in Japan caused by the soraing oil prices disturbed our financial plan not a little. Since June all of the members of this expedition had to work very hard to raise fund, giving up their ideas of going to any of the mountain. It was just a few days before the departure that we were able to finally

manage to finance the necessary fund amounted to 30 million yen (about 100 thousand U.S. dollars).

Two members, Miyazaki and Azuma, left ahead of others Tokyo airport on 4 February, 1974 and other seven members departed on 20 February, two days before the caravan was scheduled to start.

2. CARAVAN

All members joined together in Kathmandu on 22 February. We completed the preparation of the caravan and other administrative arrangements with amazing quickness in five days, which proved that we were talented not only as climbers but as negotiators.

On 28 February, seven members and sherpas carrying air-freighted cargoes, departed for Dahran Bazaar, the starting point of the caravan by a large bus and a landrover, and arrived there on 1 March. Two fellows, who were dispatched to Nepal in advance in order to take care of customs clearance of the ocean cargoes via India, joined the main party at Dahran Bazaar on 1 March with their assistant sherpas and a truckful of cargo.

Shanta Prasad Dawadi, the Liaison Officer, who was delayed due to his military duty, accompanied by me, rushed to catch up with the others by taking every possible air route and arrived at Dahran Bazaar on 2 March. Thus, all members of this expedition gathered there as listed below, together with the equipment and food.

Members

No.	Name	Age	Role in the expedition	Mountaineering career
1.	Mikio Kawase	39	Leader Domestic affairs Records	18 years Member of the *JAC
2.	Kazutoyo Hashimura	37	Assault leader Vice leader Foreign affairs	23 years Assault leader of JAC Aconcagua S. Face Exp., 1965–66 Member of the JAC Director of the Alpine Guide Society of Japan

3.	Yukihiro Ichikawa	38	Vice leader Accounting Photography	20 years Member of JAC Aconcagua S. Face Exp., 1965–66 Assault leader of JAC Makalu S. E. Ridge Exp., 1970 Member of the JAC
4.	Eiji Yamada	37	Equipment	20 years Member of the JAC
5.	Takeshi Naganuma	37	Fuel Photography (assist.)	16 years Member of the JAC Member of the Alpine Guide Society of Japan
6.	Jun Miyazaki	26	Food Logistics	11 years Member of the JAC
7.	Sumio Azuma	27	Oxygen Transportation	10 years Member of the JAC Member of the Alpine Guide Society of Japan
8.	Soji Obara	23	Odd Jobs Food (assist.)	4 years
9.	Koichiro Ohara	36	Surgeon Foreign Affairs (assist.)	20 years

* JAC: The Japanese Alpine Club

Sherpas

No.	Name	Age	Role	Birth Place
1.	Shree Karma	39	Sirder	Taktod
2.	Tensing	37	Assistant sirder	Namche
3.	Danu	23	Cook	Sholu*
4.	Nima Tensing	38	High altitude porter	Panboche
5.	Sona Jangbu	37	High altitude porter	Panboche
6.	Ang Kami	33	High altitude porter	Khumjung*
7.	Pemba Chiring	30	High altitude porter	Thame
8.	Daji	30	High altitude porter	Panboche

9.	Phur Temba	29	High altitude porter	Panboche*
10.	Ang Phurba	28	High altitude porter	Khumjung
11.	Dawa Chiring	28	High altitude porter	Zarok*
12.	Lakpa	25	High altitude porter	Panboche
13.	Pasang Norbu	21	High altitude porter	Namche*
14.	Pasang Temba	21	High altitude porter	Panboche*

* : those who are not well qualified to work at the high altitude.

In addition, we hired 10 Sherpas as the local porters, the kitchen boys and the mail runners.

From Dahran Bazaar, we went on the Shangri pass, crossed the Tamur river, passed Dankuta and arrived at Hile. From there, we went up and down repeatedly on the ridge from 2000 m to 2900 m in height and descended the Tamur river again to arrive at Dumhan on 11 March. This trip took eight days from Dahran Bazaar.

Dumhan is the border of the north and south region, and 160 porters out of 370 were replaced by the northern residents. We divided the caravan into two, and an eight-day trip was continued further through Mitlun-Chirwa-Shakatum-Amjerasa-Kebra-Kunsa up to Base Camp.

Our Base Camp was settled in the comfortable meadow close to the clear pond on the side moraine located at 4500 m high on the left bank (seen from the down stream) of the Yamatari glacier. It was the same location as the one Terray based in 1962, and we found that the ruin of their "Jannu Palace" had almost been destroyed. It was repaired for use as our meeting room of sahibs.

3. Up to Installation of C3

The Yamatari glacier has 3 main branches on its right bank, namely, from the down stream to upward, the glacier descending down from the President Peak, the glacier from the Head of Knife and the Throne glacier directly comes from the summit of Jannu. The first one is not a route to Jannu. The last one is the shortest way to the summit. It has, however, the huge ice-fall of 1700 m high and 500 m wide falling to the Yamatari glacier and always being swept by ice block avalanches on various scales. We decided it too dangerous to advance inside of this glacier. So-called the Spur of the Newcomer, the icy ridge rising from the Yamatari glacier to the Head of Knife, is seemingly too steep in its lower part to use as a route.

We, therefore, decided to take our route in the second branch, namely the glacier from the Head of Knife. This glacier, 3000 m long and 1200 m high, is separated by a small spur from the small glacier next to the right side of the Throne glacier, which was the route of L. Terray in 1962 Expedition. It originates in the dominent cirque surrounded by the icy spur, which separates the Yamatari glacier from the Yalung glacier and continues to the Peak of Discovery from the Head of Knife, and by the Spur of the Newcomer which rises up from the Yamatari glacier to the Head of Knife.

This glacier enchanted us, especially when seen from the upper part, by its glorious environment encircled by the solemn pillers of granite, the steep walls of blue ice with a series of layered overhangs, magnificent fluted buttresses . . . . It was the very place for the Gods of Mountain, we felt, and named "the Glacier of Gods". C1 was installed at 4800 m point where the Glacier of Gods falls to the Yamatari glacier as the first ice-fall of 200 m high. We climed up the left hand side of this fall and built C2 at the altitude of 5300 m just under the second ice-fall which was full of sérac. C3 was settled at 5900 m in the center of the cirgue under the Head of Knife after the second and the third ice-falls were climbed.

There was a bottomless crevasse of 10 m wide across the third ice-fall, and it forced us to use the double-folded duralumin bridge of 12 m long, whose joint was almost broken after the frequent transportation by heavily loaded sherpas and reinforced by two pieces of 15 m log carried from Kunsa. Cargoes were also transported upward by the aerial tramway at this point. Including this crevasse, to pass the third ice-fall was the most difficult point up to C3. From C1 to C3, we used about 1800 m of ropes as the fixed rope or the aerial tramway to secure loaded sherpas. Installation of C3 was completed on 6 April, 13 days after C1 was built.

4. Installation of C4 and the Accident of Karma

C4 point at 6500 m was established after long and hard climbing. Be tween C3 and C4, we used a lot of snow-bars and ice-pitons and set the fixed ropes of 1500 m long. C4 was installed on 20 April on the great mass of ice hanging from the Head of Knife toward the huge ice-fall of the Throne glacier.

14 days were consumed to install C4 due to the following factors:

(1) letting assault members descend to B.C. to take a rest by turns.

(2) difficulty of the route dodging and climbing of the ice ridge followed by the Col of the Newcomer.

(3) decrease of loading ability of sherpas to 20 kgs per head because of the difficulty of the route.

(4) periodical snow storm in every afternoon.

Ichikawa, Naganuma, Obara, I, and Pemba Chiring at C4 started to dodge the route to climb over the Head of Lace and to enter the Throne glacier. There was no choice but acting only in the morning due to the bad weather in the afternoon and we made only little advance.

On 23 April, sirder Karma, leading the loaded sherpas from C3 to C4, was caught by the hidden crevasse just after 20 m walking from C3 tent the Col of the Newcomer. We had considered these area as the quite safe ice-bed of the cirque and nobody was tied by the rope. Although fallen by 25 m, he fortunately stoped at the narrow part of the crevasse.

Under the command of Miyazaki, Azuma belayed by sherpas, went down the crevasse, and rescued Karma, who had his right shoulder dislocated. Led by Ichikawa and Naganuma, who came down from C4, all sherpas below C3 were called up to carry him down to B.C. on 24 April.

After the examination by the doctor and the consultation among L.O., Ichikawa, and me, Karma was decided to be picked up by the helicopter to fly to Kathmandu, which was requested to Royal Nepal Airline Corp. by wireless. In the meantime, Obara, I, and Pemba Chiring at C4 continued the route-dodging to the Head of Lace, fighting against the afternoon storm accompanied by the thunder. But the rescue of Karma and the persuasion of the depressed sherpas delayed the schedule about a week.

5. Settlement of C5 and Wounding of Tensing

C5 was settled at 6900 m on the upper edge of the Throne glacier. On 5 May, Yamada and Obara, taking with them the assistant sirder Tensing and the most excellent sherpa, Ang Phurba, occupied this tent to start opening the route to C6 point at 7350 m on the E. shoulder of Jannu. The route from C4 to the Throne glacier by climbing over the Head of Lace has a very difficult wall with continuing gutter like ices named as "Ice-flute" by the French climbers, and we fixed 700 m ropes totally all the way.

On 6 May, Yamada and Obara fixed the rope on the steep ice slope of 45° angle and 450 m high which rises from C5 to E. shoulder of Jannu.

Following them, Miyazaki and Azuma, the new residents of C5, started their climbing from the upper end of the fixed rope, and on 8 May, they finally succeeded in setting the fixed rope up to the E. shoulder in spite of the heavy blizzard in the afternoon. Every camp was hailed by this great news, because all of us considered that our only jobs left before the summit assault by two times to be tried by the main members, Ichikawa, Yamada, Naganuma, Miyazaki, Azuma, Obara, I, and two sherpas, Tensing and Ang Phurba, were route opening in the gully cracked on the summit rock wall of 200 m in height and installation of C6.

It was the next day that we met our tragedy. On 8 May, in the afternoon, the heavy snow storm with thunder raged throughout Jannu, which caused numerous new snow avalanches at the upper part of the Throne glacier. Around 11 p.m., one of the avalanches directly hit our C5 and swept its two tents down by 200 m keeping Miyazaki, Azuma, Tensing and Ang Phurba inside.

Stopped at just 20 m before the great crevasse, they had a narrow escape, but Tensing twisted badly his back muscles into no walking. Besides the destroyed tents, we lost the whole equipment and supplies of 140 kgs including oxygen, food, fuel, ropes, pitons, crampons, axes, hatchests, jümars.

We were confronted with the extreme difficulty. Informed of this accident by transceiver, 4 members and 5 sherpas departed C4 to rescue them at dawn on 9 May. This was also not an easy job as the snow on the route was as deep as my thigh.

We rebuilt C5 at the lower and safer point of 5700 m on the Yalung side of the Throne glacier, which was perfectly protected from the avalanche by two large crevasses. But this lower location of new C5 made it more difficult to establish C6.

As it was impossible to carry him down through the difficult route of the Head of Lace, wounded Tensing was accomodated there until he recovers to be able to walk by himself. I and Nima Tensing, 38-old holder of the tiger medal, took good care of him by communicating with the doctor at B.C. After 8 days' stay in C4, Tensing became able to walk and safely returned to B.C., with the powerful assistance of the rescue team.

Sirder Karma was already wounded on 23 April. Naganuma also withdrew due to the duodenal ulcer on 7 May. Now the accident of second sirder, Tensing greatly discouraged the fighting spirits of sherpas. Some of them even

escaped from the upper camp.

The high morale of the members, however, was not affected at all, and we all reconfirmed our strong intention not to give up the idea of attacking the summit as long as the possibility remains however small it may be. To us these troubles were just a soft breeze against a slab of granite.

After our long lasting and pains-taking persuasion, sherpas made up their mind, though reluctantly, to go on climbing once again, but became not cooperative to loading beyond C5. Only two sherpas, Nima Tensing and Pemba Chiring, were exceptional, who did not lose high morale and beyond C5 always acted as we had expected, and carried load up to C6 two times together with sahibs. Whenever I look back upon the hard days in Jannu, I am always reminded of these two gentle and strong sherpas with the happy remembrance.

5. Settlement of C6 and Opening a Route to the Summit

Now we had no choice than limiting to four members, Ichikawa, Yamada, Obara, and myself, and two sherpas, Nima Tensing and Pamba Chiring, for the purpose of C6 settlement and route opening to the summit, because Kawase was not qualified technically, Naganuma was sick, and Miyazaki and Azuma had to stay in the new C5 to take care of Tensing.

Although they well realized that there was no opportunity for them to be appointed as the assault members, Miyazaki and Azuma did their job to support us quite well without a single complaint. To cover the shortage of the numbers of loading sherpas, they shuttled between C4 and C5. I was impressed by these respectable self-sacrificing deeds of them and felt very proud and happy to have these fellows as partners of our Jannu team.

Now, due to the incessant accidents, much days were not left for us to bid the summit before the approaching monsoon.

Herculean effort was made to establish C6 in the continuing snowfall. On 14 May, seven men, Ichikawa, Yamada, Obara, myself, Nima Tensing, Pemba Chiring and Lakpa departed from C5 and went on climbing without oxygen help in the thigh-deep snow, panting under the heavy load. This day was really the most painful one I ever had in my long climbing life.

It was around 3: 00 p.m. when we were climbing on the icy slope of 45° angle, which is connected to E. shoulder beyond the bergschrund. At that moment, through the poor visibility owing to the snowfall, Yamada caught

in his quick sight a new snow avalache falling just toward us. Holding the fixed rope on the steep ice slope and loading 20 kgs each, instead of escaping from the avalanche, we barely could unload the cargo between the feet, hold tight the jümar of the fixed rope with the right hand, stick the ice-axe deep into the snow with the left hand and prepare for the coming stroke.

A blow of the snow powder and the horrified pressure raided us. The seizing by the avalanche lasted quite a while, and we felt almost choked to death. Then the avalanche went away. Thank God, we all were saved!

After this intense shock, we all were thoroughly exhausted, became unwilling to make further advance and returned to C5 after settleing depot.

On 15 May, the same members as the day before completed to install C6. Members carried 30 kgs, sherpas 20 kgs, without using oxygen. Our torture was indescribable. Ichikawa and Obara stay at C6, engage in setting the fixed rope on the summit rock wall and bid the summit on 18 May: Yamada and I try an ultimate attack if the first team failed, which has been our plan.

However, only 250 m was the stock of the rope left with us, as more than 300 m was buried by the avalanche raided the previous C5 eight days before. After reserving 50 m for the assault party, we could use only 200 m for the fixed rope. On 16 May, Ichikawa, under the belaying of Obara and helped by oxygen, dodged the route from C6 to the bottom of the summit rock wall and used this 200 m rope completely as the fixed rope. They had to take the whole day rest at C6 on 17 May, having nothing to do owing to the shortage of the ropes.

L. Terray, together with Ravier and sirder Wongdi, is told to have struggled for full one day to open the route on the summit rock wall which started from there by spending a lot of pitons. We had to make a free climbing at the same place.

6. To the Summit

On 18 May at 5 a.m., the first assaulters, Ichikawa and Obara started from C6 to the summit, carrying only one cylinders of oxygen each and breathing a litre a minute out of it. They could not carry two cylinders because the route beyond C6 was so severe.

Yamada and I departed from C5 to C6 for the provision of the another trial. Miyazaki and Azuma began to bring down Tensing, who just recovered

to walk by himself. In C5 Nima Tensing, Pemba Chiring and Daji awaited their sahibs to return.

At 7: 00 a.m., only two hours after the departure, the assault team arrived at the bottom of the summit rock wall, assisted by the fixed rope. This distance took whole hours or two days before, and they realized how helpful the fixed rope was.

From there, the new territory started as far as we were concerned. Belayed by Obara, Ichikawa kept climbing up about 300 m in ropes length, by cutting the steps in the gully cracked on the summit rock wall.

This delicate climbing took five and half hours to reach the summit ice ridge. Blessed by the good weather, though windy, they made up their mind to go forward up to the summit by all means. After the hard climbing of another five hours, by step cutting on the sharp knife edge of the summit ridge, and sometimes advancing astride the ridge, they finally reached to the summit of Jannu at 5: 05 p.m.

It was the glorious sunset of the great Himalaya. In the east, Kangchenjunga soared. Far away to the west, Everest, Lhotse and Makalu dominated above the clouds. In 20 minutes this scenery was all filmed in the 8 mm movie in color. They left the summit at 5: 40 when darkness was approaching. Then their oxygen almost went out.

Having to climb down on the summit rock wall of grade between III and IV without assistance of the fixed rope and oxygen, they were forced to strain every nerve all the way down to the bottom. Under the light of the headlamp, they also took enough time and care not to cause an accident while climbing down. Their long trip of this day had finished at 10: 45 p.m. at C6, where they were welcomed by Yamada and me, the provisional attackers.

This day happened to be one of only three all-day-long fine days out of 67 days which we spent above B.C. If they had had the afternoon storm as usual, (actually it happened the next day) they would have been faced the serious danger on their way back to C6. How precious this fine day was, and how lucky we were!

Repeated accidents greatly depressed sherpas. No more ropes verged to a close were available and propane gas,. After their hard works, both of the first assaulters left no more extra energy necessary for support the second trial by Yamada and me. In view of all, we, 4 members in C6, unanimously agreed to withdrawal, and this dexision, in addition to the news of the big

success, of course, we informed of to the lower camps by transceiver.

Thus Jannu surrendered her summit to us after a long and tough battle. Finally, we made it!

7. Conclusion

That was a long struggle with full of terror and torture. Our operation plan had to be rewritten many times due to the strong defense of Jannu. Although knocked down or exhausted so often, we held out the unyielding spirit as true mountaineers the confidence in our own mountain-craft and our mutual reliance on the partner, which drove us to the victory.

We all realized how hard this climbing was, which firmly united Seijo climbers having strong egos and different characters toward a good cooperating team. What made the ascent of Jannu possible, without a single life lost, was the intense will power in addition to the mastered mountain-craft of individuals.

Above B.C. our team seemed to be as a primitive commune, where everybody had to be responsible for all. This was what Jannu forced to us and maybe also to the French team which made the first ascent of her. Now we renewed high respect on their mountain-craft and felt more familiar with their personalities.

It is a pity that we were unable to ascend the summit with all the members, which we had wished and planned. Nevertheless, we are happy with the confidence that we could strengthen our mutual ties and friendship.

These memories of Jannu will keep shining with the pearly brightness in the heart of us all.

Southwest Face of Everest: 1973

by Michio Yuasa

It was in 1970 that we decided to send "Japanese Everest Expedition, 1973" centering on the members of the Second RCC (rock climbing club). Committee for Himalayas, led by Akira Okuyama had already begun studies on Everest since '69. I was sent to negotiate with the Nepalese Authority to climb Everest. I was given an informal permission to challenge Everest

posts '72 or '73. An Italian party reserved their right in '72, and Mr. Bonington was also proposing permission. Finally, we were allowed to climb in post, '73.

On our way in preparation, our leader Okuyama was dead by cancer. I succeeded his role. The members were;
general leader; Ryutaro Hashimoto (63), leader; Shotaro Mizuno (66), deputy leaders; Michio Yuasa (37) (climbing leader), Senya Sumiyoshi (47), sub-climbing leader; Hiroshi Aoki (35), members; Katsuhiko Shikano (31), Jiro Endo (35), Tomio Ueda (34), Masaru Morita (36), Katsuyoshi Kogure (30), doctors; Sokichi Tanaka (33), Masaki Kaneda (27), Toshitaka Sakano (29), Seiichi Iizuka (32), Akira Matsuda (29), Ichiro Mitoda (31), Hisashi Ishiguro (28), Toshio Aida (26), Masami Sakurai (30), Ryoichi Fukuda (30), Takane Watanabe (26), Masaru Miwa (31), Tsuneo Shigehiro (26), Seiji Shimizu (28), Nobuo Shitasaka (25), Yoshinobu Suda (28), Kazushige Takami (28), Hiroshi Niwa (26), Satoru Negishi (26), Tsuneo Hasegawa (25), Yosuke Sakurai (24), Hirohori Fukushima (32), Osamu Kunii (29), Shunzo Sato (30), Tadatsugu Shigeno (30), Miyoshi Hongo (22), Sakio Maetani (24), reporters; Takane Fujiki (47), Mikio Imai (33), Kazuo Nakamura (43), Takeyoshi Akamatsu (36), Sutemi Terada (34), cook; Uno Kohei (34), liaison officer; Dipak Lana (23), first sirder; Hakpa Tenzin, second sirder; Sonam Garzen, third sirder; Pasang and employed thirty sherpas.

Eight members led by Yamada left for Kathmandu in early April to deal with goods by ship. They hired thirty flights to Lukla in the midst of sightseeing season competiting with the Italian party. Almost all members gathered in Kathmandu on July 20. Fifteen tons of goods were carried by four transport parties in rain. Our caravan once gathered in Shanboche on August 19. Three members were suffered from hepatitis by this time. We reorganized caravan parties there and left for BC one by one. Our schedule was to rest for three days in Pheriche and Lobuje. Some mebers were directly sent to BC for getting data of acclimatication. Our long stay in Shanboche resulted in good acclimatization. Only a few fell indigestion. By August 27, all parties reached BC which was built at a little higher plateau than of Italian party. Forty tents, warehouses, a dining house were built there.

Activities to build ABC

The most difficult problem in Everest is how to pass icefall safely. We

had to carry up 19 tons of goods on a man's back. We, at the same time, had to practice acclimatization through the process. Moreover, we had no data about the conditions of icefall in monsoon. We nominated full-time route keeper in icefall. Instead of Maetani who fell in hepatitis, the sherpa, Sange devoted himself to play this role all through our stay there. We employed 26 icefall porters.

We began to make route in icefall from August 29. We followed the course which former parties had passed. Conditions of icefall was rather good than in premonsoon. As had been pointed out by Mr. Miyashita, massive snow burried schrunds. Avalanches, however, occured frequently in the afternoon on Lho La. And Nuptse Faces. Clear sky in the morning always changed to snow in the afternoon. We could build tentative C1 at 5950 m on Western Cwm on August 31. Then built C1 at 6100 m on Sep. 4, TC2 at 6450 m near the Italian ABC on the same day and built ABC at 6700 m on a plateau on Sep. 9. Members carried up oxygen cylinders to upper camps. They followed the rotation shift, three days of labor and two days of rest. We were obliged to rest our activites for only three days by bad weather.

Attack Southwest Face

Our strategy for Southwest Face was to climb through rightside snowfield at 8000 m and to the summit via South Ridge. Supply operation was to build C6 at 8350 m, and attack camp at 8500 m. Our principle was to take the easiest course. Because it is the privilege for the first ascent. Which course is the easiest, however, cannot be known until we reach there, so we decided to make precise plan when we reach at 8000 m.

Although it was said that problems till 800 m on Southwest Face had already been solved, we carefully made lifting goods program. It was because if it took at least three days to make route between C6 and C7 on rock walls, and 100 kg of goods had to be needed at C7, we had to lift about a ton of goods to C6. Consequently, whether C4 can play the role of supplying BC for upper camps or not became the key element.

Usual site for C4 at 7500 m was defenseless against falling stones. We had two alternatives for solving the problem. They were, 1), to build C4 a little bit higher than 7500 m to the rightwards and set more than three tents; 2), to build C4 at 7500 m and try direct lift of goods from C3 to C5, then, C4 becomes merely transit camp. We took the latter in principle, but did not

completely abandoned the former. Consequently, we needed to shift C3 to higher place.

The first team made direct route from ABC in order to build C3 on upper left part of Gunkaniwa (battleship rock) just below rockwalls. We could not judge the new site for C3 was safer than usual one, also we could not expect to find the place of C4 for three tents. We changed the direct route to usual one on Sep. 15. Fukata and Miwa built C3 on Gunkaniwa. C4 was built at 7500 m above the central snowfield on Sep. 27. Two Whillans boxes were set there. We used tent-stands (frame and nests) for falling stone catcher since the falling stones and iceblocks easily broke through tents, if crushed directly. The fresh snow which was brought by strong wind assaulted members on steep icewall just like slabavalanche.

Our lift operation, however, went on steadily. We had about 9 tons of goods in C1, 3 tons in TC2, 2 tons in ABC, 600 kg in C3, and 100 kg in newly built C4 on Sep. 28. Three teams alternately climbed up and found a place for C5 at 8000 m on Sep. 30. The place had a space for two Whillans boxes. Aoki and I moved up to upper camps from BC on Oct. 1. We at last obtained the height from where we could aim the summit.

Winter has come on Everest

Just before we moved up to upper camps, we decided to send a support party from South Col in the leaders meeting on Sep. 28. The plan originally was discussed in Kathmandu with the leader, Mizuno. It became evident that the route on South Ridge was longer than had expected. According to the plan, we build E3 at 7500 m on Southeast ridge and E4 at South Col. These tents were expected to left alone till the day of attack by Southwest Face. Sirders agreed to carry goods from C3 to C5 directly. We had 12 tons in C1. Sherpas were gathered in ABC. All the preparation was finished.

The weather rapidly broke on Oct. 2. Almost all frames of tents in C1 broke down although snow was removed every hour. Blizzard prevented all activities of members in C2. Okabe, Kondo, Kato, Shitasaka and other began to carry goods up to C5 and route making on Oct. 5 and 6, although in bad condition. Two tons of goods were lifted to C3. Fukata and Miwa built C5 and made route to 8100 m in strong wind. They stayed in C5 hearing the fierce sound of jet stream. At the midnight, Zambu in sherpa's tent came in since his tent was broken. In the next morning, they climbed down. Tem-

perature had rapidly fallen in these days. Violent gale blew above ABC. Even ABC which had been said absolutely safe was assaulted by snow avalanche for twice. Conditions were considerably different respectively in BC, C1, and ABC.

We continued lifting goods to ABC in the interval of stormy weather. Sherpas in C3 and C4 fled down to ABC because of too fierce gale. In this while, Morita and Takami stayed in C4 without oxygen and saving foods for four days. Members in C3 and C4 repeated removing snow.

Disaster

We had a little ceased weather on Oct. 12, although it was blowing a gale on upper Southwest Face. Zambu persuaded reluctant sherpas to carry goods up to C3. We expected to carry goods directly from C3 to C5 in the next day. They started from ABC in blizzard. Just before reaching the schrund at the foot of South Face, they were assaulted by a snow avalanche. Members in C3 hurried to rescue them. One by one, they dag under sherpas the snow, but they could not find out Zambu. After an hour of search, all men returned to C2.

It was very ironical that we had clear sky and weak wind in the following two days. We stopped all climbing activities and engaged in the search of the corpse of Zambu. We could not find him out. The weather broke again from 15th. Members in C2 had knives in their hands when sleeping. They knew it useless, but they could not but do it preparing for avalanche.

Plan change

It became difficult even to keep C3. We had to proceed the support from Southeast ridge. Attack camp on Southwest Face had become a dream for us. Only the attack from C6 at 8300 m was left for us. Temperature was still falling and jet stream which collided against West ridge became strong day by day. Opinions among members divided into the attack only by Southeast ridge, and the challenge Southwest Face as far as possible. I made up my mind to aim both attempts. I had all members meeting in ABC on Oct. 16. We thought we will be able to get the summit by Southeast ridge, if we could have three fine days, and if five or seven fine days continuously, by Southwest Face. In the meeting, we elected the members of Southeast ridge party led by Tanaka and Southwest Face party led by Morita. Furthermore,

members in TC2 and C1 were limited for four and others were decided to return to BC on 22nd. We had only 10 days' of foods.

Attack by Southeast Ridge

Southeast ridge party left for Lhotse Face and reached at 7450 m on Oct. 17 in strong wind. They built E3 on the next day. We had a relatively favorable weather on 19th. We eagerly lifted goods from ABC and making routes to South Col. Rope was fixed to 7700 m. Static electricity by blowing iceblock sparked in E3. Temperature meter showed −20°C in the tent when cooking. Iizuka, Okabe, and Shimizu maintained the tent in E3 for four days.

The weather miraclously cleared up on Oct. 24. Ishiguro and Kato climbed up to E3 with the support by Hasegawa and Matsuda. Ishiguro and Kato built E4 on South Col with the support of Matsuda and Hasegawa and seven sherpas, on 25 th. Ishiguro, Kato, Ang Tsering, and Hakpa Tsering stayed in E4 that night. It was fine and little wind on 26th. Ishiguro and Kato started from E4 at 7: 30 with sherpas' support. They firmly believed th reach the summit when they stood on the ruins of the final camp of the Italian party. They let sherpas go back to E4 and left their Zeltsack there. They continued to climb up to the summit. Southeast ridge was knife-edged and Hileary Chimney was difficult to pass by piled snow. The Sail between them formed arch in the air by strong wind. Kato changed his cylinder just under the summit. To their surprise, the substitute one showed merely 50 atm of pressure. They forgot the check as they overtrusted French cylinder. They stood on the summit at 16: 30. They took pictures and moved 16 mm film panning the camera to the perspectuve from the top of the world. They soon began descent. Kato's cylinder was almost vacant. They consumed oxygen of Ishiguro's alternately. Scarce oxygen, however, brought them failing of eyesights. They could hardly maintain their course directly. When slipped a little to Thibetan side, they decided bivouac at 8650 m just under South Peak. Without even Zeltsack, they waited for the next morning. They were actually facing their deaths. Sometimes, beating faces each other, they sat still. Their vitalities were really amazing. In the next morning, they could reach the deposit place, the final camp of Italian party. Consuming oxygen there, they spoke to us after two days and nights of silence. We could hear their voices at 7: 30. They were safely rescued in E4 on South Col. They were fast asleep. Violent blizzard blew on 28th. Matsuda, Okabe, and Shimizu who

had climbed up to E3 in gale and −40°C the night before, climbed up to E4. They had only 10 m of visibility. They reached E4 and found Ishiguro and Kato were safe. Although they were frostbitten, the second degree, I ordered them to climb down by themselves. Their brave rescue, friendships will be proudable in their later lives.

Southwest Face, the final trial

Everest was completely in winter. Although the tent for members in C4 was rebuilt, we could not do for sherpa's. Only direct lift from C3 to C5 was left for us. We continued to carry goods up to C3 for that operation. But all activities above C3 were impossible by gale and snow from Oct. 18. We, however, waited for the clear sky. Of course, five or seven fine days was perfectly impossible to hope, we intended to try our best. It was also miraclous for members for Southwest Face party that the weather got better on 24th. Shigeno and Negishi climbed up to C4 and Shigehiro reached C3 with five sherpas. Shigehiro carried goods up to C5 and stayed in C4 on 25th. Morita climbed up to C4 and met Shigehiro. Shigeno and Negishi made route to 8000 m and stayed in C5 that night. Morita and Shigehiro in turn climbed up to C5 on 26th. They climbed up through right snowfield and reached the foot of South Face on 27th. Morita was little frostbitten on his feet. They judged the height was 8380 m. It was almost as high as marked by the British party. Takami carried goods to C5 and returned to C4. The party had already fixed rope 800 m above C5. Wind became stronger and the tent in E4 on South Col was dangerous. Members in E3 were busy preparing for the next day's rescue. Others in ABC and BC were devoted in checking the volume of oxygen in upper camps. At 21: 45, I ordered to abandon the attack by Southwest Face. I could see tears on the face of every member. Morita lightly responded to obey my order through transceiver. Gale again blew on upper Southwest Face on 28th. Members on upper camps returned to C2 in the evening. It was clear and no wind at 5400 m. Our climb on Southwest Face was over.

Our original aim was defeated, although we could make the first ascent of Everest in post monsoon. Our experience tells us that the authodox supply operation will not bring the success of ascent by Southwest Face, if the weight of oxygen sylinder does not become lighter.

Saburo Matsukata

von Samuel Braband

Aus Japan erreichte uns im letzten Herbst die traurige Kunde, dass Herr Saburo Matsukata am 15. September einem langen schweren Leiden erlegen sei. Wir Grindelwalder Freunde des Verstorbenen konnten die Nachricht kaum fassen, obschon wir von seiner schweren Erkrankung unterrichtet waren. Aber Herrn Matsukatas Bild wird weiter in uns leben, sein stets fröhliches Lachen und sein freundliches Wesen wird stets um uns sein.

Saburo Matsukata gehörte zu der grossen Bergsteigerfamilie aus Japan, die aus den Herren Yuko und Tomo Maki, Saburo Matsukata, S. Bekku, Prinz Chichibu, Samitaro Uramatsu, Hatiro Watanabe, Shigeo Matsumoto, Kanichi Kokubu, M. Takagi, Haruo Yamasaki, Keizo Isono, Kiyoshi Ida, Toshio Fujishima und den Brüdern Ichiro und Jiro Taguchi bestand. Im Jahr 1925, also vor bald fünfzig Jahren, erschien Herr Matsukata zum erstenmal in unserem Tal. Nur die japanischen Bergsteiger Yuko und Toshio Maki und Bekku waren vor ihm da gewesen. Er kam nicht als Anfänger in die Schweizer Alpen. In seiner Heimat hatte er sich zum erstklassigen Alpinisten ausgebil det. Das beweisen seine Touren, die er gleich zu Anfang im Juli 1925 ausführte. Er begann am 15. mit dem Wetterhorn, bestieg am 18. die Jungfrau und traversierte am gleichen Tag den Mönch über den Westgrat nach der Berglihütte. Am 19. Juli erreichte er über das Mönchsjoch die Konkordiahütte und überschritt von dort das Finsteraarhorn nach der Strahlegghütte. Darauf wechselte er in die Engelhörner hinüber, wo er am 23. Juli die Kingspitze bestieg und am 24. den Simelistock. Am 28. Juli überschritt er das Lauteraarhorn über den Lauteraargrat und am 29. das Grosse Schreckhorn mit Abstieg über den Andersongrat nach der Gleckstein-hütte. Wenn mir recht ist, blieb Herr Matsukata im Winter 1925/1926 in Europa mit Standquartier in Grindelwald. Er besuchte unter anderm Italien und fuhr Ski in unserem Tal. Schon früh im Frühling 1926 bestieg er das Faulhorn. Seine treuen Begleiter waren meist die beiden weissen Hunde aus dem Hotel Adler. Als dann Anfangs Juli auch Herr Yuko Maki wieder in Grindelwald eintraf, besuchte er mit ihm zusammen das Wallis, wo sie zusammen herrliche Tage erlebten. Sie bestiegen in Zermatt am 14. Juli das

Zinalrothorn, am 17. das Obergabelhorn mit Abstieg über den Arbengrat, am 20. Juli die Dent Blanche und überschritten am 24. das Bietschhorn über den NO-Sporn und den Westgrat nach dem Berner Oberland. Am 1. August sahen wir die beiden in den Engelhörnern, wo sie den Simelistock überschritten. Am 4, Aug. traversierten sie zusammen mit ihren Freunden Watanabe und Matsumoto das Wetterhorn mit Abstieg über die steile Nordwand. Am 7. Aug. überschriten sie erneut das Grosse Schreckhorn, um am 11. mit der Traversierung der Kingspitze den ersten Teil des Sommers abzuschliessen.

Der August des Jahres 1926 war den Touren mit Prinz Chichibu gewidmet, an welchen Herr Matsukata nicht Teilnahm. Doch im September traversierte er mit seinen Freunden Maki und Watanabe den Mönch über den Nollen und den Eiger über den Mittellegigrat. Ein Versuch, die Eigerhörnli zu überschreiten scheiterte an der mangelhaften Vorbereitung.

Herr Matsukata kam im Sommer 1927 erneut nach Grindelwald. Diesmal brachte er seinen Freund Samitaro Uramatsu mit. Am 3. Aug. überschritten die beiden die Mittelgruppe in den Engelhörnern und vollführten am 6. Aug. die denkwürdige Erstüberschreitung der Eigerhörnli. Am 9. Aug. sehen wir die beiden auf der Jungfrau, worauf ins Wallis hinübergewechselt wurde. Dort überschritten sie das Matterhorn über Zmutt- und italienisch Grat und wurden wegen schlechten Wetters am Weisshorn zurückgeschlagen. Es folgte eine Reise in die Dauphiné, wo eine Traversierung der Maije in Blitz, Donner und Schneesturn gelang. Zurückgekehrt nach Chamonix überschritten sie den Petit Charmoz, bestiegen die Aiguille Argentiere und überkletterten als herrlichen Schluss den Grépon. Einem seiner Führer schrieb Herr Matsukata damals ins Führerbuch. "So lange wir uns erinnern die teuflische Kluft des Hörnligrates, die kalte Begehung des weissen Matterhorns und die Blitze und Schneesturm auf dem meijegrat werden wir nicht seine immer tadellose Führung vergessen." Seine Führer auf all den genannten Bergfahrten waren Emil Steuri und Samuel Brawand, mit welchen er bis zu seinem Tode enge Freundschaft pflegte.

Herr Matsukata wohnte während der ersten Zeit im Hotel Adler und später im Hotel Bahnhof-Terminus, wo er mit der Hotelierfamilie Märkle-Gsteiger enge Freundschaft schloss. Er kehrte auch bei seinen späteren Grindelwaldbesuchen stats dort ein. Zum Abschluss des Sommers 1926 machten die Herren Matsukata, Maki und Watanabe mit den beiden Tächtern des Hotels eine Tour auf das Finsteraarhorn mit Abstieg nach der Grimsel.

Wir alle erinnern uns der schönen Tage, als ob das prachtvolle Bergerlebnis erst gestern gewesen wäre. *Eine grosse Zahl von Herrn Matsukatas Grindelwalden Bergfreunden ist ihm im Tode vorangegangen, aber wir Ueberlebenden werden den lieben Menschen Saburo Matsukata nie vergessen.

* Auch in späteren Jahren, als er nicht mehr zu Berge stieg, blieb Herr Matsukata Grindelwald treu. Jedesmal, wenn er Europa besuchte, machte er zum mindesten einen kurzen Abstecher in seine "zweite Heimat." Sein Neujahrsglückwunsch fehlte nie. Meist wies die Karte eine Aufnahme seiner Familie auf, an welcher er so innig hing.

◀日本山岳会創立70周年記念出版▶

覆刻 日本の山岳名著

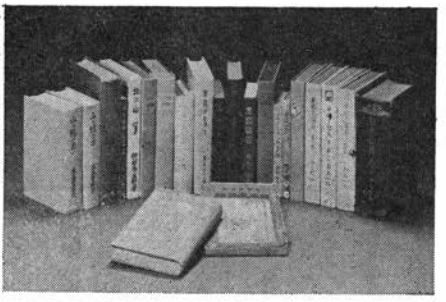
企画・編集　日本山岳会　　全18点22冊／付・解題書

〈刊行のことば〉日本山岳会は、明治三十八年このかた、山岳の研究、登山の実践および啓蒙等の諸活動を通じて、斯界に寄与することすくなからぬものがありましたが、本年、創立七十周年をむかえるにあたって、先人の偉大な業績を集大成すべく『覆刻・日本の山岳名著』を刊行する運びとなりました。これらの文化遺産を正しく継承し、現代において生かすことは、われらの美しい国土を守ることに通ずると考えるからであります。大修館書店が、初版原本についての研究考証、資材・印刷等にかんする根本的な検討をへて、みごとな完成をしめされたことは、まことに感謝にたえません。この文化遺産の覆刻にたいし、山岳人・愛書家はもとより、江湖の絶大なる御支援をお願いする次第であります。

日本山岳会会長　今西錦司

❶志賀重昂「日本風景論」　明治27年　政教社
❷高頭式編「日本山嶽志」　明治39年　博文館
❸小島烏水「日本アルプス」全四巻　明治43年～大正4年　前川文栄閣
❹鹿子木員信「アルペン行」　大正3年　政教社
❺田部重治「日本アルプスと秩父巡礼」　大正8年　北星堂
❻槇有恒「山行」　大正12年　改造社
❼冠松次郎「黒部谿谷」　昭和3年　アルス
❽大島亮吉「山―研究と随想」　昭和5年　岩波書店
❾板倉勝宣「山と雪の日記」　昭和5年　梓書房
❿藤木九三「雪・岩・アルプス」　昭和5年　梓書房
⓫武田久吉「尾瀬と鬼怒沼」　昭和5年　梓書房
⓬辻村伊助「スウィス日記」　昭和5年　梓書房
⓭辻村伊助「ハイランド」　昭和5年　梓書房
⓮小島烏水「氷河と萬年雪の山」　昭和7年　梓書房
⓯伊藤秀五郎「北の山」　昭和10年　梓書房
⓰今西錦司「山岳省察」　昭和15年　弘文堂
⓱Walter Weston: Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps, 1896 (John Murray, London

別巻　木暮理太郎「山の憶ひ出」増補版　全二巻
解題書（A5判・二七〇頁）斯界研究者16氏共同執筆



全巻一括配本
〈詳細内容見本進呈〉

推薦者
●遠い青春との再会　井上靖
●再び私の書架にも　串田孫一
●全岳人の期待と喜び　渡辺公平

■価格＝セット価格　予価195,000円
（現金払いの場合―全国の書店で取扱います
分割払いの場合―版元契約の代理店で取扱いますので詳細は版元にご照会下さい）
■刊行期日＝昭和50年12月
（特典1）特別資料　日本山岳会会報 第1号（昭和5年）～第100号 日本山岳会編
（特典2）革ケース入り特製ペーパーナイフ進呈

大修館書店
〒101 東京・神田錦町3-24
振替番号／東京40504
電話・03(294)2221〈大代表〉

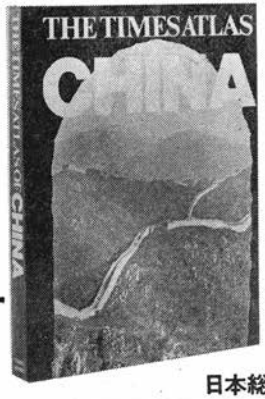
新しい中国像と最新地理情報を伝える タイムズ中国地図帳

THE TIMES ATLAS OF CHINA

Editors : D.C.Twitchett, P.J.M.Geelan

●好評発売中！

1974. 27.2×37.5 cm., 232 pages ¥22,000



タイムズ社が，地図製作の名門バーソロミュー社やケンブリッジ大学の中国学者の協力を得て完成させた画期的な地図帳です。

最新の地理情報をもとに正確な現代中国像を描出する編集／歴史王朝の支配範囲と地方区域を示す歴史地図と解説／人口・小数民族・気象・農業・道水路・鉄道・鉱物・エネルギー資源・産業・貿易・行政区域・国境周辺を示す地図と解説／平均130万分の1の29省別地図と解説／5地域に大別した600万分の1地勢図／主要32都市の市街図／地名発音は標準表記である Wade Giles式

(Times Newspapers Ltd., London)

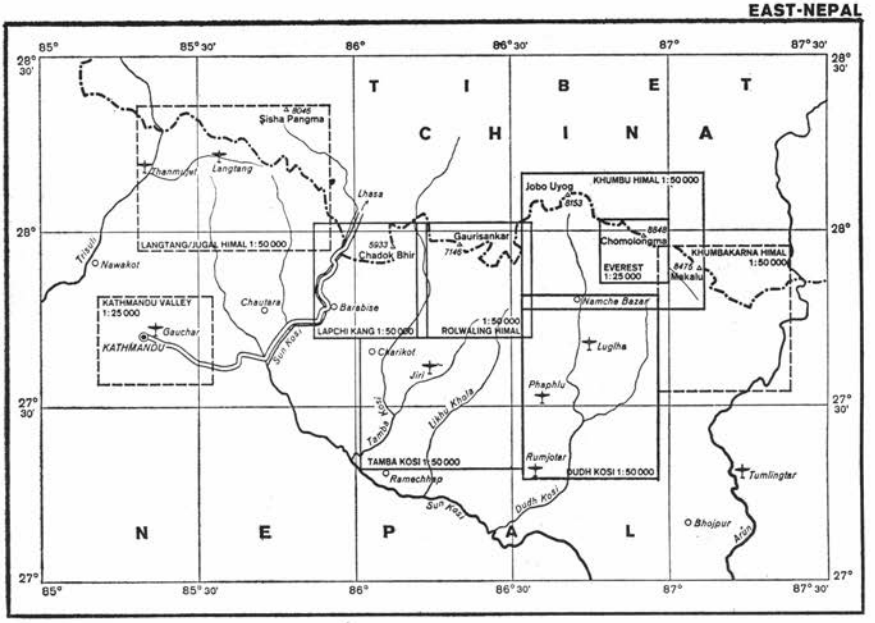
日本総代理店 Ⓜ丸善 東京・日本橋 ☎(03)272-7211

古本の買入と販売

山岳書
動植物書
全集・叢書
一般学術書
名士の書簡
色紙・短冊

地方も出張します

〒101
東京都千代田区神田神保町一ノ三
(有)悠久堂書店
電話 (二九一) 〇七七三番 〇九二〇番



1:50,000

1. Khumbu Himal 1965 ¥3,020
2. Tamba Kosi-Likhu Khola 1969 ¥4,200
3. Lapchi Kang-Rolwaling Himal 1974 Set ¥5,590
4. Dudh Kosi-Shorong Hinku 1974 Set ¥5,700
5. Lantang-Jugal Himal 〈未刊・ご予約受付中〉
6. Khumbakarna Himal 〈未刊・ご予約受付中〉

1:25,000

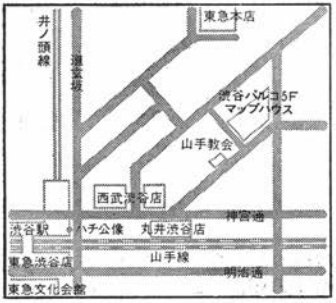
1. Kathmandu Valley 〈未刊・ご予約受付中〉
2. Chomolongma-Mt. Everest ¥1,150

1:100,000

1. Mt. Everest Region ¥2,400

MAP HOUSE CO,LTD

5th Floor Travel Saloon
Shibuya PARCO
15-1 Udagawa-cho,
Shibuya-ku, Tokyo.
150



株式会社
マップハウス
東京都渋谷区宇田川町15-1
渋谷パルコ 5F 〒150
TEL03／464／6867
年中無休
AM10:00～PM8:00

本多勝一・著

新版 山を考える

●名記者・本多勝一が、山を対象に綴った好エッセイ。各紙絶賛の書。

四六判／980円

●串田孫一の本

山のパンセ

●水晶のようにきらめく文章。不朽の自然文学。

A5変型／1300円

若き日の山

●名作「若き日の山」を主体に、「乖離」等を収録。

A5変型／1300円

心の歌う山

●荒廃の現代に叛いて生きる著者の山の名文章。

A5変型／1800円

上高地の大将

●木村殖

週刊朝日など、各紙誌絶賛の本！

B6判／880円

谷川岳とゲの大将

●高波吾策

谷川のヒゲおやじ吾策さんの一代記

B6判／880円

剣岳の大将文蔵

●佐伯文蔵

誇り高き最後のガイド文蔵の自伝。

B6判／980円

山菜記（正・続）

●片岡博著

なつかしいふるさとの味を流麗な筆で綴った随想集。料理法付記。

B6判／正880円・続620円

朝日新聞前橋支局編

はるかな尾瀬

●美しき尾瀬を舞台に自然と人間との係わりを描く。写真多数収録。

B5変型判／1500円

東京銀座1-3 実業之日本社 振替東京1-326

日本が世界に誇る「今西学」の全貌を初めて明らかにした各界待望の個人全集！

全10巻絶賛発売中

今西錦司全集

講談社版 全十巻 ●各2,600円

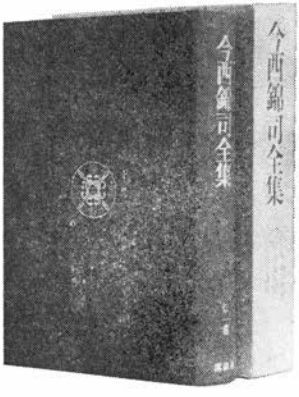
編集委員＝伊谷純一郎　上山春平　梅棹忠夫　吉良竜夫
桑原武夫　森下正明

《本全集の特色》

●半世紀におよぶ博士の巨大な研究足跡の体系的な集大成です。
●諸者の便宜をはかり、各巻に編集委員による解題を付しました。
●全巻にわたって改めて、校閲、補筆し、完璧を期しました。
●全巻に月報を付し、各界諸先生方の格調高いエッセイを掲載しました。

《全巻編成》

第1巻　生物の世界・山岳省察・山と探検
第2巻　草原行・遊牧論そのほか
第3巻　ヒマラヤを語る・カラコラム
第4巻　生物社会の論理
第5巻　人間以前の社会・人間社会の形成
第6巻　御崎馬の社会調査・村と人間
第7巻　ニホンザルの自然社会・ゴリラ
第8巻　日本山岳研究
第9巻　私の自然観・自然と山とそこに山がある
第10巻　私の進化論・私の履歴書



講談社

●現代に自然を求める山仲間の月刊誌

山と溪谷社
東京都港区芝大門1-1-33

山と溪谷
yama-kei

"ヤマケイ"はあなたの山仲間。安全で楽しい山登りを教えてくれるすばらしいパートナーです。常に新鮮でユニークなワイド特集記事を中心に、時代を先取りしたニュースや情報、ワイド判になって一層迫力を増したグラフページ、かゆいところまで手が届くような親切な案内や実用記事等々、とにかく一度手に取ってご覧下さい。いつもフレッシュな魅力でいっぱいです。

●本格派のための山岳専門誌

岩と雪

ヒマラヤ、アンデス、アルプス…世界の山から日本の山まで、最新の登攀記録・情報・評論・資料を集めた「岩と雪」は、実践派を自認するあなたのよき伴侶です

登山者の心の糧　山と溪谷社の図書

高所登山研究
日本山岳会編　ヒマラヤを始めとする海外高峰登山の総合テキスト　3000円

現代ロッククライミング
クライミング・フォト第一人者小森康行氏の華麗なる写真技術書　2500円

名峰シリーズ **槍・穂高**
水越武・写真　豪壮な山岳景観を見せる槍穂高連峰の傑作写真集　1800円

第7級 極限の登攀
R・メスナー　鋼鉄のアルピニストがつづる極限の登攀記の数々　850円

マカルー西稜
R・パラゴ他　8千米の垂稜に挑んだフランス隊の赤裸な登攀記　1800円

ゼクラン山群 特選100コース
G・レビュファ　シャモニ針峰群の美しい写真と文章の登攀案内　6800円

世界の山
世界の名峰を一堂に集めたオールカラーの華麗な世界山岳絵巻　4800円

ヒマラヤ《人と辺境》

諏訪多栄蔵編　全7巻／本邦初訳（好評刊行中）

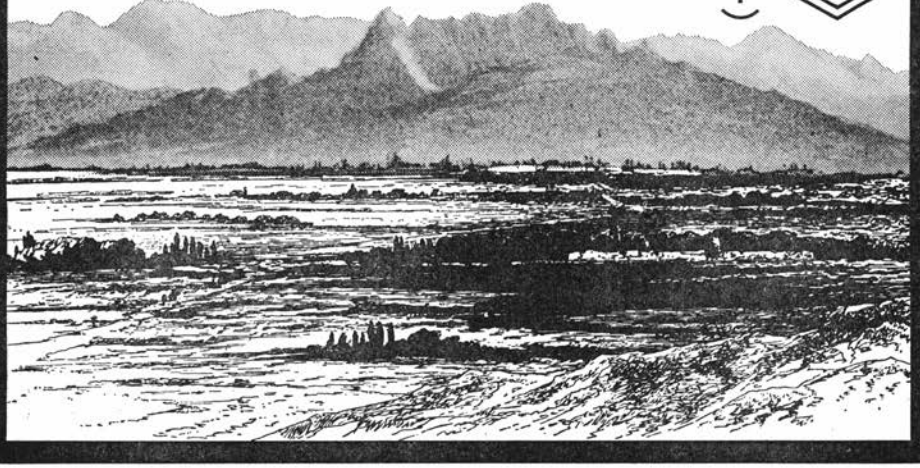
ヒマラヤ周辺から中央アジアにかけての辺境は
登山の探検・諸種の学術的調査を志す人々の憧れの地である
本シリーズは、この人跡稀な秘境に全生命をかけた
すぐれた探検家・登山家など七人の伝記と探査紀行である

1 幻の探検家ネイ・イライアス　モーガン／吉沢一郎訳
2 国境のかなた—大探検家ベイリーの生涯　スウィンソン／松月久左訳
3 青いケシの国　キングドン＝ウォード／倉知　敬訳
4 異教徒と氷河—チトラール紀行　ショーンバーグ／雁部貞夫訳
5 ヒマラヤ巡礼　スネルグローヴ／吉永定雄訳
6 カラコルムからパミールへ　ティルマン／薬師義美訳
7 ダッタンの山々　シプトン／水野　勉訳

四六判・9ポ一段組・総布装・箱入・口絵写真8頁・月報挿入
各巻末に別刷貼込地図挿入・見返しに《ヒマラヤ周辺概念図》（作図 吉永定雄）
《オクサス河と大パミール》の写真（撮影 平位 剛）掲載 ★平均定価一八〇〇円

白水社　〒101 東京都千代田区神田小川町3—24
電話（291）7811／振替東京33228

内容解説呈
〈SG係へ請求下さい〉

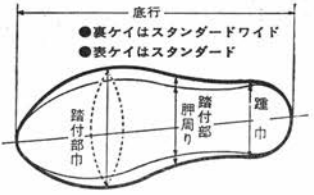


―足巾が広く お困りの人ももう安心―

キャラバン・スタンダードワイド

新発売！

●スタンダードワイド
サイズ：24.0～28.0cm
（27.5cmなし）
胛　布：ナイロン
色　　：紺
¥4,900

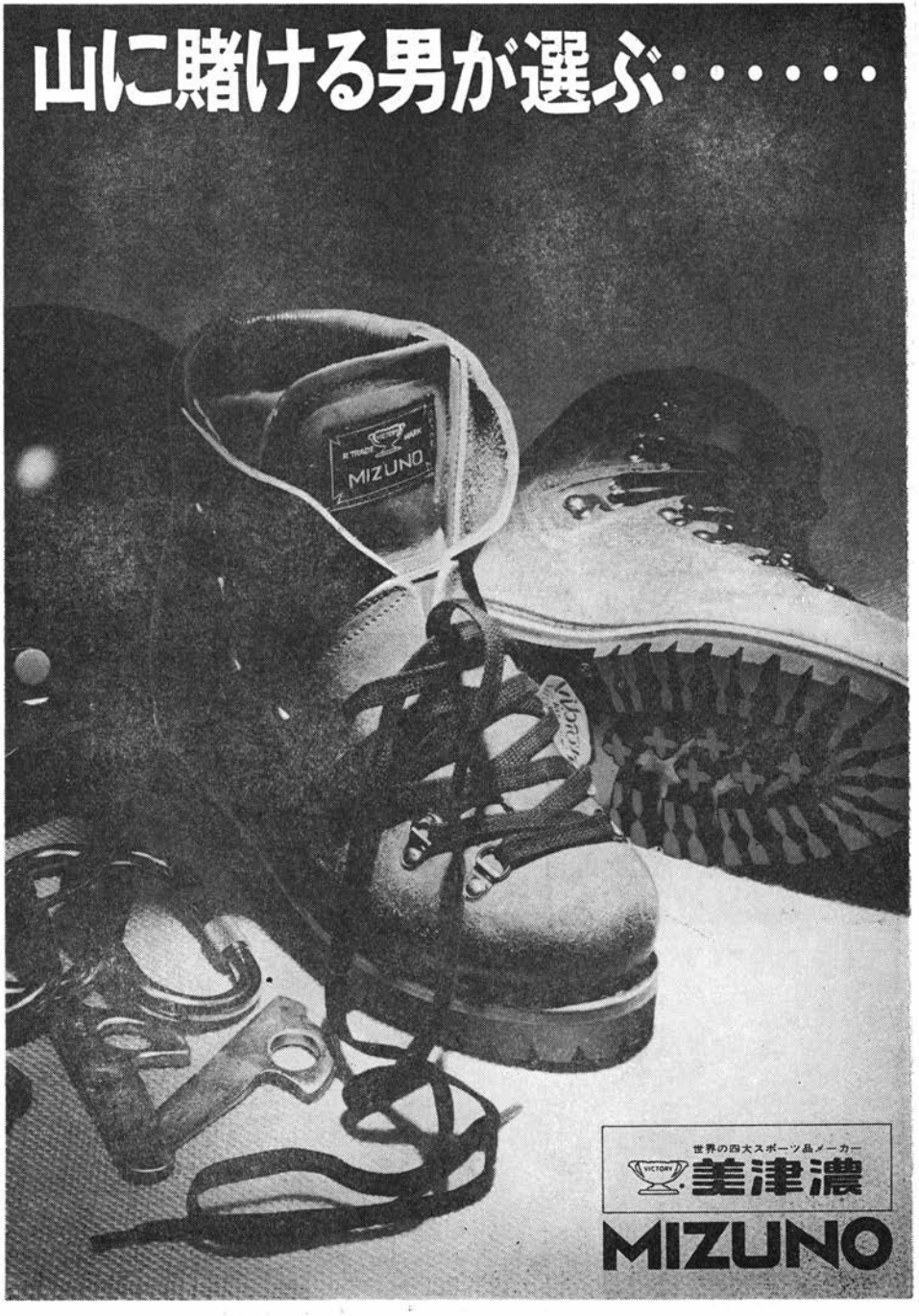


●キャラバン・ジュニア
サイズ：17.0～21.0cm
（1cmきざみ）
胛　布：綿デニム（紺のみナイロン）
色　　：紺、ブルー、ベージュ、赤
¥3,000

足巾の広く、お困りの皆様用に、キャラバンシューズの、《ワイド版》が新登場いたしました。このワイド版の完成により昨年誕生のジュニアとあわせ、お子様からお年寄まであらゆる年令層、足型の皆様に快適な登山が楽しんでいただけると、自負しております。

発売元
株式会社 **キャラバン**

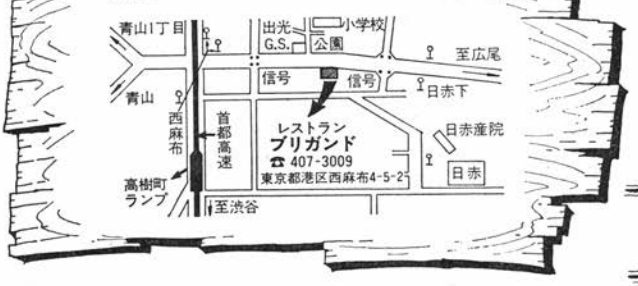
〒170 東京本社　東京都豊島区巣鴨1－25－7　☎(03)944－2331㈹
〒564 大阪支店　大阪府吹田市芳野町1番4号　☎(06)386－0451㈹
〒062 札幌営業所　札幌市豊平区美園一条6－47　☎(011)822－8664㈹


山に賭ける男が選ぶ……
MIZUNO
世界の四大スポーツ品メーカー
美津濃
MIZUNO

Restaurant
FONDUE Brigand STYLE
山賊フォンデュ

山賊料理

ブリガンドの意味は「山賊」。
自然を愛する勇者です。
ヨーデルの調べと山賊料理をお楽しみ下さい。



40年の前進史

マナスル型高所用天幕考案

1952年日本山岳会マナスル偵察隊
全装備納入以来高所用天幕専門
製作・海外遠征隊には各方面より
御使用頂き御高評頂いて居ります

吉田テント　吉田喜義商店

東京都杉並区桃井1丁目3番3号
電話 東京 (399) 2548　(398) 8469 (夜間)

信頼のブランド

ザンター羽毛シュラフ

羽毛製品の品質の良否の判断は、専門家でも難かしく、長い間使用することを考えれば、なんといっても実績のあるメーカー品を各自の山行形態に合わせて選ぶ事が大切です。ザンターは、1956年の“マナスル登頂”以来、数々のエクスペディションに参加し、多大な実績を積み重ねてきました。
今年もザンターの技術を結集した数々の羽毛製品をお届けします。

スタンダードシュラフ

日本の冬山に最適な全身用シュラフ。居住性、保温力ともこのクラスでは最高級。
箱マチ縫製、重量・1100ｇ、
サイズ・210×85(cm)
色・紺、赤、価格￥29,000

ジャンボシュラフ

完璧な保温力と居住性は、
海外遠征用として人気絶項。
大型のわりには収納時のかさと
重量が大きすぎないことが最大の
魅力です。
波マチ縫製、前チャック式、
重量・1600ｇ、サイズ・220×95(cm)
色・紺、赤、価格￥39,000

ZANTER

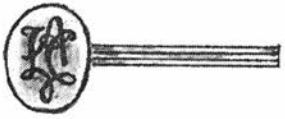
●主要発売製品

羽毛服、パンタロン、
登攀服、ニッカ、
アンダーウェア、
ベスト、フード、
ミトン、シューズ、
シュラフ各種

株式会社
ザンター

〒154 東京都世田谷区野沢２～20～１ ☎03－410－8808(代)

日本山岳会の記念品・バッジを作ってます。



株式会社 ラマーノ　中川　武

〒102 東京都千代田区三番町24三番町ハイム　☎ 03(262)0525

GV・5067

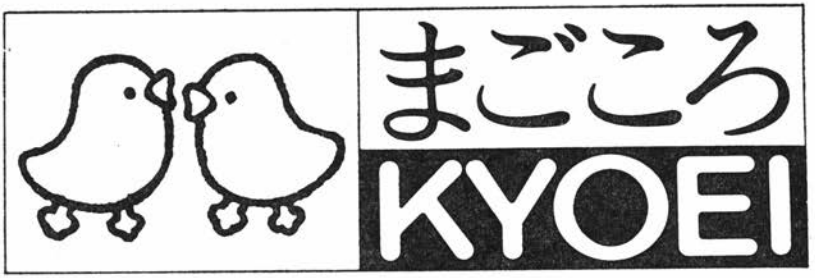
グロンサン1000mg、
ビタミンB1・B2・B6、
精製ハチミツ、リンゴ酸を配合。

滋養強壮に
新グロモント

●虚弱体質 ●肉体疲労、栄養障害、
食欲不振時の栄養補給に。

医薬品
新グロモント
100m

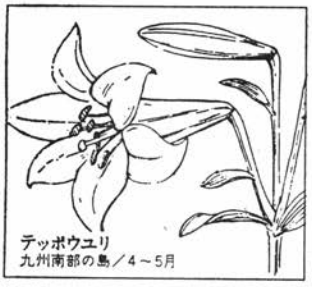
共栄火災は
まごころを
大切にします。



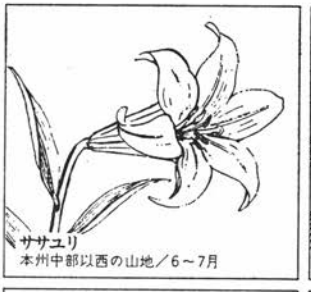
●「まごころ」は共栄火災の企業スローガンです。

共栄火災海上保険相互会社

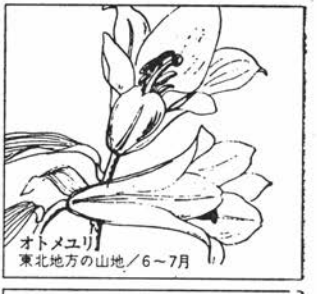
日本全国で
一年じゅう咲いている花



テッポウユリ
九州南部の島／4～5月



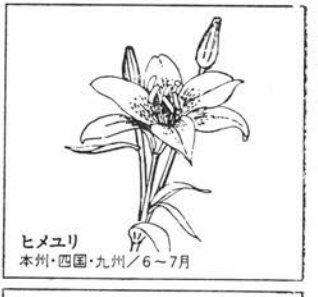
ササユリ
本州中部以西の山地／6～7月



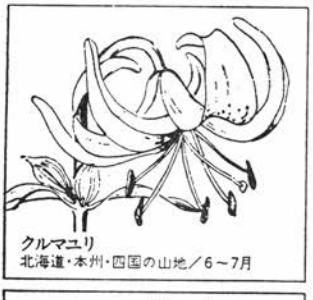
オトメユリ
東北地方の山地／6～7月

ヤマユリ
近畿以北の山地／7～8月

イワトユリ
紀伊半島以北の太平洋岸／7月上～下旬

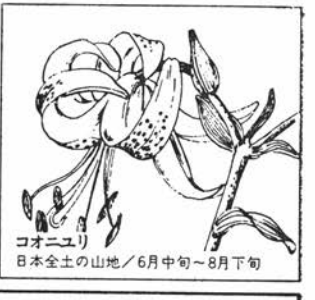


ヒメユリ
本州・四国・九州／6～7月

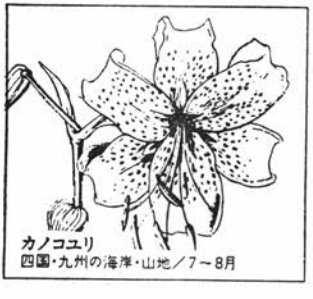


クルマユリ
北海道・本州・四国の山地／6～7月

オニユリ
日本全土／7月中・下旬



コオニユリ
日本全土の山地／6月中旬～8月下旬



カノコユリ
四国・九州の海岸・山地／7～8月

協和の支店は全国で220余ヵ店。
それぞれの地域で、みなさまのくらし、
みなさまの事業の
よきアシスタントとして、
いっしょうけんめい努力しています。
シンボルはユリの花。
協和は、清潔で明るい銀行を
めざしています。

協和銀行

●お気軽な海外旅行を

どんなに旅慣れたお方でも海外旅行はなにかとめんどうなもの。まして視察研究留学の旅はなおさらです。煩雑な手続や日程作成、手配などはすべて専門家におまかせください。

海外一流業者と提携した日通観光のサービス網は、団体はもちろん、あらゆる旅行のお世話をいたします。

お問合せはお近くの日通支店観光係または左記の日通東京航空支店へどうぞ。

東京都港区新橋一―五―二

（電）五七一・八四八一

日本通運

山岳　第六十九年（通巻一二八号）
一九七五年四月三十日発行
価二五〇〇円

発行所　社団法人　日本山岳会
東京都文京区湯島一ノ六ノ一
さくらビル内　〒一一三
電話東京八一三局二二八六番
振替　東京　四八二九番

発行人　今西錦司
編集人　近藤信行
〈編集委員〉山崎安治・金坂一郎
中島寛・山本良三・雁部貞夫
節田重節・高遠宏・近藤信行

印刷　株式会社　技報堂

発売所　株式会社　茗渓堂
東京都千代田区神田駿河台二ノ一
電話　東京二九一局　九四四二番
振替　東京　一一四七二三番

豊かな
生活環境を築きあげる……

(オーダー建材)

カーテンウォール
アルミサッシ
スチールサッシ
クールサッシ
NKウォール
防音壁
アルミキャスト

(標準建材)

PA－60シリーズアルミサッシ
PA－70シリーズアルミサッシ
PS－80Aスチールサッシ
NKパーティション

(産業機械)

熱交換器(アライトロン)
各種工業用精密涙過装置
(NKフィルター)
プール用循環浄化装置
各種浄水・廃水処理装置
精密金型

(電機製品)

電気洗濯機
冷凍ショーケース
業務用自動食器洗滌機
連続自動洗米機

日本建鐵株式会社

取締役相談役　早川種三
東京都千代田区大手町２－６－２
ＴＥＬ　東京（270)6511(大代表)

The Journal of

The Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. LXIX 1974